

# 京都府遺跡調査報告書

第 15 冊

上人ヶ平遺跡  
〈本文編〉

1991

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版第 1

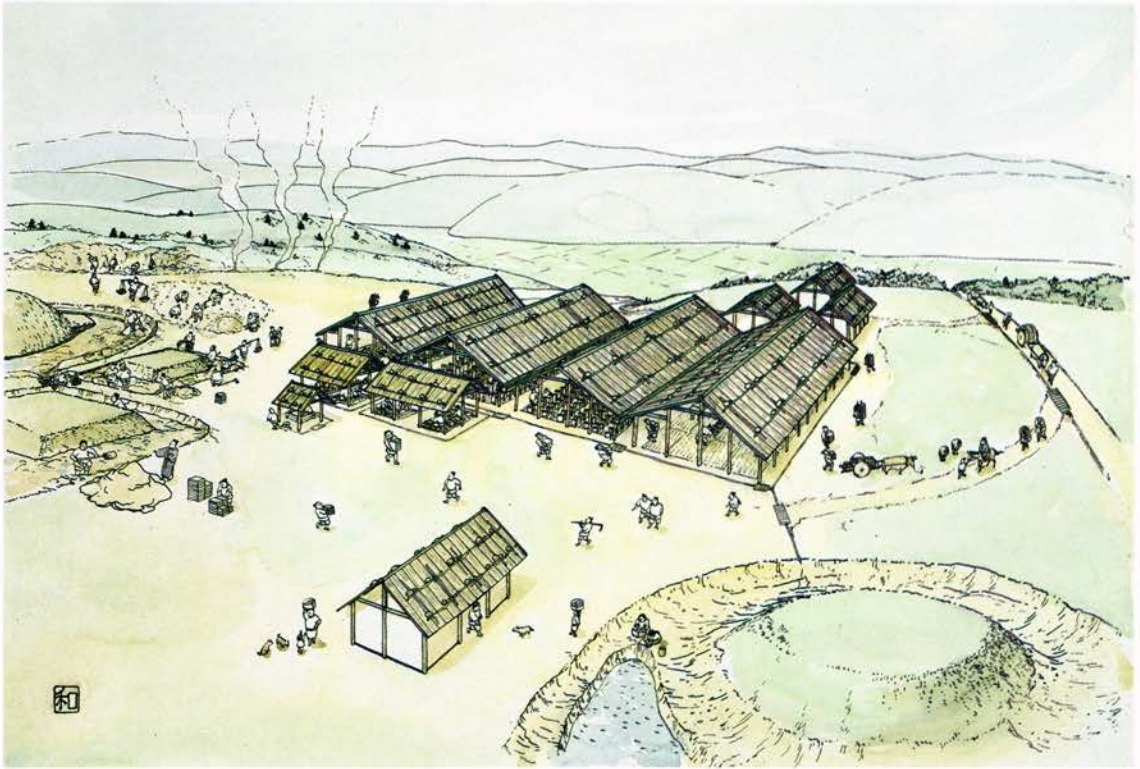


1トレンチ全景(南から)



1トレンチ全景(東から)

卷頭図版第 2



第Ⅲ期遺構、推定復原図



出土遺物—埴輪—

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この報告書に収められた上人ヶ平遺跡も、関西文化学術研究都市の開発に伴い発掘調査を行った遺跡で、調査面積は約1.2haもの広い範囲に及びます。この調査では、古墳時代から奈良時代にかけての様々な遺構や多数の遺物が見つかりましたが、とりわけ奈良時代の大規模な掘立柱建物跡群は、平城宮の造営に関連した官営の瓦工房跡であることがわかり、調査中から大きな注目を集めました。

これまで、当調査研究センターでは、『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』を通じて、各遺跡の調査成果を紹介してまいりました。これらの刊行物とあわせて、本書を関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

上人ヶ平遺跡の調査にあたりましては、発掘調査を依頼された住宅・都市整備公団をはじめ、京都府教育委員会・木津町教育委員会などの関係諸機関の御協力を受けただけでなく、極暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に各作業に従事していただきました。ここに記して、感謝したいと存じます。

平成3年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

## 例 言

1. 本書は、京都府相楽郡木津町字市坂小字上人ケ平に所在する上人ケ平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 上人ケ平遺跡は、住宅・都市整備公団関西支社、関西文化学術研究都市整備局の依頼を受けて、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが昭和59年度から平成元年度にかけて現地調査を実施した。
3. 現地調査及び本報告書にかかる経費は、住宅・都市整備公団関西支社、関西文化学術研究都市整備局が負担した。
4. 本報告書の作成は、各年度の調査担当者の協力のもとに、調査第2課調査第3係石井清司・伊賀高弘が行い、編集には後藤尚規の協力をえて、調査第1課平良泰久・辻和美・土橋 誠が行った。
5. 本書に掲載した遺構図の方位は、すべて座標北をさす。
6. 写真撮影は、遺構を各年度の調査担当者が行った。遺物写真は調査第1課田中 彰が行った。また、イラストは早川和子氏が、航空写真及び一部の図化作業は、国際航業株式会社・写測エンジニアリング株式会社が行った。
7. 本書の執筆は、石井・伊賀のほか、調査第2課黒坪一樹・小池 寛、奈良大学学生筒井崇史、中井英策が行い、各節の文末にその名を記した。また、胎土分析については、奈良教育大学三辻利一氏の玉稿を掲載した。

# 本文目次

第1章 歴史的環境と調査経過	1
第1節 歴史的環境	1
第2節 調査の経過	5
第2章 上人ヶ平遺跡の概要	10
第1節 地形と層位	10
第2節 遺構の種類とその分布	11
第3章 上人ヶ平遺跡の遺構と遺物	14
第1節 時期の設定	14
第2節 第Ⅰ期の遺構・遺物	15
(1) 弥生時代の遺構	15
(2) 弥生時代の土器	17
(3) 古墳時代前半の遺構	19
(4) 古墳時代前半の土器	33
(5) 石器	36
第3節 第Ⅱ期の遺構	37
(1) 古墳	37
(2) 埴輪窯	86
第4節 第Ⅱ期の遺物	89
(1) 土器類	89
(2) 鉄器類	93
(3) 玉類	95
(4) 埴輪類	96
第5節 第Ⅲ期の遺構	140
(1) 掘立柱建物跡	140
(2) 路面	152
(3) 井戸	153
(4) 土坑	157
(5) 溝状遺構	163

(6)古墳の再利用	164
第6節 第Ⅲ期の遺物	164
(1)瓦磚類	164
(2)土器類	172
(3)錢貨	177
(4)小結	178
第7節 第Ⅳ期の遺構・遺物	179
(1)遺構	179
(2)遺物	179
(3)小結	181
第4章 考察	182
第1節 遺跡の変遷	182
第2節 集落遺構について	184
第3節 上人ヶ平遺跡の第Ⅱ期の遺構(上人ヶ平古墳群)について	186
第4節 古墳出土の土器について	193
第5節 上人ヶ平遺跡出土の古墳時代の須恵器をめぐって	194
第6節 上人ヶ平1号埴輪窯について	199
第7節 上人ヶ平埴輪窯の製品の供給先について	203
第8節 奈良時代の遺構について	206
第9節 「造瓦所」について	213
おわりに	218
付載 上人ヶ平遺跡出土埴輪・瓦の蛍光X線分析	242

## 挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	3
第2図	年度別トレンチ配置図	6
第3図	土層概念図	10
第4図	遺構概念図	12
第5図	第Ⅰ期の遺構概念図	14
第6図	S H101実測図	15
第7図	S X119・S X120ほか実測図	16
第8図	S K141遺物出土状態実測図	17
第9図	S K142遺物出土状態実測図	18
第10図	S H102実測図	19
第11図	S H103実測図	20
第12図	S H104実測図	21
第13図	S H105実測図	22
第14図	S B107実測図	22
第15図	S B106実測図	23
第16図	S B106「四ハ」柱穴内遺物出土状態実測図	24
第17図	S H121実測図	24
第18図	S X134実測図	25
第19図	S K136・137・138実測図	25
第20図	S H122・123実測図	26
第21図	S H124実測図	27
第22図	S H125・126・127実測図	28
第23図	S H128実測図	29
第24図	S H133実測図	30
第25図	S H132実測図	30
第26図	S B130・131・147、S A146実測図	31
第27図	第Ⅱ期の遺構概念図	37
第28図	南支群古墳配置図	41



第29図	5号墳造り出し部・墳丘埴輪列実測図	43
第30図	5号墳東地区実測図	45
第31図	5・7・8・16号墳周濠(溝)断面図(5号墳周濠改修模式図)	47
第32図	5号墳外堤埴輪列実測図	50
第33図	S X 135実測図	52
第34図	6号墳実測図	53
第35図	6号墳周溝内遺物出土状態実測図	54
第36図	7号墳実測図	56
第37図	7号墳主体部実測図	57
第38図	8号墳実測図	59
第39図	8号墳主体部実測図	60
第40図	14号墳実測図	62
第41図	14号墳周溝内遺物出土状態実測図・周溝断面図	63
第42図	14号墳周溝内蓋形埴輪出土状態実測図	64
第43図	15号墳実測図	65
第44図	15号墳周溝内遺物出土状態実測図・周溝断面図	66
第45図	16号墳実測図	67
第46図	16号墳主体部実測図	68
第47図	17号墳北周溝内馬形埴輪出土状態実測図	70
第48図	18号墳実測図	71
第49図	18号墳北東隅土坑(S X 113)遺物出土状態実測図	72
第50図	18号墳主体部実測図	73
第51図	1・9号墳実測図	74
第52図	1・9号墳墳丘・周溝断面図	75
第53図	4号墳実測図	77
第54図	10号墳実測図	79
第55図	10号墳西辺周溝実測図	80
第56図	10号墳西辺周溝内遺物出土状態実測図	80
第57図	11～13号墳実測図(Ⅲ支尾根遺構配置図)	81
第58図	19号墳実測図	83
第59図	20号墳実測図	84
第60図	S X 111実測図	85

第61図	埴輪窯トレンチ配置図	87
第62図	1号埴輪窯実測図	88
第63図	上人ケ平古埴群土器類出土状況図	90
第64図	S X 111・7号埴出土玉類実測図	96
第65図	円筒埴輪口唇部断面形態分類図	98
第66図	底部輪台の接合法分類図	100
第67図	普通円筒埴輪(A類)外面調整手法分類図	101
第68図	普通円筒埴輪内面調整手法分類図	101
第69図	B類円筒埴輪外面調整手法分類図	103
第70図	C類普通円筒埴輪器面調整手法分類図	105
第71図	16号埴出土朝顔形埴輪実測図	109
第72図	朝顔形埴輪口縁部製作概念図	109
第73図	家形埴輪製作技法分類図	118
第74図	家形埴輪屋根部製作手順模式図	120
第75図	蓋形埴輪笠部成形概念図	122
第76図	立ち飾り名称図	123
第77図	第Ⅲ期の遺構概念図	140
第78図	S B 301模式図	141
第79図	S B 302模式図	141
第80図	S B 303模式図	142
第81図	S B 304模式図	142
第82図	S B 310実測図	143
第83図	S B 311実測図	144
第84図	S B 312実測図	145
第85図	S B 313実測図	146
第86図	S B 314実測図	147
第87図	S B 353実測図	148
第88図	S B 307北西隅柱内遺物出土状態実測図	148
第89図	S B 308・309実測図	149
第90図	S B 307実測図	151
第91図	S E 315・S K 319遺物出土状態実測図	154
第92図	S E 382実測図	155

第93図	S E 382井戸枿実測図	156
第94図	S K 321遺物出土状態実測図	158
第95図	S K 349実測図	159
第96図	S K 360・361・362・363実測図	160
第97図	S K 375遺物出土状態実測図	160
第98図	16号墳墳丘上面遺物出土状態実測図	161
第99図	軒瓦型式図	166
第100図	塼模式図	169
第101図	遺構別瓦分布図	170
第102図	銭貨拓影	178
第103図	S X 501周辺実測図	180
第104図	第Ⅳ期の遺物実測図	181
第105図	南山城地域出土の古式須恵器	195
第106図	第Ⅲ期の建物変遷図	207
第107図	上人ヶ平遺跡の想像復原図	211
第108図	平城山丘陵の瓦窯分布図	214

## 付 表 目 次

付表1	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡一覧表	32
付表2	石器一覧表	36
付表3	古墳一覧表	38
付表4	ガラス製小玉計測表	95
付表5	普通円筒埴輪類型設定基準表	97
付表6	形象埴輪出土一覧表	117
付表7	掘立柱建物跡一覧表	152
付表8	瓦磚類集計表	167
付表9	埴法量表	169
付表10	S X 321土器集計表	173
付表11	1号埴輪窯出土埴輪一覧表	204
付表12	新旧建物跡番号対照表	224
付表13	円筒埴輪観察表1	228
付表14	円筒埴輪観察表2	232
付表15	A建物跡群、柱穴掘形規模一覧表	236

# 第1章 歴史的環境と調査経過

## 第1節 歴史的環境

### (1) 自然環境

上人ヶ平遺跡の所在する木津町は、京都盆地の最南端に位置する。京都盆地の中央部には巨椋池(現在は干拓田として陸化している)があり、これを北限とするその南半地域は、南北約14km・東西2～3kmの狭長な地形を呈し、一つの文化圏を形成していることもあって一般に「南山城」と呼称されている。

この南山城地域の平地部は、奈良・三重県を水源とする木津川と、それに注ぎ込む中小河川の沖積作用によって形成された河谷平地で、東・西・南方を地殻変動性の山地に囲まれている。

平地の縁辺部には、鮮新～更新統(洪積層＝大阪層群)が広く分布し、またその内帯の各所には中～上部更新統の段丘地形が発達している。南山城の場合、洪水などの影響もあつてか、人類の生活の痕跡はこうした縁辺部の台地上に顕著に広がっており、沖積低地に比較して優位な生活環境を示している。そして、上人ヶ平遺跡も盆地の南を限る丘陵の縁辺部に営まれている。

次に、視点を遺跡の所在する木津町周辺に移してその地形環境をみたい。

それまで東方から流下してきた木津川は、木津・山城両町付近で流路を北に変換し、これより北方に南北に狭長な盆地性の沖積低地を展開するが、一方でその転換点の南側の攻撃面側にも支流である井関川・鹿川・山松川・山田川などの中小河川によって小規模な沖積低地が形成されている。この木津町域の唯一の平野ともいえる沖積低地の、東・南・西の三方を丘陵(奈良市北方丘陵・平城山丘陵)が取り囲んでいるが、この奈良市北方丘陵は、盆地の東辺にみられるような中～古生層(基盤岩層)によって構成される急峻な山岳地形ではなく、洪積層の隆起による緩やかな丘陵地形となつて京都・奈良両盆地を区切っている。同丘陵の洪積層は、大阪層群の最下部と下部に相当する未固結の砂礫を主体とする地層(梅谷砂・礫層)で構成されるため、非常に崩落しやすく、全体になだらかな地形を呈している。また、京都盆地側に面する丘陵裾には、大阪層群を不整合に覆う段丘地形はほとんどみられず(沖積層下に埋没している)、後述するようにわずかに上人ヶ平遺跡の付近に露呈しているにすぎない。

遺跡周辺の丘陵は、平城山丘陵の東寄りに位置する州見山(標高106m)を最高峰としてお

り、この山塊には北西に面する平地部に向かう幾筋もの細長い開析谷が形成されている。これらの谷地形は、井関川によるものと府県境の規模が大きく、これに挟まれた部分にも北に向かうにつれて、徐々に規模が小さくなる中小規模の谷が数条山塊を開析している。

上人ヶ平遺跡は、こうした中規模の谷に挟まれた丘陵の先端に位置する。

ただ、丘陵といってもその先端には、長さ約200m・幅200mの平坦面(標高52~59m)が形成されており、この部分は平地部との比高8.0mの段丘崖をめぐらせる高位または中段段丘面と推定されている。さらに、この段丘部を詳細にみると、その北縁から台地基部にのびる小規模でかつ比較的新しい開析谷が数条みられ、これによって台地北半が掌状の複雑な地形となっている。

(伊賀高弘)

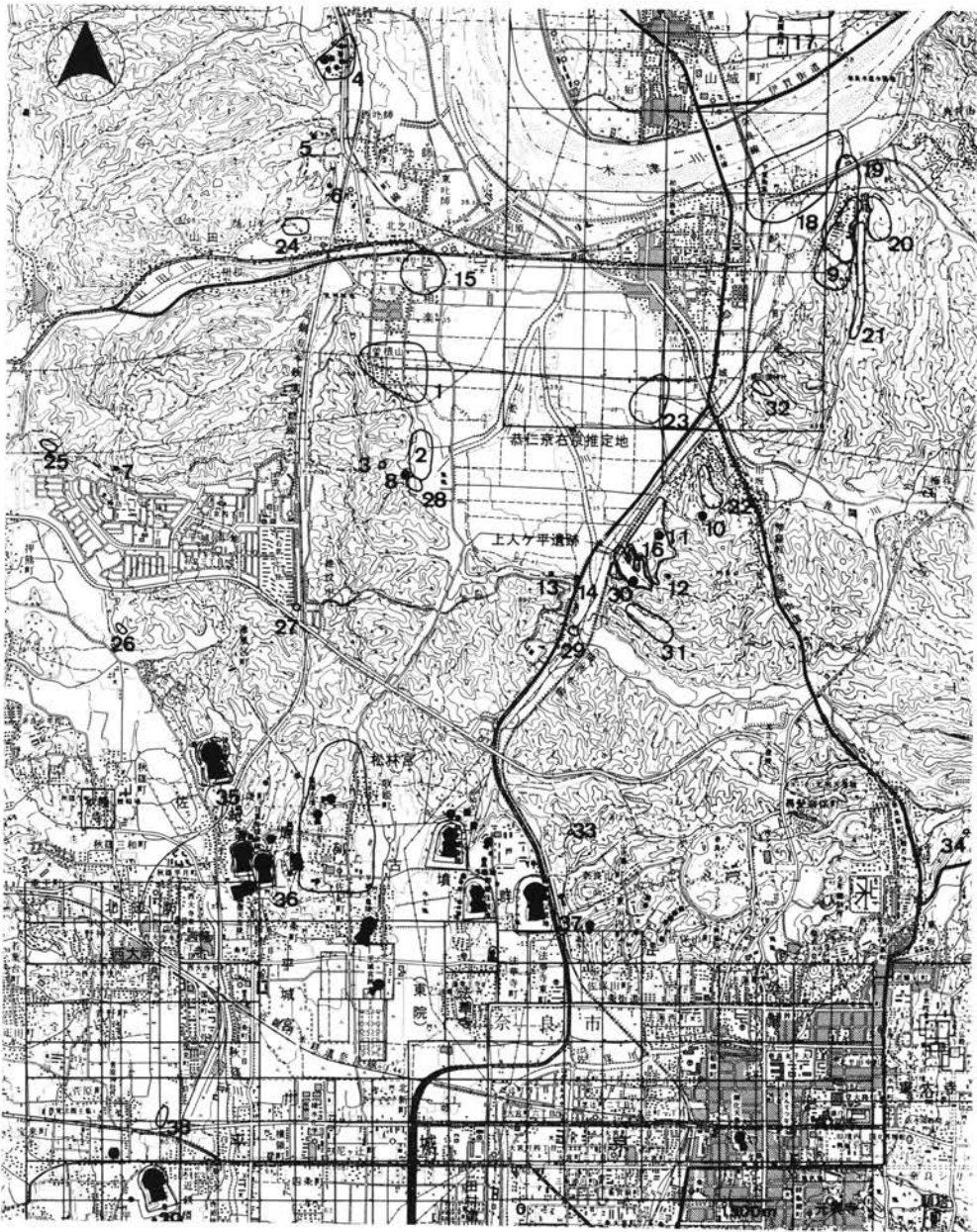
## (2)歴史的環境

ここでは、上人ヶ平遺跡の所在する木津町を中心とする相楽郡と、この遺跡と深く関わる平城京周辺の歴史的環境について述べる。

相楽郡内で最も古くさかのぼるものとしては、木津町岡田国神社境内出土のサヌカイトの剝片が旧石器時代の遺物であろうといわれている。続く縄文時代には、山城町内で縄文時代草創期のサヌカイト製有舌尖頭器が千両岩遺跡から出土しているのをはじめ、同町涌出宮遺跡で縄文時代前期の土器や石鏃・叩き石などが、また、椿井大塚山古墳の封土内からも縄文土器が出土している。さらに、近隣地域では、綴喜郡井手町鳥休遺跡で中期初頭の土器や石器が、城陽市森山遺跡で縄文後・晩期の竪穴式住居跡などが見つっている。しかし、この森山遺跡を除いて縄文時代の顕著な遺構の検出例はない。

弥生時代に入ると、山城町涌出宮遺跡・木津町燈籠寺遺跡などで前期の土器が発見されている。涌出宮遺跡は主に中期の集落遺跡であるが、一部前期にまでさかのぼると考えられている。この遺跡は発掘調査によって、土器・磨製石剣・石庖丁・石鏃などが出土し、南山城地域では重要な集落遺跡であることが明らかにされた。一方、燈籠寺遺跡は発掘調査の結果、弥生時代前期から古墳時代、さらに中・近世に至る複合遺跡であることが明らかにされたが、後で述べる内田山古墳群を除いて、その性格や構造はほとんど不明であり、今後の調査を待つ必要がある。

弥生時代中期には、先に述べた山城町涌出宮遺跡のほか、木津町大島遺跡・精華町畑ノ前遺跡などが知られている。大島遺跡も弥生時代中期から奈良時代に至るまでの複合遺跡であるが、弥生時代中期の遺構としては、竪穴式住居跡3棟、方形周溝墓1基が検出された。また、この遺跡の西方に位置する相楽山遺跡からは、偏平鈕式の銅鐸が出土した。こ



第1図 調査地位位置図

1. 曾根山遺跡 2. 大畠遺跡 3. 相楽山銅鐸出土地 4. 吐師七ツ塚古墳群 5. 坊谷古墳
6. 白山古墳 7. カザハヒ古墳 8. 音乗谷古墳 9. 内田山古墳群 10. 西山塚古墳
11. 瓦谷古墳 12. 幣羅坂古墳 13. 奈良山13号地点古墳 14. 奈良山15号地点古墳 15. 相楽遺跡
16. 瓦谷遺跡 17. 高麗寺跡 18. 上津遺跡 19. 燈籠寺遺跡 20. 赤ヶ平遺跡
21. 釜ヶ谷遺跡 22. 西山遺跡 23. 八後遺跡 24. 樋ノ口遺跡 25. 押熊瓦窯跡群
26. 奈良山51・52号窯 27. 奈良山53号窯 28. 音如ヶ谷窯跡群(歌姫西窯跡群) 29. 歌姫窯跡群
30. 市坂瓦窯跡 31. 瀬後谷窯跡群 32. 大谷窯跡 33. 奈良山28号窯跡 34. 瓦窯跡
35. 五社神古墳 36. 佐紀陵山古墳 37. ウワナベ古墳 38. 菅原東遺跡 39. 宝来山古墳

れは、両者が時期的にはほぼ同じであることから、銅鐸祭祀の執行とそれを行っていた集落、という関係を考えることができる。また、畑ノ前遺跡では、計10棟の竪穴式住居跡が発見されており、相楽郡内でも有数の集落遺跡であるといえよう。

弥生時代後期になると、前述の木津町燈籠寺遺跡や同町曾根山遺跡・山城町柏谷遺跡・加茂町樋用遺跡、また、椿井大塚山古墳・平尾城山古墳周辺でも、この時期の土器が発見されており、以前に比べ、相楽郡内各地に遺跡を見ることができる。これらの遺跡はいずれも高地性集落としての性格を少なからず含んでいる。

古墳時代初頭、相楽郡内で相次いで巨大な前方後円墳が造られる。山城町に所在する椿井大塚山古墳と平尾城山古墳の2基である。特に、椿井大塚山古墳(全長185m)は、長大な竪穴式石室をもち、37面以上の鏡を出土するなど、南山城地域に限らず山城地方全体でも前期古墳中、最大規模を誇っている。これに続く古墳として、大塚山古墳の北方に位置する平尾城山古墳(全長110m)がある。椿井大塚山古墳と平尾城山古墳の被葬者は、ともに南山城地域を治めていた首長の墓であろうと考えられている。しかし、この2基の古墳に続く大型古墳は、相楽郡内には見い出せず、規模を著しく縮小した数基からなる古墳群に築造の重点が移る。この時期の木津町内には、上人ヶ平遺跡の北方約300mに所在する瓦谷古墳が、前期後半の古墳として位置づけられているが、規模ははるかに小さく、30m前後の円墳である。

前期古墳の中心地が山城町であるとすれば、中期古墳は木津町がその中心地となり、内田山古墳群・上人ヶ平古墳群・吐師七ツ塚古墳群などがあげられる。このうち、上人ヶ平古墳群については、この報告書で述べるので、他の2古墳群についてみると、内田山古墳群は、一辺10~15mの小型方形墳が2基確認されており、上人ヶ平遺跡のそれに類似している。これに対して、七ツ塚古墳群は、全長が約34mのやや大形の帆立貝式古墳あるいは方墳が7基造られている。しかし、椿井大塚山古墳のような巨大な前方後円墳は存在せず、南山城地域を治めていた首長の墓域は、城陽市の久津川古墳群へと移行していく。

後期になると、古墳の築造の中心地は再び山城町内に移る。山城町車谷古墳群・同城谷古墳群・同千両岩古墳群などがそうである。これらの古墳群は、いわゆる群集墳と呼ばれるもので、家族墓的性格をもち、埋葬施設として横穴式石室を採用するが、その規模は20mを越えることはない。現在、山城町内で確認されている群集墳の総数は、160基以上に達するが、郡内の他の町村における群集墳の数はそれほど多くない。この時期、木津町内で確認されている後期古墳は、わずかに坊谷古墳・音乗谷古墳など数例があるにすぎず、群集しないという点からみて、群集墳とは性格の異なる古墳ではないかと考えられる。この木津町と山城町との関係は、墓域の移動などの問題とも深くかかわってくると思われる。



飛鳥時代(7世紀代)にはいと、古墳の築造はほとんど行われなくなり、それに代わって高麗寺・蟹満寺・松尾廃寺など寺院の造営が行われる。寺院造営の中心は、古墳時代後期と同様に山城町であった。なお、この時期の古墳として、木津町と奈良市の境にカザハヒ古墳(通称石のカラト古墳)がある。発掘調査の結果、一辺14mの上円下方墳で、葺石、排水施設などを持つことが確認された。また、主体部構造は横口式石槨である。

続いて、奈良時代に入ると、都が奈良盆地南部の藤原京から北部の平城京に遷され(710年)、相楽郡内には、新たに官営の工場が造られるようになった。その一つに、貨幣を鑄造する「鑄銭司」の跡と考えられる加茂町の銭司遺跡がある。また、平城宮・京造営のための瓦生産も行われた。この瓦生産のための窯は、木津町の梅谷瓦窯・市坂瓦窯・音如ヶ谷瓦窯、精華町の乾谷瓦窯など、平城京北方の奈良山丘陵に造られた。これらの瓦窯に関連して、官営の瓦工房として造られたのが、今回報告する上人ヶ平遺跡である。

以上、簡単に上人ヶ平遺跡周辺の歴史的環境について述べてきた。最近の調査によると、弥生時代以前には顕著な遺構が少ないものの、徐々にその様相が明らかになりつつある。また、古墳時代には、ヤマト政権との関係もあって、その初期に巨大古墳を築造するが、その後は、中小規模の古墳を築造したにすぎない。奈良時代になると、木津川を媒介として物資の多くが平城京に運ばれた。その中継点として木津町がある。

(筒井崇史)

## 第2節 調査の経過

上人ヶ平遺跡の調査は、昭和13年の「市坂の一古墳」の調査から始まる。

昭和13年の調査では、「市坂の一古墳」(後述する上人ヶ平5号墳)の円筒埴輪列の一部を確認し、その埴輪列の配列から「帆立貝式古墳」であることが明らかにされた。

昭和13年の調査以降、昭和59年の住宅・都市整備公団の宅地開発事業に伴う事前調査まで、発掘調査が行われることはなかったが、この間にも上人ヶ平遺跡の重要性は指摘されていた。特に、上人ヶ平5号墳に隣接した市坂瓦窯は、京都府教育委員会等の踏査によって、平城宮大膳職などで用いる瓦を生産した、官営瓦窯であることが指摘されている。

このように、市坂瓦窯を含めた上人ヶ平遺跡(対象面積17,000㎡)は、古墳及び瓦窯跡として知られていたが、昭和59年度以降の当調査研究センターの試掘及び発掘調査によって、弥生時代から中世まで続く遺跡で、竪穴式住居跡・古墳・埴輪窯・瓦工房など重要な遺構・遺物を数多く検出した。

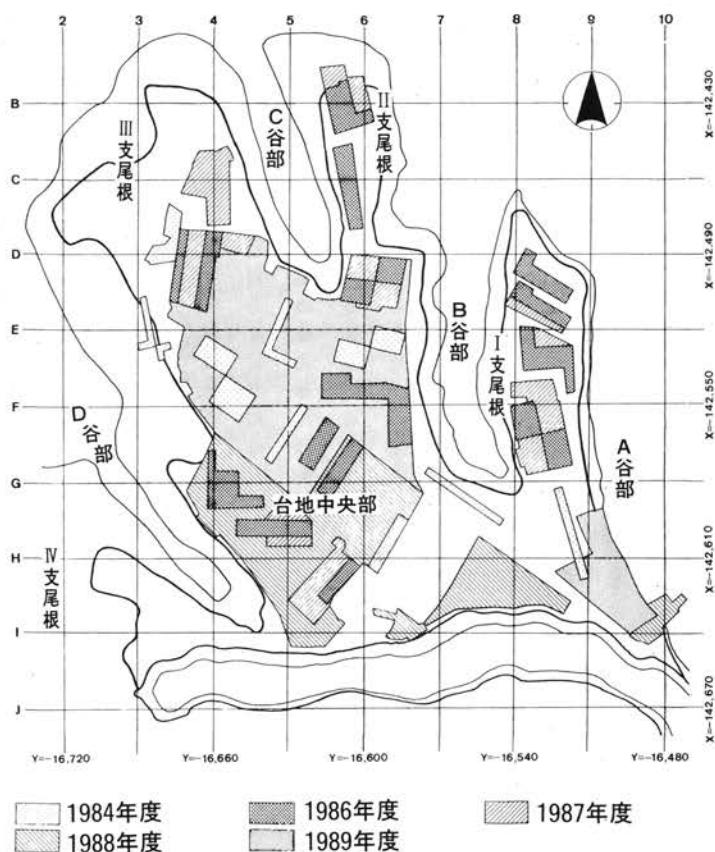
以下、当センターが実施した昭和59年度以降の調査経過を述べる。

### 昭和59年度の調査

対象面積約17,000m<sup>2</sup>に対して、試掘調査を行った最初の年である。

試掘調査では、上人ケ平遺跡が立地する台地上の西端で、2間×4間の掘立柱建物跡S B 01（後述するS B 307）・S A 01・02のほか、瓦片を多く含む溝状遺構(13bt-S D 01など)を確認し、台地上に市坂瓦窯に関連した建物跡群を確認した最初の調査である。

また、上人ケ平5号墳とともに、これまでの分布調査で確認して



第2図 年度別トレンチ配置図

いた市坂1・4号墳(後述する上人ケ平1・4号墳)の調査を行った。その結果、1号墳は直径13mの円墳で、周溝内から出土した埴輪から5世紀末～6世紀初頭の古墳であること、4号墳は古墳ではなく、江戸時代以降の盛り土であることが明らかになった。

### 昭和61年度の調査

昭和61年度の調査は、昭和59年度の調査分をあわせ、17地点(26トレンチ)の試掘調査を行った。その台地の全域にわたり、遺構・遺物ともまんべんなく分布していることが明らかとなった。なお、説明の際、便宜上、上人ケ平遺跡の立地する台地が4条の小丘陵の張り出しからなっているため、各支尾根を東からI支尾根、II支尾根、III支尾根、IV支尾根と仮称する。

I支尾根(概要報告34・35・36bt)では、古墳時代前期の竪穴式住居跡6基と掘立柱建物跡2棟を確認し、I支尾根が古墳時代前期中心の居住地域であることが明らかとなった。

II支尾根(概要報告5・6・19bt)では、二重口縁壺を利用した合口壺棺S X 1920(後述するS X 111)、円形あるいは方形の周溝状遺構のほか、奈良時代の土器・瓦を多く含む土坑S

X1909(後述するS K321)などを確認した。

Ⅲ支尾根では、弥生時代後期の焼失家屋(S H101)、周溝状の遺構S D0820・0805(後述する9号墳)やS D0803(後述する10号墳)などを確認し、1号墳に隣接した方墳の存在が明らかとなった。

台地中央部では、5号墳の周溝とその外側の堤状の遺構(外堤)を検出したほか、柱穴3個を確認した。この3個の柱穴が、奈良時代の瓦工房に関連した建物跡(S B301)の身舎部分であることが平成元年度の調査で明らかとなった。

#### 昭和62年度の調査

昭和62年度は、前年度の試掘調査によって確認された各遺構の性格をより明らかにするため、各試掘トレンチを拡張し、一部分的調査を行った。

I支尾根では、新たに2基の竪穴式住居跡を確認し、Ⅲ支尾根では9号墳の全容とともに4基の方墳(10・11・12・13号墳)と弥生時代の竪穴式住居跡を確認した。台地中央部の中央地区では、5号墳を中心にトレンチを設定し、新たに7・8号墳を確認した。

この62年度の調査では、古墳を中心に調査を進め、1号墳を中心とした支群と5号墳を中心とした支群に大別できることが明らかとなった。また、I支尾根とⅡ支尾根に挟まれたB地区の谷部では、唐櫃を転用した井戸(瓦谷遺跡S E7402)も確認している。

#### 昭和63年度の調査

昭和59・61・62年度の試掘調査によって遺跡の範囲が限定できたため、昭和63年度は面的調査(本調査)を行った。ただ、上人ヶ平遺跡全体が17,000m<sup>2</sup>を上回る広い範囲であるため、本調査は2か年に分けて行い、初年度(昭和63年度)は、農道の南半分で、5号墳を中心とした地点約48.00m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。

この調査では、試掘調査で確認していた5・7・8号墳のほか、新たに14・15・16号墳の方墳を確認した。また、遺跡が立地する台地の西側斜面で埴輪窯3基を確認した。そのうち、最も北側の1基(1号埴輪窯)のみ発掘調査を行い、その製品が上人ヶ平遺跡の古墳群へ供給されていることが明らかとなった。

奈良時代の遺構としては、井戸S E8837(後述するS E315)のほか、瓦・土器を多く含む土坑S K8833(後述するS K319)などを確認した。

#### 平成元年度の調査

平成元年は、昭和63年度の残り約7,500m<sup>2</sup>を対象に本調査を行った。

平成元年度の調査では、4間×9間の大形建物跡群(後述するA建物跡群)と、その周辺の小形建物跡群(後述するB・C建物跡群)のほか、古墳時代前期の竪穴式住居跡と倉庫跡、大形円墳などを確認した。昭和63年度の調査が古墳を中心とした調査であるのに対し、平

成元年度の調査は、奈良時代の遺構・遺物を中心とした調査となった。

#### 平成2年度の整理作業

平成2年度は、1か年をかけて、これまでの調査で出土した遺物の整理、遺構の検討とともに報告書作成の準備にあてた。

報告書作成に際しては、上人ヶ平遺跡が数年度にわたる調査であり、遺構番号などの統一に欠けるため、再度検討を行った。その結果、ここでは遺構番号を三ケタで表示し、弥生～古墳時代の遺構を000～299で、奈良時代の遺構を300～499で、奈良時代以降の遺構を500番台で表示した。なお、これまでの概要報告などで記載した遺構番号とこの報告書で使用する遺構番号との対比表は末尾に示した。

#### －調査組織－

調査主体者	福山敏男（理事長 昭和59～平成元年度）
調査責任者	栗栖幸雄（事務局長 昭和59年度） 荒木昭太郎（ ” 昭和60～平成元年度）
調査担当責任者	堤圭三郎（調査課長 昭和59・60年度） 中谷雅治（ ” 昭和61年度、次長 昭和62～平成元年度） 杉原和雄（調査第2課長 昭和62～平成元年度）
事務局	白塚 弘（総務課長 昭和60年度） 中西和之（総務課長 昭和61年度） 田中秀明（総務課長 昭和62・63年度） 山本 勇（次長 平成元年度）
調査担当者	松井忠春（主任調査員 昭和59～61年度） 小山雅人（調査員 昭和59～60年度、調査第3係長 昭和62～平成元年度） 戸原和人（調査員 昭和59～61年度、主任調査員 昭和62年度） 石井清司（主任調査員 昭和63年度～平成元年度） 石尾政信（調査員 昭和62年度） 黒坪一樹（調査員 昭和59年度） 岩松 保（調査員 昭和62年度） 荒川 史（調査員 昭和61年度） 小池 寛（調査員 昭和62年度） 伊賀高弘（調査員 昭和61年～平成元年度）

調査に際し、下記の方々から協力及び有益な助言をいただいた。謝意を述べる(敬称略)。  
 岡田英男・水野正好(奈良大学)、宮本長二郎・金子裕之・西村 康・山崎信二・小林謙二・  
 毛利光利彦・上原真人(奈良国立文化財研究所)、都出比呂志(大阪大学)、大川 清(國學院  
 大學)、森郁夫(京都国立博物館)、堤圭三郎(京都府教育委員会)、高橋美久二(京都府立山  
 城郷土資料館)、和田晴吾(立命館大学)、和田 萃(京都教育大学)、大船孝弘・森田克行  
 (高槻市立埋蔵文化財調査センター)、笠井敏光(羽曳野市教育委員会)、松本秀人(木津町教  
 育委員会)、中村 浩(大谷女子短期大学)、岡本健一・入江正則(大阪府文化財センター)、  
 高橋克壽(京都大学)、川西宏幸(古代學協會)、中井 公(奈良市教育委員会)、山崎 武(鴻  
 巣市教育委員会)、河内一浩(和歌山県文化財研究会)

#### 上人ヶ平遺跡関係図書

- 梅原末治「木津市坂の一古墳」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査會報告』第20冊 京都府) 1940  
 長谷川達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』  
 京都府教育委員会) 1982  
 「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵  
 文化財調査研究センター) 1985  
 「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵  
 文化財調査研究センター) 1987  
 「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵  
 文化財調査研究センター) 1989  
 「木津地区所在遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵  
 文化財調査研究センター) 1990  
 平良泰久「上人ヶ平古墳群」(『木津町史 史料篇Ⅰ』 木津町) 1984  
 小池 寛「上人ヶ平遺跡の発掘調査—弥生・古墳時代の概観」(『京都府埋蔵文化財情報』第27  
 号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988  
 石井清司「京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都  
 府埋蔵文化財調査研究センター) 1989  
 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文  
 化財調査研究センター) 1989  
 杉原和雄「官営の瓦工房」(『季刊考古学』第30号、雄山閣) 1990  
 小山雅人・石尾政信「上人ヶ平遺跡」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財  
 調査研究センター) 1991  
 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集  
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991  
 高橋美久二「古代の道路と瓦の運搬」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財  
 調査研究センター) 1991

## 第2章 上人ヶ平遺跡の概要

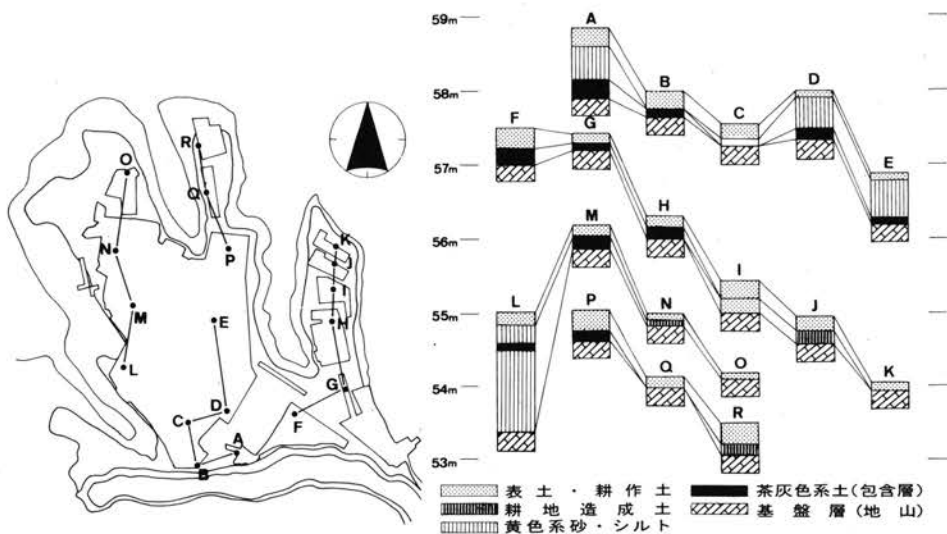
### 第1節 地形と層位

上人ヶ平遺跡は、自然環境の項目でも述べたように、木津川水系によって形成された段丘性の台地上に立地する。この丘陵尾根の先端に形成された段丘は、上面がほぼ平坦で、長軸(およそ南北方向)220mあたりの比高差が5mを測り、わずかに北に傾斜しているにすぎない。

段丘の縁辺には、特に北から西側にかけて、小規模な谷地形が台地を開析しており、台地の北側が掌状の複雑な地形となっている。この開析谷によって削り残された部分は、狭長な尾根状を呈して地形的に区画されるため、これを東側からⅠ・Ⅱ・Ⅲ支尾根と仮称することは先に述べた。この内、Ⅲ支尾根が最も幅広く(上部平坦面幅約60m)、東寄りのⅠ・Ⅱ支尾根はかなり狭い(上部幅15~30m)。

この台地の調査前の状況は、主に畑地として土地利用されており、台地の基部寄りから南西側斜面は竹やぶが茂っていた。台地の北半で谷地形に挟まれた狭長な部分は、耕地が段差を設けて水平に造成されており、過去には水田として開墾されたこともあったことが窺われる。

この台地上の現地表から基盤層までの層序は、場所によって層厚に差異があるものの、



第3図 土層概念図

基本的には上位からⅠ.表土(耕作土、床土も含む)、Ⅱ.黄色系の砂または砂質シルトの互層、Ⅲ.茶灰色系土、Ⅳ.淡黄灰色系粘質土となる(第3図の土層概念図参照)。

このうち、Ⅱ層は、本来は台地上の全面を覆っていたものが、人為的な耕作や自然の削平によって、台地の縁辺部、特に谷が貫入する北半部ではほとんどみられない(わずかに古墳の周溝内に堆積しているにすぎない)。また、遺物はみられず、薄縞状の堆積を示すことから、緩い流れによる堆積と考えられる。Ⅲ層は、古墳時代から中世にかけての遺物包含層で、観察地点のN-P-Hを結んだライン付近を境にしてその南側で広く堆積する。これより北側では、地形の傾斜がやや急になることも加わり、Ⅲ層は削平を受けてほとんど残存しない。ところで、Ⅲ層は、地形に画された小地区(支尾根)によって若干異なった内容を示す。すなわち、東側の地区(Ⅰ支尾根)では、褐灰色を帯びた土層で、主として中世の土器資料の細片が含まれる。これに対して、この西側の地区ではより暗い色調の茶灰色土が堆積し、奈良時代～古墳時代の遺物が包含される。Ⅳ層は、黄色系の地山で、台地の大部分は風化して、粒子が細かく、粘性の強い土質を示すが、下位にいくほど堅固な土層に暫移し、小礫を含むようになる。

遺構は、各時期ともに、基本的にはⅣ層上面(地山面)で検出した。ただ、観察地点E・M・P付近では、Ⅲ層の包含層をベースに掘り込まれた、主として溝状の遺構(奈良時代以降と考えられる)を確認できた。

(伊賀高弘)

## 第2節 遺構の種類とその分布

### (1)遺構の分布

上人ケ平遺跡は、約17,000m<sup>2</sup>の台地上に各時代の遺構が分布している。

この上人ケ平遺跡が立地する台地は、主尾根(Ⅲ支尾根)と、そこから派生した3本の支尾根からなっている。主尾根と、それぞれの支尾根は、時期ごとに遺跡の種類が異なっており、ここでは主尾根とそれぞれの支尾根ごとに遺構の分布状況を概観する。

なお、説明に際しては、それぞれの尾根を東から、Ⅰ支尾根・Ⅱ支尾根・Ⅲ支尾根・Ⅳ支尾根に、支尾根と支尾根に挟まれた谷部を東からA・B・C・D谷部とする。また、各支尾根の基部にあたる広い台地上を台地中央部と仮称する。

### (2)Ⅰ支尾根の遺構(9～13トレンチ)

Ⅰ支尾根の遺構は、古墳時代前期の竪穴式住居跡10基(一部建て替えあり)と倉庫跡2棟、5世紀後半代の埴輪窯3基からなる。

竪穴式住居跡は、北にのびる尾根の先端に1基(SH121)を確認したほか、支尾根の中央(10トレンチ)に住居跡が集中する傾向にある。10トレンチでは、中央に2棟の倉庫跡を、そして倉庫跡を中心に、6基(一部建て替えあり)の竪穴式住居跡が東側斜面に隣接して分布している。

埴輪窯は、支尾根の基部で東側斜面に3基が構築されている。

なお、I支尾根では、奈良時代の遺構・遺物の分布は非常に希薄である。

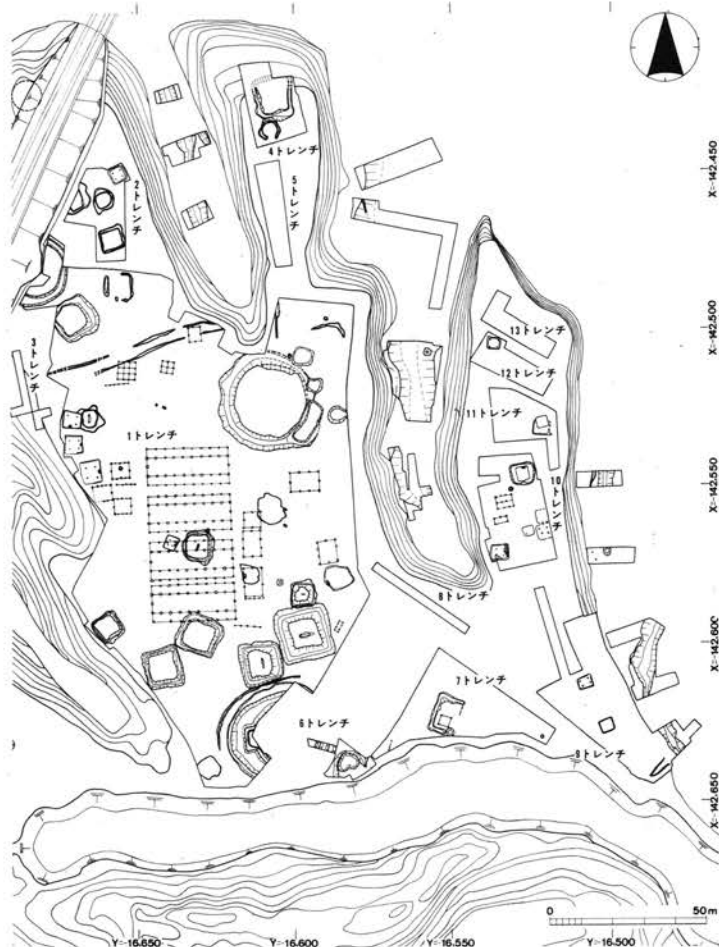
I支尾根の東側にあたるA谷部では、布留式土器を含む河道を検出している。

### (3) II支尾根の遺構(1トレンチの北端と4・5トレンチ)

II支尾根の遺構は、北にのびる尾根の先端部(4トレンチ)と基部(1トレンチの北端)に遺構が集中し、中央部(5トレンチ)では遺構密度が希薄である。

II支尾根の尾根先端部では、弥生時代後期の土坑(SK141・142)と、方形あるいは円形の周溝状遺構(SX119・120)が2基、尾根の基部では奈良時代の土坑(SK321)及びピット群からなっている。

奈良時代の遺構・遺物は、尾根先端部では遺構密度が希薄であり、尾根の基部に集中する傾向にある。特に土坑(SK321)は、多量の土器・瓦が出土した。



第4図 遺構概念図



なお、Ⅰ支尾根とⅡ支尾根の間のB谷部(概報では瓦谷遺跡で記述)には、唐櫃を転用した井戸(S E 382)があり、奈良時代の上人ケ平遺跡の性格を考える上にも重要な遺構である。

#### (4)Ⅲ支尾根の遺構

Ⅲ支尾根は、北西方向にのびる尾根であり、本来は、上人ケ平遺跡が立地する台地の主尾根である。

Ⅲ支尾根の遺構密度は高く、弥生時代後期の竪穴式住居跡1基、古墳時代中・後期の古墳8基のほか、土坑・ピットなどがある。

竪穴式住居跡は、尾根の先端に1基独立しており、Ⅱ支尾根の土坑(S K 141・142)と同様、弥生時代後期の遺構が尾根の先端にかたよって存在する傾向にある。

古墳は、未調査の古墳(2号墳・3号墳)を含め8基の古墳があり、1号墳を中心にその周りを取り囲むように方墳が分布している。Ⅱ支尾根とⅢ支尾根の間のC谷部では、河道を確認しており、庄内併行期の甕をはじめ、若干の遺物が出土した。

#### (5)Ⅳ支尾根の遺構

Ⅳ支尾根は、西方向にのびる小さな尾根である。

このⅣ支尾根は、調査対象外にあたり、遺構・遺物の様相は明らかではない。なお、Ⅳ支尾根と台地中央部の間の狭いD谷部に、上人ケ平遺跡で成形した瓦を焼成する市坂瓦窯がある。また、Ⅳ支尾根の尾根筋と台地中央部の南にそって、現在「ふんどし池」と呼ばれている、東西方向にのびる狭長な池が掘られている。この池は、後述するように、瓦生産に関連した粘土の採掘穴と思われる。

#### (6)台地中央部の遺構

台地中央部は、上人ケ平遺跡の中心部分にあたる。台地中央部の遺構は、古墳時代前期の竪穴式住居跡4基と倉庫跡2棟、古墳時代中～後期の古墳11基、奈良時代の掘立柱建物跡13棟のほか、土坑・溝状遺構などがある。

台地中央部は、後述するように、奈良時代に古墳時代の竪穴式住居跡及び古墳の一部を削平あるいは周溝を埋め、瓦工房として整地している。

(石井清司)

## 第3章 上人ヶ平遺跡の遺構と遺物

### 第1節 時期の設定

上人ヶ平遺跡は、弥生時代から室町時代までの遺構・遺物があり、前述のように各支尾根及び台地中央部にまんべんなく遺構・遺物が分布している。

これらの遺構・遺物を概観すると、この台地上を集落として利用している段階(第Ⅰ期)、墓域として利用している段階(第Ⅱ期)、瓦工房として使用している段階(第Ⅲ期)に大別することができる。

I期は、弥生時代後期～古墳時代前期末までであり、古墳時代前半の集落が主体である。検出遺構は、竪穴式住居跡や倉庫跡などがあり、その居住区はⅠ支尾根の先端部とⅢ支尾根の基部の2グループに大別することができる。

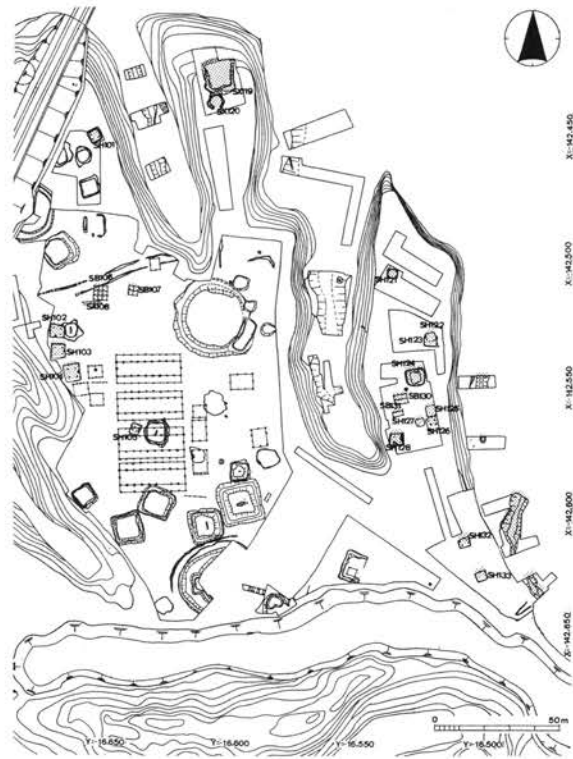
Ⅱ期は、古墳時代中期～後期にあたり、古墳群が築造された時期で、Ⅰ期の居住区と同様、2支群に大別することができ、台地中央部とⅢ支尾根の先端に分かれる。

Ⅲ期は、古墳時代以降一時期の空白期間をおいてのち、奈良時代に大きくこの台地上を改変した時期であり、平城宮へ瓦を供給するための瓦工房として利用された段階である。Ⅲ期の遺構は、台地中央部に集中する傾向がある。

Ⅳ期は、遺構密度は希薄であるが、中世の墳墓堂と思われる遺構が台地中央部にある。奈良時代以降の時期である。

以上のような時期設定により、遺構・遺物の概要説明を行う。

(石井清司)



第5図 第Ⅰ期の遺構概念図

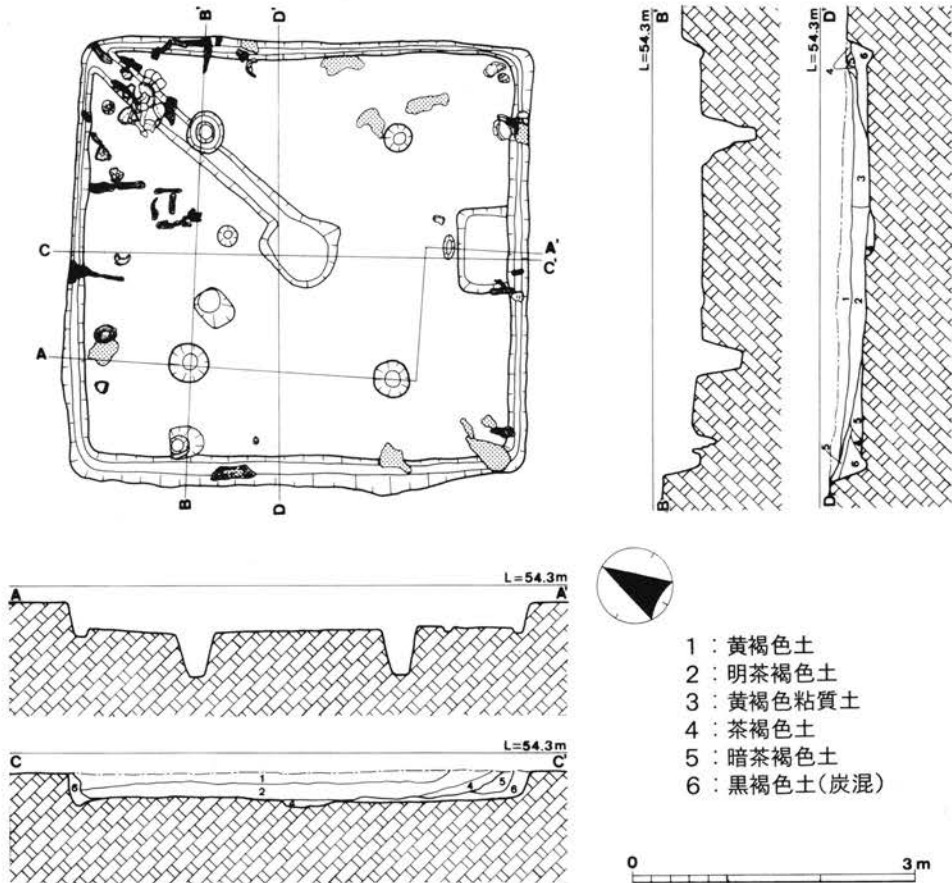
## 第2節 第I期の遺構・遺物

### (1) 弥生時代の遺構

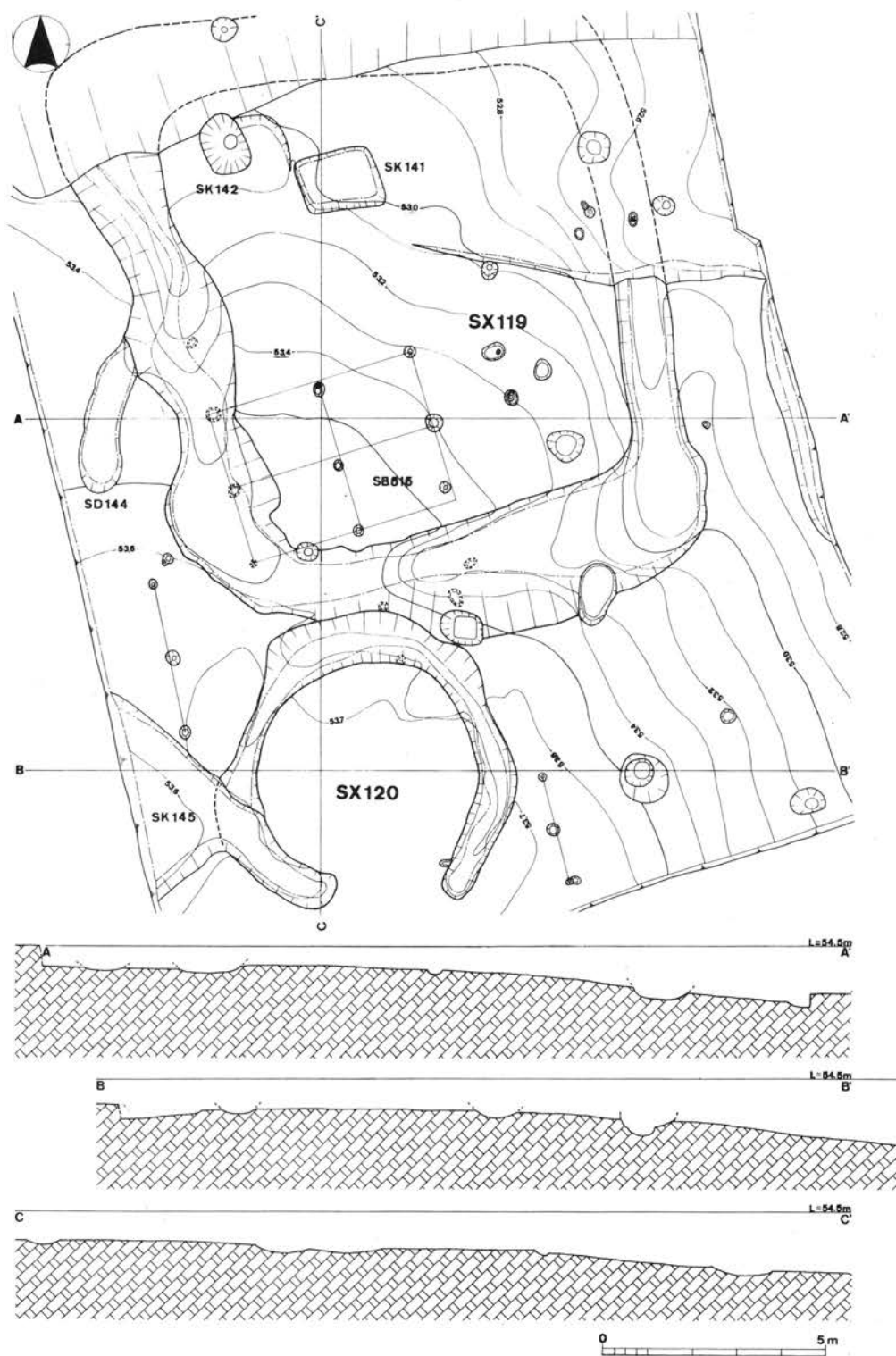
上人ケ平遺跡が立地する台地上に、明確な遺構が現われるのは、弥生時代後期からであり、それ以前の状況はわずかに遺物(石器)がみられるのみである。

弥生時代後期の遺構には、竪穴式住居跡(S H101)、周溝状遺構(S X119・120)、土坑(S K141・142)があり、この時期の遺構は、北に張り出した尾根の先端にある。

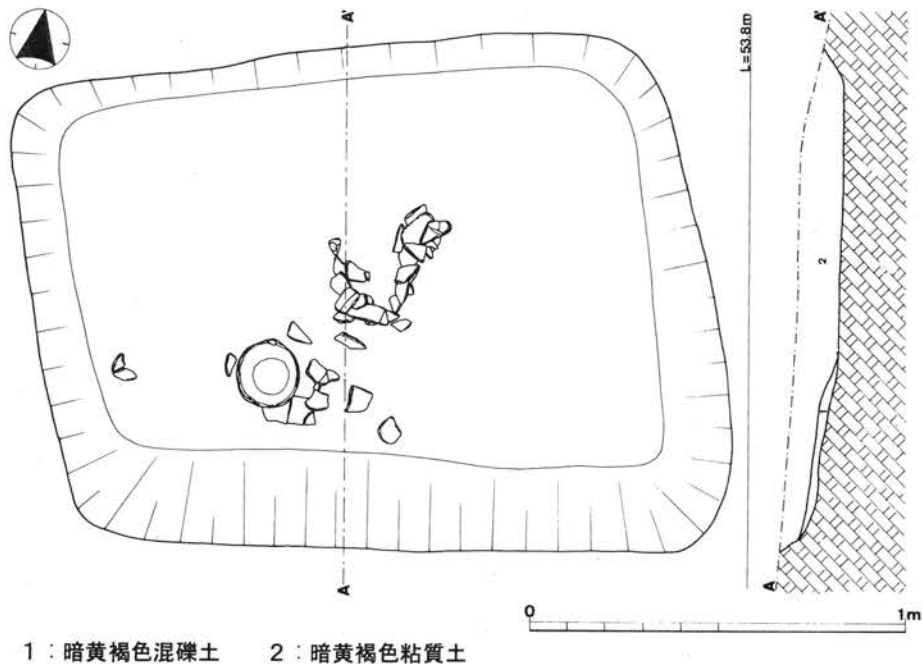
S H101(B-4) 隅丸方形の竪穴式住居跡で、床面には(床面から40cm掘り込まれている)4本の柱穴と周壁溝が完周する。南面の周壁溝に接してわずかに凹んだ方形土坑(一辺30cm)がある。この方形土坑の周辺部は堅くしまっており、出入口とも想定できる。床面の中央には円形土坑(直径30cm)と、その土坑から住居跡の北西隅へ続く溝状遺構(幅15cm・深さ15cm・断面「U」字形)がある。その溝の周壁溝に近い部分から台石(チャート製)が出土した。この土坑・溝は何らかの作業に関連するものと考えられる。床面直上には焼土と炭化材が散



第6図 SH101実測図



第7図 SX119・SX120ほか実測図



1：暗黄褐色混礫土      2：暗黄褐色粘質土

第8図 SK141遺物出土状態実測図

乱していた。

SX119 尾根の先端で検出した方形周溝状遺構である。SX119は、北辺が削平されており、三辺のみを確認している(東西7.0m×南北9.0m以上)。溝は断面「U」字形を呈し、幅1.3~20m・深さ0.1~0.3mを測る。溝内から弥生土器と思われる小片が数多く出土した。

SX120(B-5) SX119の南側に接する円形周溝状遺構(復原径5.5~6.5m)である。溝は断面「U」字形を呈し、幅0.6~1.0m・深さ0.05~0.1mを測る。溝内から弥生土器と思われる小片が少量出土した。

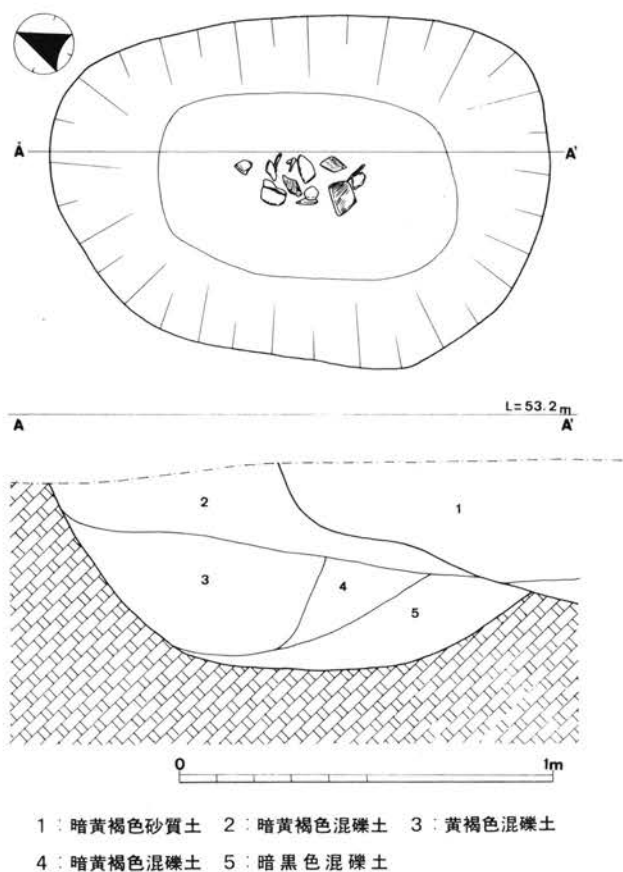
SK141(A-5) SX119の溝に囲まれた中で、中央より北西方向に扁してある方形の土坑(一辺1.7m・深さ0.1m)である。この土坑からは、壺1個体分が出土した。

SK142(A-5) SK141の北西に隣接してある円形土坑(直径0.3m・深さ0.2m)である。この土坑からは、手焙り形土器1個体分が出土した。

## (2)弥生時代の土器(図版第4)

SH101出土遺物 竪穴式住居跡の床面直上から、完形に近い状態で土器が出土した。

甕1は、輪台状の底部から内湾し、あまり肩の張らない胴部をもつ。頸部で屈曲し、口唇部に面をもつ。内面は一部縦方向のハケメが観察でき、底部側面はナデている。口径12.2cm・器高9.4cm。



第9図 SK142遺物出土状態実測図

甕5は、平底の底部から内湾し、やや肩の張った胴部をもつ。頸部の屈曲は緩く、口唇部に面をもつ。外面は縦方向の、内面は横方向のハケ調整を施す。口径13.8cm・器高11.6cm。

甕8は、平底の底部から長胴形の体部を呈し、器高のほぼ中間に最大径がある。頸部は屈曲し、口唇部は丸く納める。内・外面ともハケ調整を施す。口径10.2cm・器高14.3cm。

鉢2・3・7は、輪台状の底部から内湾する胴部をもつ。口唇部は丸くおさめる。外面はヘラケズリののち、ナデ調整を施す。2は、口径7.8cm・器高6.3cm、3は、口径11.2cm・器高7.9cm、7は、口径10.1cm・器高7.7cmを測る。

鉢4は、輪台状の底部から直線的に開く胴部をもち、口唇部を丸くおさめる。外面は下方へのヘラケズリの後、ナデ調整を施す。底部側面に縦方向のナデが明瞭に残る。口径10.4cm・器高7.5cm。

SK141出土遺物 SK141からは、壺(10)が出土した。

壺10は、体部最大径が中位よりもやや上方にある。口頸部は筒状の頸部から斜上方に立ち上がる口縁部へ続く。底部は突出ぎみの平底である。口径16.3cm・復原高29.5cm。

SK142出土遺物 SK142からは、手焙り形土器が1個体出土した。手焙り形土器3は、偏球形の体部で、口縁部はわずかに受け口状を呈する。体部下半には、鈍い1条の突帯がめぐる。

ピット出土遺物 甕6は、倒卵形の体部で、口縁部は単純「く」の字形を呈する。体部外面は右上がりのタタキを施す。体部内面は、ヘラ削り調整を施す。口径11.3cm・器高13.2cm。

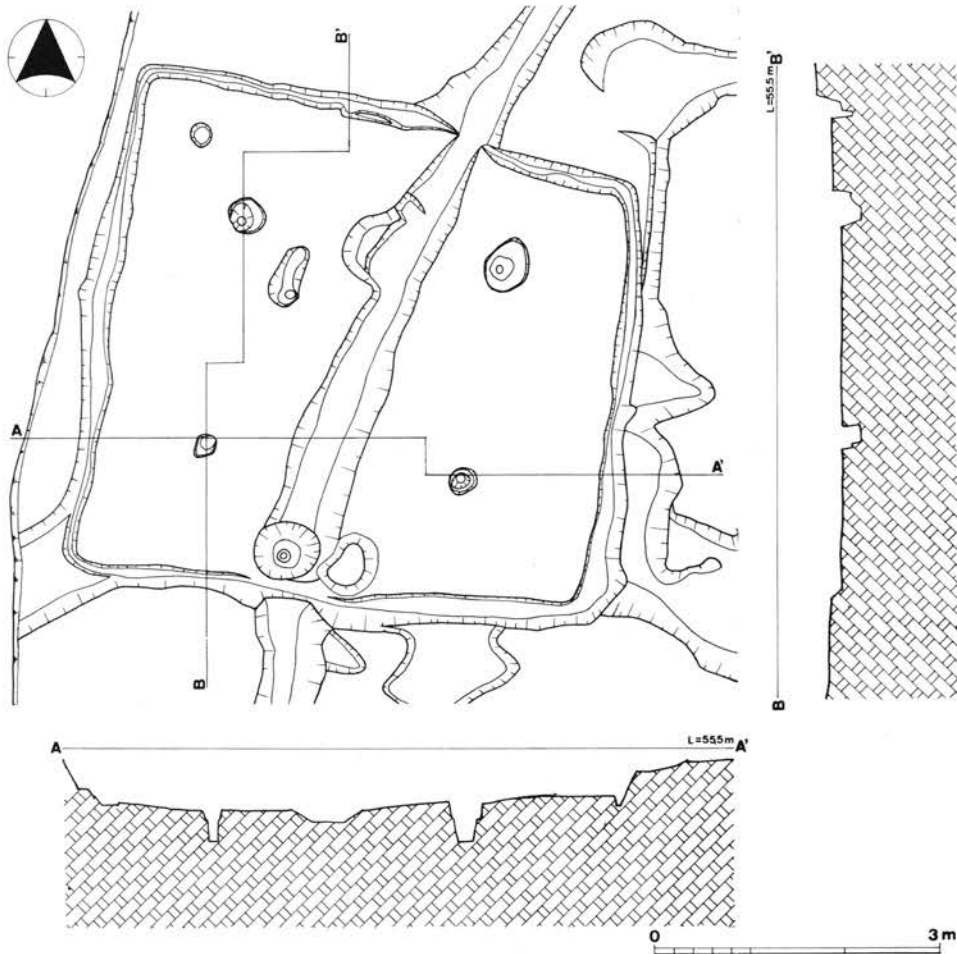
(3)古墳時代前半の遺構

弥生時代の遺構が、北側にのびる尾根(第Ⅱ・Ⅲ支尾根)の先端のみにおいて、遺構密度が希薄であるのに対して、古墳時代前半の遺構は、Ⅰ支尾根の全域と台地中央部の西側にかたよって存在している。この時期の遺構としては、竪穴式住居跡15基、掘立柱建物跡6棟のほか、柵列や土坑などが存在している。

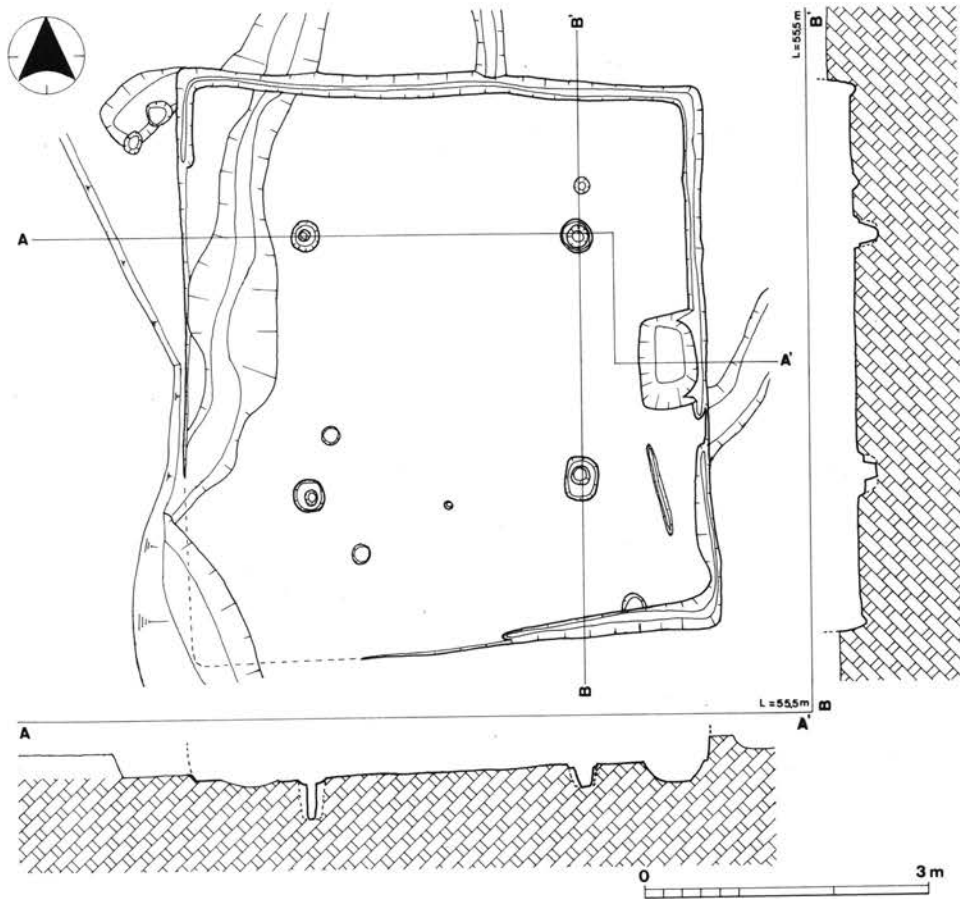
SH102(E-3)

台地中央部の西端で検出した、隅丸方形の竪穴式住居跡である。SH102は、東西5.2m・南北5.5mを測り、床面は4本柱で周壁溝が四周する。

SH102の南中央部に推定径約60cmの円形土坑があるが、南北方向にのびる幅0.75m・深さ約10cmの溝によって削られている。この円形土坑の北東約30cmの位置に、大形壺の口頸部片があたかも意図的に伏せて置かれたような状態で、1個体出土した。



第10図 SH102実測図



第11図 SH103実測図

南面中央の周壁溝の上面には、長軸約10cm・短軸約0.55mを測る焼土坑がある。大形壺の口縁部片以外には、床面で土師器の細片が出土した。

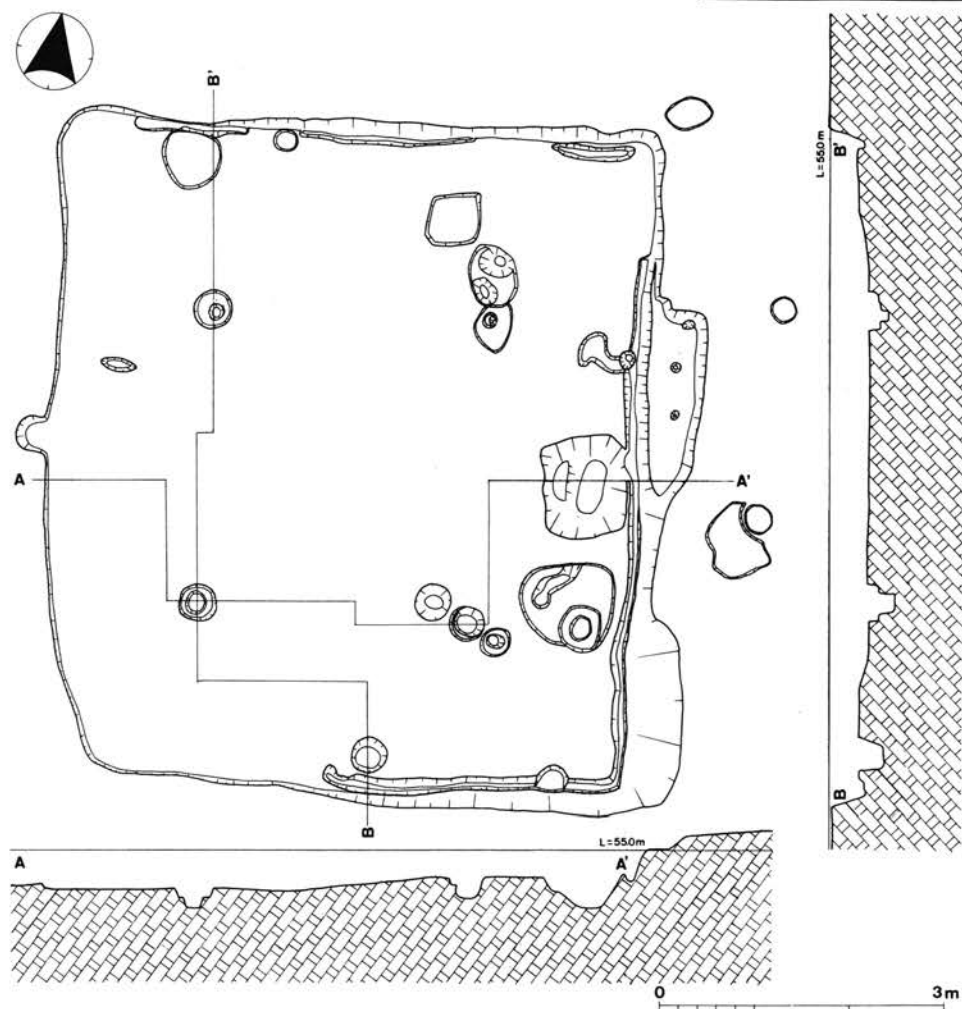
SH103(E-3)

SH102の南約3.5mにある隅丸方形の竪穴式住居跡である。SH103は、東西5.8m・南北6.0mを測り、4本柱で、周壁溝が四周する。SH102の東面の周壁溝に接して、東西1.4m・南北0.9mの方形土坑がある。土器は床面のほか、周溝及び方形土坑内からも土師器の細片が出土した。

SH104(E-3)

SH103の南約3.6mにある隅丸方形(東西6.3m・南北7.0m)の竪穴式住居跡である。周壁溝は東・北と南の一部に残り、西辺は残存していない。床面には10か所程度のピットがあるが、支柱穴は4本と思われる。





第12図 SH104実測図

東面の周壁溝に接して、東西1.1m・南北0.9mの方形土坑がある。土器は、細片が東面の周壁溝の上面に、住居廃絶後に廃棄したかのような状態で出土した。なお、SH104では埋土上面に奈良時代の土器が比較的まとまって出土した。

#### SH105(F-4)

後述するように、奈良時代のA建物跡群の造営により大きく削平された竪穴式住居跡である。SH105は、東西3.6m・南北4.5mを測り、平面プランは方形である。床面には8か所の小ピットがあるが、支柱穴は4本と思われる。周壁溝は、西面を除いて南・北・東にめぐる。東面の周壁溝に接して長軸0.9m・短軸0.65mの不整形土坑がある。土師器は、床面直上及び周壁溝から少量出土した。

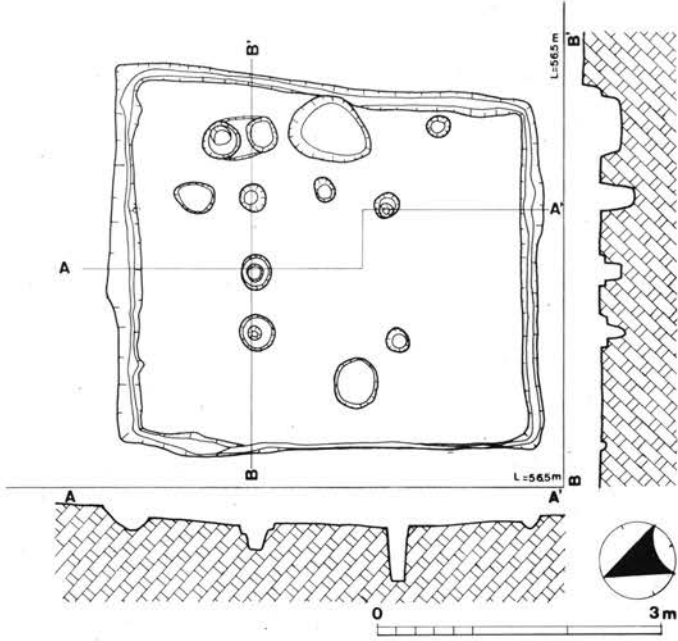
#### SB106(D-4)

台地中央部の竪穴式住居跡群の北東約10mにある、3間×3間の総柱建物跡(東西5.75m・

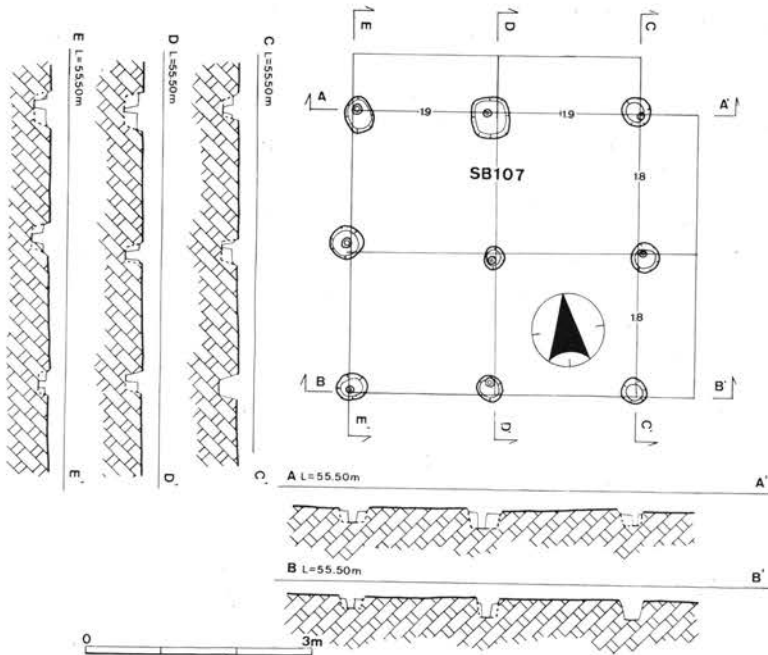
南北5.65m)である。各柱穴は、径30~60cmの円形掘形で、径10cm前後の柱痕跡を残すものが多い。各柱間間隔は企画性が乏しく、1.7~2.0mを測る。各柱穴からは土師器が出土したが、特に、「四ハ」柱穴内からは、焼成後に円孔を打ち欠いた小形丸底壺1個体を含む壺が3個体出土し、うち2個体は口縁部を重ねあわせた「合わせ口」の状態出土した。この2個体の壺の中から炭化米と滑石製白玉1点が出土した。

SB107(D-4)

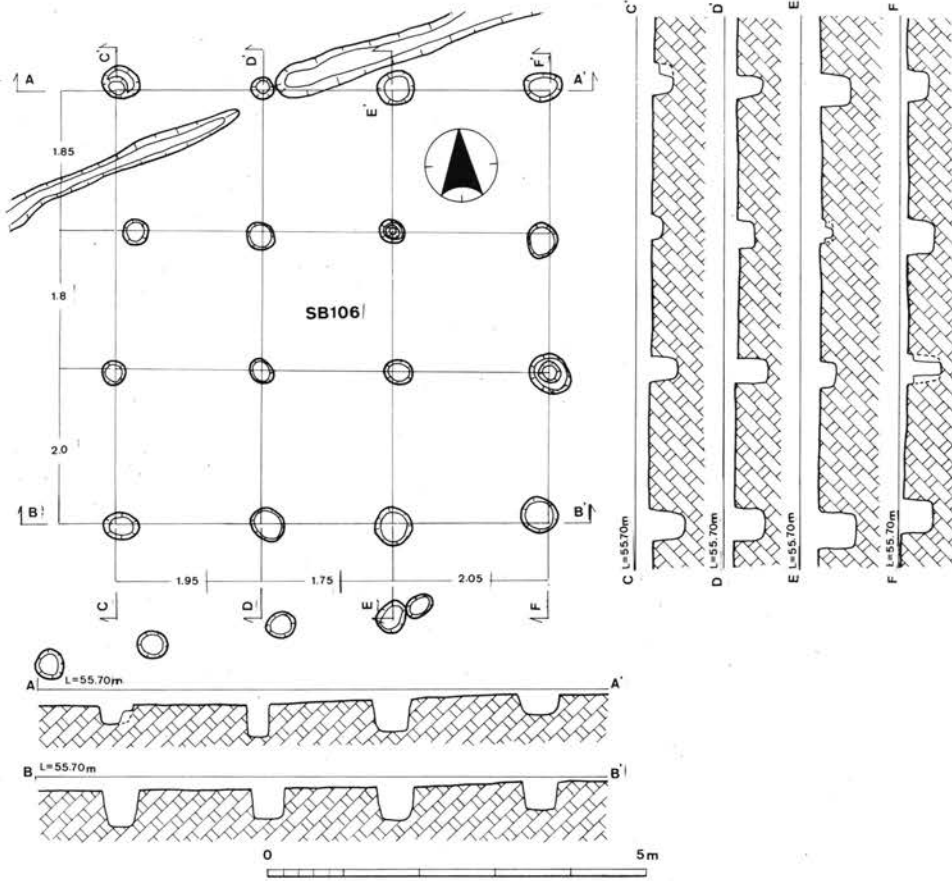
SB106の東約8mにある2間×2間の総柱建物跡(東西3.8m・南北3.6m)である。各柱穴はSB106と同様、径30~60cmの円形掘形で、径10cm前後の柱痕跡を残すものが多い。建物跡の主軸は、



第13図 SH105実測図



第14図 SB107実測図



第15図 SB106実測図

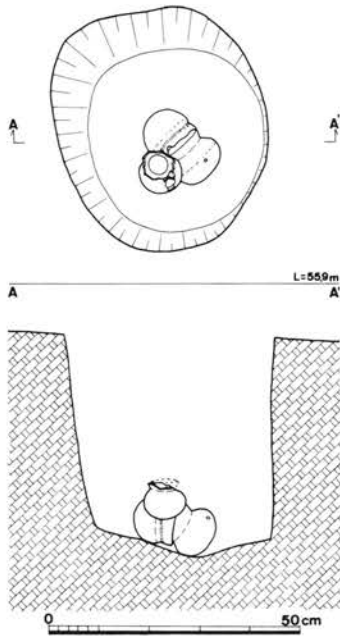
S B106のN 3° 30' Eに対し、S B107は東に5° 20' 振れている。

S A108(D-4)

S B106の南前面を画する柵列(5間)であり、方位はS B106の方位より西に約10° 振れている。柱穴は掘形直径約0.4mを測る。S A108の柱穴内からは、遺物が出土していないが、柱穴内埋土がS B106・107と同様であったため、S B106・107に附属する柵列と思われる。

S X134(B-3)

S X134は、Ⅲ支尾根の先端にある、隅丸長方形プラン(長軸1.94m・短軸0.54m)の土壌墓である。検出面から底までの深さは0.5mを測り、下層に濁黄褐色粘質土、上層に暗褐色土が堆積している。底部北西部には、幅10cm・深さ10cmの溝状施設があり、灰褐色砂利が充填されていることから、排水用として掘られたと考えられる。遺物は、土坑内両端で土師器小形壺が1点ずつ出土した。この土坑は上層の攪乱により、棺埋納痕は明瞭でなかった。



第16図 S B 106「四ハ」  
柱穴内遺物出土状態実測図

S K 136(D-4)

S K 136は、S B 106の北東約6 mにある不整形(東西1.9m・南北0.8~1.2m)土坑である。S K 136の上層には炭・焼け土とともに小形丸底壺が出土した。

S K 137(D-4)

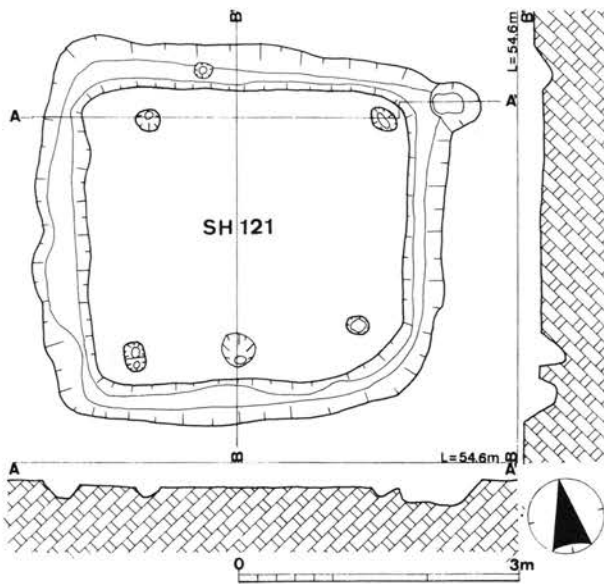
S K 136に近接してある円形土坑(長軸2 m以上・短軸1.55m)である。S K 137もS K 136と同様、炭・焼け土が埋土内に混入していた。

S K 139(D-4)

S K 136の北に隣接する不整形土坑(長軸1.2m・短軸0.95m)である。埋土は黄茶色砂質土で、上記の土坑と異なる。

S H 121(D-8)

全体の形状は、隅丸方形を呈し、一辺約4.0~4.4mを測る。住居跡床面には、4本の柱穴と幅約20~30cmの周壁溝が四周している。床面の中央部には、溝状に炭が入る。南東の周壁溝内から土師器・高杯1点が出土した。



第17図 S H 121実測図

S H 122(E-8)

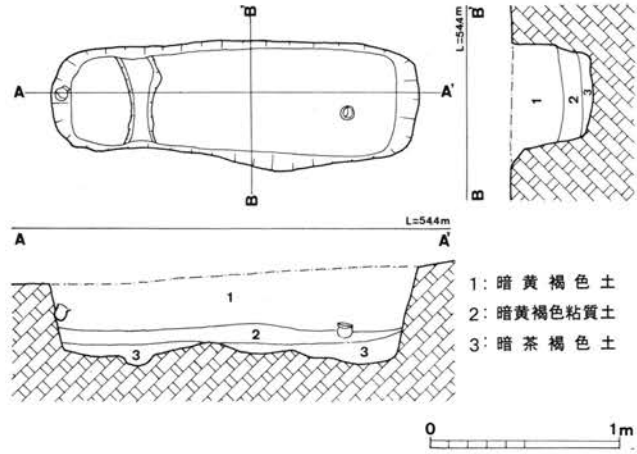
上面の削平が著しく、器壁の残存高は約5 cmである。S H 122は、隅丸方形を呈し、東西約3.2m・南北約3.1mを測る。S H 122は4本柱とはならず、中央に支柱穴と思われる2本の柱穴がある。床面の南辺には一辺約0.9mの方形土坑があり、土坑中央には直径40cm・深さ20cmの土坑がさらに深く掘り込まれている。この円形土坑内から小形丸底壺1点が出土した。

S H123(E-8)

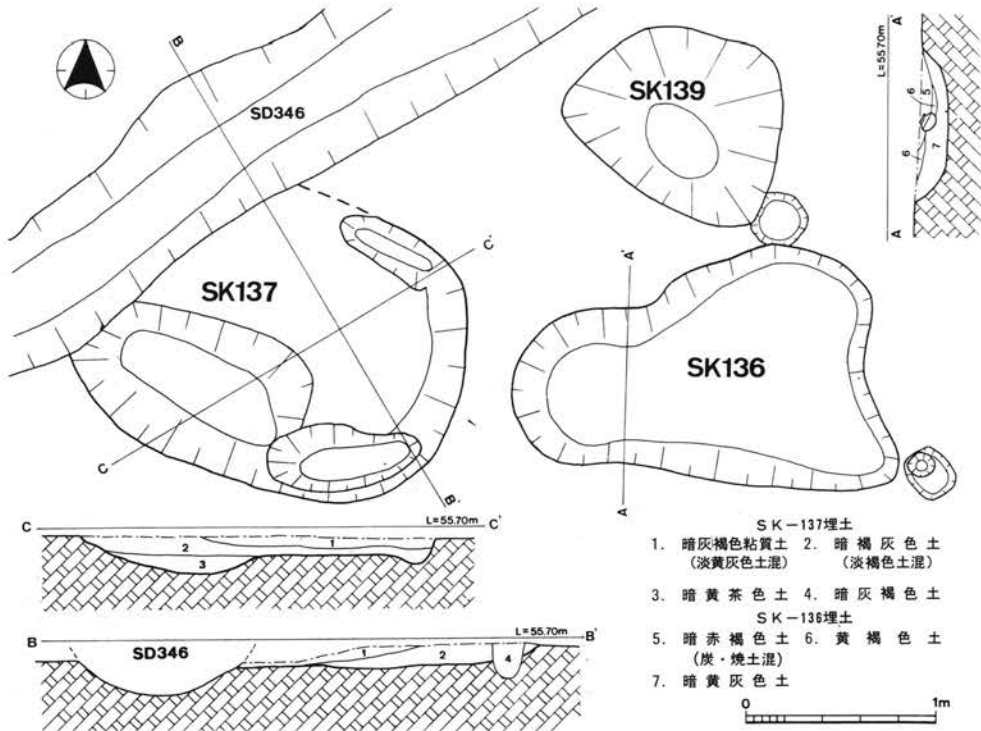
S H122を切った隅丸方形の竪穴式住居跡で、一辺約5mを測る。床面には4本柱と一部途切れる周溝がある。

S H124(E-8)

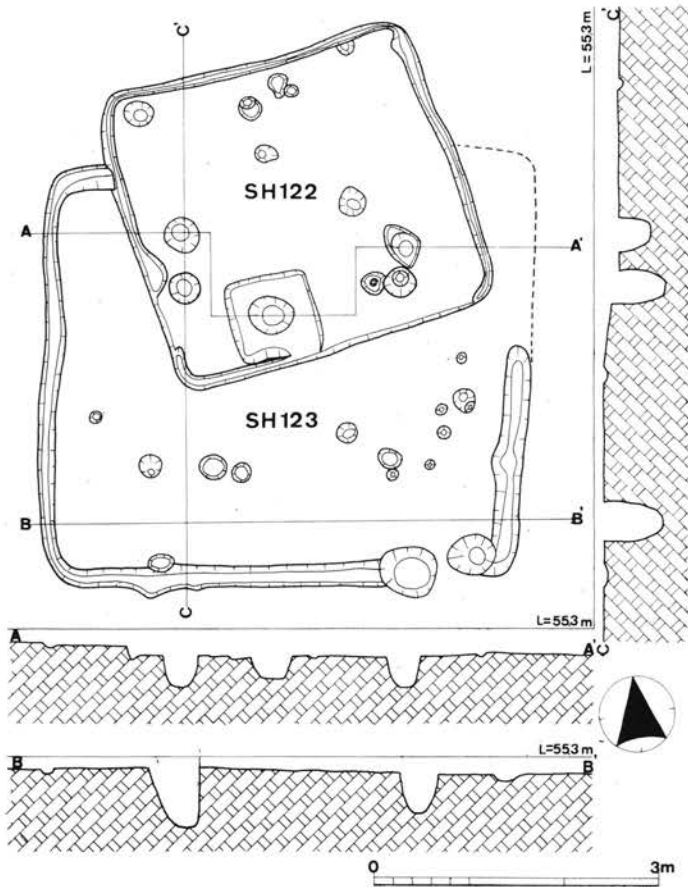
東西3m・南北4mの方形プランで、幅10cmの周壁溝がめぐる。床面では柱穴は検出できず、木板等で柱を受けた可能性がある。床面の北側には焼土が薄く堆積しており、炉の痕跡と思われる。S H124の外側には、平面台形状(北辺6m・南辺5m・東西5m・溝幅15cm)の溝



第18図 S X134実測図



第19図 S K136・137・138実測図



第20図 SH122・123実測図

がめぐる。溝の南面中央には0.4m×0.6mの方形土坑がある。この溝は、SH124の床面よりも深く掘り込まれていることから、排水溝（流水の進入を防ぐ目的）の可能性がある。SH124の床面とその外側にめぐる溝内から土師器が出土した。

SH125(F-8)

近世の土取りにより70%以上が削り取られ、西辺の一部だけが遺存している。SH125の一边は約3mで、床面には周壁溝がめぐる。床面からは遺物は出土していない。

SH126(F-8)

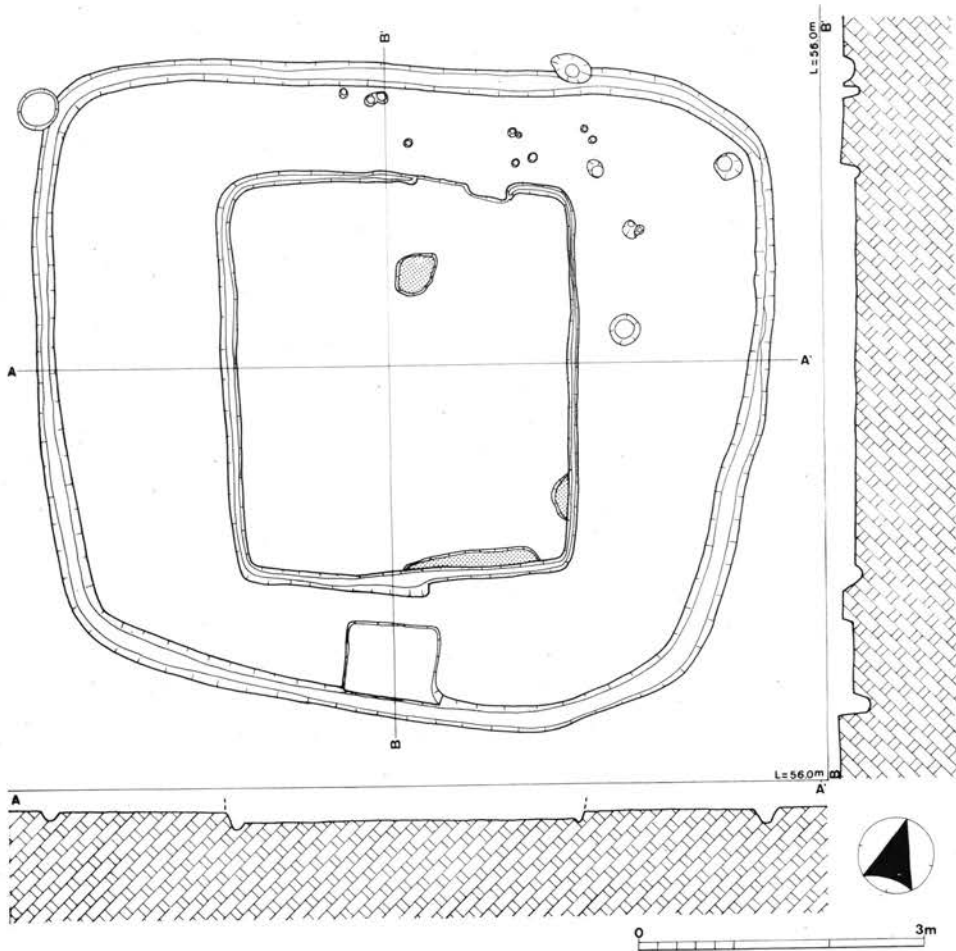
SH125と同様、60%以上が近世の土取りにより削り取られて西辺のみ遺存している。SH126は、一边5mを測り、床面には4本柱柱穴と南壁溝がめぐる。床面中央には、砂利を充填した炉の跡がある。遺物は床面直上で土師器片が数点出土した。

SH127(F-8)

北辺に比べて南辺が少し短い台形プランで、一边約3.5mを測る。床面で1か所ピットを確認したにすぎない。周壁溝は一部途切れながらも四周する。

SH128A・B(F-8)

SH128は、建て替えがあり、当初東西4.9m・南北4mの隅丸方形プラン(SH128-A)を、北東方向に5.0m×5.9mに拡張している。SH128-Aは、北面の周壁溝は残存しない。SH128-Bは、SH128-Aの北西・南西面の周壁溝を共存し、新たに北東方向に周溝を掘り加えている。SH128-Bの床面には、数多くのピットがある。これらのピットは、床面



第21図 SH124実測図

からの深さが50cm前後のものと20cm前後のものに大別することができ、50cm前後のものが  
 支柱穴と思われる。床面及び周壁溝からは、少量の土師器片が出土した。

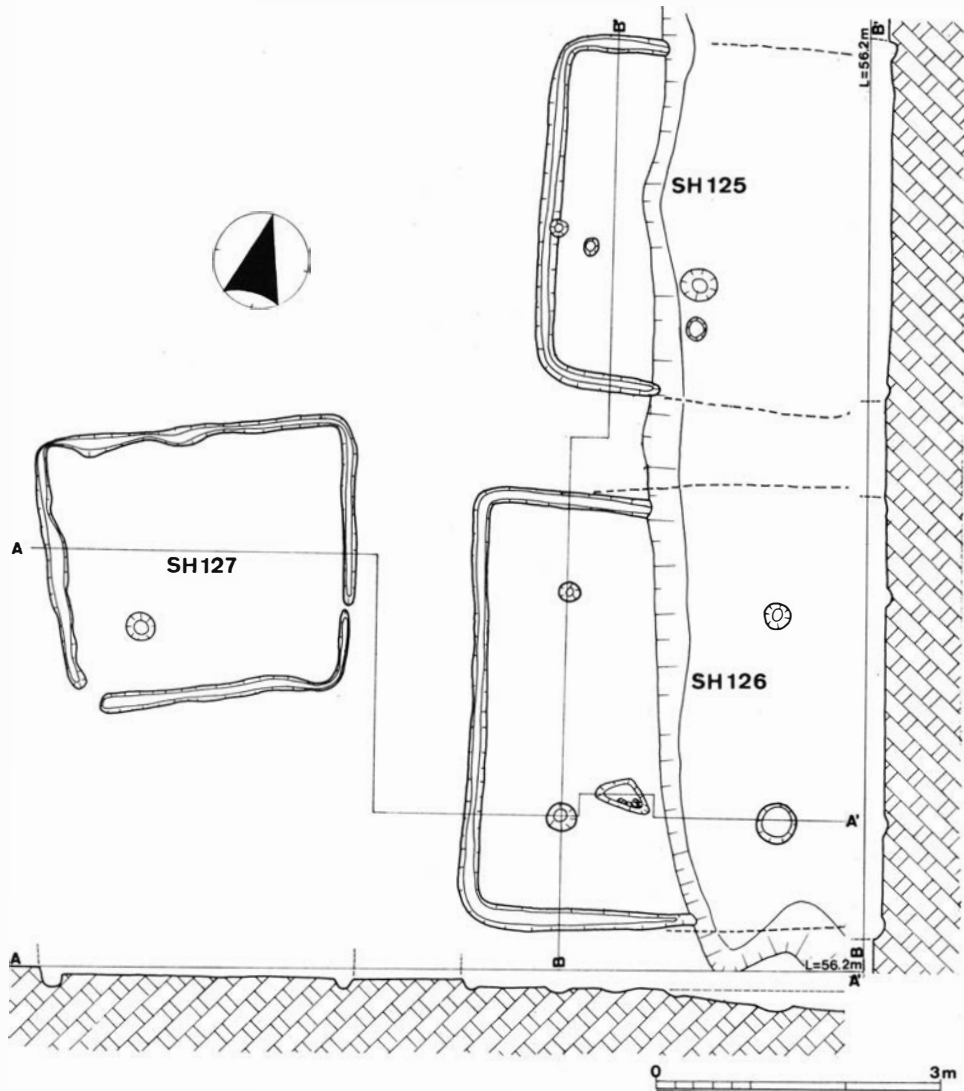
S H132(H-9)

I 支尾根の基部で検出した東西4.7m・南北4.3mを測る方形の竪穴式住居跡である。床  
 面で10数個のピットを検出した。周壁溝は四周する。床面からは土師器片のほか、石庖丁  
 が出土した。

S H133(H-9)

東西4.7m・南北4.0mを測る方形の竪穴式住居跡で、床面には4本の支柱穴がある。周  
 壁溝は一部途切れながらもめぐる。床面からは土師器片が出土した。

(石井清司)



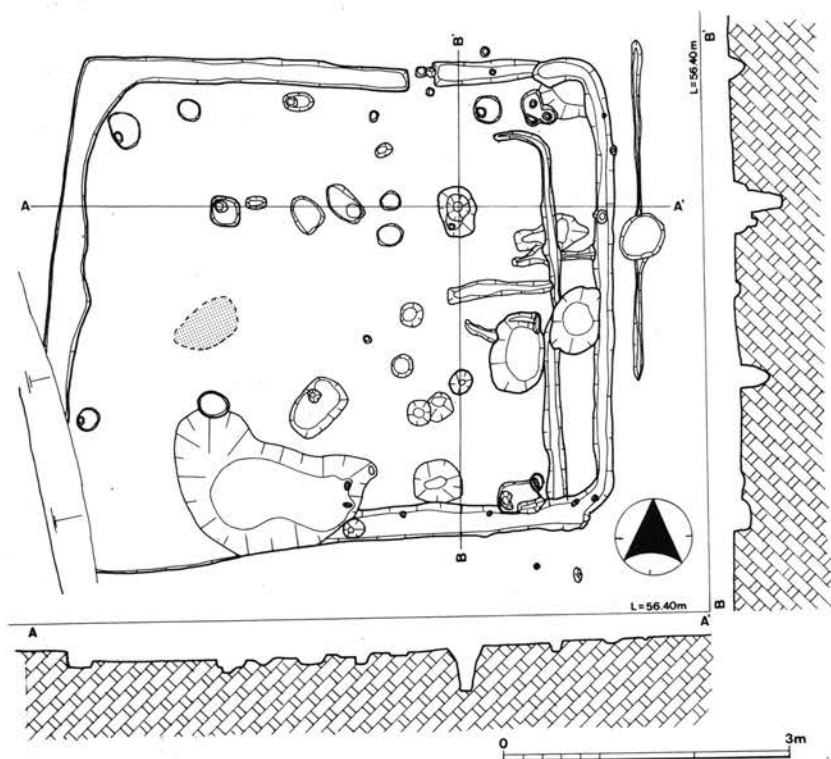
第22図 S H125・126・127実測図

S B130(F-8)

堅穴式住居跡 S H124の南西側の空間地に多数のピットが検出され、その平面・位置関係や掘形の埋土の違いから3棟の建物と1条の柵列に復原した。

周囲の土層の堆積状況は、耕作土・床土(一部旧耕作土)を除去すると淡黄褐色粘質土の地山となり、上記のピットの多くは基本的にはこの地山をベースに掘り込まれる。ただ、このピット群の北半部に限り、布留式併行期の土器細片を若干含む包含層が地山上面に薄く残り、この領域のピット(S B130北側柱部分)は、この包含層に被覆された状態で確認された。したがって、このS B130は、柱筋を揃えて並立するS A146・S B131(S B147)と





第23図 SH128実測図

ともに古墳時代前半期に属するものと考えられる。

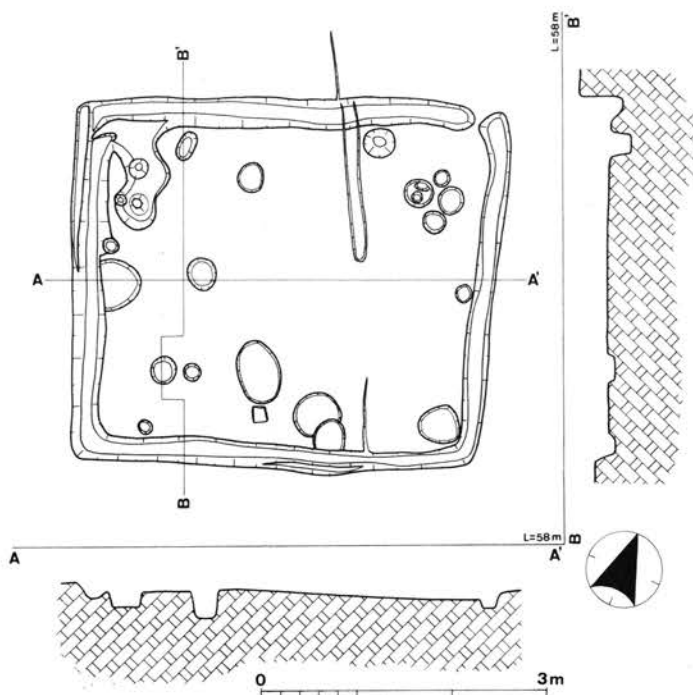
S B130は、東西2間(3.5~3.8mで南辺が長い)・南北2間(3.95m)で束柱を有する総柱建物に復原できる。柱間寸法は、不揃いで1.6~2.1mを測る。柱掘形は、平面が円形に近い隅丸方形で、規模は、一辺(あるいは直径)26~45cm・検出面からの深さ20~45cmを測る。柱根は残らないが、ほとんどの場合、その痕跡(直径10~15cm)を確認できた。

#### S A146(F-8)

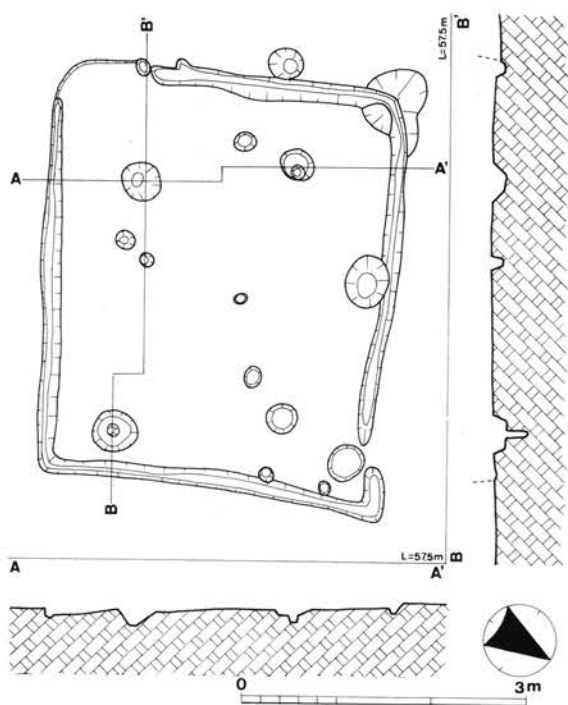
S A146は、S B130の約1.3m南で、東西方向にのびる柱列である。主軸方位は、柱の軸線がやや乱れるものの、N78°Eを示し、S B130の南側柱列に対して、わずかに斜行する。全長は6.9m(5間)で、柱間寸法は1.0~1.8mと揃わない。柱掘形は、円形プランを呈し、その規模は直径20~30cm・検出面からの深さ10~30cmを測る。柱根は残らない。

#### S B131(F-8)

S B131は、S A146のさらに南に接する掘立柱建物跡で、建物跡の方位はS B130とほぼ一致する。東西2間(4.1m)×南北1間(2.0m)の東西棟に復原したが、さらに南にのびる可能性がある(南側は削平を受け少しずつ傾く)。柱間寸法は、桁行・梁間ともに約2mを測る。柱掘形は、円形に近い隅丸方形プランを呈し、その規模は、一辺(あるいは直径)20~



第24図 SH133実測図



第25図 SH132実測図

55cm・検出面からの  
深さ5~15cmを測る。  
直径10~15cmの柱根  
痕を残すものが多い。  
SB130と同じ平面プ  
ラン(2間×2間の総  
柱建物跡)を呈する可  
能性もある。

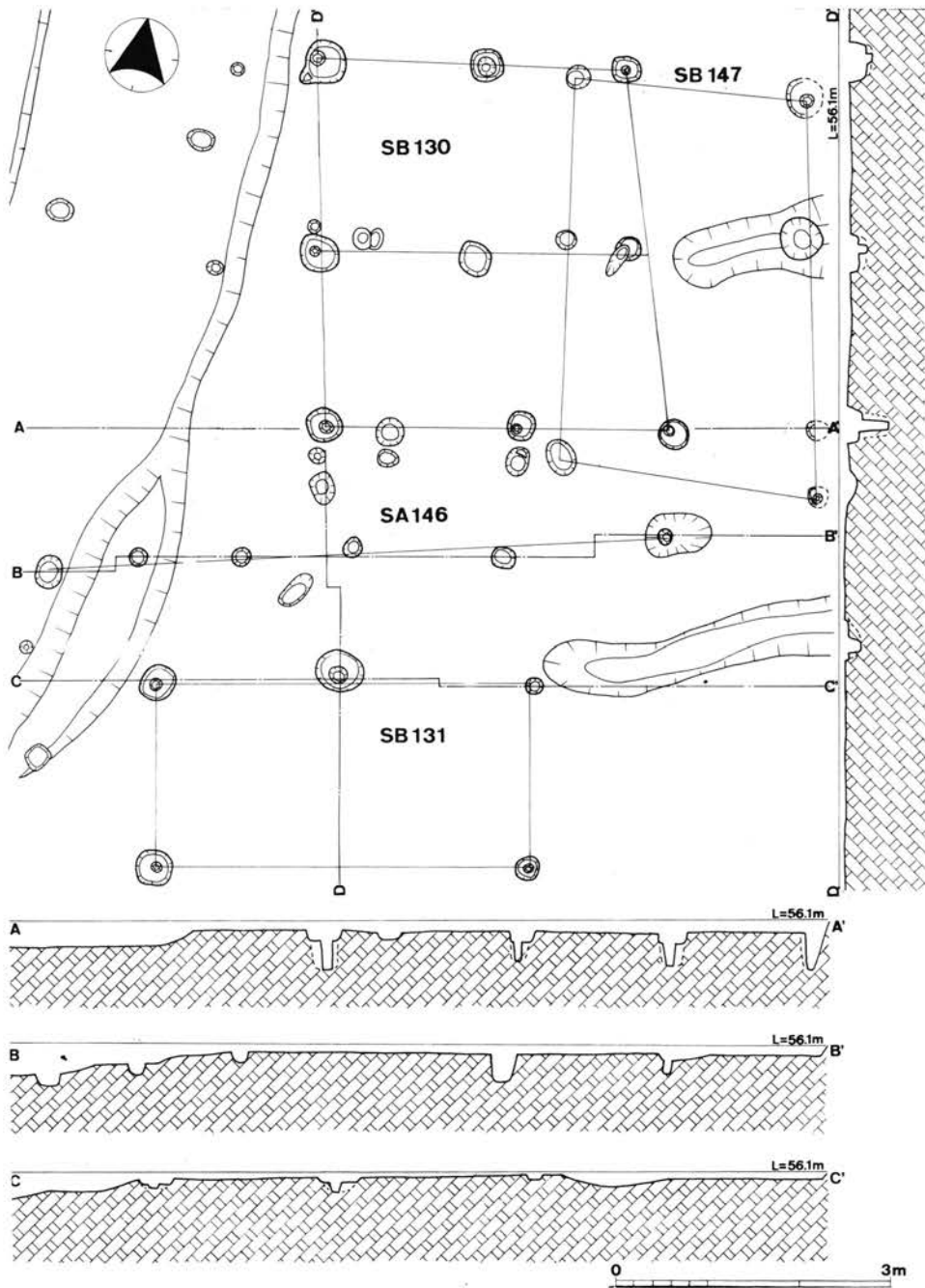
SB147(F-8)

SB147は、SB130  
の東側で重複する南  
北2間(4.05m)×東  
西1間(2.6~2.9m)  
の南北棟の掘立柱建  
物跡である。SB130  
との間にピットの重  
複関係はないが、布

留式併行期の土師器を含む溝状土  
坑に東側柱列北第2柱が重複し、  
より新しい。さらに、柱穴埋土が  
SB130を含めた古墳時代前半期の  
一連の建物跡群と異なることから、  
このSB147は古墳時代中期以降に  
帰属するものと考えられる。

柱掘形は円形~不整形プランを  
呈し、その規模は、直径25~45cm  
を測り、掘形内に直径10~15cmの  
柱根を残すものがある。

(伊賀高弘)



第26図 S B130・131・147、S A146実測図

付表1 竪穴式住居跡・掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	尾根	時期	形態	規模	床面積	炉	主柱穴	周溝	床面	出土遺物	備考
SH101	Ⅲ支尾根	弥生後期	方形	一辺7.5m	56.25		4本	有	南面の周壁溝に接して方形土坑住居中央に円形土坑	甕・鉢7 内鉢6	
SH102	台地中央部	古墳前半	方形	東西5.2m×南北5.5m	28.60		4本	有	東面に円形土坑(径0.6m)		南面の周壁溝の上面に焼土層(長軸1m坑×短軸55cm)の範囲
SH103	台地中央部	古墳前半	方形	東西5.8m×南北6.0m	34.80		4本	有	北面の周壁溝に接して方形土坑(東西14m×南北0.9m)		
SH104	台地中央部	古墳前半	方形	東西6.3m×南北7.0m	44.10		4本	一部有	東面の周壁溝に接して方形(東西1.1m×南北0.9m)		東面の周壁溝の上面には、住居廃絶後、廃棄したような状態で土器が出土
SH105	台地中央部	古墳前半	方形	東西3.6m×南北4.5m	17.10		4本	有	東面の周壁溝に接して円形(不整形)土坑(短軸6.5×0.9)		
SB106	台地中央部	古墳前半		東西5.75m×南北5.65m	32.49				掘形直径0.35~0.5m、柱穴直径0.15~0.3m、柱間1.8~2.0m		
SH107	台地中央部	古墳前半		東西3.6m×南北3.8m	13.68				掘形直径0.25~0.5m、柱穴直径0.1m、柱間1.8~1.9m		
SH121	I支尾根	古墳前半	方形	一辺4.0~4.4m	17.60		4本	有		土師器・高杯1点	
SH122	I支尾根	古墳前半	方形	一辺3.1m	9.61			有	南辺に方形(一辺0.9m)土坑、中央に円形土坑(直径0.4m)	土師器・小形丸底甕	
SH123	I支尾根	古墳前半	方形	東西5.0m~南北5.2m	26.00		4本	有			
SH124	I支尾根	古墳前半	方形	東西3m×南北4m	12.00	北面	なし	有		土師器・壺・甕・高杯	主柱穴が四本揃わず木板等で柱を受けていた可能性がある。住居跡の周囲に台形の溝(北西6m・南面5m・東西面5m・幅15cm)がめぐる。
SH125	I支尾根	古墳前半	方形	一辺3m	9.00		なし	有			近世の土作りによって大半が削り取られている。
SH126	I支尾根	古墳前半	方形	一辺5m	25.00	中央	4本	有		土師器	
SH127	I支尾根	古墳前半	方形	一辺3.5m	12.25		なし	有			
SH128-A	I支尾根	古墳前半	方形	(古)東西4.9m×南北4m	19.60		なし				改築により、規模を拡大か?造営当初の住居は柱穴をもたない方法で柱を受けた可能性あり。
SH128-B	I支尾根	古墳前半	方形	(新)東西5.0m×南北5.9m	29.50		拡張後の住居4本				
SH132	I支尾根	古墳前半	方形	東西4.7m×南北4.3m	20.20			有		土師器	
SH133	I支尾根	古墳前半	方形	東西4.7m×南北4.0m	18.80			有		土師器	

(4)古墳時代前半の土器(図版第4・5)

古墳時代前半の土器は、その大半が竪穴式住居跡から出土したものであり、いずれもが細片が多く、図示しうるものは限られていた。以下、各遺構ごとに土器の説明を行う。

S H124出土の土器(11~19)

土器は床面直上から出土したもので、図示したものは、二重口縁壺(12)・直口壺(13・19)・小形丸底壺(16)・甕(11・14・15)・高杯(17・18)がある。

壺12は、外反する頸部から、斜め上方に長く立ち上がる口縁部へ続き、口唇部はわずかに肥厚する。口縁部内・外面はヨコナデ調整。12は口径13.8cmを測る。

壺13・19は、直立ぎみの短い頸部から、口縁部は外反ぎみに立ち上がり、口唇部はわずかに内側に肥厚し、面をつくる。体部外面の調整は遺存状態が悪く不明。体部内面は横方向のヘラ削り調整を施す。13は口径12.5cm、19は14.8cmを測る。

小形丸底壺16は、球形の体部で、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。体部外面は縦方向のハケ、体部内面は横方向のヘラ削り調整を施す。16は、口径7.4cm・器高6.0cmを測る。

甕11・14・15は、長胴形の体部で、口縁部は外反(14)あるいは内湾ぎみ(11・15)に立ち上がり、口唇部が内側に肥厚するもの(11・15)と丸くおさまるもの(14)がある。14の体部外面はハケ、内面はヘラ削り調整を施す。11は口径22.8cm、14は口径11.6cm、15は口径9.8cmを測る。

高杯17・18は、浅い椀状の杯部で、口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。杯部内・外面の調整不明、17は口径11.4cmを測る。

S H104出土の土器(20~28)

S H104からは、壺・甕・高杯などが出土した。

壺20は、肩部の張った体部で、口頸部は斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部内・外面はヨコナデ調整を施す。20は口径7.3cmを測る。

壺24は、体部最大径が中位より下半にある、ずんどう形の体部で、口頸部は外反ぎみに短く立ち上がる。口縁部内・外面はヨコナデ、体部内面は下半にヘラ削り調整を施す。24は口径4.4cmを測る。

甕21・22は、肩部の張った体部で、口頸部は斜め上方に立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。体部外面にはハケ、体部内面にはヘラ削り調整を施す。21は口径11.8cm、22は口径11.8cmを測る。

高杯25~28は、浅い椀状を呈するもの(25)と、水平にのびる杯底部から斜め上方に直線的に長く立ち上がるもの(26・27)がある。脚部は杯底部から裾開きとなるもの(26)と、直線的に柱状部を形成するもの(27)がある。杯部及び脚部外面はハケ、杯部内面には指ナデ

調整を施す。25は口径13.3cm、26は口径11.7cmを測る。

脚部23は、丸底の底部に裾開きの短い脚部を貼り付けたものである。

#### S H102出土の土器

S H102からは、二重口縁壺(48)・甕(38~40・48)・高杯(41)などが出土した。

二重口縁壺48は、「く」の字形に屈曲する頸部から、口縁部は直立ぎみに長く立ち上がり、口唇部は外側にわずかに肥厚し、面をつくる。体部と頸部の境には断面三角形の突帯を、また、頸部と口縁部の境にも突帯状の面をつくる。頸部外面は縦方向の、口縁部外面は、横方向のていねいなハケ調整を施す。48は口径47.6cmを測る。

甕40は、外反ぎみに短く立ち上がる口縁部で、口唇部は丸くおさまる。40は口径11.7cmを測る。

甕38・39・49は、内湾ぎみに斜め上方に立ち上がる口縁部で、口唇部は内側に肥厚し、面をつくる。口縁部内・外面はヨコナデ調整、体部外面はハケ、内面はヘラ削り調整が認められる。38は口径13.7cm、39は口径12.6cm、49は口径12.0cmを測る。

高杯41は、浅い椀状の杯部で、口唇部は丸くおさまる。杯部内・外面は遺存状態が悪く調整不明。41は口径13.0cmを測る。

#### S B106出土の土器(32~34・42~45)

S B106からは、小形丸底壺・高杯などが出土した。

小形丸底壺32・33・34は、球形あるいは偏球形の体部で、口縁部は外反ぎみに短く立ち上がる。体部外面はハケ、内面はヘラ削り調整を施す。32は口径8.8cm・器高8.4cm、33は口径7.8cm・器高8.7cmを測る。

高杯42・43は、水平ぎみの杯底部から、口縁部は斜め上方に長く立ち上がる。脚部は、「ハ」の字形のやや開きぎみの柱状部から、ラッパ状に開く脚端部へ続く。杯部内・外面には、ナデまたはヘラ磨き調整を施す。42は口径16.0cm、43は口径13.2cm・器高9.7cmを測る。高杯44は、杯底部から内湾ぎみに立ち上がる深い椀状の杯部を呈する。杯部の外面にはハケ、内面にはナデ調整を施す。44は口径16.4cmを測る。高杯脚部45は、ラッパ状に広く開がる。

#### S H103出土の土器

S H103からは、壺・甕・高杯・鉢などが出土した。

壺35は、外反ぎみに立ち上がる口頸部で、口唇部はわずかに内側に肥厚する。口縁部内・外面はヨコナデ調整を施す。35は口径12.5cmを測る。

壺36は、ナデ肩の体部で、口頸部は斜め上方にやや内湾ぎみに立ち上がる。口縁部内・外面及び体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリ調整を施す。36は口径9.5cmを測る。

甕37・52・55・56は、「く」の字形に屈曲する口縁部で、口唇部が丸くおさまるもの(54)

と、内側に肥厚し面をつくるもの(37・52・56)がある。口縁部内・外面はヨコナデ調整、体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整を施す。

高杯46・47は、水平ぎみにのびる杯底部から、口縁部は斜め上方に直線的に長く立ち上がる。脚部は「ハ」の字形に開く脚柱部から、ラップ状に開く脚端部へ続く。杯部外面は縦方向の、杯部内面は横方向のていねいなヘラミガキ調整を施す。46は口径29.8cmを測る。

鉢54は、内湾ぎみに深く立ち上がる体部で、口縁部は内方ぎみに直線的に立ち上がる。体部外面はナデ、内面はヘラ削り調整を施す。54は口径12.4cmを測る。

#### S H133出土の土器(50・51)

S H133からは、二重口縁壺・甕がある。

二重口縁壺50は、ナデ肩の体部で、口頸部は「く」の字形に屈曲する頭部から、頸部と口縁部の境に丸みをもつ段を設けたのち、斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続く。口唇部は外方にわずかに肥厚する。口縁部内・外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ調整を施す。50は口径22.9cmを測る。

甕51は、ナデ肩の体部で、口縁部は「く」の字形に屈曲する。口唇部は内側にわずかに肥厚する。体部内・外面は遺存状態が悪く調整不明。51は口径13.8cmを測る。

#### S H122出土の土器(29)

S H122からは、小形壺が出土した。

小形壺29は、倒卵形の体部で、口縁部は「く」の字形に屈曲する。口縁部内・外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整を施す。29は口径6.0cm・器高8.0cmを測る。

#### S K136出土の土器(30)

S K136からは、小形丸底壺が出土した。

小形丸底壺30は、偏球形の体部で、口縁部は「く」の字形に屈曲する。体部外面はナデ、内面はヘラ削り調整を施す。

#### S H121出土の土器

S H121からは、高杯が出土した。

高杯31は、深い椀状の杯部で、「ハ」の字形に開く脚柱部から、ラップ状に開く脚端部へ続く。杯部及び脚部とも遺存状態が悪く、調整は不明である。

以上のように、各住居跡及び古墳時代前期の遺構から出土した遺物は、細片が多く時期決定を示す資料が少ないが、それぞれの住居は短期間に築造し、排絶したと思われる。

(石井清司)

(5)石器(図版第6)

石器は、遺構に伴って出土したものではなく、遺跡全体の広い範囲から採集された。定形的なものはすべて以下に示した。その他の剥片・碎片の点数もわずかであった。

器種の内訳は、石鏃10点、削器1点、楔形石器1点、石庖丁2点である。

石鏃は、木葉形石鏃1点(1)、凹基式鏃8点(3~10)、形態不明1点(2)に分けられる。石材は、すべてサヌカイトである。特徴的なものについて説明を加えたい。1の木葉形石鏃は、断面凸レンズ形で、両面加工である。自然面はいずれの面にも残さない。ていねいな押圧剝離によって仕上げられている。基部と先端は欠損している。

凹基式鏃である3と5は、基部付近にくびれ部をもつ。両面加工で自然面は残さない。同じく凹基式鏃の9は、えぐりが深く、長さの3分の1以上にも達している。裏面中央には、大きく自然面を残している。なお、基部のえぐりの形態は、3~6・9・10が円形、7・8が角度をつけた山形である。

削器(11)は、横長剥片の長軸に沿って刃部をつくり出した利器である。刃部の調整加工は、腹面側からの打撃で、背面にうろこ状の剝離痕をとどめる。腹面には打点を残している。最大長7.2cm・最大幅1.8cm・重さ18.5gを測る。サヌカイト製である。

楔形石器(12)は、長軸の両極に細かな階段状剝離と潰れ痕をとどめる。両面に加工が及び、片面には打撃による下端から上端にまで抜けた長い剝離痕が観察される。上端は折損している。断面形は凸レンズ形を呈する。最大長4.1cm・最大幅3.6cm・最大厚1.3cm・重さ16.5gである。石材はサヌカイトを用いている。

石庖丁(13・14)は、頁岩ないし粘板岩製で、ともに半壊品である。13は、残存長3.9cm・残存幅3.2cm・残存厚0.3cm・重さ6g、14は、残存長12cm・残存幅5.2cm・残存厚0.6cm・重さ73gを測る。ともにゆるやかに湾曲する刃部は、長軸方向によく研磨されている。14は、両面から穿たれた2つの孔がある。

石器の時期は、この2点の石庖丁に代表されるように弥生時代と考えられるが、一部えぐりの深い石鏃があり、縄文時代の可能性がある遺物も含まれている。

(黒坪一樹)

付表2 石器一覧表

No./項	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	出土地点	No./項	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	出土地点
1	(5)	2	0.6	4	9号墳周溝内	6	(2.4)	1.4	0.3	0.9	16号墳周溝内
2	(2)	2	0.4	1	SH105埋土内	7	(2.4)	(1.6)	0.4	1.3	14号墳墳丘上面
3	2.2	(1.1)	0.3	0.8	8号墳周溝内	8	2.4	1.9	0.3	1.2	7号墳周溝内
4	2.5	1.7	0.4	1.3	1号墳周溝内	9	1.7	(1.2)	0.3	0.5	表探
5	(1.7)	1.3	0.4	0.6	SH124埋土内	10	(1.5)	(1.7)	0.2	0.6	7号墳周溝内



### 第3節 第Ⅱ期の遺構

上人ヶ平遺跡における第Ⅱ期とは、この台地上に、古墳が連綿と築造された時期であり、古墳時代中・後期に相当する。

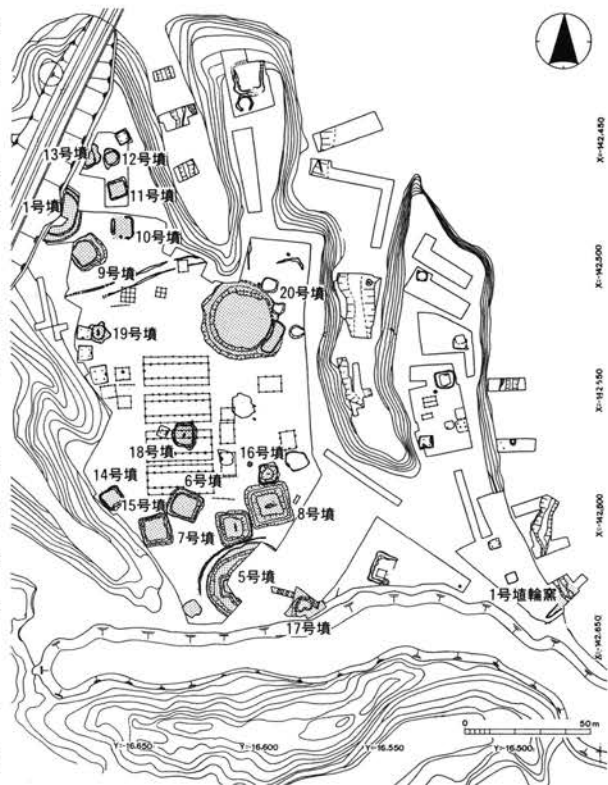
#### (1)古墳

調査によって確認した古墳は、17基を数える。

それぞれの古墳は、規模の大小や後世の土地利用などを反映して遺存状況に較差がみられ、同条件で検出された訳ではない。これを墳丘の削平度合＝遺存状態の違いとして分類すると、(A)墳丘が検出面より高く、かつ現地表上に現出しているもの。(B)墳丘が検出面より高く残るが現地表上に痕跡を残さないもの。(C)墳丘上面が遺構検出面まで削平を受けて、現地表下に埋没するもの。以上およそ三つに分別することができる。このうち、(A)は、周知の古墳として発掘調査前から認識されており、調査を開始した昭和61年までに上人ヶ平1～5号墳として遺跡登録されていたものである。<sup>(注1)</sup>これに対し(B)・(C)は、掘削調査により初めて明確になった古墳で、(B)・(C)間の相違は削平時期の違いを示していると考えられる。すなわち、(B)は、現耕作土直下まで墳丘が残存しており、その削平時期がこの台地の耕地化した時期(中世以降)に求めることができる。<sup>(注2)</sup>一方(C)は、おそらくそれに先行する時期に墳丘が削平されたもので、後述するように奈良時代頃に改変されたことが窺える。

ここでは、個別の古墳の調査概要を記す前に、まず(A)の1～5号墳の過去の研究成果をみたい。

台地の基部寄りに位置する5号墳であるが、この古墳の存在自体は比較的古くから知られており、明治期の学術報告にも「上人ヶ平古墳」として簡単な紹介文を載せている。<sup>(注3)</sup>その中で、1905年刊行の『考古界』第5篇第3号に掲載された「山城国相楽郡西部の古墳」の中で著者岩井武俊氏は、市阪(＝市坂村)に所在する「上人ヶ平」(古墳)の現状を観察し、高さ「5尺」(＝



第27図 第Ⅱ期の遺構概念図

1.5m)の円墳で、「石を以て壘み上げ、土を以て土を蔽ふ」、つまり葺石の敷設を指摘した。

その後、1933年に付近に所在する「古瓦窯址」(=市坂瓦窯)探査の際、偶然古墳の裾廻りに埴輪列が埋没していることが確認され、これを受けて1938年に京都府が簡単な発掘調査を実施し、その内容について翌年「木津町市坂の一古墳」と題して梅原末治<sup>(註4)</sup>が報告している。この調査では、墳丘裾をめぐる埴輪列の一部と、そこから直角に派生する埴輪列を検出し、現況の墳丘平面形(五角形状)は、後世の耕地化に伴う改変によるものであり、本来の墳形は、埴輪列検出状況から西側に「低平な小区画」(=造り出し部)を付設した円墳であることを想定した。また、墳丘全面に「川石」による葺石が残り、墳頂部の盗掘坑の観察から内部主体が石室の構造を採らないことを予想した。ただし、古墳の築造時期は、小区画から出土した蓋形埴輪の立ち飾り部が奈良県日葉酢媛陵(=佐紀陵山古墳)のそれと類似するとして、これを前方後円墳の起源の問題とからめてかなり古く位置づけた。

次いで1972年、竜谷大学によって墳丘の測量調査<sup>(註5)</sup>が行われ、現状墳丘の西側から北側にかけての部分が本来の形状をよくとどめており、また、等高線や畦畔に残る地割りなどから周濠の存在は否定的とした。また、墳丘の規模及び形状を先の梅原報告の埴輪列のめぐる範囲に求め、後円部(主丘部)直径21m、造り出し部の長さ3m・幅3.7mのいわゆる帆立貝式前方後円墳として理解した。築造時期に関しては、須恵質埴輪の存在や古墳の周囲で

付表3 古墳一覧表

古墳名	小群	墳形	遺存度	墳丘規模	外部施設	内部施設	その他の施設	出土遺物	円筒埴輪	形象埴輪	時期
1号墳	北群	円墳	A	径約19m	B	未調査	-	-	D類	器財	V期
5号墳	南群-a	円墳	A	主丘部 径25m	A	未調査(墳 頂に擾乱坑 有)	西側に造り出 し	布留式土師器	A類	家・器財・ 動物・鶏	IV期前半
6号墳	南群-b	方墳	C	一辺11m	B	残存しない	-	須恵器(TK-47)	C類	動物(馬)	IV期後半
7号墳	南群-a	方墳	B	一辺10m	B	木棺直葬1 基 (副室付設)	-	須恵器・玉類 鉄器・須恵器	A類	器財(蓋)	IV期前半 (TK- 208)
8号墳	南群-a	方墳	B	一辺13m	B	木棺直葬1 基 (盗掘坑有)	-	須恵器・鉄器 堅櫛	A類	器財(蓋・ 粉)・鶏	IV期前半 (TK- 216)
9号墳	北群	方墳	C	一辺11m	B	残存しない	橋状施設?	土師器・須恵器	D類	家・器財	V期(T K-10)
10号墳	北群	方墳	C	一辺8m	D	残存しない	西辺溝が独立	土師器	D類少量	未確認	V期?
11号墳	北群	方墳	C	一辺7m	D	残存しない	-	-	D類少量	未確認	V期?
12号墳	北群	方墳?	C	一辺6m	D	残存しない	-	須恵器	-	-	TK-10
13号墳	北群	方墳	C	一辺8m?	D	残存しない	-	-	-	-	?
14号墳	南群-b	方墳	C	一辺7.6m	B	残存しない	-	土師器・須恵器(T K-208)	B類	器財(蓋 元形1)	IV期後半
15号墳	南群-b	方墳	C	一辺10.4m	B	残存しない	-	須恵器(TK-47)	C類	家・器財 (蓋)	IV期後半
16号墳	南群-a	方墳	B	一辺6.5m	B	木棺直葬1 基(墓壇な し)	-	釘状鉄器(棺用)	A類	家・器財 (蓋3)	IV期前半
17号墳	南群-a	方墳?	C	不明	B	残存しない	-	須恵器	A類少量	動物(馬)	IV期後半
18号墳	南群-b	方墳	C	一辺8.6m	C	木棺直葬1 基	溝中土壇1基	鉄器・須恵器	-	-	TK-208
19号墳	北群	方墳	C	一辺6.3m	D	痕跡のみ	-	-	-	-	?
20号墳	単独	円墳	C	径約26m	D	残存しない	溝内に土器棺	玉類(土器棺) 土師器	-	-	布留式 併行期

表採された須恵器高杯から5世紀後半とした。

さらに、1984年、平良泰久氏は、『木津町史 史料篇Ⅰ』の中で、未公開資料を図化して掲載するとともに、上人ケ平古墳のこれまでの成果を総括した。そして、古墳の呼称に関しては、周辺に群在する他の古墳を含め、これを上人ケ平古墳群と位置づけ、これまで「上人平」「市坂の一古墳」「上人ケ平古墳」などと称されてきたこの古墳を、上人ケ平5号墳としてその名称の整理を行った。また、「方壇」(=盛り土)をもたない造り出し部について、通常は周濠によって削り出して築造されるものとする立場から、この古墳にも周濠が存在することを指摘した。

一方、舌状台地の先端に位置する古墳については、この丘陵地形の突端部を走るJR関西本線の切り通しによって、大きく破壊されて旧状を失うものも少なくないが、隆起地形をもとに、町史編纂の段階で4基の古墳として把握されている。

このうち、西側半部が破壊された1号墳について、先の梅原報告の注釈には「……右の墳(=5号墳)から西々北(=北々西)に当る同じ台地の突端に近い所であって(5号墳と似た古墳が)南北に二個並び、其の一は鉄道関西線の堀割によって半ば削られてある。規模は本文述べたるもの(=5号墳)よりも大きく、共に丸形をしている。もっとも、一見した所では埴輪円筒や葺石はないようであった(筆者注釈。)」とあり、古くから注意されていたことがわかる。また、「南北に二個」並んでいるうちの南側は、現状から4号墳と解することができる。

このように、地上に墳丘の一部が現われた古墳については、従前より古墳として認識され注意されていたわけであるが、実際、この台地のほぼ全域を発掘調査することによって、未知の埋没古墳が多数検出され、上人ケ平古墳群の全貌がほぼ判明する成果を得られた。

以下、今回の調査によって判明した事実を古墳ごとに記述したい。

### 1. 5号墳(H-5)

以下、古墳の位置関係を示す場合、古墳の中心点を代表させて用いることにする。

段丘性の台地の基部寄りほぼ中央に位置する。

上人ケ平古墳群では最大の規模をもち、唯一造り出し部を付設する円墳である。

調査は、現存墳丘部を除いて、その周辺地区を対象に実施した。すなわち、墳丘の周辺のうちその西側一帯と、東側の一部にトレンチを設定して調査に当たった。その結果、従来未確認であった周濠を確認したほか、造り出し部の全体像や埴輪・葺石といった外部施設の状況が判明した。

以下、各遺構(部位)ごとに説明する。

**周濠** 東・西トレンチで確認した。いずれも築成前の旧表土上面をベースに、基本的に

はこれを断面逆台形状に浅く掘り込んで構築している(築成前の旧表土面は、西側の調査区の南断面で墳丘側のみ腐植土が薄く認められた以外、一般には周濠外周側も含めて直接地山が露呈している)。この地山面は、上層が風化の進行した黄灰色粘質土であるが、その下は次第に小礫を含む比較的堅固で水はけの悪い淡黄白色粘質土に移行し、周濠の底は後者の層位に達している。周濠の断面形は、詳細にみると、内外両傾斜面の中位に幅の狭いテラスを設けて小規模な段築状を呈する。こうした形態は、造り出し部も含めてすでに掘削したすべての調査区で確認ができ、局所的な変形でないことがわかる。このような2段傾斜の断面をもつ周濠は他に例がなく、特異な形状といえるが、これは後述するように後世の改変と考えられる。

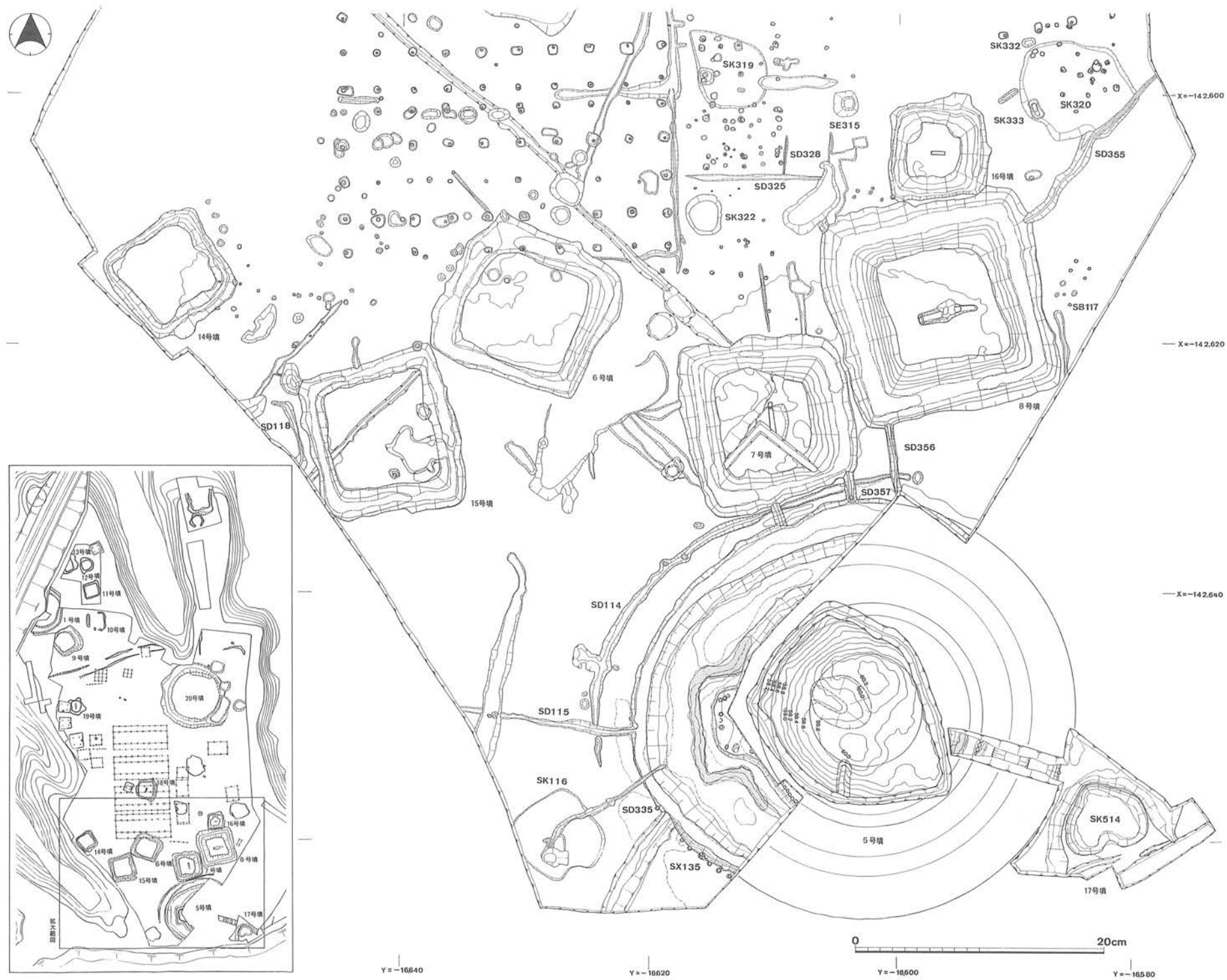
次に、周濠の平面形であるが、外縁線(外側縁のライン)は検出面の高低差(造り出し部以西が1段低く造成され、検出面も10cmほど低くなる)を考慮しても、真円にはならない。これは、造り出し部の付設される西側部分がこれに規制されて突出し(真円ラインから約2.1m外側に突出)、全体として東西にやや長い卵形を呈したものと思われる。

周濠内の堆積土は、その土質や色調により大きく3層に分けられる。遺存状態のよい東側トレンチ断面(第30図下段)をみると、上位から黄色系の砂ないしは同色系の細砂質粘土による互層(I層)、暗灰色系の粗砂混じりの還元層(II層)、埴輪片や葺石の転落石を多く含む茶褐色系土層(III層)である。この基本層序は、既掘部分の各所でI層の層の厚さに相違がある以外は共通している。このうちI層は、洪水等により周囲から流入したものと思われる、薄稿状堆積を示すことから長期にわたる自然堆積と考えられる。出土遺物は極めて少ない。II層は濠底付近に約10cmの厚さで堆積し、埴輪片に混じり、瓦などの奈良時代の遺物が混入する。この土層の暗灰色のグライ化は、周濠内の滞水を示しており、少なくとも奈良時代まで水濠として機能していたことを示している。III層は、周濠の内外の両斜面から裾にかけて堆積し、墳丘側(外傾斜面)の層が厚い。内傾斜面側では周濠最下層に薄く堆積し、外堤側の盛り土あるいは旧表土が流入したと考えられる。一方、外傾斜面側では葺石の転落石や埴輪片を多く含み、墳丘流土と考えられる。この墳丘の崩壊は、長期にわたりにかつ複次にまたがるようすが窺われる。

周濠斜面の外表施設としては、比較的堅固な地山を反映してか、造り出し部を除き、特に葺石は敷設されないし、粘質土による斜面の貼土も現状では認められない。

**造り出し部** 主丘部との接続部を除き、ほぼその全体像を確認した。

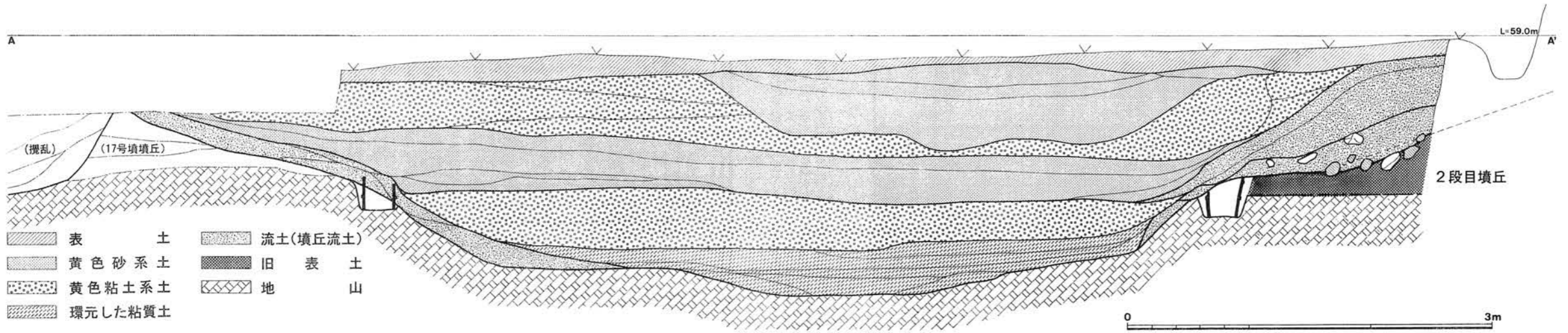
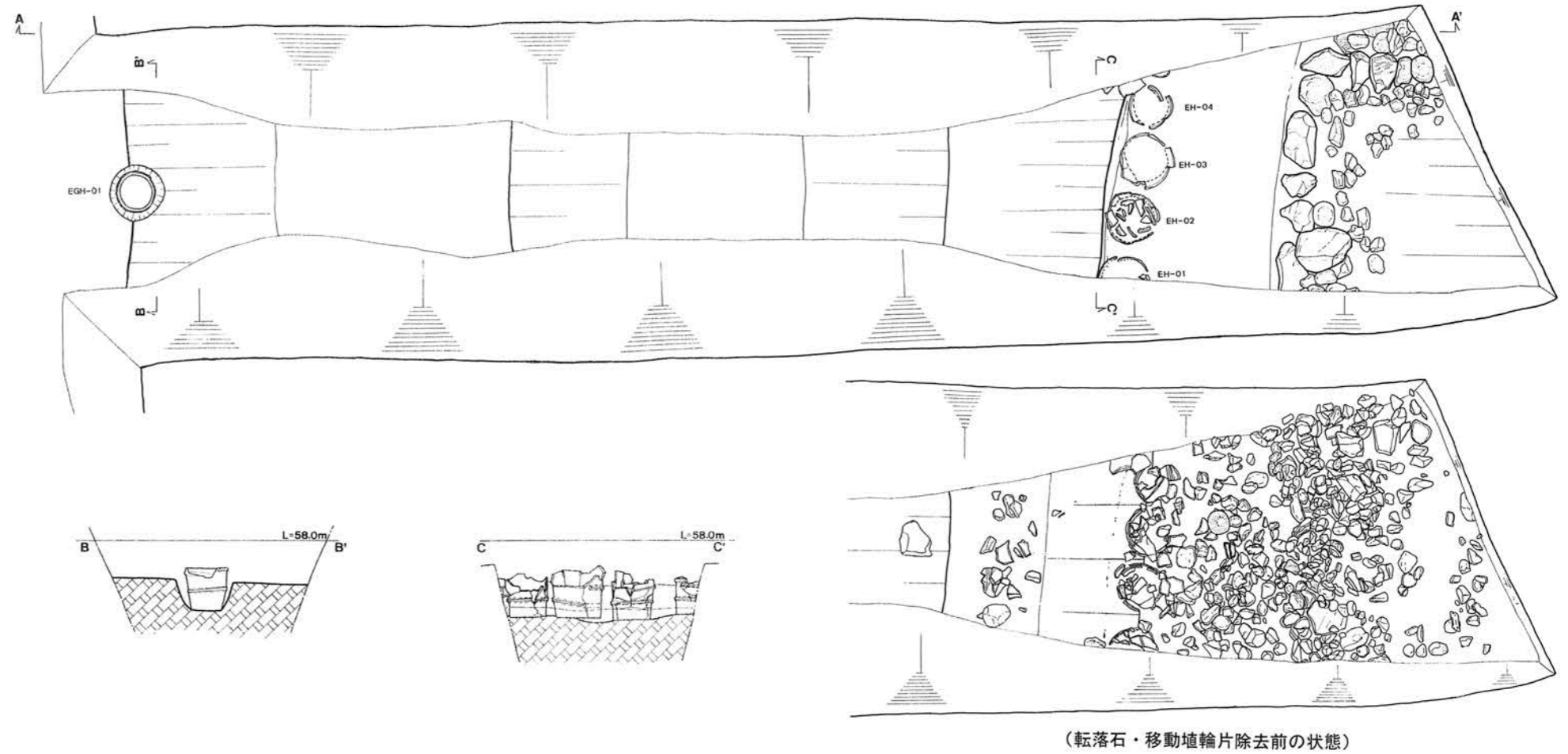
周濠掘開時にすでに構築が計画されており、地山部分を矩形プランに掘り残すことで周



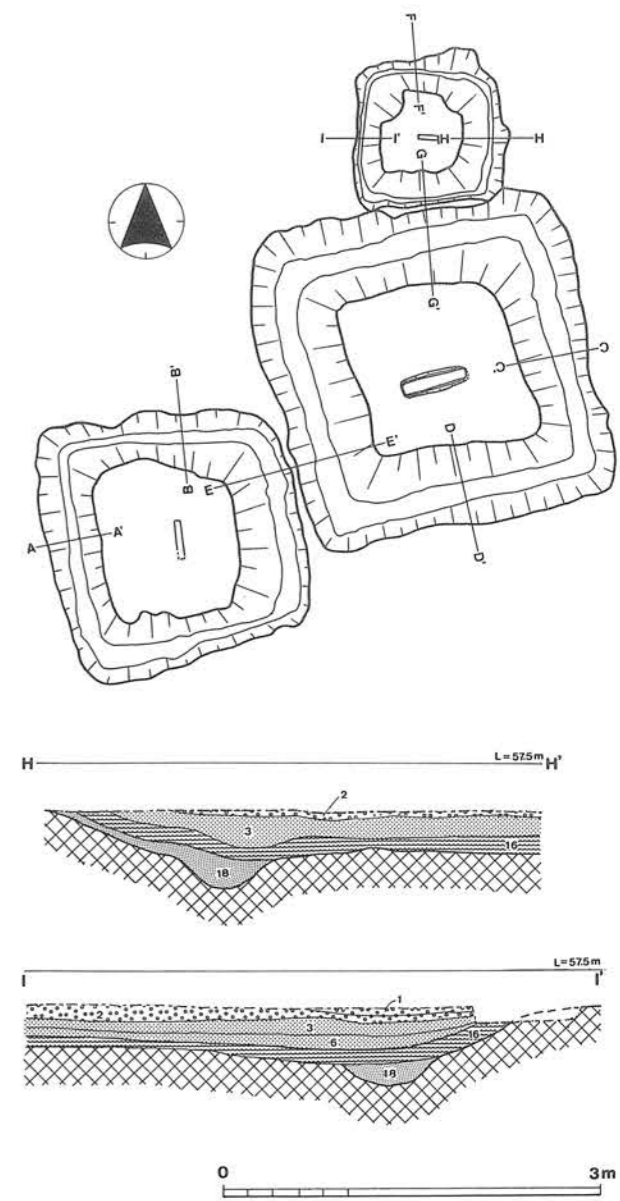
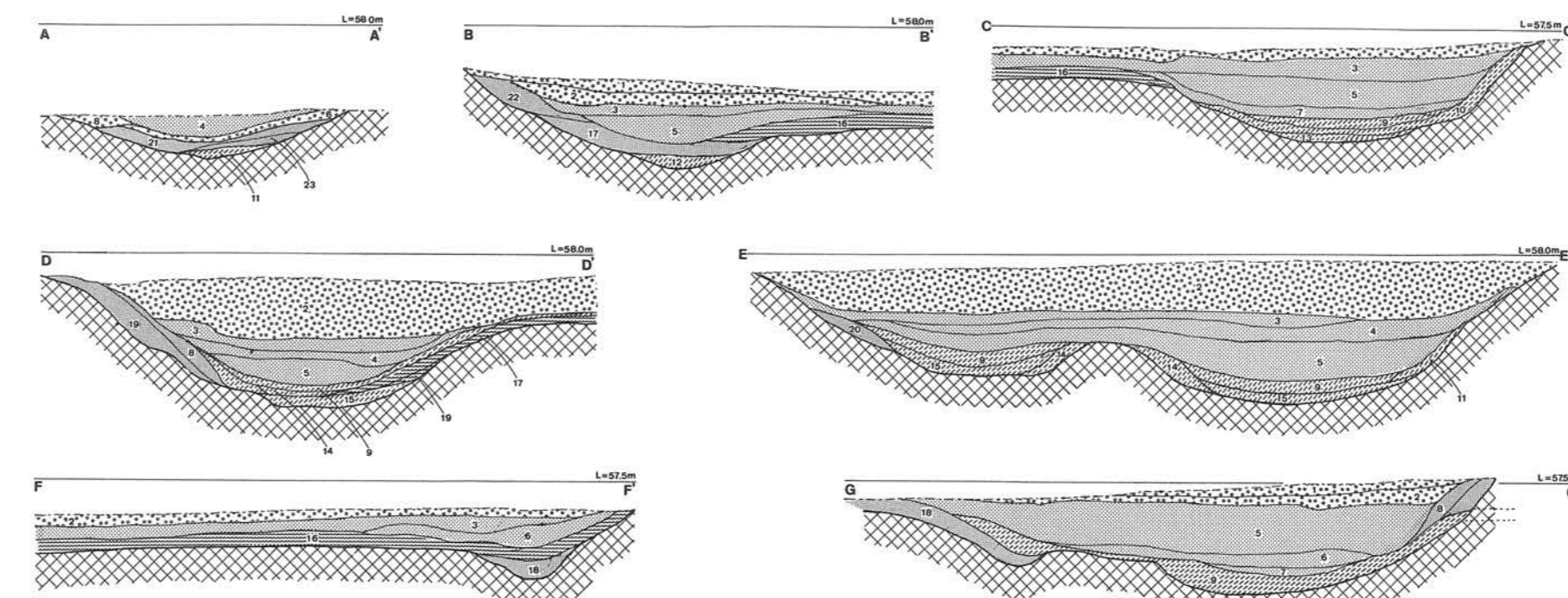
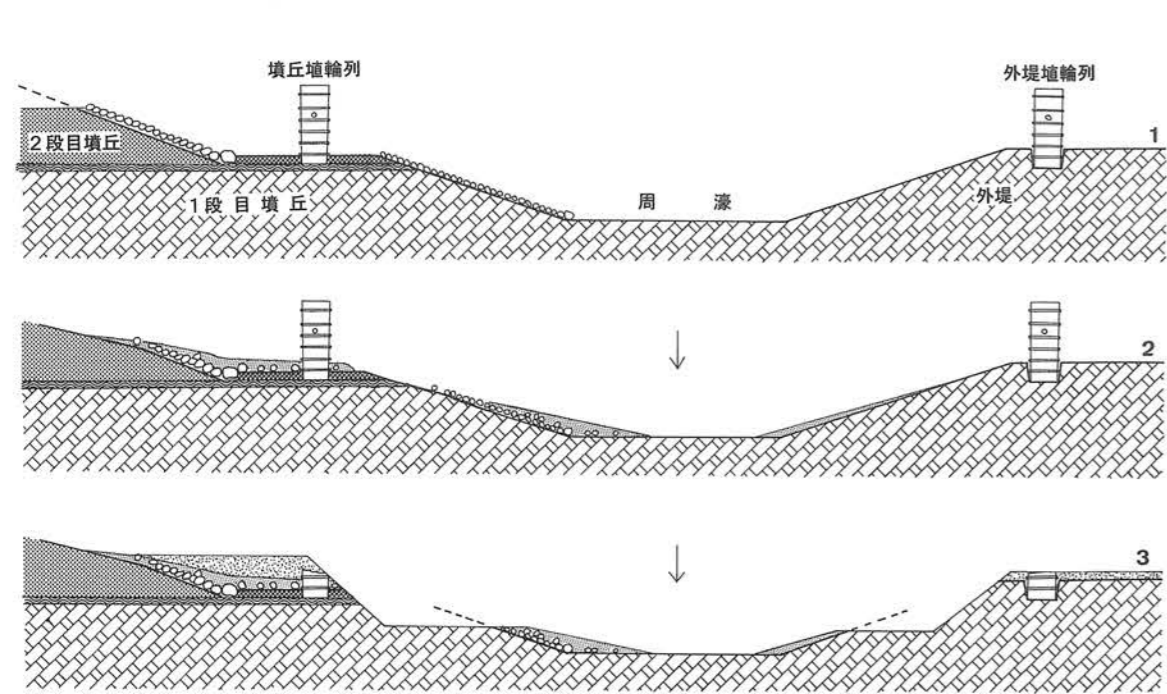
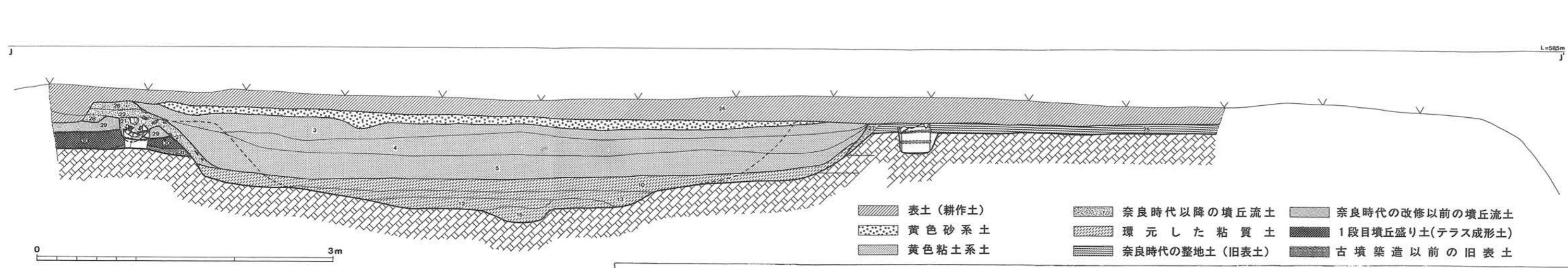
第28図 南支群古墳配置図



第29図 5号墳造り出し部・墳丘埴輪列実測図



第30図 5号墳東地区実測図



- |              |             |             |                 |                     |
|--------------|-------------|-------------|-----------------|---------------------|
| 1. 淡黄灰色シルト質砂 | 8. 淡茶灰色土    | 15. 淡白色砂礫粘土 | 22. (暗)黄茶色粘質土   | 29. 黄灰色粘質土(淡灰色粘質土混) |
| 2. 淡黄灰色砂     | 9. 暗灰色粘質土   | 16. 暗茶灰色土   | 23. 暗黄灰色粗砂質土    | 30. 黄褐色粘質土(淡灰色粘質土混) |
| 3. 淡黄灰色砂質シルト | 10. 暗灰色粘砂土  | 17. 黒灰色粘質土  | 24. 黒灰色砂質土(表土)  | 31. 暗黄褐色粘質土(旧表土)    |
| 4. 淡黄灰色砂質粘土  | 11. 淡灰色砂質粘土 | 18. 淡黄茶色粘質土 | 25. 黄茶色土        |                     |
| 5. 淡黄白色粘土    | 12. 黒灰色粘土   | 19. 黄褐色粘質土  | 26. 黄灰色砂質シルト    |                     |
| 6. 淡褐灰色粘土    | 13. 灰褐色粘質土  | 20. 黄灰色粘質土  | 27. 暗灰褐色粘質土     |                     |
| 7. 暗灰色粘土     | 14. 暗灰色砂礫粘土 | 21. 暗黄茶色粘質土 | 28. 暗灰色粘質土(焼土混) |                     |

第31図 5・7・8・16号墳周濠(溝)断面図(5号墳周濠改修模式図)



濠内に造り出している。

基底部で測ると前端部幅9.5m、主丘部からの突出長2.8m、主丘部との接合部(くびれ部)の幅9.5m、現状での周濠底からの高さ0.5mを測り、基底ラインでみる限り相対的に幅が広く、前端部があまり広がらない平面形を呈する。斜面の断面は、周濠と同様に中位にテラスを設ける2段傾斜を示す。

外部施設として埴輪列と葺石がある。埴輪列は、造り出し上部の平坦面上に上縁線に沿って直線的にめぐると、遺存状態は悪く、欠落するものも少なくない(樹立間隔は各埴輪の心々間で約0.4mを測る)。このうち、南辺埴輪列については梅原氏によって調査された場所であり、埴輪の掘形を確認したにとどまり、それ以外の北側半部については、耕地が1段低くなるため埴輪の基底部のみ遺存していたにすぎない。これら埴輪列の示すプランは、コーナー部が鈍角に開き、前端部がくびれ部に対して狭くなるような形を採り(埴輪列の示す前端幅4.5m)、基底部での造り出し部の形状と異なる。

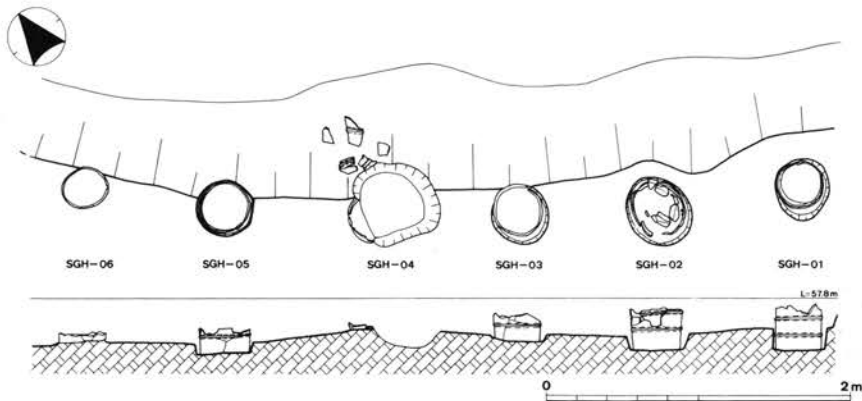
使用した埴輪は、底径30cm前後の規模のものを基準とするが、北西コーナーの埴輪のみ底径40cm前後の規模の大きな個体を使用しており、コーナー部の標識としての意味をもたせているのかもしれない。また、同じ北西コーナーの造り出し部斜面で大形の鶏形埴輪(118)が出土しており、元来このコーナー部に樹立されていた可能性も指摘できる。

葺石は、下段斜面にのみ遺存し(転落石の量から本来は斜面全体に敷設されていた可能性が高い)、その敷設範囲は、造り出し部全体と、くびれ部から主丘部側に約3.5mにわたってのびている。構造的には、拳大の自然石(現地で産出したチャートを中心とした石材と考えられる)を、重ねることなく斜面に張り付けただけの簡易なもので、そこには明確な基底石列や作業基準となる仕切り石列の使い分けは認められない。

**墳丘** 1段目墳丘斜面とその上面テラス、及び東側調査区では、これに加えて2段目墳丘の一部を確認した。

1段目墳丘は、周濠によって内方に削り出された基台に若干の盛り土を行うことで築成している。西側の基台上面には部分的に築造以前の旧表土面(腐植土)が遺存しているが、東側では認められず、墳丘築造の際、旧表土面を平坦に整形し、より高い東側を削平したものと考えられる。つまり、古墳築造以前の旧地形は東から西に緩く傾斜していたと推定される。このように、造られた基台上面に黄褐色粘質土を約20cmの厚さで盛り土して、1段目墳丘上面のテラス面を整形し墳丘を完成させる(現状でのテラス幅は約1.0mを測る)。

1段目墳丘テラスには1重の埴輪列がめぐると、この埴輪列は、現状では極めて周濠側に偏っており、その軸線は周濠上縁とほぼ一致する。樹立間隔は、心々で約35cmを測り、隣接する埴輪との間隔はほとんどない。樹立方法は、部分的な断ち割り調査の結果からみる



第32図 5号墳外堤埴輪列実測図

と、溝状の掘形を伴うような単純なものではない。むしろ、墳丘の構築と一連の作業のもとに埴輪を樹立したことが判明した。すなわち、1段目墳丘が周濠によって削り出され、その上面が平坦に整形された段階(これを整形面と仮称する)で、最終的に樹立する埴輪のうち、数本おきの埴輪(これを基準埴輪と仮称する)を、整形面に円形の掘形を穿って設置し、埋め戻して固定する。次に、この基準埴輪間に数本の埴輪(これを充填埴輪と仮称する)をほとんど間隙ないよう整形面上に据え置く。最後にこの整形面上に盛土(厚さ約20cm)をすることで、テラス面を形成するとともに充填埴輪を固定する。したがって、墳丘テラスの埴輪列は、埴輪の下位レベルが数本おきに深くなり、結果として埴輪上縁の高さが一定しない状況を生ずることになる。基準埴輪の1点が朝顔形埴輪に復原できたことから、あるいは基準埴輪は、すべて器高が普通円筒埴輪より高い朝顔形埴輪であった可能性がある。

1段目墳丘斜面(=周濠外傾斜面)は、前述のように2段傾斜の断面形を呈し、葺石は、造り出し部とくびれ部付近以外は施されない。

東側で検出した2段目墳丘は、すべて盛り土で築かれ、斜面には本格的な葺石が敷設される。葺石の施工方式の詳細は未確認だが、基底石(径30cm前後のやや横長の垂円礫で基底ラインにその長軸を揃えるものが多い)と、一般石(拳大程度の自然石)を明確に使い分け、下位の石に上位の石が重なるようにていねいに積み上げている。また、調査区の南端部で墳丘に対して放射方向にのびる区画石列(直径20~30cm程度)が認められた。

外堤 周濠外縁ラインより周囲には1条の埴輪列がめぐり、更に外周にSD114が円弧を描くようにめぐることから、周濠外縁とSD114までの帯状部を外堤と認識した。

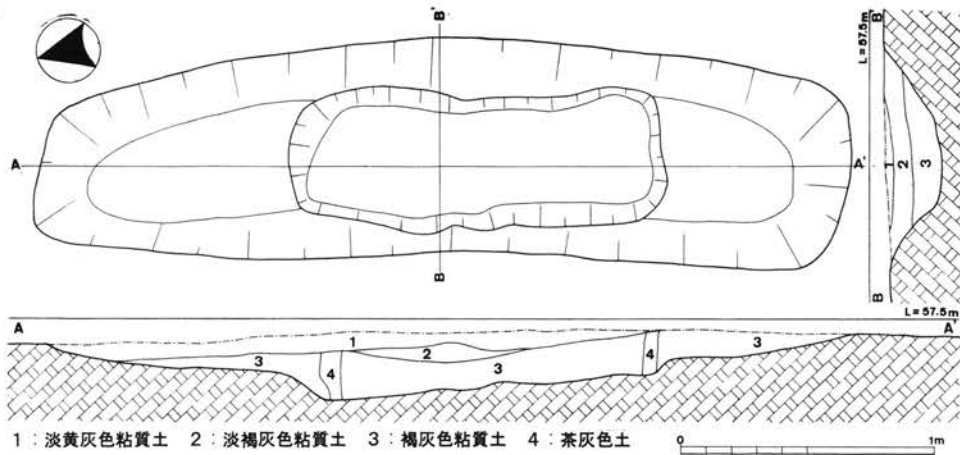
外域と外堤を区画するために掘られたSD114は、断面「U」字形の素掘り溝(幅0.4m、深さは検出面から約0.2mを測る)で、古墳の西側を円弧長にして約38mにわたってめぐりが、両端は途切れて一巡しない(全円周の約1/3)。特に、遺存状態の良好な南側では逆に検

出されなかった。またSD114は、周濠外縁線と同心円で円弧を描くのではなく、北側ほど周濠に近接し外堤幅を狭めている(外堤幅は造り出し部で3m、7号墳と接する付近で0.9mを測る)。

埴輪列は、耕地が一段高く残っていた古墳の南側(造り出し部より南側)と東側調査区で検出した。古墳の西～北側でも近接する周濠やSD114から埴輪片が少なからず出土することから、外堤の埴輪列は、古墳の周囲を一巡していたものと考えられる。削平を受けなかった南側で観察すると、埴輪のめぐりラインは、周濠外縁ラインとほぼ一致するほど内側に偏っている。埴輪の樹立間隔は平均90cmと墳丘側に比べて大きく、このため樹立方法も個別の円形掘形を穿って据え付けている。2段目タガ付近まで遺存する埴輪付近では、土層観察すると、外堤上には当初から盛り土は施されず、その上面は旧表面の整形程度にとどまっていたようである。

ここで周濠の内外傾斜面が2段に傾斜している点に言及したい。一般に古墳の周濠の断面形がこのような形態を呈する例は他にない。また、墳丘テラスの埴輪列及び外堤の埴輪列の軸線が、周濠の内外両傾斜面の上縁線とほぼ一致するほど近い点も特異といえる。果してこのような形態が、古墳築造当初のものであったかどうか疑問が生じてくる。

その否定要因をいくらか列挙すると、まず第1に周濠内埋土の混入遺物をみると、周濠の2段傾斜によって生ずる下段部分には、埴輪類や葺石の崩落石が包含されるが、上段部分ではさらに奈良時代の瓦磚類が混入していること。第2に造り出し部及びその周囲に敷設された葺石が上段部分にはなく、この下段斜面にのみみられる点、第3に古墳の西側半部で周濠に取り付く狭長な素掘り溝を5条検出しているが、そのうち北側4条は古墳の関連施設を限るSD114と重複し、より新しいことが確認されている(後述)。このことから、こうした周濠の形態は後世の改変であって、周濠に取り付く小規模な溝と一連の改修造作に関わるものと思われる。そしてこれらの改修の時期は周濠内から出土した瓦磚類の内容から、奈良時代とみるのが適切であろう。周濠の再利用については後述するように、瓦生産に関連した施設(貯水等)が考えられる。これは、地下水位の高いこの台地では地面を掘削することで容易に貯水でき、たまたま古墳の周濠が水濠としてすでに存在したことから上記の機能を負わせるべく奈良時代にこれを再利用したと考えられる。そして、利用の際、半ば埋没していた周濠(おそらくこの時点で濠内にはⅢ層とⅡ層の一部が堆積していた)を内外に拡幅する改修を行い、その拡幅の範囲を残存していた墳丘及び外堤の埴輪列までとした結果、その上縁と内外の埴輪列の軸線が異常なまでに接近したものと推察する。ここに、あえて埴輪列を破壊しないという奈良時代における古墳観の一端を、読み取ることもできる(第31図左下の5号墳周濠改修模式図参照)。



第33図 S X 135実測図

## 2. S X 135(I-5)

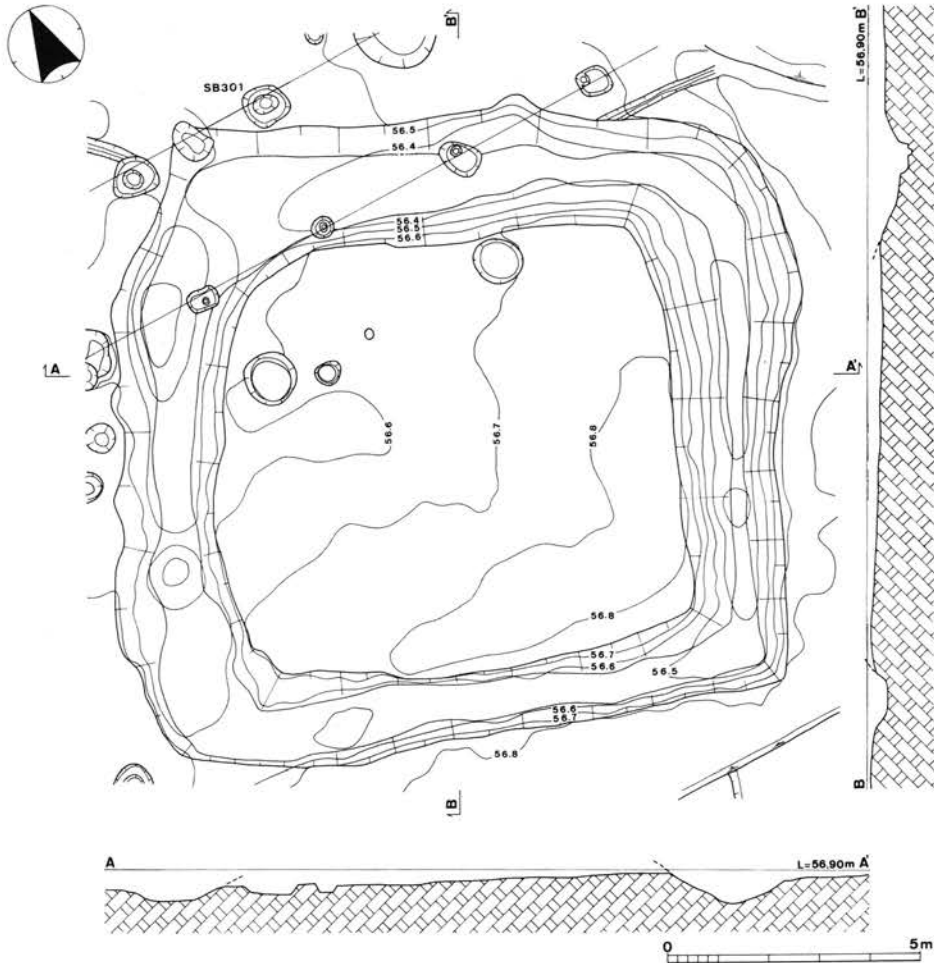
5号墳の南側で、周濠の外縁から約3.0m離れた地区(5号墳の外堤の領域内)で検出した墓壇状遺構である。その構造は、2段掘りの形状を呈し、上段部分は、長円形に近い隅丸長方形プラン(長軸3.2m・最大幅0.85m)で、断面形は側壁が緩やかに立ち上がる舟底状を呈する(検出面からの深さ0.15m)。この上段部分の壇底のほぼ中央に、下段部分が掘り込まれる(上段墓壇底から南端で0.05m・北端で0.1m)。下段部分の平面形は、隅丸長方形(長軸1.46m・短軸0.5m)を呈し、側壁の傾斜は約35~45°を測る。壇内埋土は、上位から淡黄灰色粘質土・淡褐灰色粘質土・褐灰色粘質土の層順で堆積し、下段部分の短側辺に沿って茶灰色土層が幅5~8cmの範囲で带状で垂直に立ち上がっている。出土遺物は、皆無で時期が特定できないが、垂直に立ち上がる土層が木材の腐植土質化したものとすれば、あるいは小口板の痕跡とも考えられ、組み合わせ式木棺を下段部分に設置した木棺直葬形式の埋葬遺構の可能性を指摘できる。但し、長側板や底板を示す痕跡は全く残っていなかった。なお、この土坑(墓壇)を取り巻く周溝は、5号墳の外堤の埴輪列の遺存状態からみても、当初から存在しなかったものと考えられる。

## 3. 6号墳(G-4)

5号墳の中心から北西約43.0mに位置する小規模な方墳である。

古墳の遺存状態は、墳丘が周囲の地表(調査時の遺構検出面で風化して粘質化した地山層)と同一レベルまで削平を受けていた(先の遺存度の分類のCに該当)。古墳が占有する墓域は、その北半部が後世(奈良時代)の大規模な掘立柱建物跡(S B 301)の敷地に重複するため、この時点で墳丘部が削平されたものと思われる。

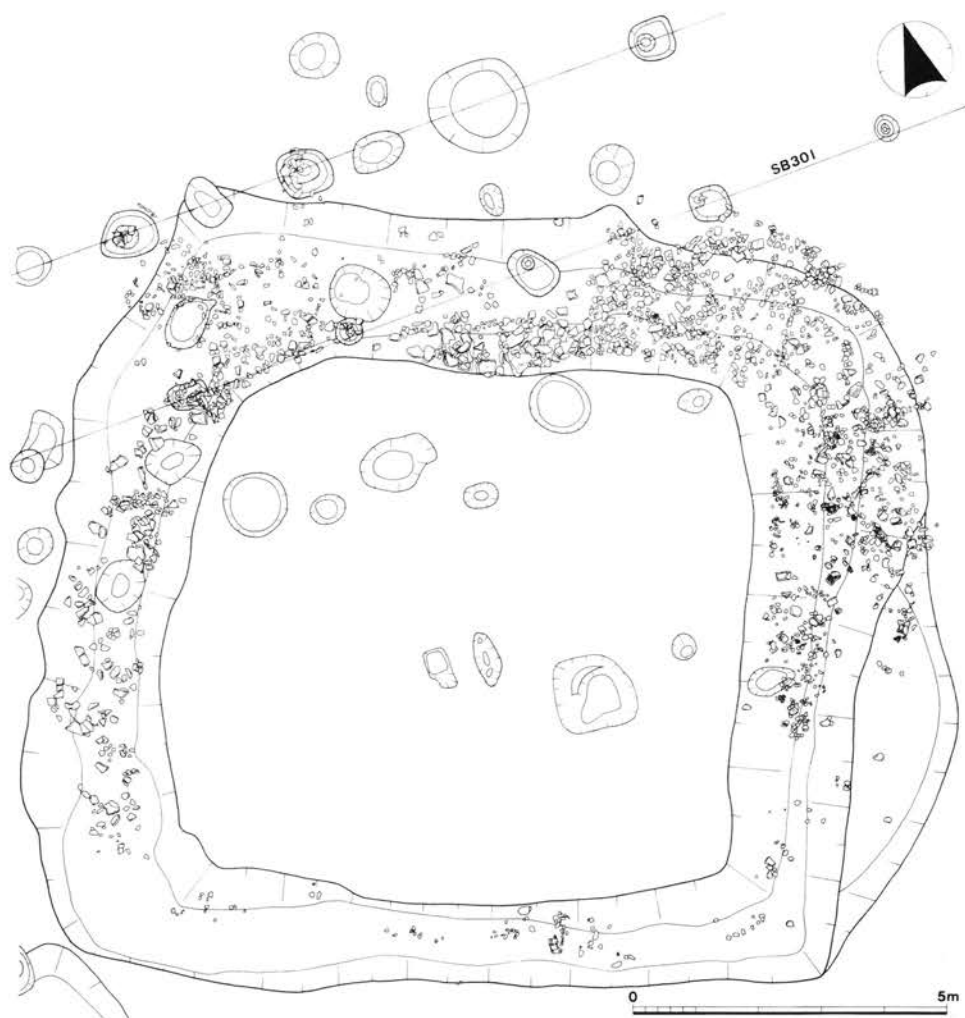
**周溝と墳丘** 周溝は、四周途切れることなく完周する。その上縁幅は1.2~2.8mを測り、



第34図 6号墳実測図

現状では検出面が南側ほど高いが、逆に南半部で周溝幅が狭くなる。

周溝の断面形状は、基本的には内外両斜面が外上方に大きく開く「U」字形を呈し、周溝下縁が緩く屈曲して明確な底面を区別できない。周溝内埋土は、基本的には3層に区分できる。上層は、茶褐色粘質土で奈良時代の瓦磚類・須恵器・土師器を包含し、中層は、黒褐色粘質土で、小片化した馬形埴輪などの形象を含む埴輪片を出土する。下層は、暗黄褐色土が墳丘側に偏って堆積し、墳丘築造後少なくとも奈良時代以前に崩落した墳丘流土と考えられる。この下層から須恵器の杯身・杯蓋・甕が、ややまとまって出土している(内部主体に副葬されていたものが墳丘の削平によって周溝内に転落したものではない)。上層の瓦磚類の堆積状況には、人為的形跡(瓦を重ねることなく横方向に並べることを基本とする)が認められ、かつ建物跡と重複する古墳北半部に集中することから、軟弱な周溝部分に



第35図 6号墳周溝内遺物出土状態実測図

瓦を混入して建物敷地を堅固な地盤に改良したものと考えられる。

墳丘は、周溝によってその内方に削り残された基台上に盛り土することで構築したと思われるが、現状では盛り土部分が削平され直接地山が露呈している。その平面形は、ほぼ正方形を呈し、主軸の示す方位はN22° Eを示す。墳丘の規模は、その基底が明確でなく、対向する周溝の中軸線間の距離で計測すると、東西約11.2m・南北約10.3mを測る。

墳丘の外部施設として段築は確認できないが、埴輪のめぐっていたことが周溝内に転落した埴輪片から推定できる。一方、葺石は、その転落石すら全く存在しないので、当初から敷設されていなかったものと思われる。

墳丘部の埋葬施設(内部主体)は、削平されて墓壇の痕跡すら残存していない。

#### 4. 7号墳(G-5)

5号墳の北側に主軸方位を揃えて接するように、位置する小規模な方墳の一群がある。その中で、5号墳の周濠に最も近いのが7号墳である。

古墳の遺存状態は、段差をもって造成された耕地の地境が墓域内を縦貫するので、古墳の北西側と南西側が1段低く削平されている。それでも、墳丘の遺存状態は相対的に良好で、その約1/4が周溝の外肩の検出面(=遺構面)より約0.8m高い(先の遺存状態のB類)。

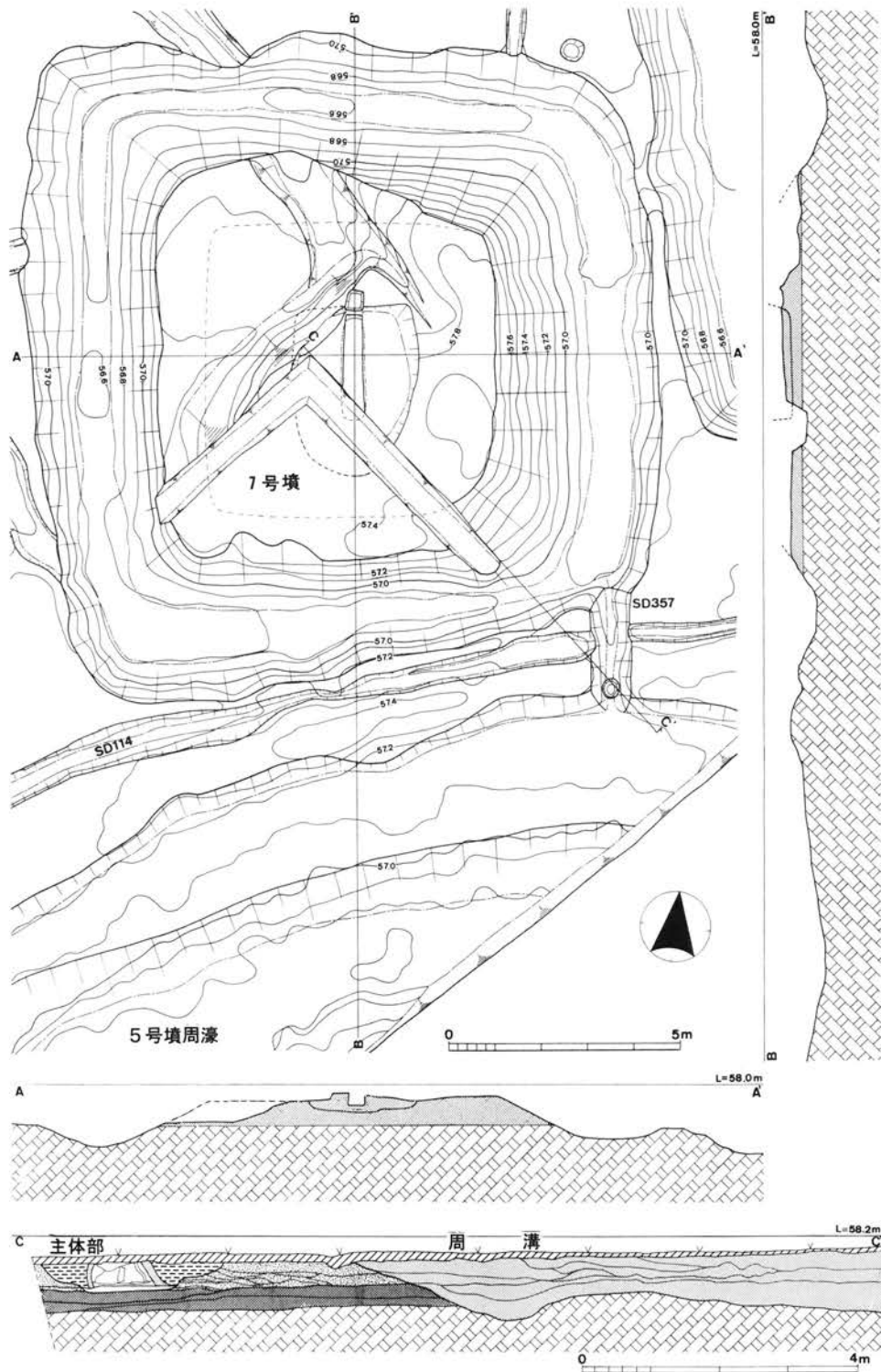
この7号墳では、内部施設及びその副葬品を検出し、また一部断ち割って墳丘部の築造状態を明らかにした。

**周溝** 周溝は、古墳築造前の旧表土面をベースにこれを掘り込み、その底部は堅固な淡黄白色粘質土の地山に達する。周溝の断面形は、基本的には平坦な底面を設けず外上方に大きく広がる「U」字形を呈するが、部分的に鈍い斜面と底面の傾斜変換点を設けて逆台形状に掘り込んだか所も確認できる。周溝の幅は、周囲の検出面のレベルで1.8~2.5m、同じく検出面からの深さ0.25~0.81mを測るが、削平された古墳外周の旧表土を考慮すれば、築造当初はこれより約0.7m広がったことが算出できる(旧表面からの深さ0.83~1.14m)。周溝の平面プランは、正方形を基本とするが、その外縁線は5号墳に接する側で内方に偏向している(約2.0m)。

周溝内の埋土の基本層序は、上位から淡黄色系の砂あるいは粘土の互層(I層)、暗灰~黒灰色粗砂質土(III層)で、墳丘側にのみIII層の上位に茶灰色系土層(II層)が薄く堆積する。このうち、I層が埋土の大部分(周溝中央部で約2/3の厚さ)を占めるが、出土遺物は皆無で自然堆積と考えられる。II・III層は、多数の埴輪片に少量の瓦礫類が混じり、II層は墳丘流土、III層はかつて水濠であったことを示す還元層と考えられる。埴輪の出土に対し、奈良時代の遺物はごく少ない。

**墳丘** 周溝の掘削により内方に削り残された方形基台(その上面は約0.3mの厚さで腐植化している)にテラスを設けることなく盛り土して築いている。盛り土には、黄褐色粘質土に黄白色粘質土が混入しており、特に盛り土の作業過程は確認できなかったが、その土質から周溝掘削の際の排土を供出したものと思われる。墳丘斜面の断面形態は、現状では一律の勾配ではなく、盛り土部分の傾斜が下位の堅固な基台より緩く屈曲している。これは軟弱な盛り土部分が崩落したためと思われる。墳丘の規模は、その底面と斜面のわずかな傾斜変換点を基にすると南北10.3m・東西10.3mを測り、その主軸はN10°Wを示す。

墳丘を表飾する外部施設に関しては、埴輪片が周溝内から多数出土することから、埴輪の樹立が想定される。樹立位置は、段築によるテラスが設けられていないことから墳頂平



第36図 7号墳実測図

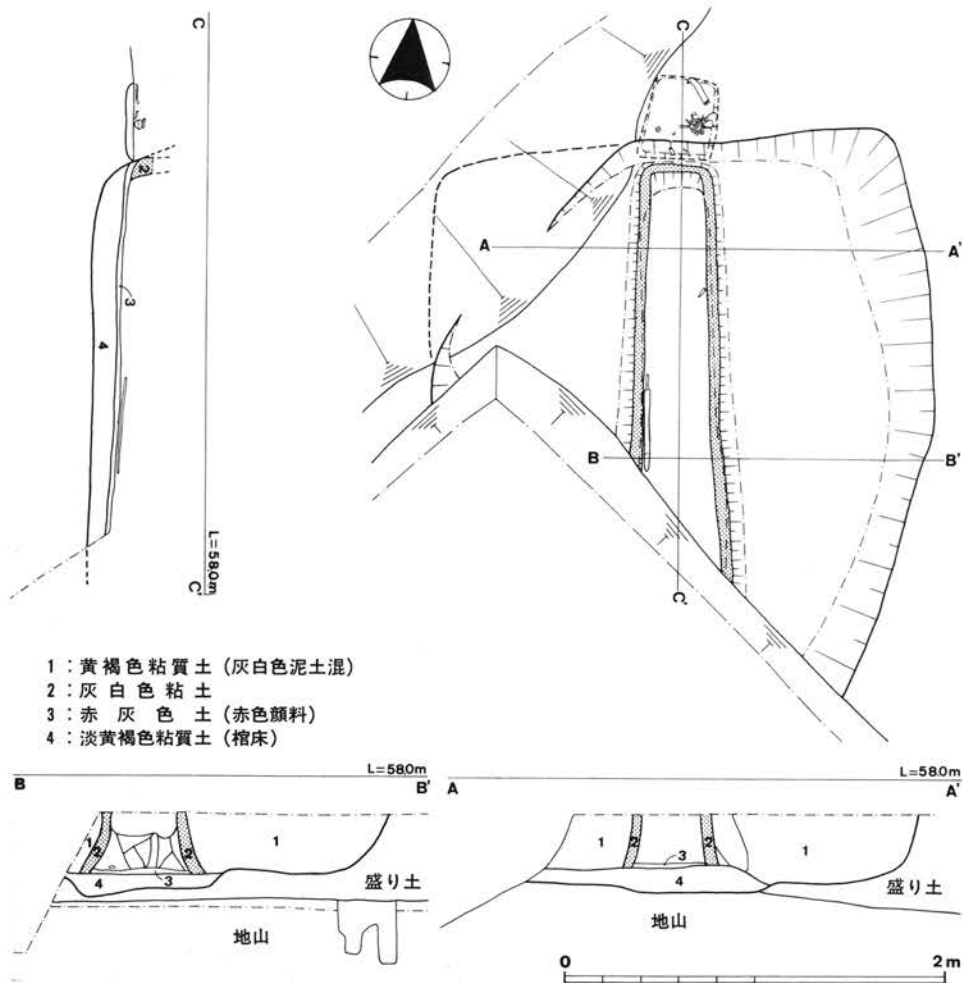


坦部と考えられる。

**内部施設** 墳頂部の中央で、主軸を墳丘の主軸と揃えて南北にとる木棺直葬形式の埋葬施設1基を確認した。墓壇の西半部と棺を含めた南端部を攪乱で失っているが、比較的遺存状態はよく、棺底から上位40cmまで遺存しており、墳頂部の削平が比較的少なかったことがわかる。

墓壇は、墳頂部を2段に掘り込んで構築している。上段部分は、やや不整形な長方形プラン(東西約2.6m・南北3.0m以上)を呈し、断面形は縦・横断面とも極めて緩い勾配をもって底部へと続く(残存する深さは東側で約0.35m)。

下段部分は、上段墓壇底の側縁部に幅0.5m程度の平坦部を残し(小口側はテラスを設けない)、その内方をさらに0.05m程度の緩い勾配で掘り込んでいる(上縁幅約0.75m・下縁



幅約0.6m)。

この下段墓壇には厚さ0.13mの粘質土が敷かれ、これを棺底として上位に木棺が安置される。そして、この下段墓壇に敷かれた粘質土上面は平坦で、ここに側板の痕跡が残らないことから、この木棺は底板の上に側板・小口板がのる組合式木棺、あるいは平坦な底部のくり抜き式木棺と考えられる。棺の周囲に内傾するものの立った状態で白色粘土が帯状(幅約0.05m)に残存しており、棺材の支持には粘土を用いたものと思われる。さらに同質の粘土が棺内にもブロック状に落ち込んでいたことから、棺蓋上も粘土で覆われていたことがわかり、簡易な粘土槨の様相を呈していたものと思われる。

棺内には、ほぼ全面に薄く赤色顔料が塗られ、鉄剣(F21)・ガラス小玉(第64図1~46)・鉄鏃(F16~18)・刀子(F1)が棺底に置かれた状態で出土した。このうち、鉄剣と鉄鏃は埋葬時の状態を保っていたが、ガラス小玉は広い範囲に散乱していた。木棺の北方(北小口に隣接する部位)には、白色粘土で覆われたやや南北に長い方形の区画(南北0.4m・東西0.3m)があり、内部から須恵器椀(68)・鉄鏃(F16~19)・刀子(F2~5)・曲刃鎌(F9)・ミニチュアの鉄斧(F27)・鋤鋤先(F6~8)・鎌(F13~15)及び鉄刀の鋒(切先)部分が現位置を保って出土した。この区画は、その底面が棺底より30cmほど高く墓壇ラインを超えて展開していることから、棺の一部とは考えにくく、別の施設(例えば木製の容器)の可能性が高い。さらに、この副室的施設の安置された高さや墓壇ラインとの重複関係から、この内部施設の構築は、墳丘の築成と一連の工程のもとに行われた可能性が指摘できる。すなわち、墳丘がまだ完成していない段階で一端その上面を整形し、墓壇を掘り込んで、ここに木棺を安置し粘土でこれを被覆する。そして、墓壇を埋め戻した段階で棺の北小口延長部に副室的な施設を据え置き、これも粘土で被覆した後、再び墳丘の盛り土作業を行い、棺と副室を完全に被覆するとともに墳丘を完成させる。以上のような工程が復原できる。

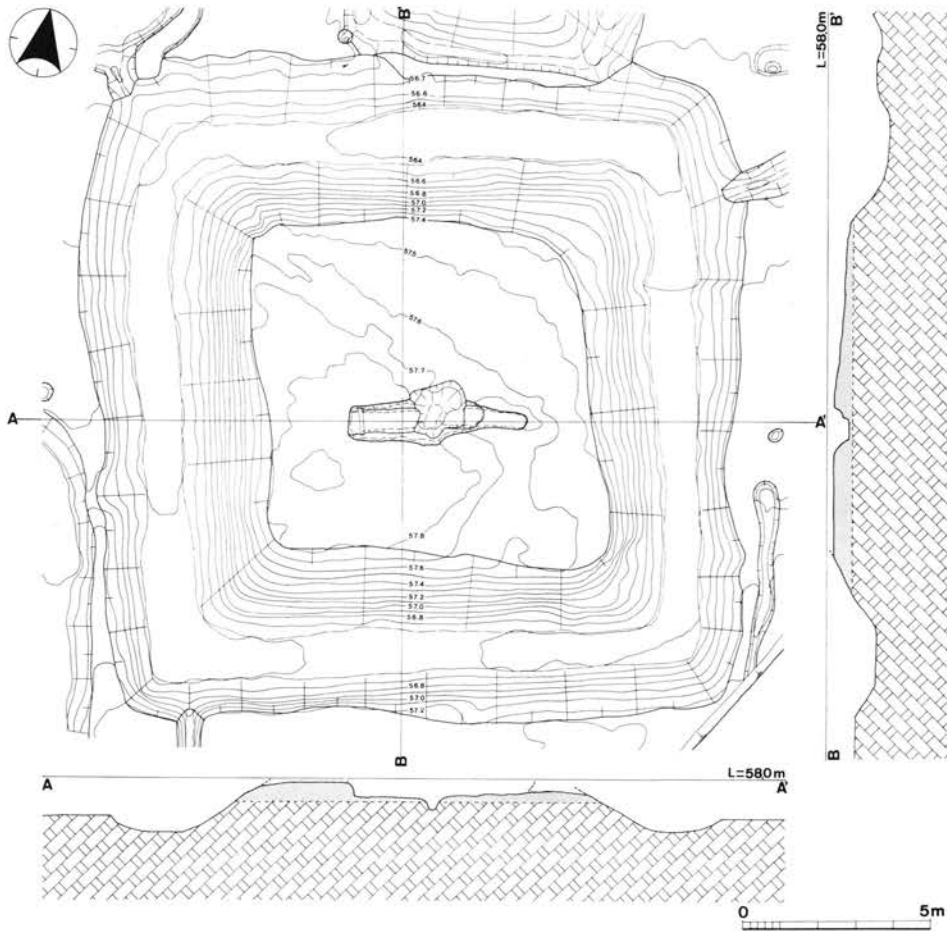
この7号墳の南辺周溝には、5号墳に連繋する1条の小規模な素掘り溝(SD357)が取り付いているが、いずれも直接古墳とは関係なく奈良時代の遺構である。

## 5. 8号墳(G-6)

7号墳の北東側で周溝に接するように隣接する小規模な方墳である。

埋没古墳としては非常に良好な状態で墳丘部が遺存しており(B類)、地表にその痕跡さえ追えなかったものの、現表土直下に墳頂面が位置していた。上人ヶ平古墳群の小規模な方墳の中では最大規模を測る。

**周溝と墳丘** 8号墳は、墳丘の断ち割り調査を実施していないので、その築成状態の詳細は明らかでないが、墳丘の傾斜変換点を基盤層による方形基台と盛り土部分の境界とみるなら、約0.5mの盛り土高が残存していたことになる(周囲の検出面から墳頂部までの比



第38図 8号墳実測図

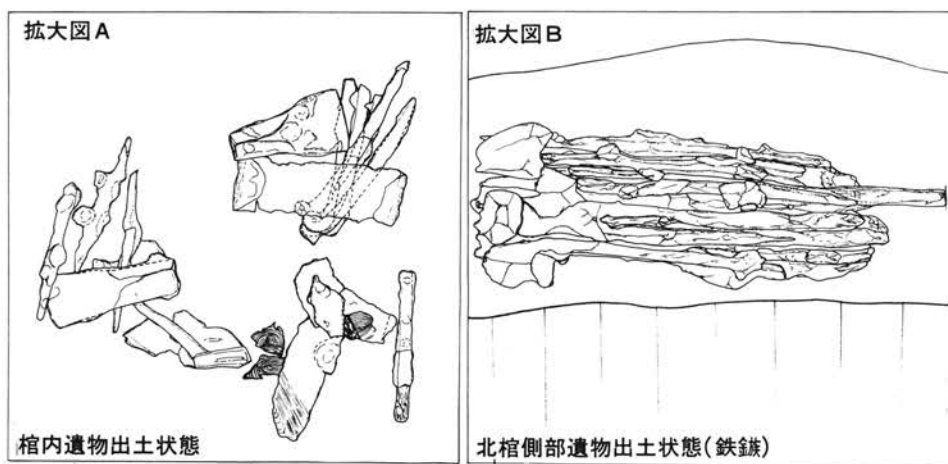
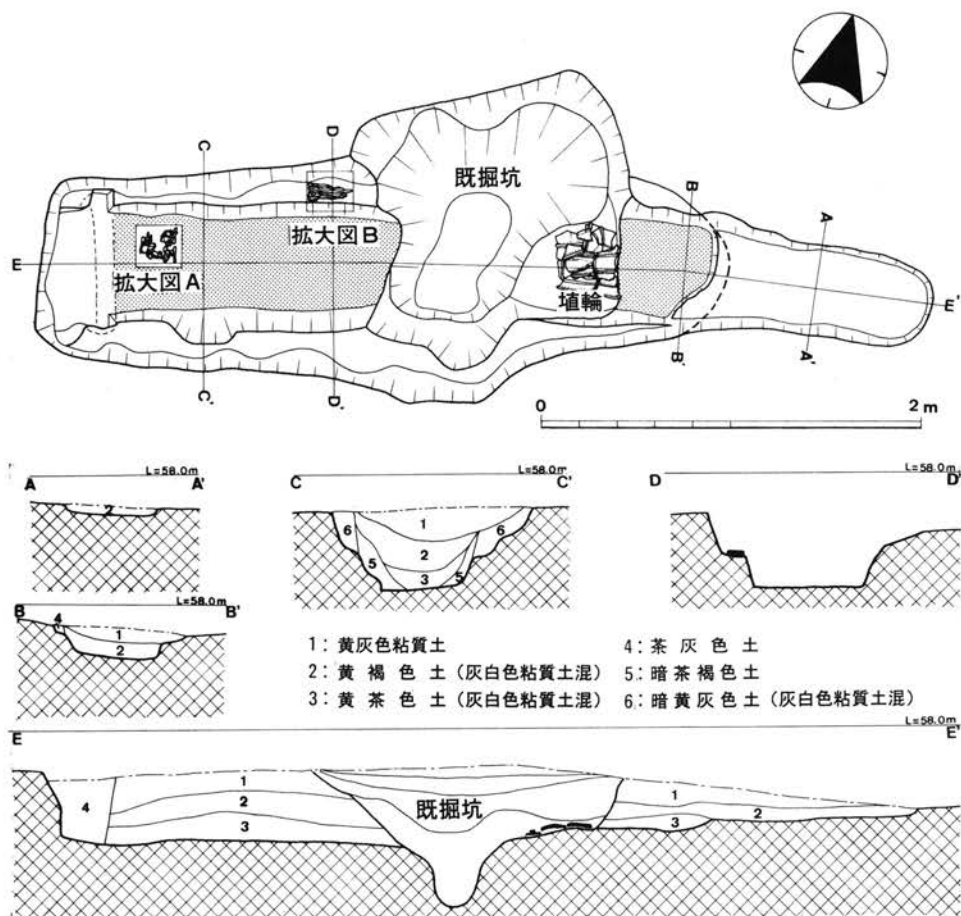
高差は約1.0mで、これから盛り土高を減じた数値が墳丘下に保護されている旧表土厚となる)。

周溝は、底部が不明瞭な「U」字形の断面を呈し、その下半部は堅固な地山層を深く掘り込んでいます。周溝の規模は、周囲の検出面を基準にすると幅2.8~3.5m・深さ0.6~0.9mを測り、その外縁ラインが示す平面形は整美な正方形を呈する。

周溝内埋土の堆積状況は、基本的には7号墳と変わらない。すなわち、遺物を包含しない黄色系の砂と粘土の互層(I層)が埋土の大半で、遺物を包含する層は下層に限られる。

墳丘は、周囲の周溝によって内方に掘り残された基台に、テラスを設けることなく盛り土することで構築する。墳丘の規模は、周溝底面と斜面のわずかな傾斜変換点間で求めると南北12.3m・東西12.6mを測り、その一辺の方位はN11°Wを示す。

外部施設としては、周溝内に包含されている埴輪片から、墳頂部で埴輪のめぐっていた



第39図 8号墳主体部実測図

ことが想定できるが、葺石はその転落石すらない。

**内部施設** 墳頂部の中央やや南寄りで、主軸を墳丘と揃えた木棺直葬形式の埋葬施設1基を確認した。墓壇の中心付近に径2m前後・深さ最大0.75mの摺鉢形盗掘坑が存在する。

墓壇は、墳頂部を2段に掘り込んで構築している。上段部分は、隅丸長方形プラン(長辺3.6m・最大幅1.2m)を呈し、断面形は縦・横断面とも比較的緩い勾配をもって掘り込んでいる(残存する深さは検出面が最も高い西端で約0.25m)。また、墓壇の東側には、幅と深さを一段縮小した浅い掘形が、主軸をやや違って接続している。

下段部分は、上段墓壇の底面の側縁部に、それぞれ幅0.1m程度のテラスを残し、その内方をさらに0.15m掘り込んでいる(上縁幅0.6m・下縁幅0.5m・上縁長3.6m・下縁長3.55m)。下段墓壇の底面は平坦で、側壁部も上段に比べ直立している。また、墓壇西端から0.3m東方で、棺木口板を固定する側方への掘り込みがあり(東木口部分にはない)、さらに、この西木口への痕跡から東方の下段墓壇底面の全面に赤色顔料が認められる。なお、東木口の閉塞方法が不明として残るが、これらのことから、内法長さ3.15m・幅0.5mの組合式木棺が、墓壇壁に密着させるように設置されていたものと思われる。

伴出遺物は、棺内・棺外(墓壇内)・盗掘坑から若干出土した。

棺内からは、西木口板の約0.25m東方で、鉄製農工具(刀子F52~55・鑿F58・斧F61・62・鎌・F59・60・鍬先F57)・堅櫛が鎌に錆着し、一か所に集中して出土した(第39図中の拡大図Aを参照のこと)。棺外では、上段墓壇底面のテラス上(いわゆる遺物床)に、鉄鏃が16本(F35~50)束になって一括埋納されている(第39図中の拡大図Bを参照のこと)。いずれも鋒(切先)を西方に向けており、有機質の容器に収納して供献したものと考えられる。

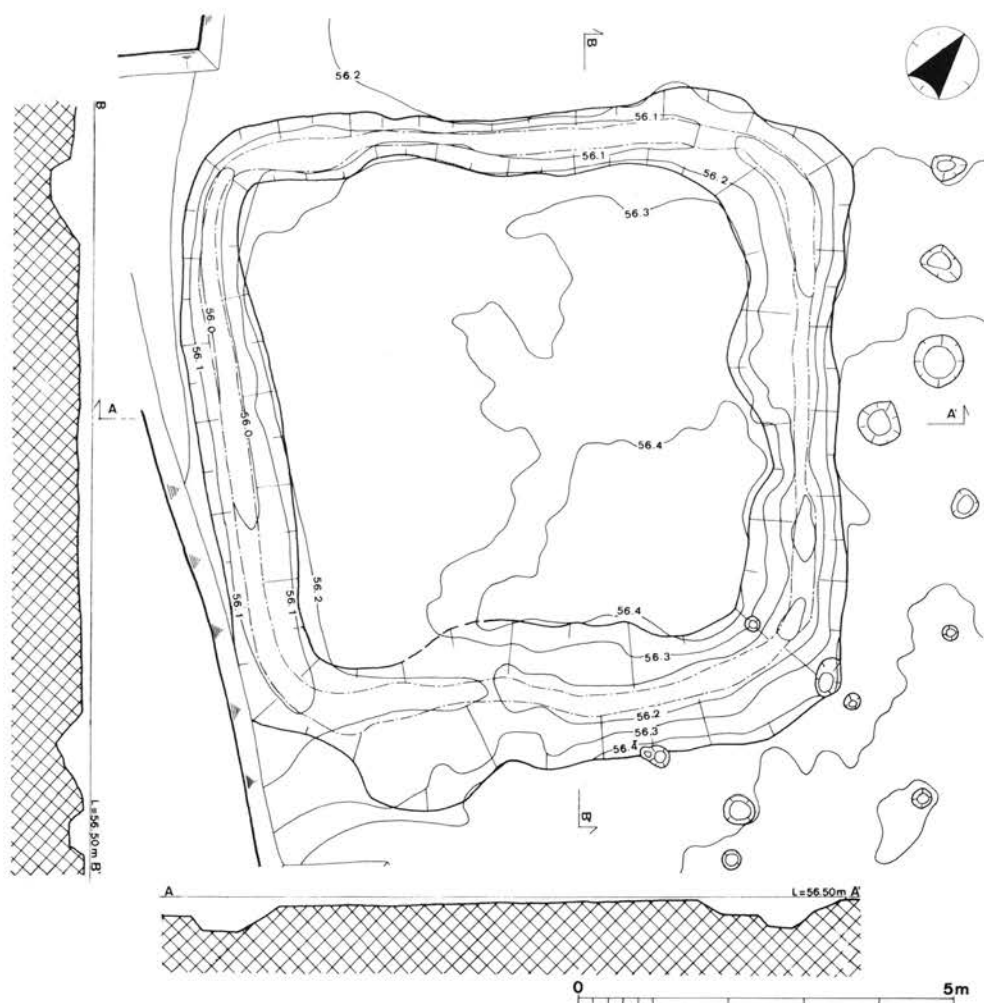
盗掘坑からは、埴輪・須恵器(甕・杯蓋71・壺76)の小片が少量出土している。このうち、第39図に図示した埴輪については、盗掘坑の範囲に入るものの、円筒埴輪の比較的大きな破片を、棺底ライン直上に臥せるように置いたもので、あるいは築造当初の施設(例えば枕状施設)の可能性がある。墓壇の東方張り出し部、及び西木口と墓壇西端との間に位置する副室的な空間からの出土遺物はない。

この古墳の南周溝西寄り及び東周溝北寄りから北東方向に派生する小規模な溝(SD355・356)は奈良時代の遺構であり、前者はSD114に切り勝ち、5号墳の周濠につながる。

## 6. 14号墳(G-4)

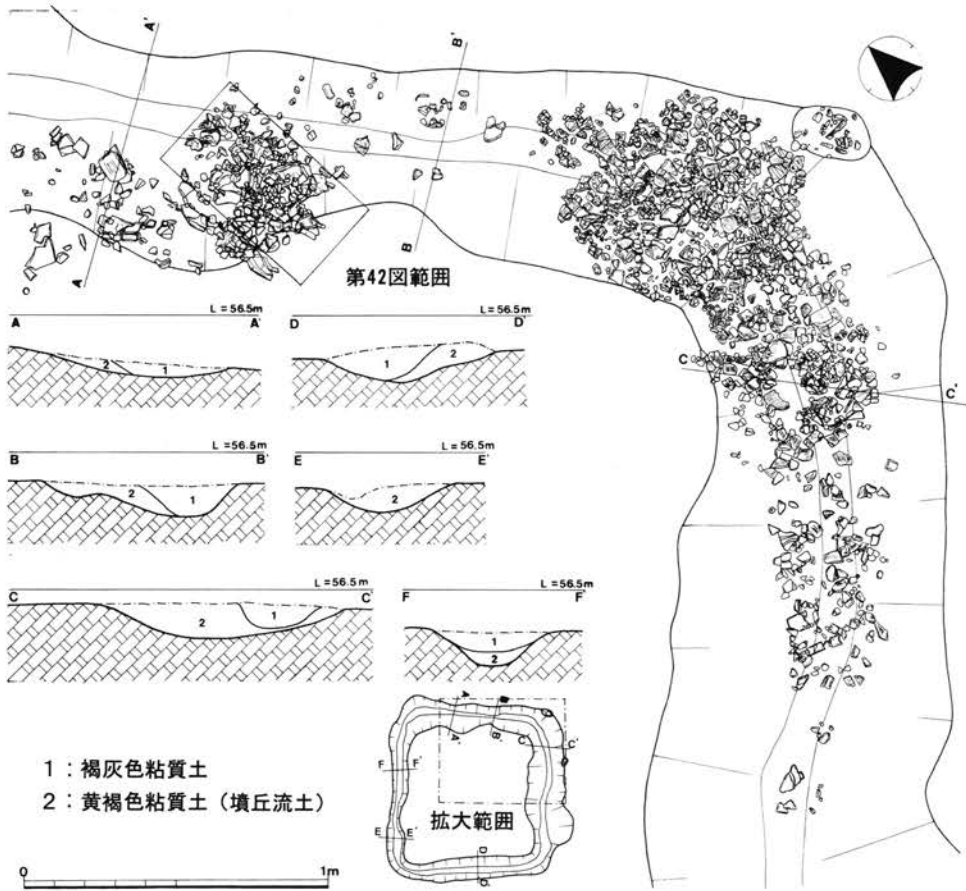
6号墳のさらに西方で、5号墳の西北西67.0mに位置する小規模な方墳である。墳丘は、周溝の検出面と同レベルまで削平されており(遺存度C)、墳丘高(周溝底からの高さ=周溝深さ)も0.1~0.7mを測るにすぎない。

**周溝と墳丘** 古墳の立地が台地の縁辺に近く、遺構面が南西側の谷に向って緩く傾斜し



第40図 14号墳実測図

ているため、遺存度も西側ほど悪い。周溝の規模も最も遺存状態のよい東側で上縁幅1.8mを測り、西辺溝ではわずか0.5mを測るか所もある。周溝の断面は、大きく外上方に開く「U」字形を呈し、平坦な底面を設けない。周溝内には埋土が上位から褐灰色粘質土、黄褐色粘質土の順に堆積するが、幅の狭い西半部では上層が見られないか所もある。下層は、基本的には墳丘側に偏って堆積し、その土質より墳丘が崩落した流土と考えられる。これに対して、上層は埴輪類に混じって多量の瓦磚類が含まれている。その出土状態は、あたかも敷き並べたような状態を呈し、この土層は人為的な造成土の可能性もある。墳丘は、削平を受けて基台の下半部をとどめるにすぎない。その規模は、対向する周溝の中軸間から求めると、北東辺～南西辺間が約7.5m・北西辺～南東辺間が約7.7mのやや北西辺の長い正方形プランを呈し、主軸の示す方位はN36°Wを測る。



第41図 14号墳周溝内遺物出土状態実測図・周溝断面図

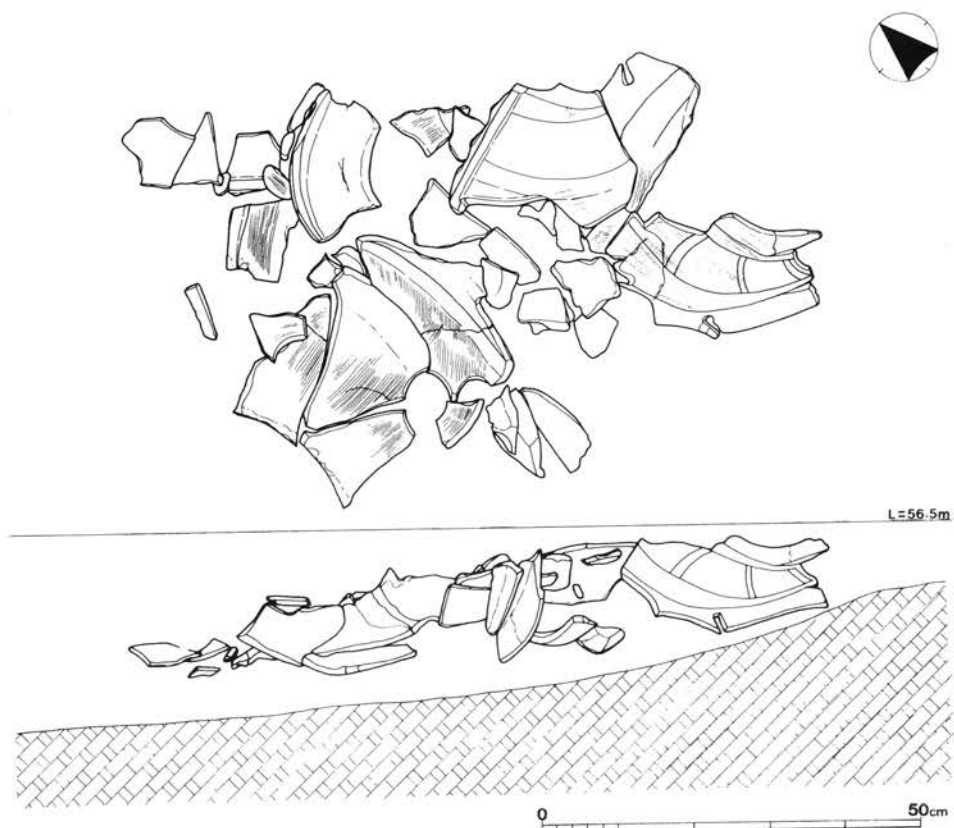
北東辺の周溝内から蓋形埴輪・普通円筒埴輪・土師器甕・須恵器杯蓋が出土した。このうち、蓋形埴輪(285)と普通円筒埴輪(281)は、完全復原可能な程度に遺存した個体であり、各々1個体ずつ数m間隔で周溝底付近に横位に転倒していた。特に、蓋形埴輪は、笠部と立ち飾り部が装着されたままの状態出土し、元位置を大きく移動していないと思われる。土師器甕(91)と須恵器杯蓋(72)は、ともに溝底から遊離した位置にあり、前者は倒立して内部とその周辺に赤色顔料が散乱していた。

墳丘の外部施設として、周溝内から埴輪片が出土したので、埴輪の樹立が想定できるが、葺石は転落石すらないことから当初から敷設されていなかったものと考えられる。

内部施設は、削平のためその痕跡すら残存していない。

#### 7. 15号墳(G-4)

6号墳の南西に接し、5号墳の西北西約46.0mに位置する小規模な方墳である。墳丘は、周囲の検出面まで削平され(遺存状態の分類のB)、墳丘の残存高(周溝底からの残存高)は



第42図 14号墳周溝内蓋形埴輪出土状態実測図

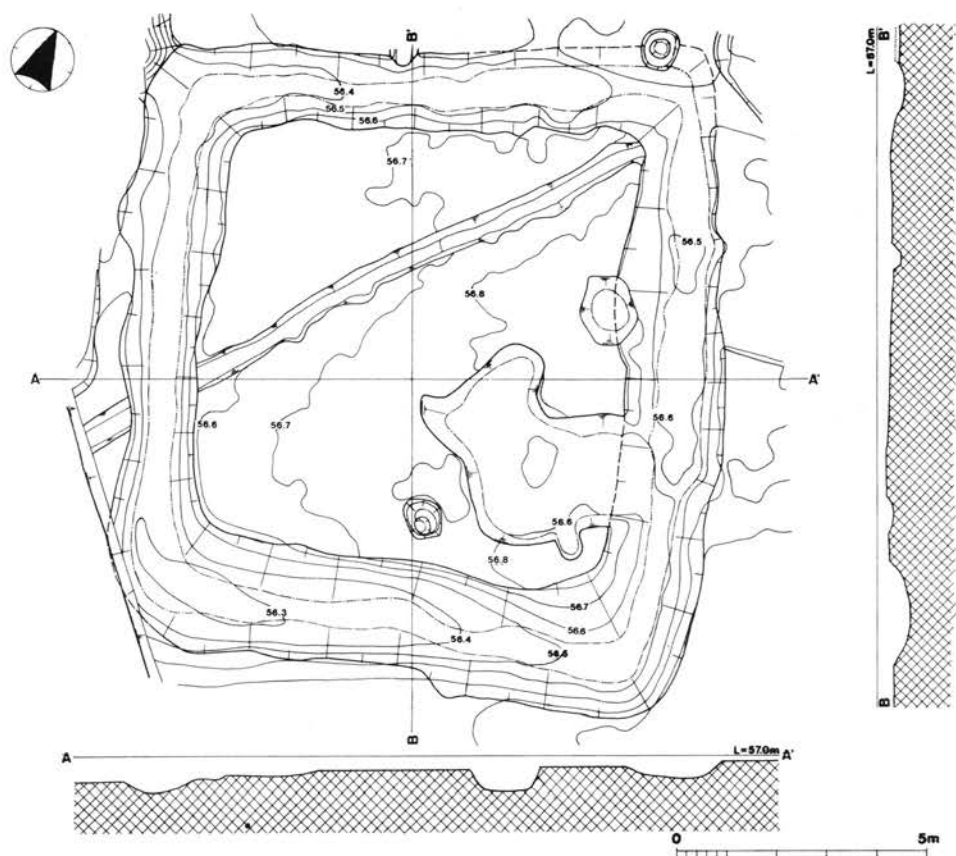
0.2~0.4mを測る。

周溝と墳丘 古墳の位置する地点の遺構面が東から西へ緩く傾斜しており、遺構も東ほどよく残存している。周溝は、南溝がやや規模が大きく、上縁幅2.2mを測る以外は1.3~2.0mの幅を測る。深さは、南西コーナー付近が最も深く(検出面からの深さ0.4m)、対向する北東コーナーでは浅くなる(同0.2m)。周溝の断面は、他の小規模な古墳と同様、明確な下底面を設けない「U」字形を呈している。

周溝内埋土の基本層序は、上位からⅠ.黄茶色土、Ⅱ.黒灰色土~暗褐灰色土、Ⅲ.黄灰色土、Ⅳ.黄褐色土となる。このうちⅡ層は東・南・西溝にみられ、特に黒灰色土は多量の瓦埴類を包含する。この瓦埴類は、重層することなく横位に並んでいることから人為的に敷き詰められていた可能性があり、この土層は奈良時代の整地層と考えられる。Ⅲ層は埴輪類を包含する層で、四辺すべてに認められる。Ⅳ層は例外なく墳丘側に堆積し、墳丘流土と考えられる。

出土遺物のうち、埴輪類は円筒埴輪のほか蓋形埴輪の立ち飾り部小片(332)を含むが、い





第43図 15号墳実測図

ずれも小片で、14号墳のように完形に復元できる個体はない。土器類としては須恵器杯蓋(73)がⅢ層から出土した。

墳丘規模は対向する周溝の中軸間で計測すると、南北10.4m・東西10.3mを測り、主軸はN12°Wを示す。

墳丘の外部施設は、埴輪列を想定できるのみで葺石は施されていない。

内部施設は、墳丘部削平のため不明である。

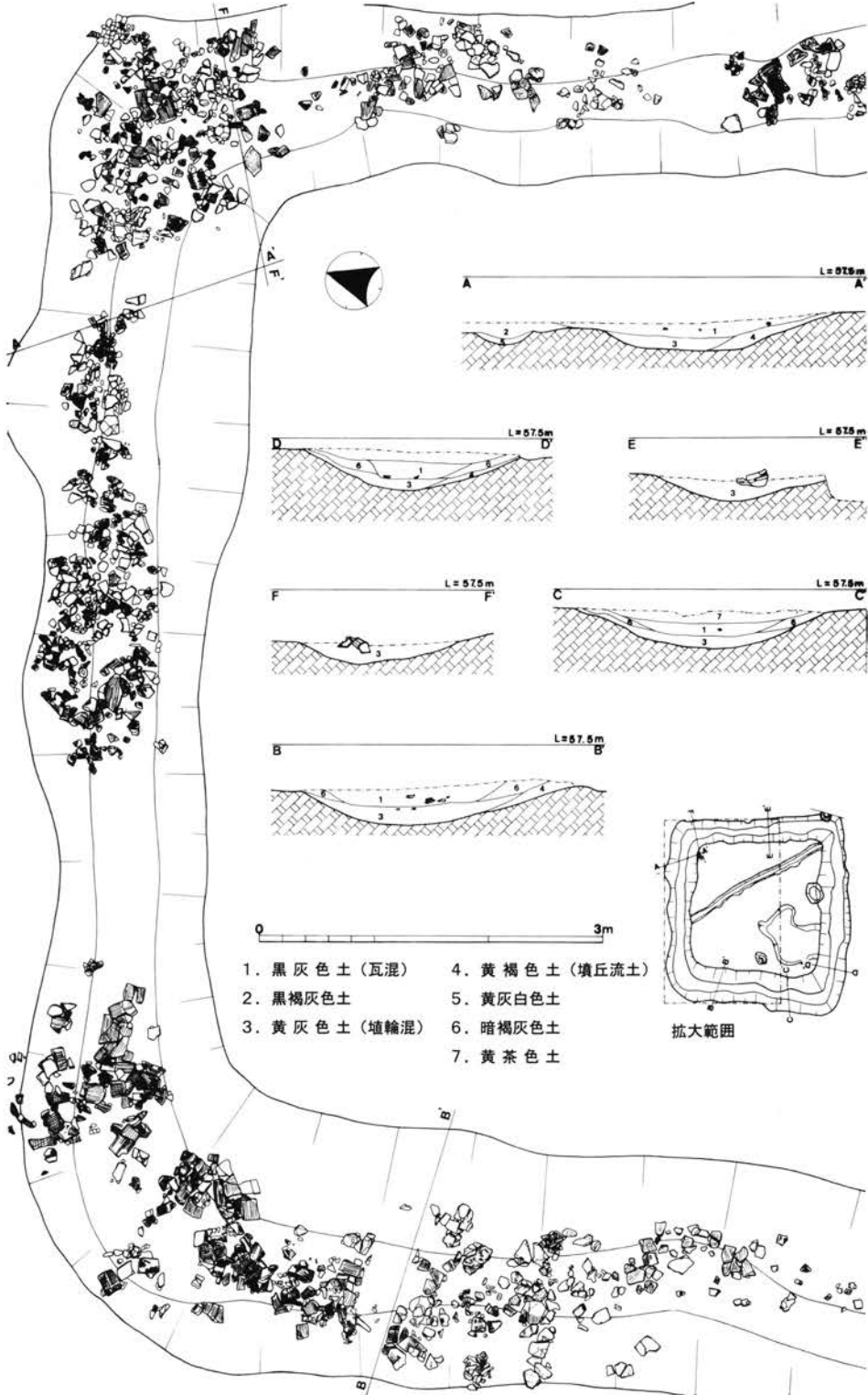
#### 8. 16号墳(G-6)

8号墳の北側周溝に接してその北側に位置する小規模な方墳である。

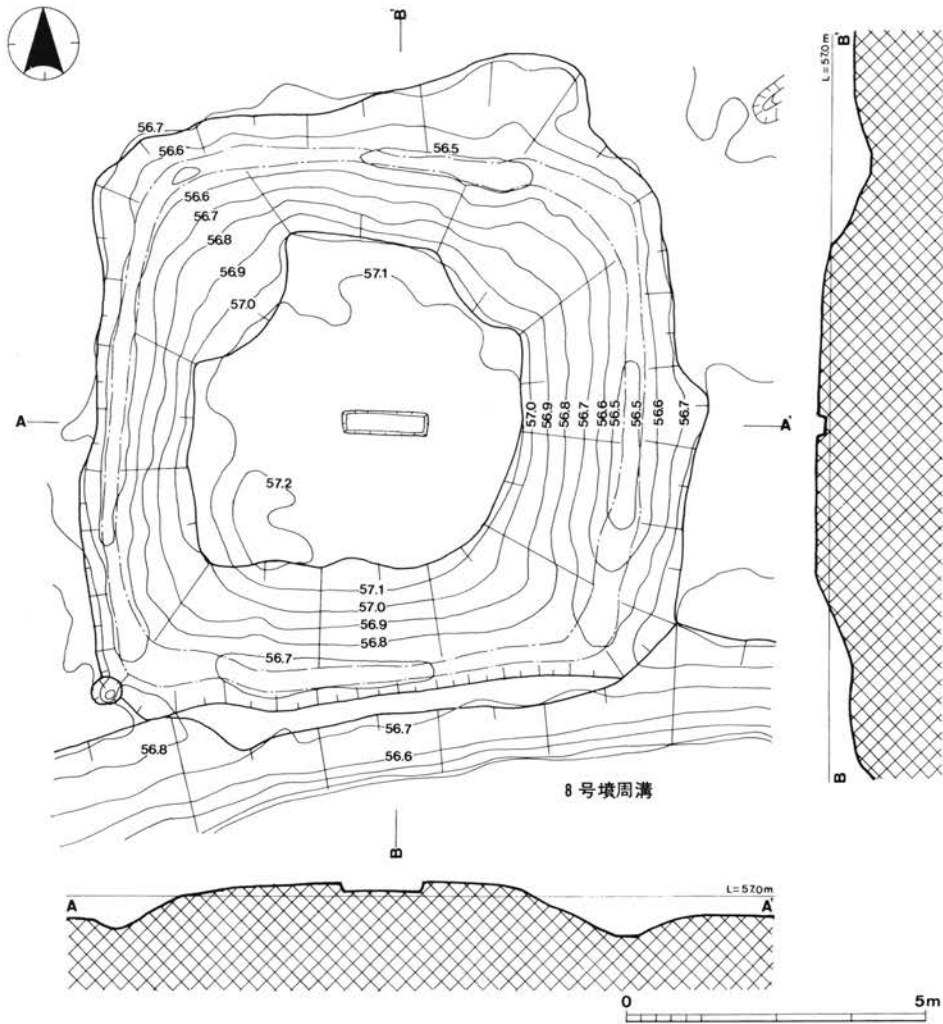
上人ケ平古墳群の中で、最も規模の小さい方墳である。

墳丘部の遺存状態は、隣接する7・8号墳と同様に良好で、墳丘が周囲の検出面から0.4m高く残る(B類)。

周溝と墳丘 この古墳の場合も墳丘の断ち割り調査を実施しておらず、構築方法の詳細を知り得ないが、古墳築造以前の面(おそらく築造時の表土面を簡単に整形した程度の面)



第44図 15号埴周溝内遺物出土状態実測図・周溝断面図



第45図 16号墳実測図

をベースにこれを掘り込み周溝とする。周溝の断面形は外上方に開く「U」字形で、その規模は古墳周溝の検出面(=後世に削平され旧表面は残存しない)を基準に測ると、周溝幅0.6~1.7m・同深さ0.2~0.4mとなる。周溝内埋土は、周溝内部分に限ると基本的には1層で、埴輪片を多く含む淡黄茶色粘質土(埴丘土)が埴丘斜面側を覆うように堆積している。

さらに、この上位に周溝の範囲を越えて、古墳の周囲に広がるように土層が堆積している。このうち下層は、暗茶灰色土で奈良期の瓦磚類が多量に含まれ、奈良時代の整地層と考えられる。一方、上層は黄色系の砂と粘土の互層で遺物を伴わない自然堆積層である(古墳の南辺で8号墳と接する側では、この層は8号墳周溝埋土I層に対応する)。周溝内埋土

(最下層)からは、多数の埴輪片に混じり、ほぼ完形に復原できる程度に残存する蓋形埴輪4個体(248~251)及び家形埴輪1個体(252)が出土した。その出土地点は、蓋形埴輪が周溝各辺のほぼ中央部に、家形埴輪が西辺溝中央部にそれぞれ集中してあり、その遺存状態から判断すれば本来の樹立位置を大きく移動していないものと思われる。

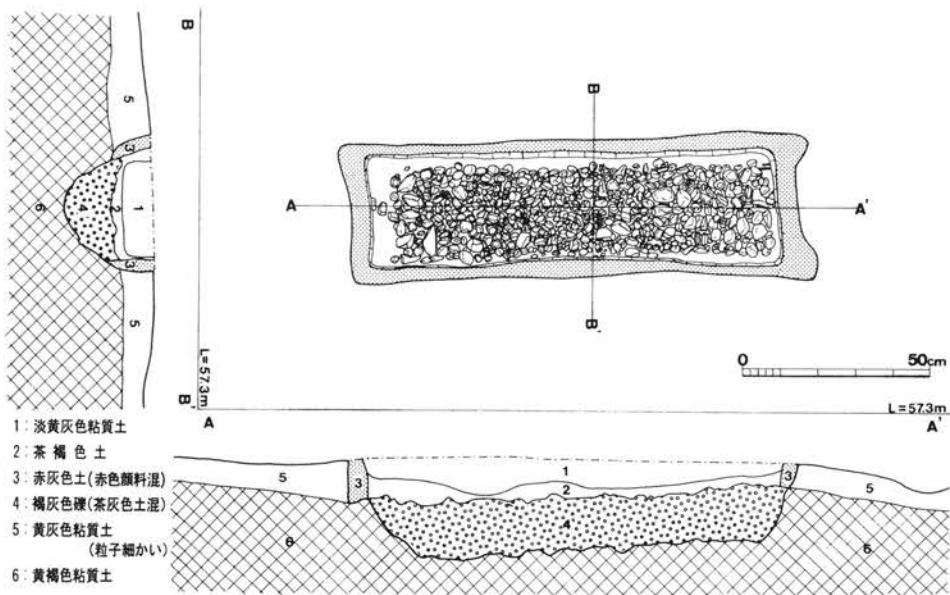
墳丘は、周溝によって内方に掘り残された基台上にテラスを設けることなく盛り土をすることで構築しており、現状では周囲の検出面より約0.4mの高さで遺存している。

墳丘斜面の断面形態は、周溝上縁を境に屈曲して緩斜面となる。これは、盛り土部分が堅固な基台に対して軟弱であるため流出した結果と考えられる。

墳丘の規模は、対向する周溝幅の心々ライン間で計測すると東西約6.8m・南北約6.7mのほぼ正方形プランを呈し、その主軸はN2°Eとほぼ磁方位の南北に一致する。

**内部施設** 墳丘のほぼ中央部で、主軸を墳丘のそれに揃え東西にとる木棺直葬形式の埋葬施設1基を検出した。その構造は組合式木棺で、側板・小口板の厚みに相当する範囲がわずかに変色していた(長さ1.25m・幅0.38m)。

棺底には、1~3cm前後の小礫(自然石)を充填した隅丸長方形プラン(長軸1.1m・短軸0.28m)で、舟底状の断面(深さ0.15m)を呈する掘形が穿たれており、排水施設として機能している。この礫敷上面には、赤色顔料のしみこんだ薄い土層が堆積しており、棺の底板に赤色塗彩が施されていたことが窺われる(棺の内法長1.08m・内法幅0.28m、検出面から礫上面までの深さ0.12m)。



第46図 16号墳主体部実測図

出土遺物は、棺東端で釘状鉄器2点が出土したのみである。

磔敷のレベルより東側に埋葬頭位を想定できる。

この埋葬施設の構築方法については、周囲の断ち割り調査によってある程度判明した。すなわち、墳丘盛り土作業がある程度進行した段階で一端上面を整形し、その中央部の棺設定位置に舟底形掘形を穿ち、内部に小石を充填する。次に、この掘形の上位に木棺を据え置き、一連の埋葬行為が終了すると、再び墳丘の盛り土作業を行い、墳丘を完成させると同時に棺を被覆する。このように墓壙を伴わない(無墓壙)方式を採用している。

#### 9. 17号墳(H-6)

5号墳の東側に設けたサブトレンチで検出した古墳状遺構で、5号墳の中心から17.0m隔てるところに位置する。

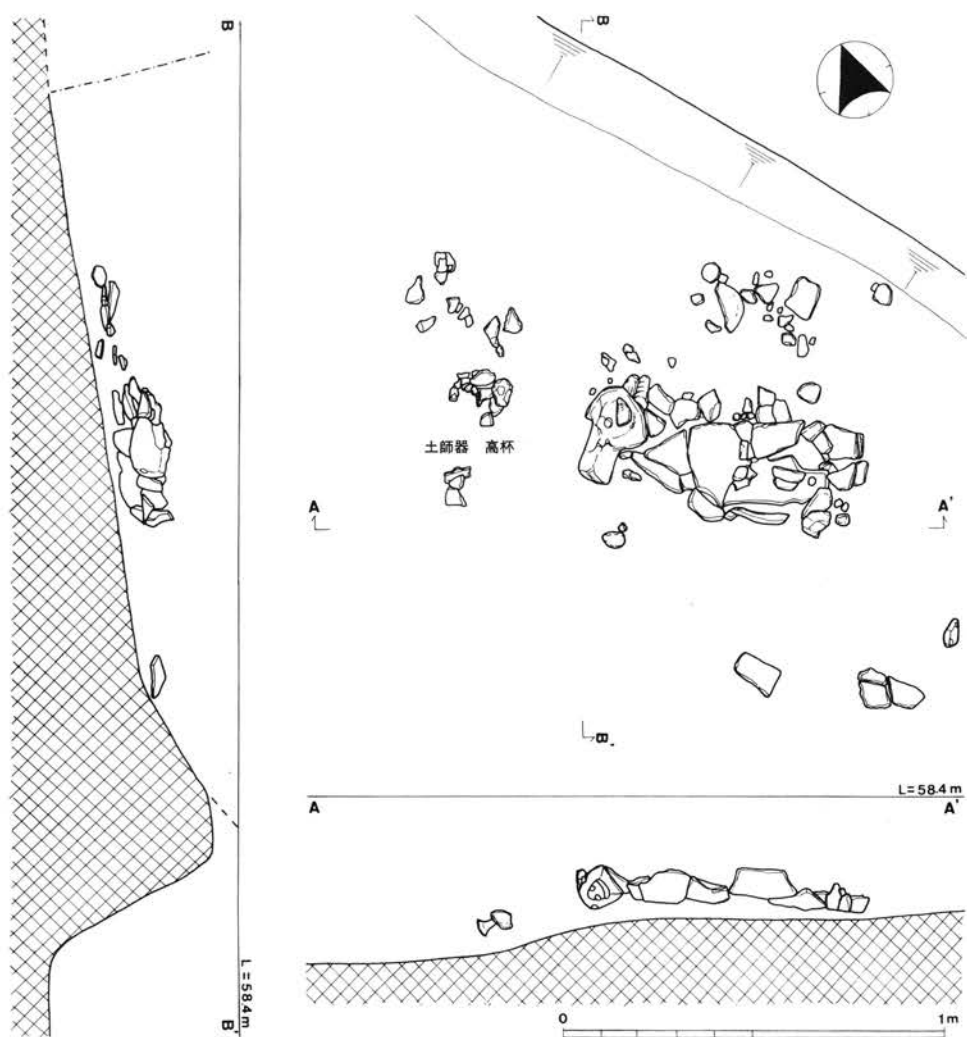
調査時の現状は、調査範囲が限定されていることに加え、遺構の南側部が台地の基部を横断する谷地形(通称ふんどし池)によって大きく削平されていること、さらに調査区内でも墳丘部の大部分が後世の土坑によって攪乱されていることから、これを古墳とみることはできない状態であった。しかし、墳丘状の高まりをめぐる周溝の一部が確認でき、周溝と思われる位置から埴輪が出土したため、ここでは古墳(17号墳)として報告する。

**周溝と墳丘** 周溝は、その外縁部が5号墳と面する側(西側)では確認できず、調査区の東端部で一部検出したにすぎない(東端部で周溝は幅を減じて途切れるが、これは谷地形の傾斜に起因するもので実際はのびるものと思われる)。17号墳の周溝は、5号墳の外堤をめぐる埴輪(E G H01)の設置位置(第31図5号墳周溝断面図参照)からみて、5号墳に接する側には周溝は存在しない可能性が高い。すなわち、周溝は墳丘の四周をめぐるのではなく、標高の高い南半部にのみ掘り割り状に設けられたものと思われる。そのため、墳丘は南半部にのみ基盤層(明黄褐色粘質砂土)による基台が周溝の内方に削り出されるが、西半部は基台部分がなく、墳丘築造前の整地面に直接盛り土して構築している(西半部に残存する盛り土高は約0.5mを測る)。とりわけ、5号墳に最も接する西辺部分はその外堤埴輪列に接する位置に墳丘基底を設置しており、あたかもこの埴輪列を墳丘の西限としている状態を確認した。5号墳が17号墳の周溝外縁を破壊して築造されたとは考えがたいので、17号墳の方が後出すると理解される。

墳丘の形態は、現存する墳丘上縁ラインが北西部で直線状を呈し、調査区内に直交する隅部を確認できることから、主軸方位をN10°Eに振る方墳と推定できる。

検出した墳丘規模は、その上縁部分で南北8.0m以上・東西9.0m以上を測る。

遺物は、墳丘裾に堆積した埋土から多量の埴輪類に混じり若干の須恵器・土師器などが出土した。なかでも墳丘北西隅部に近い北辺の墳丘斜面で、馬形埴輪1個体(255)が横位に



第47図 17号墳北周溝内馬形埴輪出土状態実測図

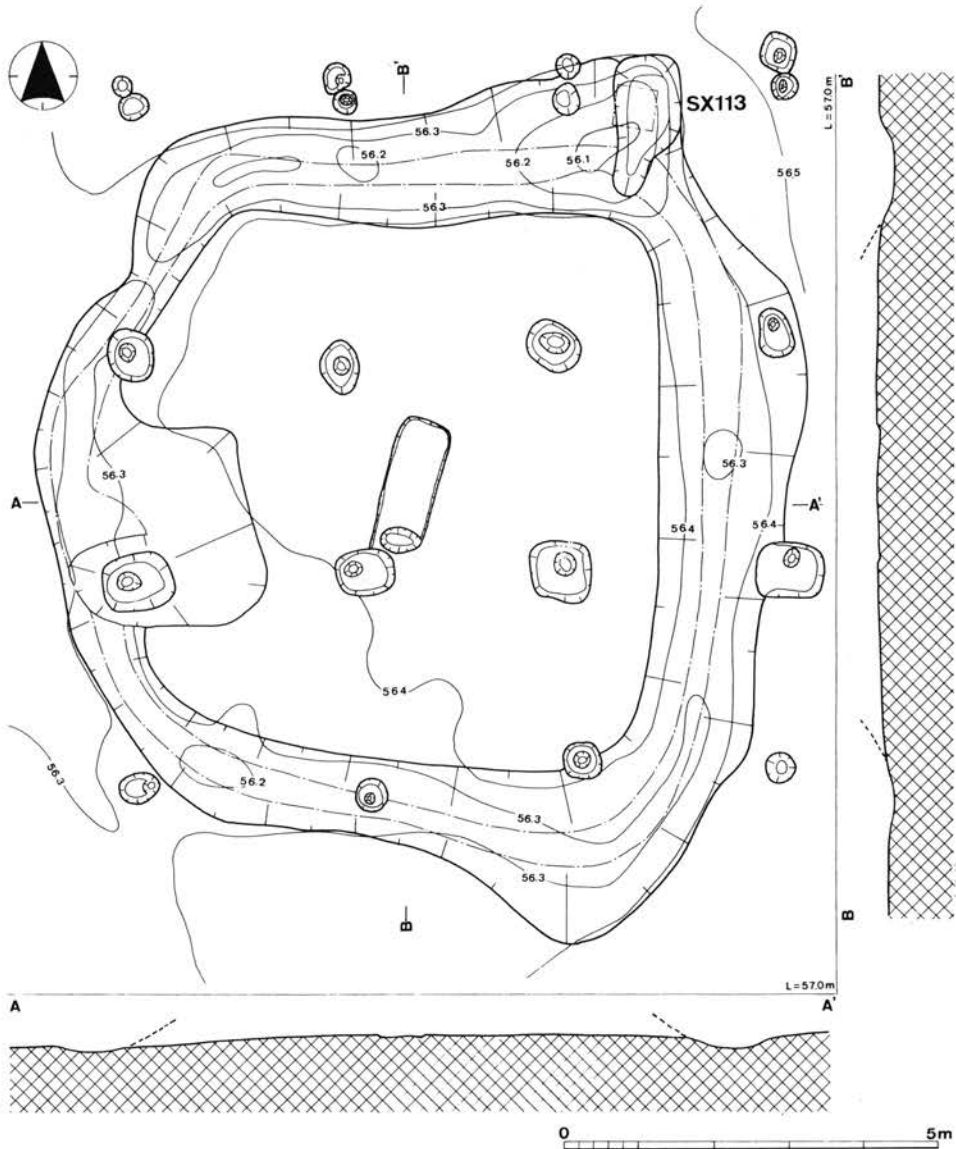
転倒した状態で出土した。馬形埴輪は、脚部を欠損しており、本来墳丘上に樹立されていたものが埴裾部に転落したものと考えられる(第47図)。

#### 10. 18号墳(F-4)

6号墳の北側で、5号墳の中心から北北西方向に約60.0mの地点に位置する小規模な方墳である。他の小規模な方墳が互いに隣接するように分布するのに対し、やや独立した位置に存在する。

墳丘は、奈良時代の遺構(後述するA建物跡群の敷地内)に重複することもあって、周囲の検出面と同レベルまで削平されている(遺存度C)。

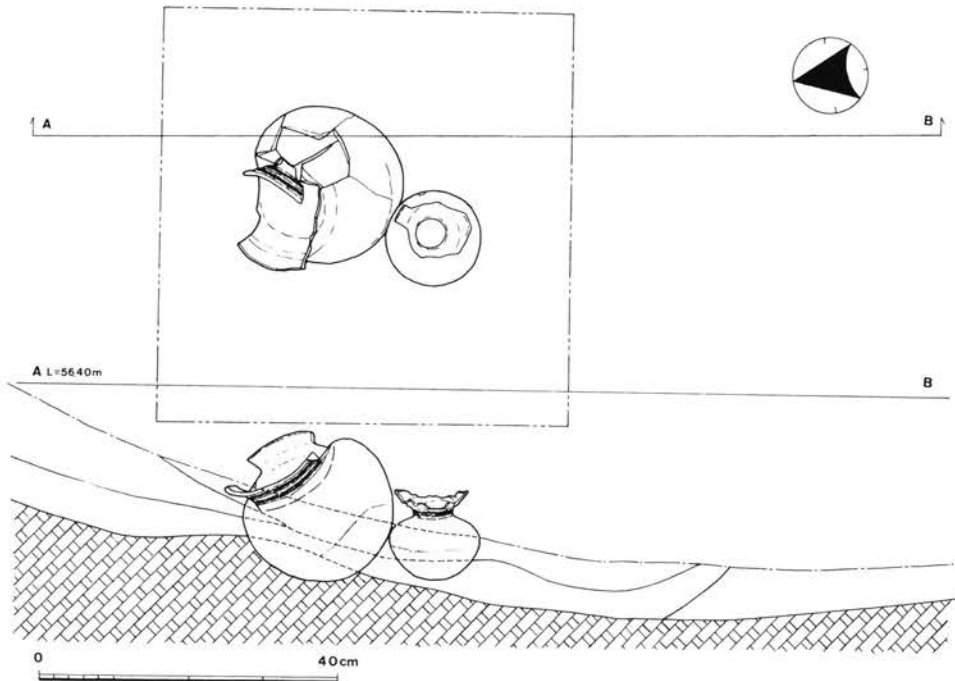
**周溝と埴丘** 周溝は、奈良時代の造成によって部分的に変形を受け、上縁幅も0.6~2.3m



第48図 18号墳実測図

と一定しない(比較的規模の変化の少ない東辺溝で幅1.5mを測る)。

周溝の断面形は、大きく外上方に広がる「U」字形を呈し、平坦な底面を設けない。周溝内には、上位から暗茶灰色土・黄茶色土の順で埋土が堆積する。このうち、上層は瓦磚類が含まれるが、14・15・16号墳のような人為的に敷き詰められた状態ではない。一方、下層は墳丘側に偏って厚く堆積しており、墳丘流土と考えられる。周溝内には埴輪などの出土遺物は皆無であった。周溝の内方に削り出された墳丘は、その基台の下部が遺存するにすぎず、盛り土部分は全く遺存しない(墳丘の高さは周溝底より0.15~0.20mを測る)。



第49図 18号墳北東隅土坑(S X 113)遺物出土状態実測図

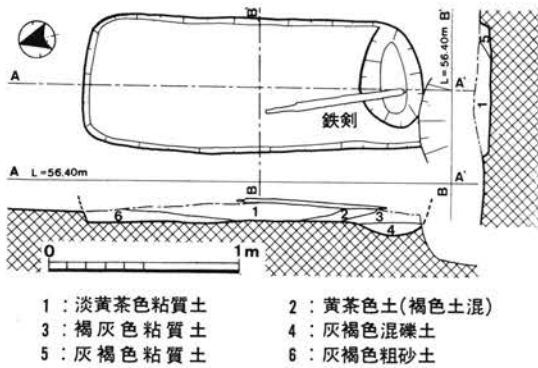
墳丘の平面形は西辺溝がやや変形しているものの、ほぼ正方形を呈する。その規模は、対向する周溝中軸間の距離で求めると、南北約8.5m・東西約8.6mを測る。

古墳の主軸の示す方位は、北・東・南周溝の内縁ラインより $N 4^{\circ} E$ を示し、ほぼ真北方位と一致する。

北辺周溝の東端部で、周溝内に掘り込まれた土坑(S K 113)を検出した。土坑の平面形は、長円形(実際は周溝深度によって不整形に検出されている)を呈し(南北2.0m・東西1.0m、周溝外周の検出面からの最大の深さ0.35mを測る)、その主軸は墳丘北辺にほぼ直交するように南北を示す。土坑の断面形は、舟底状を呈し、墳丘側ほど深く傾斜している。土坑内部のほぼ中央部で、ほぼ完形の須恵器甕(70)・甗(78)それぞれ1個体がほぼ正立した状態で、坑底に据え置かれたように出土した。このS X 113は、断面観察によると墳丘流土が周溝内に堆積する以前に掘り込まれたことが明らかであり、古墳の関連施設(例えば溝中埋葬施設あるいは土器供献土坑など)と思われる。

**内部施設** 墳丘の中央部で、主軸を墳丘のそれに比べやや北で東に振る( $N 15^{\circ} E$ )墓壇の痕跡を確認した。墓壇の遺存状態は非常に悪く(墳丘面からの深さ約10cm)、南端は奈良時代の柱穴に一部攪乱されている。墓壇(下段墓壇か?)は、下底部付近で隅丸長方形プランを呈し、その規模は短軸(東西)0.5~0.8m、長軸(南北)2.6mを測る。壇底は平坦面を呈す





第50図 18号墳主体部実測図

るが、その南端部分に皿状の掘り込みがあり、内部に小礫を混じえた灰褐色土が充填されていた。おそらく、簡易な排水施設と考えられる。坑内には黄茶色系粘質土と灰褐色粗砂が堆積し(棺床土)、その上面(ほぼ墳丘検出面と同じレベル)に、底部が平坦な形状の木棺が設置されたものと推定され、坑内

の南半部のこの面で、鋒(切先)を南に向ける鉄刀(大刀)1口(F51)が出土した。

### 11. 1号墳(C-3)

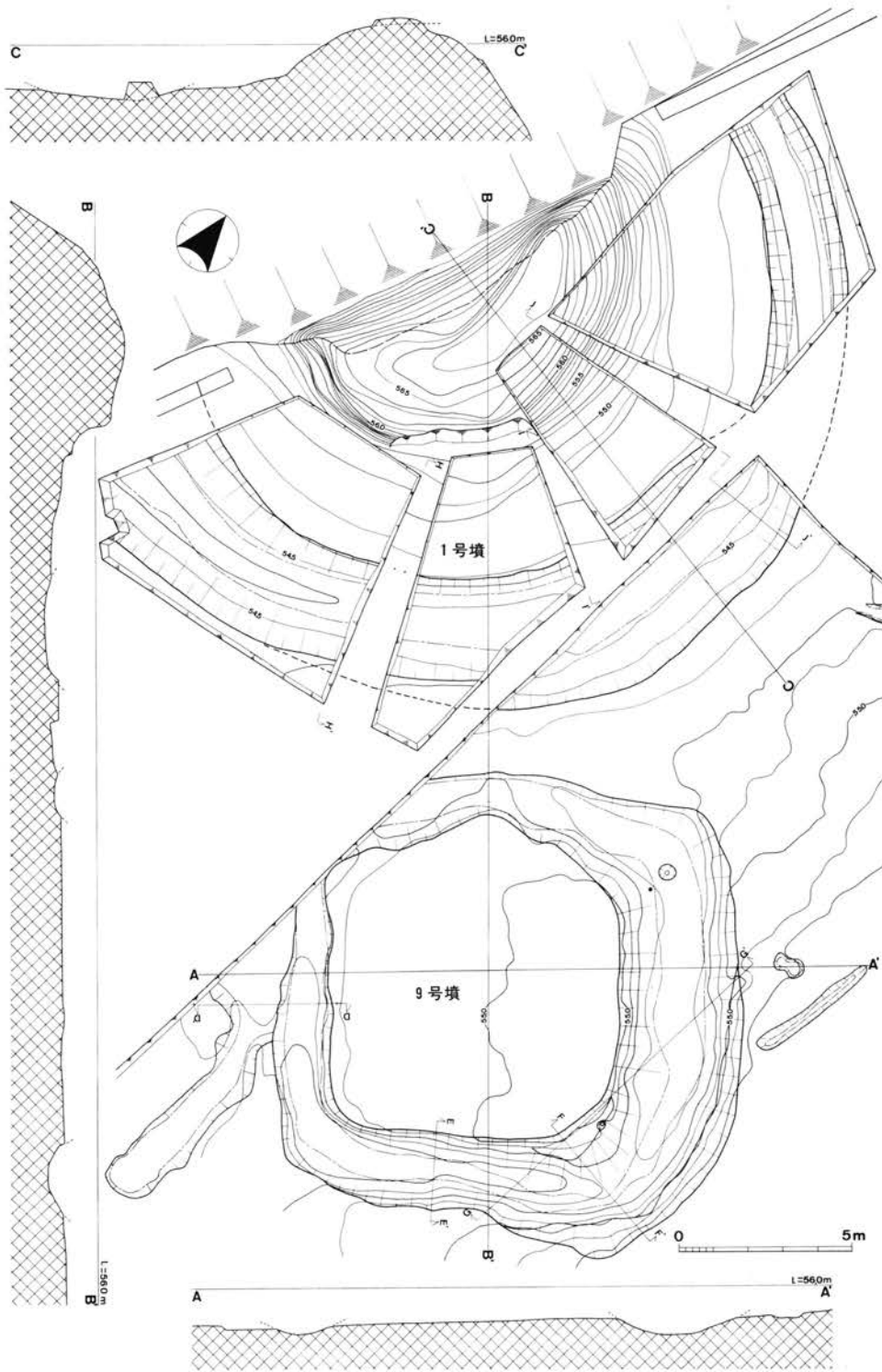
上人ヶ平の平坦な台地の北端部をJR関西本線がオープンカットして北東から南東方向に縦貫しているが、この付近に古墳状隆起が4か所存在し、かつてこれを上人ヶ平1~4号墳と認識していることは先に述べたとおりである。現在は、これらのうち、4号墳を除く3基は、いずれも鉄道の切り通しによって大きく改変を受けている。今回は、調査区の関係で、JR関西本線の線路より南側に位置する1・4号墳が調査の対象となった。

1号墳の調査時の現況は、地表に残る墳丘の北西部を関西線の掘り割りによって完全に欠失するという状態であった。ただし、南東側に残された墳丘の状態は、等高線が整美な正円弧を示すことから、削平をされなかった部分は比較的旧状をよくとどめているようすが窺えた。

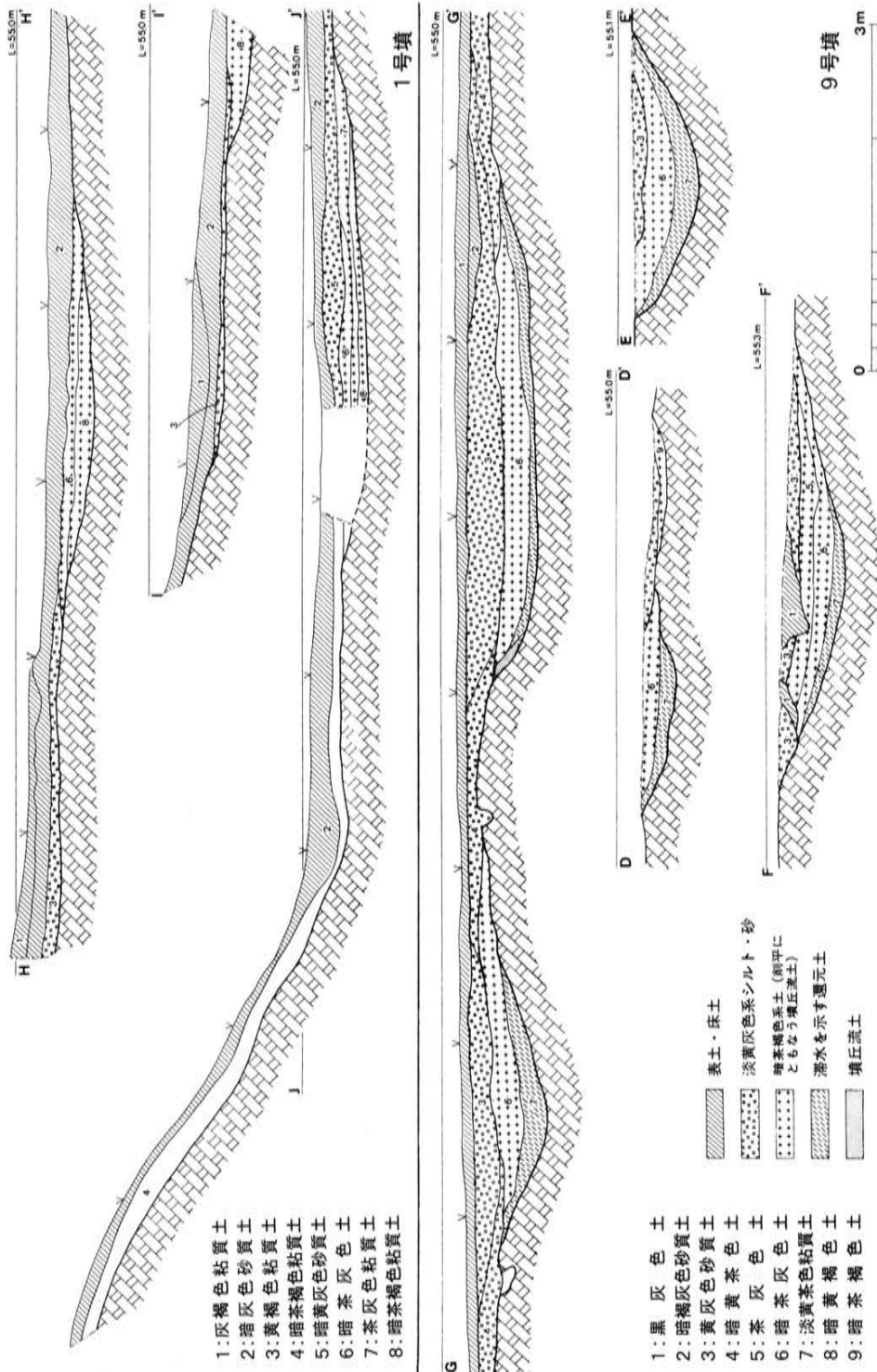
発掘調査は、鉄道への安全対策上、残丘の最高点を除き、周辺の平坦部と残丘部の一部にトレンチを設けた。その結果、周辺部で墳丘をめぐる周溝の存在と、墳丘が2段に築成されていることが判明した。

**周溝** 円を描く残丘部の基底ラインより外周約4.5~7.0mで、同心円を描く周溝の外傾斜面上縁が検出された。現状での規模は、上縁幅2.0m(北東部)~3.8m(南東部)、検出面からの深さ0.2~0.4mを測る。その断面形は、最もよく遺存していた南東部でみると、内外両斜面がやや内湾ぎみに立ち上がるものの、その内方に幅約1.2mの平坦な底面を設ける構造を呈し、他の小規模な古墳のような「U」字形断面はとらない(周溝幅の狭い部分では、検出面が古墳の周囲に傾斜するため、内傾斜面が失われ、結果として内湾する「U」字形断面を呈する)。

周溝内埋土は、基本的には上位より暗黄灰色系砂質土・茶灰色系土の順で堆積する(北東部は下層のみ)。上層は、周溝を越えて古墳周囲の遺構面をも覆っており、遺物を全く含ま



第51図 1・9号墳実測図



第52図 1・9号墳墳丘・周溝断面図

ず台地南東方向からの自然流土と思われる。下層は、全体に墳丘側に厚く堆積しており、その土質や若干の埴輪片の出土から墳丘流土と考えられる。

**墳丘** 周溝の掘削により、その内方に削り出された基台に盛り土することで墳丘を構築している。墳丘の基底(周溝外傾斜面下縁)の示す平面形は、対象地内で半円形を呈し、この古墳が円墳あるいは前方後円墳であることを示す(復原直径19.0mを測る)。

周溝残存状態の悪さに加え、埴輪列が全く残っていなかったことから、1段目墳丘上面は削平を受けているものと推定される。

2段目墳丘は、断ち割り調査を実施しておらず、断定はできないものの、盛り土築成されたものと推定される。後世の削平により生じた現状の傾斜変換点を基底として、その規模を計測すると直径約11.5m、残丘最高点までの高さ2.1mを測る。

墳丘の外部施設として、周溝埋土内から出土した埴輪片から埴輪のめぐっていたことが想定できるが、その樹立位置については原位置を保つものがないことから不明である。ただ、埴輪の出土量が他の古墳に比べて少なく、その埴輪も細片化し、摩耗を受けていることから、多量の埴輪を必要とする墳丘テラスではなく、おそらく、墳頂部にのみ埴輪列が設置されたものと思われる。

葺石は、周溝内も含め古墳の周辺に転落石すら存在しないので、当初より敷設されていなかったものと考えられる。

## 12. 4号墳(E-3)

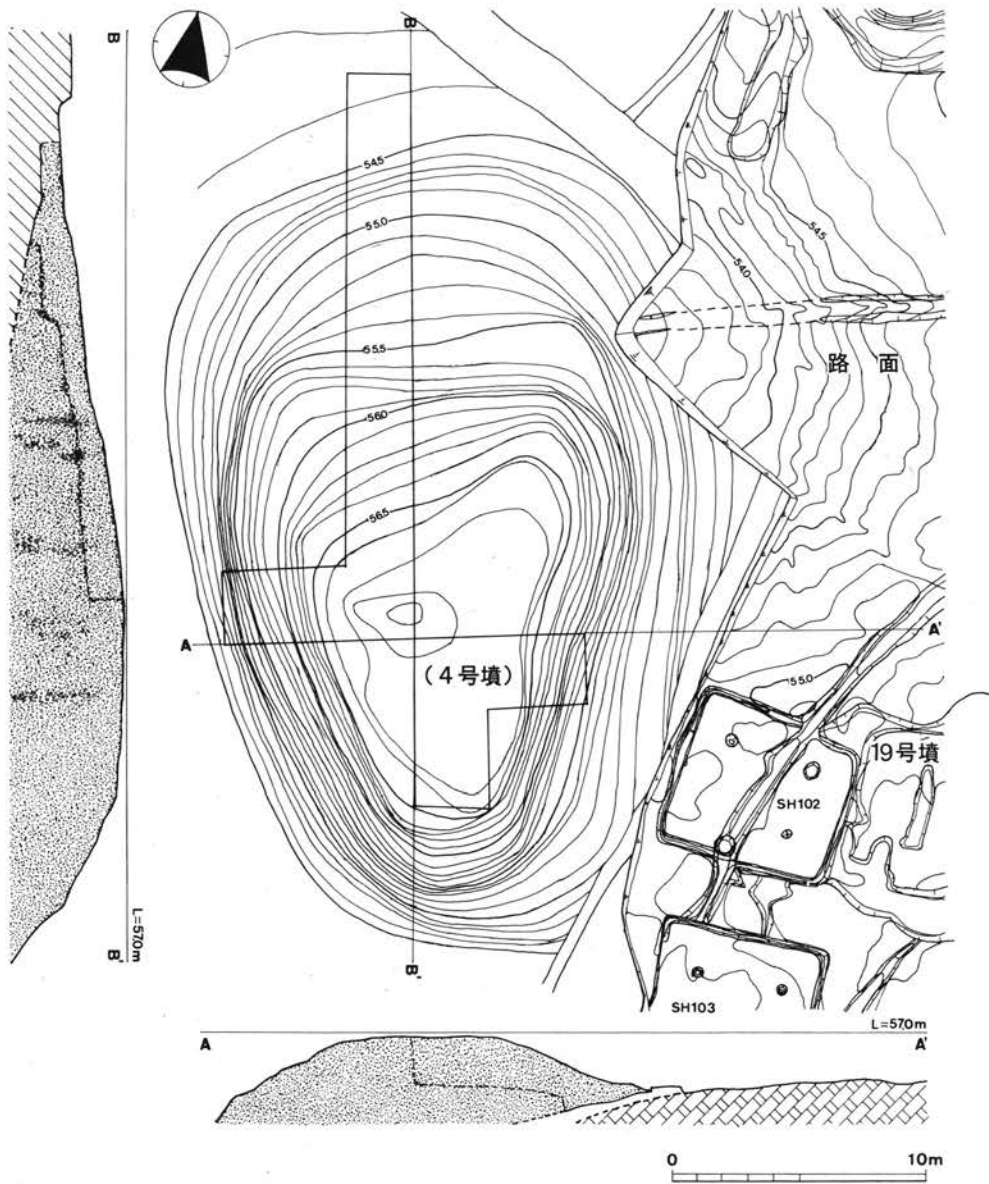
1号墳の南約20mに位置する古墳状隆起で、現状ではやや南北に長い不整長円形プランを呈し、地表からの高さは約2.4mを測る。調査は、この隆起部に「十」字トレンチを設定して行ったが、最終的に断ち割りを実施した結果、隆起部は基盤層を盛り上げた人工的な地形であり、古墳ではないことが明らかとなった。そして、古墳と思われた隆起部は、盛り土に含まれた遺物(伊万里系碗など)などから、近代以降の盛り土による地形であることが判明した。

## 13. 9号墳(D-3)

1号墳の南東に近接する小規模な方墳である。

調査時の状況は、墳丘が周囲の遺構面(=地山面)まで削平を受け、地表にその痕跡を残していなかった(先の遺存度のC類)。古墳の周溝は、検出面が東から西に緩く傾斜していることから、西側ほど遺存度は悪い。

**周溝** 現状では基盤層を掘り込むことで構築し、その底部は堅固な黄褐色粘質砂土に達している。その規模は、検出面の高低(約0.5mの標高差がある)を反映して上縁幅1.1~3.8m・検出面からの深さ0.2~0.8mを測り、東半部の遺存度が良好である。西半部も溝底の標高



第53図 4号墳実測図

が東側と変わらないため、本来は一定幅で墳丘をめぐるものと考えられる。

周溝の断面形は、基本的には内外斜面が外上方に大きくひろがり、平坦な底面を設けない「U」字形を呈する。ただ、最も幅の広く残っている北東辺周溝では、幅約1.5mの平坦面が形成される。また、東コーナー部では、内外斜面が2段傾斜を示す(外傾斜面上半の緩斜面は、崩壊に伴う可能性がある)。

周溝内埋土は基本的には3層に大別できる。上層は黄色系の砂(質土)と粘(質)土の互層

で、遺物を含まず周溝を越え広範囲に堆積しており、洪水などによる自然堆積層と考えられる。中間層は、腐植を受けた茶褐色系(粘質)土で、同層から大量の埴輪類が出土した。中間層は、墳丘が削平された際に堆積したものであろう。下層は、淡黄茶色土でやや還元されており、この周溝が一定期間、滞水していたことを示す。同層位で、周溝の南コーナー付近で須恵器壺(75)と土師器高杯が据えられた状態で出土した。

**墳丘** 周溝により内方に削り出された基台部分が遺存する(盛り土は削平されて残らない)。その規模は、対向する周溝の中軸間の距離で北東辺から南西辺間約10.5m、北西辺から南東辺間約11.0mを測る。主軸方位N60°Wを示す。

外部施設として、周溝内の埴輪の出土から埴輪列(形象を含む)のめぐっていたことが想定される。葺石は転落石も含めて存在しない。

内部主体は、墳頂部の削平により失われている。

この他、東コーナー部の墳丘斜面中位に設けられた小範囲のテラスの中ほどに、ピットが1基存在する。円形掘形(直径0.25m・深さ0.2m)で柱痕は検出されなかったが、内部に周溝内埋土上層と同じ土層が堆積していた。伴出遺物もなく古墳の構造物と断定する積極的な根拠はないが、あえてテラス部分に位置することから、墳丘へ通ずる通路(簡単な橋)の支柱の掘形とみることもできる。

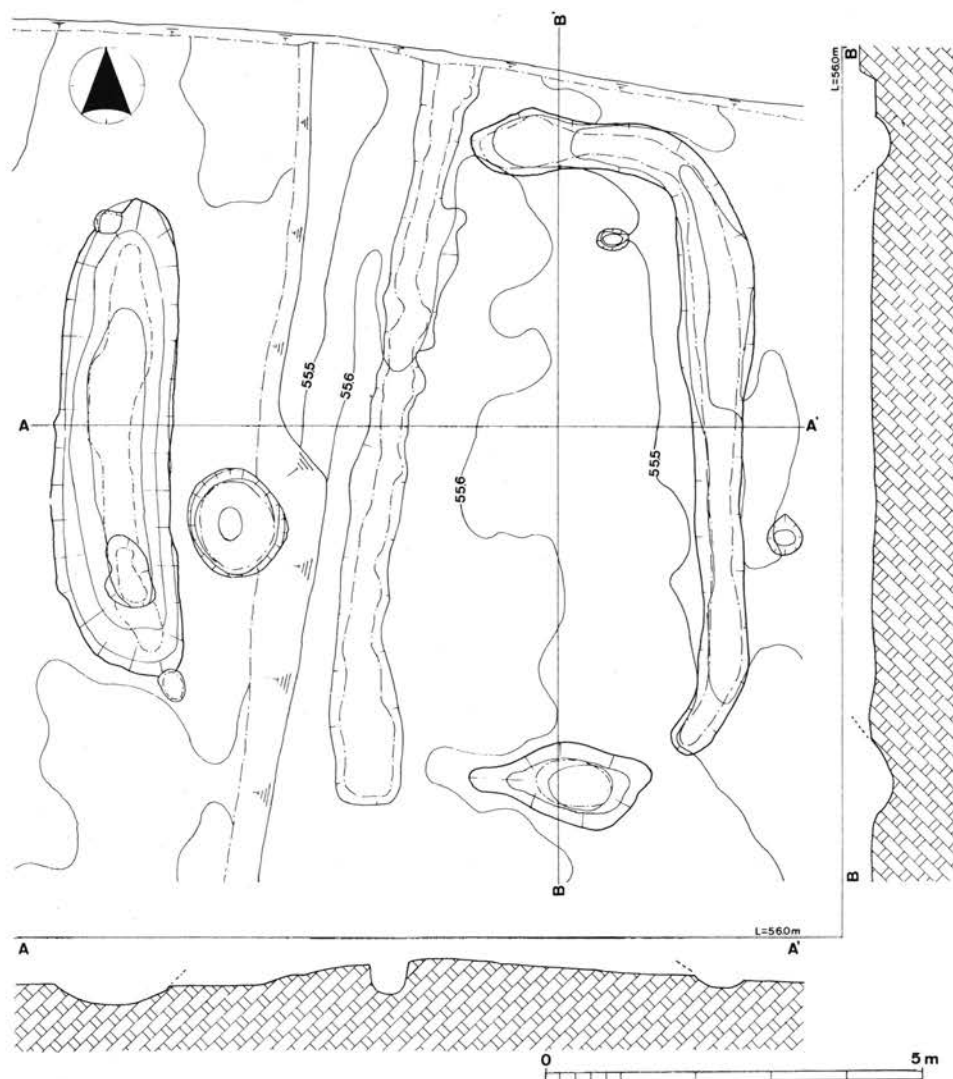
#### 14. 10号墳(C-4)

9号墳の北西に位置し、周溝間の最短距離が約5.4mと隣接する小規模な方墳である。

調査時の現況は、厚さ0.25mばかりの耕作土(表土)を除去すると、すぐに淡黄褐色粘質砂土の地山面となり、特に削平の度合は著しく、墳丘面と検出面(=地山面)が一致する(遺存状況のC類)だけでなく、周溝の浅い部分が途切れて断続的に残るにすぎない。

**周溝と墳丘** 遺存状態が非常に悪く、古墳の東半部と西辺溝の一部がかろうじて遺存している。このうち、東半部は周溝の底部付近のみが遺存し、検出面での上縁幅約0.5~1.0m・深さ約0.2mを測るにすぎない。埋土は、基本的に1層を残すのみで、若干の埴輪片を含む黄灰色系粘(質)土が堆積する。周溝の断面形は、斜面が内湾ぎみに立ち上がる「U」字形を呈し、墳丘基底を明確に区別しない。

一方、西辺溝は、現状では両端が途切れて長軸6.3m・最大幅1.6m(深さ最大値0.3m)を測る長円形の土坑状を呈する。しかし、この西辺部分は、南北に走る地境によってさらに低く造成されており、本来は完周していた周溝の浅い部分が削平され消失した可能性が高い。とすると、この長円形部分は周溝内に一段と深く掘り込まれた特殊な施設と解釈できる。この西区の深掘り部分を詳細にみると(第55・56図)、断面形は舟底状を呈し、その南端付近が南北1.0m・東西0.6mの楕円形の範囲で、一段深く掘り込まれている(坑底からの深さ0.15m)。この部分を中心として、土坑の南半に集中して土師器類(高杯6個体、長頸



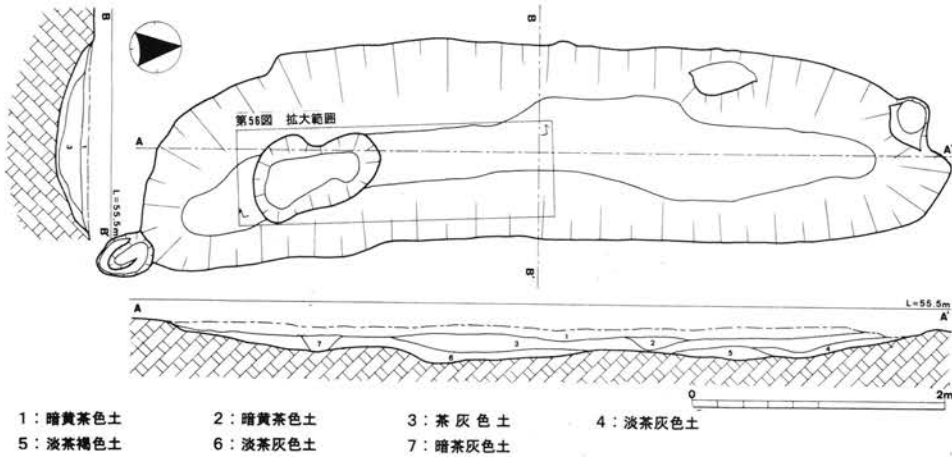
第54図 10号墳実測図

壺1個体、図版第8、80~82・86~88)が拳大から子供の頭大の石とともに、列状に出土した。その状況は、楕円形の深掘り部を茶灰色土で埋め戻した面に据えるように配置したもので、溝中埋葬の副葬遺物または溝中における埋葬儀礼に伴う儀式<sup>(註6)</sup>と関連するものと思われる。

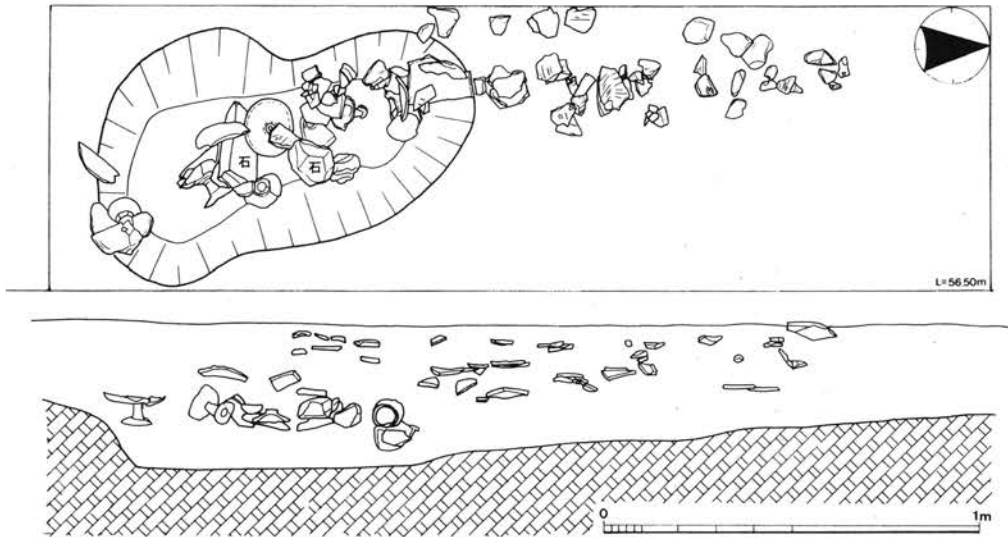
周溝によって内方に削り出された墳丘は、地山による基台部分のみが遺存し、内部主体は削平されている。規模は、周溝中軸間で南北約8.5m・東西約8.0mを測り、方位はN 3° Wと真南北に近い方位を示す。

外部施設に関しては、墳丘規模から段築は考えられず、周溝四辺から出土する少量の埴輪類から、墳頂部に埴輪のめぐっていたことが想定される。葺石が敷設された形跡はない。

(伊賀高弘)



第55図 10号墳西辺周溝実測図



15. 11号墳(C-4)

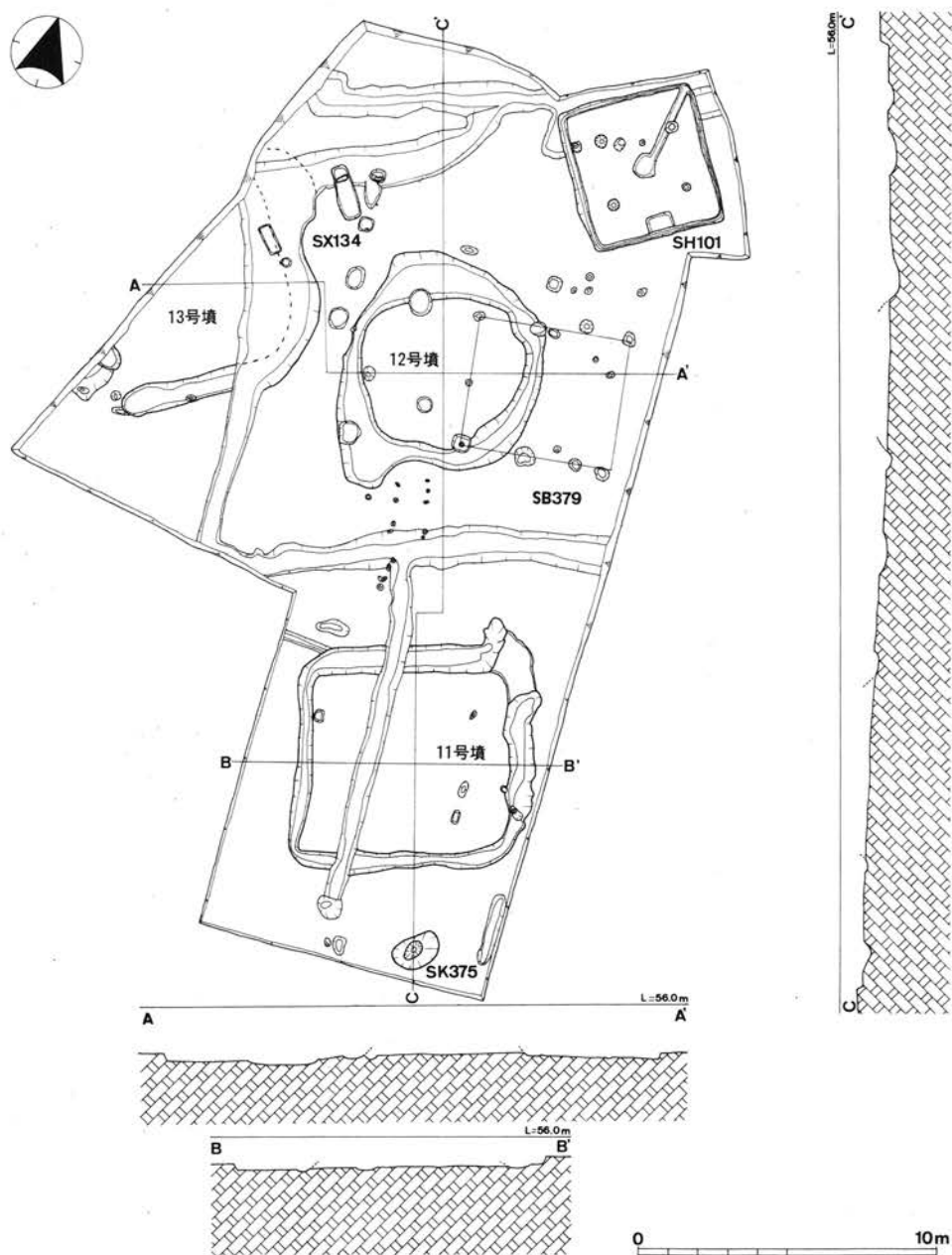
後述する12・13号墳と同一の群として捉えることのできる方墳で、周溝の最深部で計測すれば、南北6.6m・東西7.4mの規模である。周溝は、北辺が幅0.8mと広く掘られ、他の溝は、0.5m足らずである。周溝の最深部は凹凸が顕著で、必ずしも一定の深さではないが、0.2~0.4mの深さをもつ。埋葬主体部は、後世の削平によって消失しており、詳細は不明である。なお、周溝内からの遺物は出土していない。

16. 12号墳(B-3)

11号墳の北方に隣接して築造された不整形な隅丸の周溝をもつ方墳である。周溝の最深部で計測すれば、南北6.4m・東西6.2mの規模を有する。周溝の幅は、基本的に0.8mであ



るが、北辺が1.6m、南西隅が1.7mと広く掘り込まれている。特に、南西隅が南側に突出しており、他の古墳には見られない特徴である。なお、周溝の南東隅部から、須恵器・杯蓋(図版第7、74)が一点完形で出土している。埋葬主体部は、11号墳と同じく後世の削平を受け、消失している。



第57図 11～13号墳実測図(Ⅲ支尾根遺構配置図)

### 17. 13号墳(B-3)

12号墳の西方に隣接して築造された方墳であるが、周溝の大半がトレンチ外になることと、トレンチ内で検出した東辺の周溝が、後世の攪乱を受けていることから、正確な墳丘規模などは不明である。なお、周溝の南西隅に陸橋状の掘り残し部分があり、他に見られない特徴である。埋葬主体部は、後世の削平を受け、残存していない。

以上3基は、周溝のみ残存する方墳であり、周溝の形状が不整形であったり陸橋部をもつなど、他の群には見られない特徴をもっている。築造時期を知る資料としては、12号墳周溝内出土の須恵器杯蓋があり、他の群と比較すれば、最も後出する一群である。他の群の方墳は、比較的形が整っているがこれらの3基は、不整形であり、方墳の形骸化したものと解釈できる。

(小池 寛)

### 18. 19号墳(E-3)

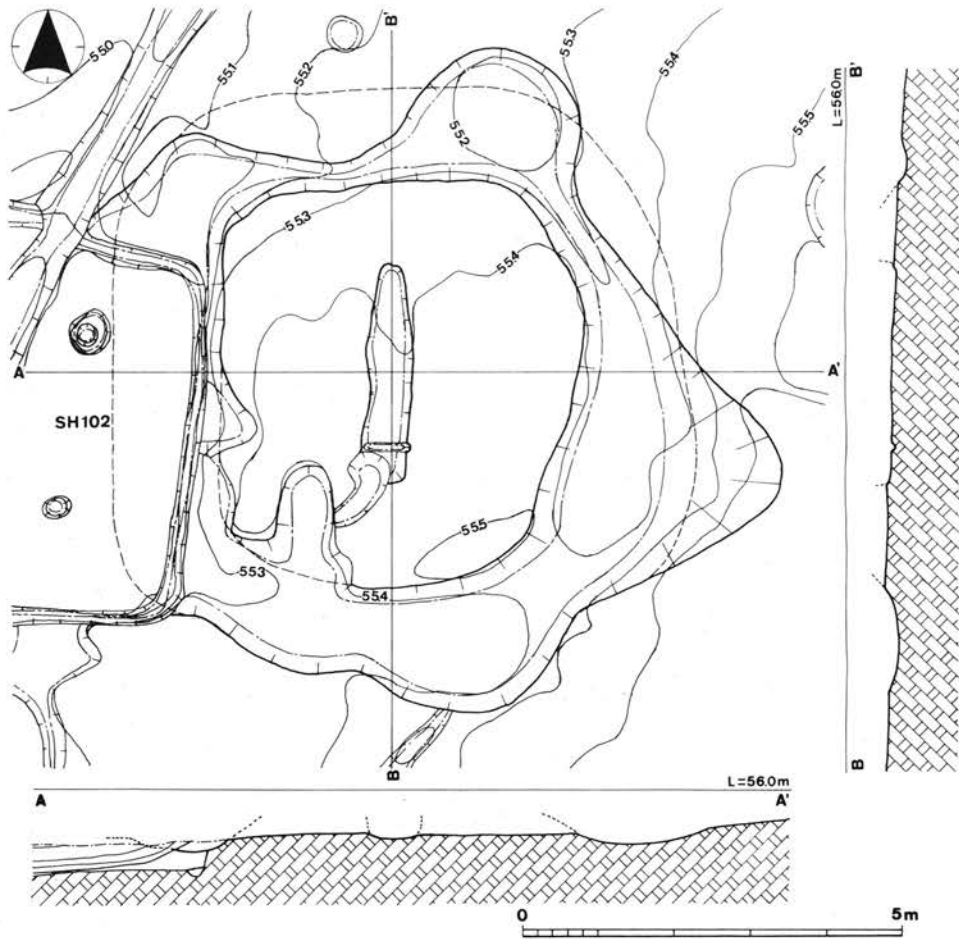
1号墳の南方約50mで、4号墳とした近代以降の築山のすぐ東側で検出された小規模な方墳である。古墳の所在する地点は、奈良時代における大規模な造成面に含まれ、この部分では耕作土の下位に奈良時代の包含層が堆積している。この奈良時代の削平によって古墳は変形を受け、墳丘部が周囲の検出面(=地山面)まで削平されている(遺存状態のC類)。

**周溝と墳丘** 周溝は、四周を完周するが、改変を受け、その外縁線が著しく変形している(外縁幅0.35~2.90m)。検出された周溝は、その下底部付近で、内外両傾斜面が大きく外上方に開く「U」字形断面を呈する(検出面からの深さ0.04~0.25m)。周溝内埋土は2層に大別でき、下層は茶灰色系粘質土で、奈良時代の遺物を若干含む。上層は黄灰色砂質土(粘質土)で、遺存状態のよい部分にのみ認められ、周辺からの流入土と考えられる。いずれも古墳時代の遺物の出土は皆無であった。

墳丘は、周溝によって掘り残された基台の下半部が遺存していたにすぎない。その規模は対向する周溝の中軸(この場合最深部)間から求めれば、南北約6.5m・東西約6.1mのほぼ正方形プランを呈し、比較的旧状をとどめる周溝内縁線の方位は、ほぼ真南北を示す。

**内部主体** 現存する墳丘のほぼ中央で、墳丘と主軸を揃えた南北方向の埋葬施設の痕跡を確認した。検出したのは墓壇の最下部で、木口側が直截状に終わらない長円形プラン(長軸2.90m・最大幅0.65m・検出面からの深さ約0.05mを測る)を呈する。壇底は平坦で排水施設等の掘り込みは認められなかった。内部からの出土遺物は皆無である。

なお、この古墳は、その西辺溝が竪穴式住居跡(S B102)と重複関係にあり、断面観察の結果、住居が廃絶して埋没した後、古墳の周溝を掘削している状況がわかる。



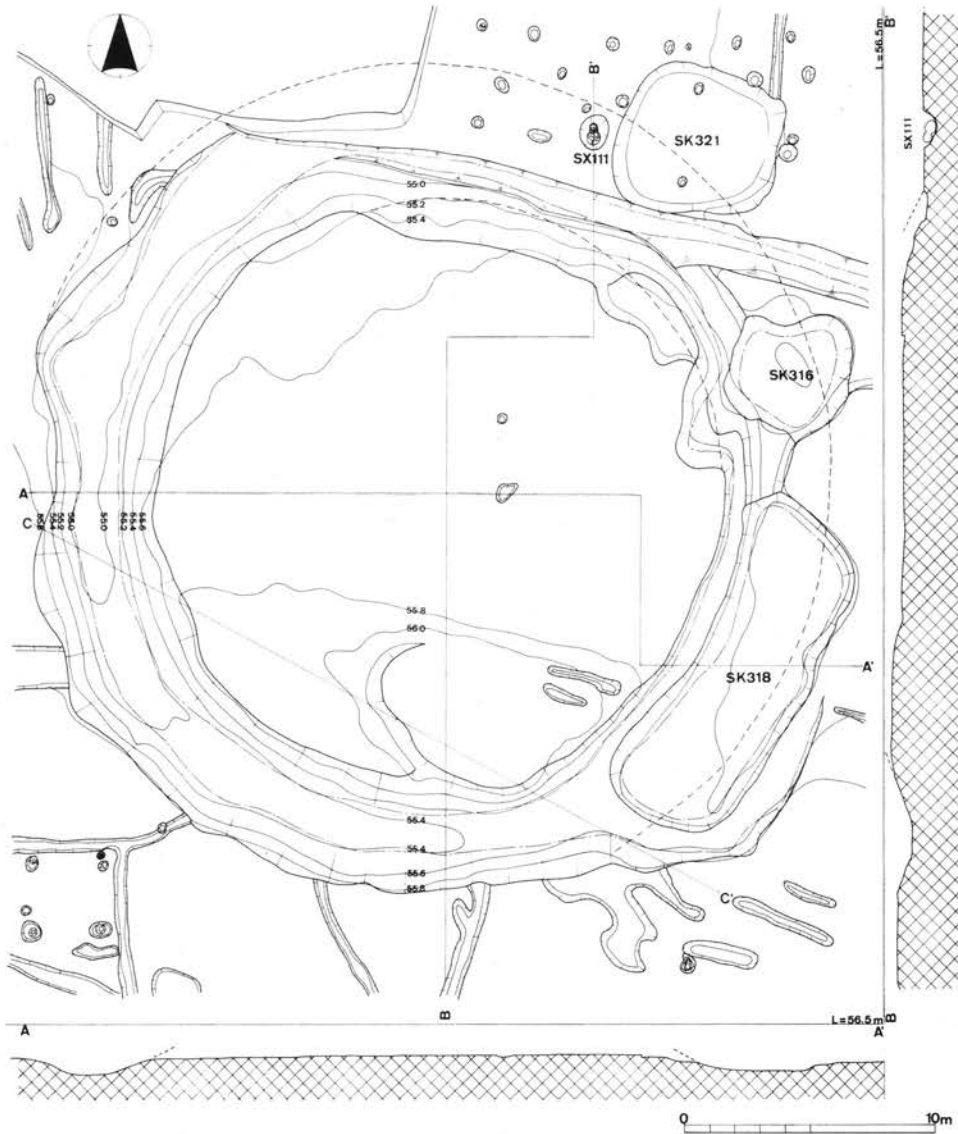
第58図 19号墳実測図

### 19. 20号墳(E-5)

台地の北辺を深く開析する2条の谷によって削り残された狭長な尾根状台地の基部に立地する中規模な円墳で、5号墳の北方108mに中心が位置する。

この付近は、後世の削平・改変が著しく、墳丘の周囲は、奈良時代の造成面が広がり、墳丘部もその南端の一部が周囲よりわずかに高く残るのみで、それ以外は近年の耕地造成の際、検出面と同レベルまで削平された。さらに、古墳の北端部は東西に走る地境溝より北側が1段低く造成されこのため、墳丘の外縁線に変形がみられ、この部分の周溝外縁が欠失している。

**周溝と墳丘** 周溝は、現状では北西部で地山面をベースに掘り込んでおり、溝底は堅固で滞水性の高い淡黄白色粘質土に深く達している。ところが、南半部では奈良時代の包含層を基礎に周溝を掘り込んだところがあり、奈良時代に周溝を再掘削した形跡が認められ



第59図 20号墳実測図

る。現状での規模は、上縁幅2.0～5.8m・検出面からの深さ0.3～0.7mを測る。周溝の断面形状は、斜面下端がわずかに屈曲して平坦な底面が形成される。

周溝内埋土の基本層序は、上位から、Ⅰ.淡黄灰色系粘(質)土、Ⅱ.茶灰色系粘質土、Ⅲ.黄灰色系粘質土に大別できる。Ⅰ層は、周溝中程に厚く堆積し、古墳周囲からの流入土と考えられ、遺物はほとんど含んでいない。Ⅱ層は、古墳の南側一帯に広がる奈良時代の包含層が周溝内に堆積したもので、多量の瓦磚類や土師器が出土する。Ⅲ層は、墳丘側に偏って堆積することから墳丘流土と考えられ、ごく少量の布留式段階の土師器片を包含する。

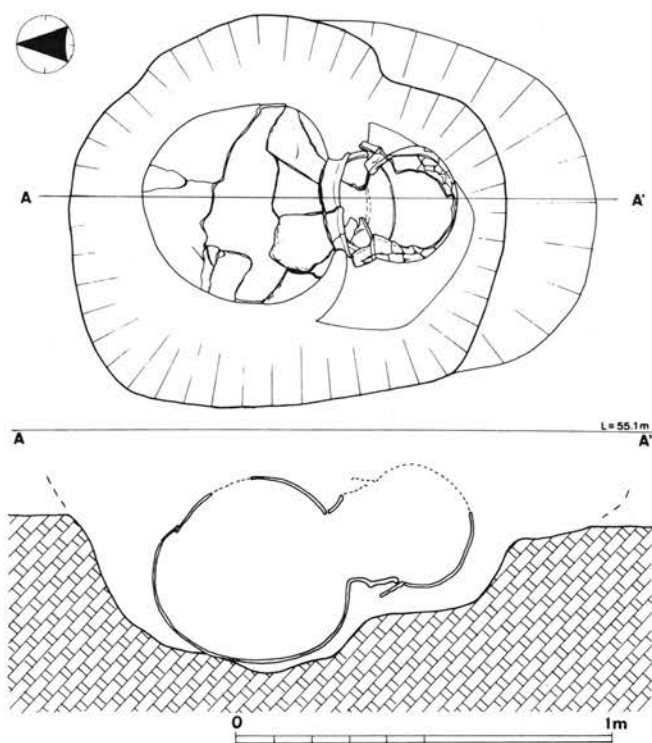
古墳の東縁部には、平面形が円形～長円形を呈する皿状断面の土坑が周溝と重複するように並び(S K 321・S K 316・S K 318)、この部分の周溝が顕著に改変されている。これらの土坑の内部には周溝内埋土のⅡ層が下半に堆積し、多量の瓦磚類が出土することから奈良時代に帰属することは明らかで、先の周溝の改修(再掘削)と一連のもとに形成された遺構と考えられる。その目的は、5号墳の周濠と同様、瓦生産に関連する施設として利用されたものと思われる。

墳丘は、周溝の内方に掘り残された基台部分のみが遺存し(最も良好に残る南東隅で周溝底より約0.7mの高さを測る)、その上面は黄褐色粘質土の地山が直接露呈している。墳丘基底ラインが示す平面形は、旧状をとどめる部分(古墳の南西半部)ではほぼ正円形を呈し、直径約26.0mの規模を測る。

墳丘の外部施設は、段築は盛り土部分が全く残らないことから、その有無は不明である。埴輪列や葺石は、周溝内からその転落したものすら出土しなかったので、当初から設けられていなかったものと思われる。内部施設としての中心埋葬は、削平のため残存しない。

(伊賀高弘)

20. S X 111 (D-5)



第60図 S X 111実測図

20号墳の北方で20号墳の周溝内、あるいは外周部分に相当する位置でみつけた壺棺墓である。土坑は、南北に主軸をとり、東西0.9～1.0m・南北1.4～1.5m、検出面からの深さ0.42mを測る楕円形土坑である。土坑内から、二重口縁壺(93)と甕(92)が出土した。壺は、口縁部を南に向け、横位の状態で据え、甕は壺の口縁部をふさぐ形で横位に据えられている。壺の中から、ガラス小玉9点(第64図47～52)が出土し

た。

(石井清司)

## (2) 埴輪窯(H-9)

埴輪窯は、1支尾根の基部で、台地の東側斜面に築かれている。

埴輪窯は試掘調査の結果、3基みつがっているが、その内、2基(2・3号埴輪窯)は、現在も農道として機能している地点にあるため、灰原と窯体の有無のみを確認し、窯体を含め調査できたのは、北端にある1号埴輪窯のみである。このため、窯体構造の明らかな1号埴輪窯についてのみその概要を記す。

### 1号窯の窯体構造

1号埴輪窯は、丘陵斜面をトンネル式にくり抜いた地下式の無段・無階の窖窯で、窯体の検出全長約8.0m(斜距離)・幅約1.45mを測る。窯体内は煙道部・焼成部・燃焼部からなり、煙道部は焼成部端から幅が狭くなり、焼成部と煙道部の境には比高差約20cmの段を設け、火楯の役割りを果している。焼成部と燃焼部の境は無階であるため、明瞭な区切りはないが、灰層の有無によって焼成部と燃焼部に分けることができる。焼成部と燃焼部は断ち割りの結果、3面の床面を確認した。

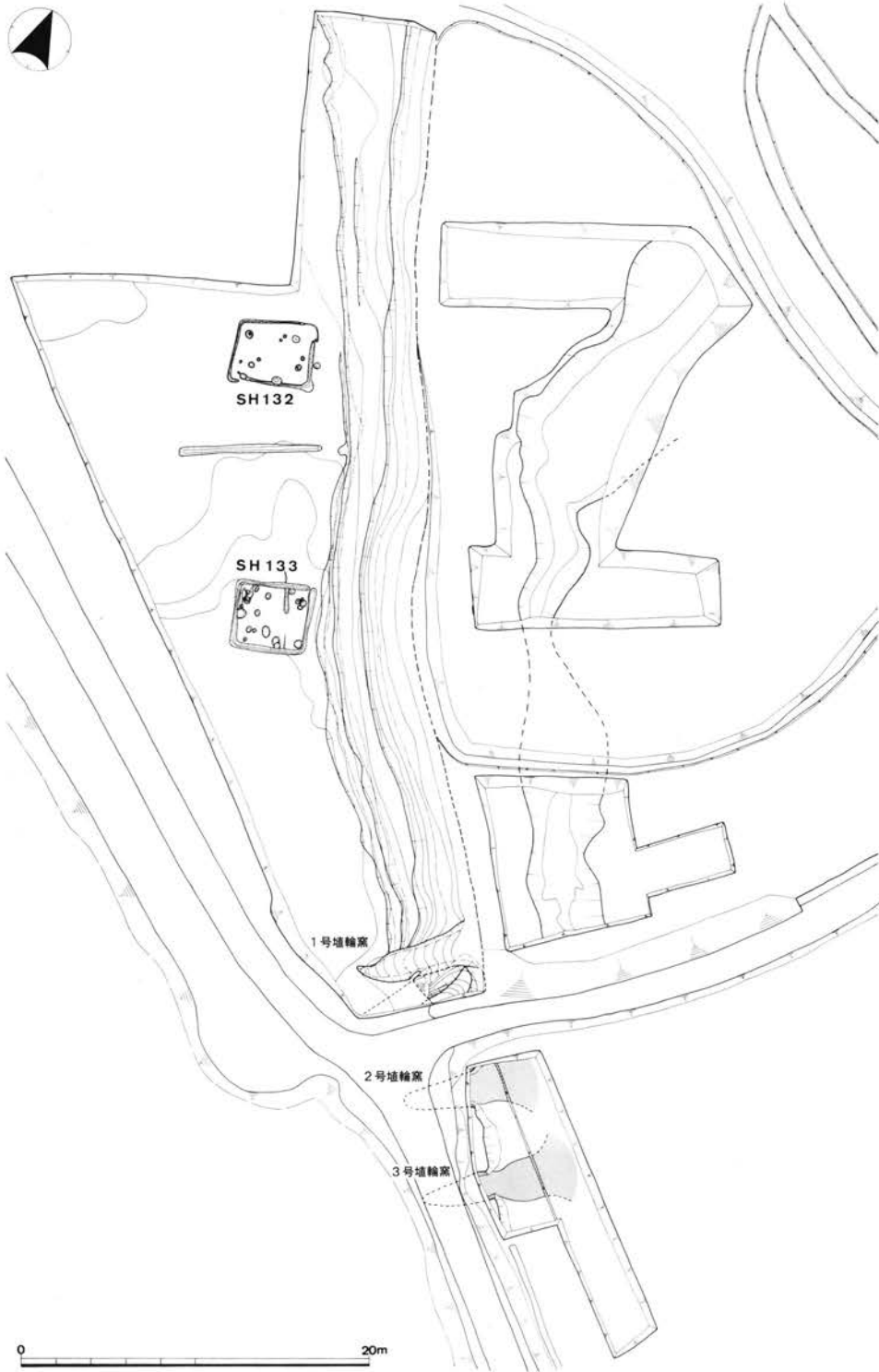
築窯当初の床面(第1次床面)は、床面傾斜角約20°を測り、燃焼部最大幅1.45m・焼成部最大幅1.45mを測る。床面に認められる燃焼部と焼成部の境の段は、この第1次床面では認められず、床面に堆積した厚い灰原から推定すると、焼成部の長さは約4mを測る。

第2次床面は、第1次床面の焼成部下半部から燃焼部にかけて、床面の床上げを行ったもので、第1次床面の焼成部から燃焼部にかけて順次厚さを増して堆積している。第2次床面の燃焼部の傾斜角は、第1次床面の燃焼部の傾斜角よりも緩くなり、燃焼部床面の傾斜角は約10°を測る。

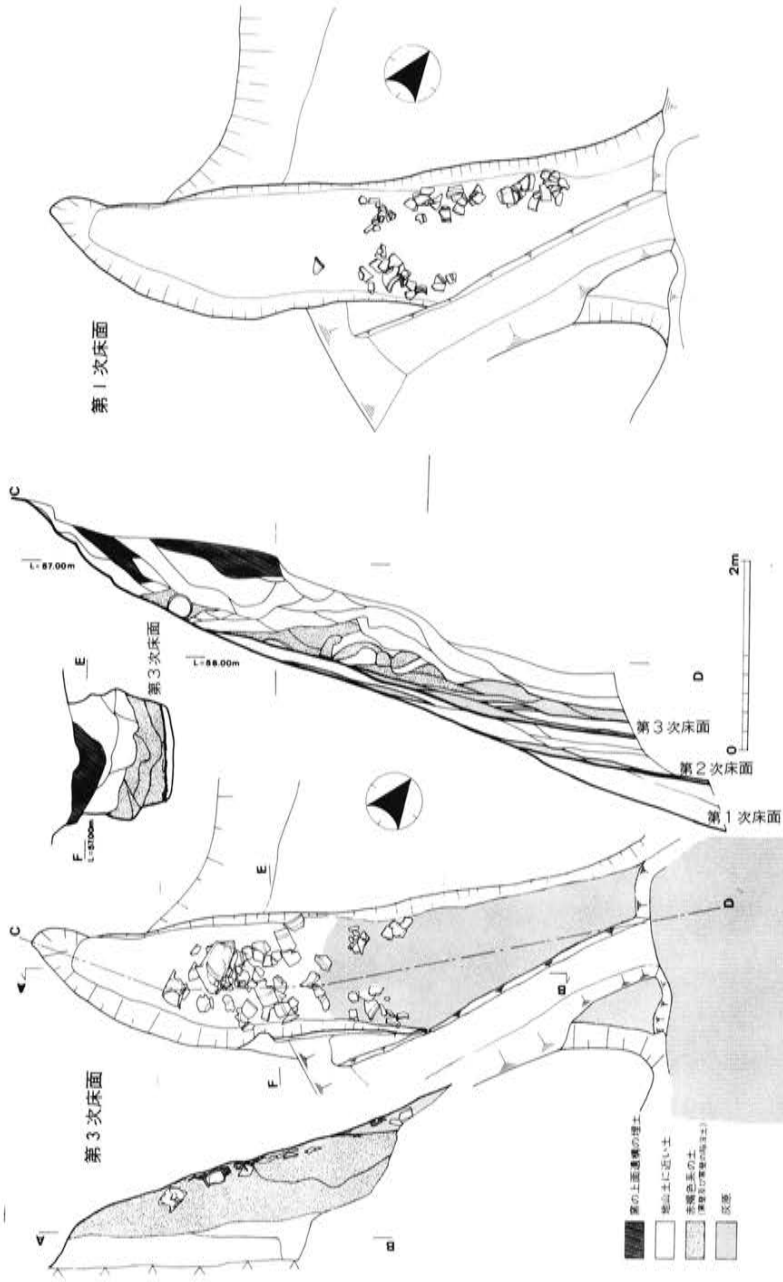
最終床面(第3次床面)は、第2次床面の上に窯壁あるいは焼台と思われる粘土塊を含んだ淡赤褐色砂質土の土でさらに床上げを行ったもので、その堆積土の厚さは最大40cmを測る。この第3次床面は、焼成部床面の傾斜角約15°を測る。

第3次床面の燃焼部の範囲は、長さ約3.0mに及ぶ広い範囲である。この第3次床面の燃焼部の範囲を第1次床面からみると、第1次床面の燃焼部及び焼成部の半分までが、第3次床面では燃焼部として利用したことになる。

第3次床面の燃焼部と焼成部付近の側壁をみると、他の側壁にくらべて、高温の火を受けているためか、還元炎に近いかのような状態(灰褐色土で堅緻)で焼けている。また、第2次床面に廃棄された埴輪が、この第3次床面の焼成部と燃焼部の境付近では、第3次焼成時の影響を受け、須恵質状に堅く焼かれている埴輪が多い。



第61図 埴輪窯トレンチ配置図



第62図 1号墳輪築実測図



窯体内に落ち込んだ埋積土内には、半地下式窖窯の埋積土にみられるような窯壁の落ち込みは顕著でなく、また、比較的小さな窯壁を観察してもスサ入り粘土はなかった。

窯体の側壁は、断ち割り作業を行っていないため明らかでないが、粘土の貼り付けは認めがたい。

各床面からは、形象埴輪を含む埴輪が出土しており、特に最終床面である第3次床面では、ある程度まとまった状態で出土した。

1号窯の灰原は、焚口部から直径約10m以上の範囲にわたって広がっており、特に布留式土器を含む旧流路の凹地に間層を挟んで灰原が堆積している。灰原は間層を挟み3層の堆積が認められ、床面の修復回数と似た傾向にある。

(石井清司)

## 第4節 第Ⅱ期の遺物

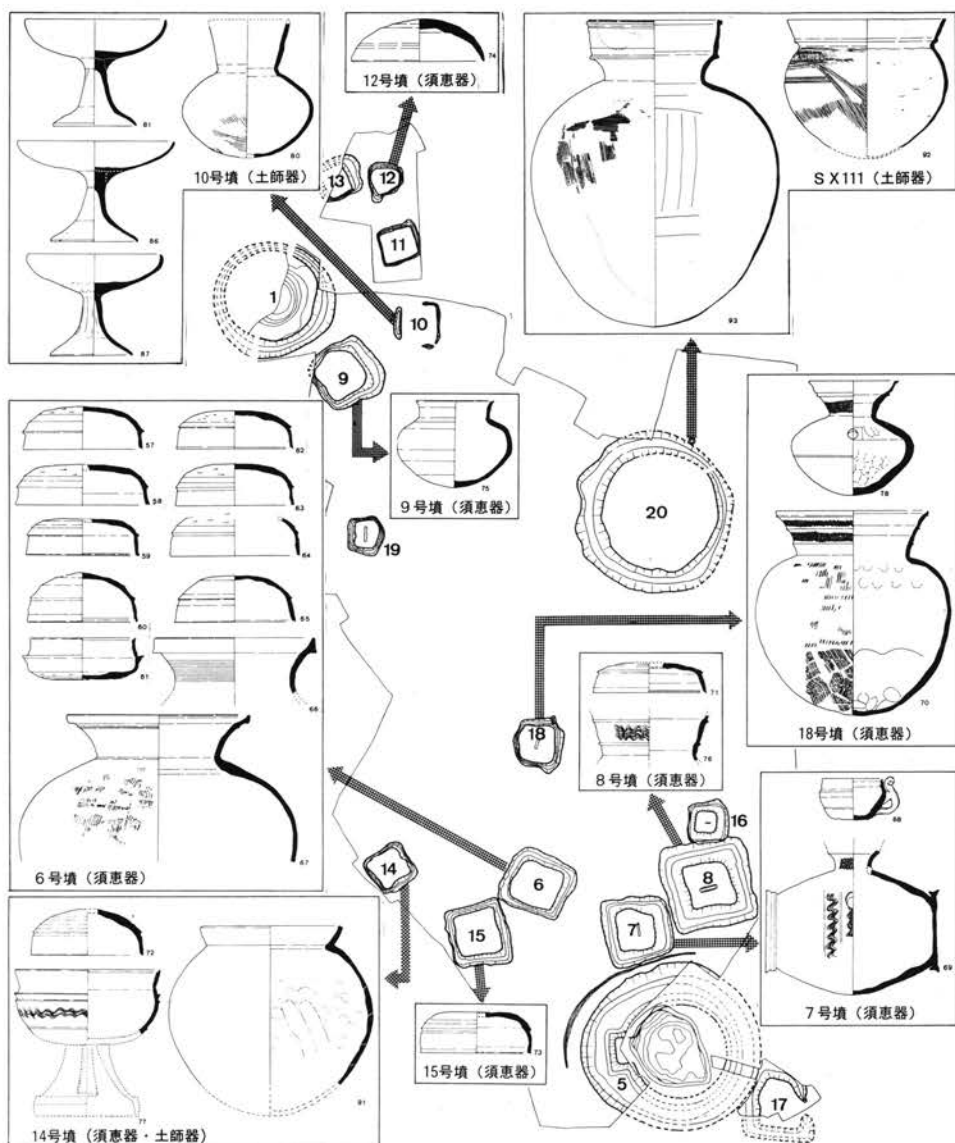
### (1)土器類(図版第7・8)

古墳から出土した遺物として、埴輪・土器・鉄器類がある。古墳群は、大きく南支群と北支群に分けることができ、立地条件や埴輪・土器などから築造時期と順序を決定しうる。ここでは、埋葬主体部と周溝内から出土した土器を中心に編年の根拠になる形態的特徴を記述する。

#### 6号墳出土土器(57～67・79)

須恵器・杯蓋 57は、天井部と口縁部を分ける稜は明瞭であり、内傾する口縁部をもつ。口径12.4cm・器高4.5cmを測る。62は、基本的に57と同じ形態であるが、天井部の回転ヘラケズリの占有率が高い。口径12.4cm・器高4.0cmを測る。65は、やや丸みを帯びた天井部を有し、天井部と口縁部を分ける稜は、あまり明瞭でない。口縁部は「ハ」字形に広がり、口縁端部はわずかに内傾する。口径12.7cm・器高4.8cmを測る。58は、平らな天井部を有し、天井部と口縁部を分ける稜は明瞭である。外反し、わずかに「ハ」字形にひろく口縁部である。口径12.6cm・器高4.4cmを測る。63は、基本的な形態は、58と同じであるが、口縁端部に沈線化した内傾面が残る。口径12.6cm・器高4.4cmを測る。59は、平らな天井部と垂直に下垂する口縁部をもつ。天井部と口縁部を分ける稜は、明瞭である。口径11.8cm・器高3.8cmを測る。64は、わずかに内傾する口縁端部をもち、天井部と口縁部を分ける稜は鈍い。口径13.7cmを測る。60は、丸い天井部と内傾する口縁端部をもつ。天井部と口縁部を分ける稜は、断面三角形を呈するが鈍い。口径11.4cm・器高5.1cmを測る。

須恵器・杯身 61は、平らな底部と、直立し内傾する立ち上がりをもつ。受け部は、水



第63図 上人ヶ平古墳群土器類出土状況図

平に短くのびる。口径11.1cm・器高4.3cmを測る。

須恵器・甕 66は、外反する口縁部をもち、口縁端部を上下方に肥厚させる。外面はカキ目で調整する。口径16.6cmを測る。67は、球体に近い体部から頸部で屈曲し、外反する口縁部に至る。口縁端部は、上下方に肥厚し、外面に一条の凸線がめぐる。体部外面は、平行タタキのあとカキ目・ナデで調整している。口径19.2cm・頸径13cmを測る。79は、頸部から外反する口縁部を有し、端部は上下方へ肥厚し、面をもつ。口径23cmを測る。

7号墳出土土器(68・69)

須恵器・鉢 68は、平らな底部から斜上方へ開く体部を有し、口縁部は内傾に屈曲したのち、短く立ち上がる。把手は、鉢底部・肩部・口縁部の3か所に接合部をもち、上端は、螺旋状の巻き込みがある。底部に「十」字形の線刻があり、口径6.3cm・器高4.4cmを測る。

須恵器・樽型甗 69は、細長く中央部が太い、いわゆるピヤ樽形を呈する体部をもつ。両端の円形粘土板と体部の接合部には、逆三角形の粘土突帯をめぐらせ、体部中央に波状文を施す。体部上半部に、円孔を穿ち、頸部に波状文を施す。円形粘土板の直径8.6cm・体部最大長18.3cmを測る。

8号墳出土土器(71・76)

須恵器・杯蓋 71は、平らな天井部と斜下方へ直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部は、内傾し尖頭状であり、天井部と口縁部を分ける稜は明瞭である。天井部の90%以上は、回転ヘラ削りによって成形されており、また、口径に比して器高が低い点など、古式須恵器の特徴を有している。口径12.1cm・器高3.1cmを測る。

須恵器・壺 25は、頸部のみの残存であり、断面三角形の二条の凸線間に波状文を施している。全体にシャープなつくりである。頸径9.9cmを測る。

14号墳出土土器(72・77・91)

須恵器・杯蓋 72は、丸い天井部からほぼ垂直に下垂する口縁部をもつ。口縁端部を丸く処理する。天井部は、ヘラ削りの後回転カキ目を施す。口径11.4cm・器高5.1cmを測る。天井部のカキ目は、他の出土須恵器には見られない特徴である。

須恵器・高杯 77は、杯底部以下を欠いているため、器高など不明であるが、丸い杯部からわずかに屈曲し、斜上方へのびる口縁部をもつ。口縁端部は内傾しており、屈曲部直下に2条の凸線が明瞭にめぐり、その下段に波状文がめぐる。口径15.4cmを測る。

土師器・甕 91は、球体を呈する体部から頸部で屈曲し、内湾する口縁部に至る。口縁端部に面をもつ。体部内面は指頭圧痕が観察できる。口径15.2cmを測る。

15号墳出土土器(73)

須恵器・杯蓋 73は、平らな天井部とわずかに内湾する口縁部をもつ。天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、口縁端部に面をもつ。口径11.7cm・器高4.3cmを測る。

18号墳出土土器(70・78)

須恵器・甕 70は、肩の張る体部から頸部で屈曲し、わずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は、上下方に肥厚し、3条の凸線間に波状文を施す。体部外面は、平行タタキのあとカキ目・ナデ調整。内面は青海波文をナデ消す。口径16cm・器高21.2cmを測る。

須恵器・甗 78は、肩の張る体部から頸部で屈曲し、外反した後に内湾する口縁部をも

つ。口縁部外面には、1条の凸線下に波状文を施す。口径9.5cm・器高12cmを測る。

9号墳出土土器(75)

須恵器・短頸壺 75は、短い頸部から斜外方へ短くのびる口縁端部をもつ。底部は丸くおさめている。口径8.3cm・器高9.2cm・体部最大径2.8cmを測る。

10号墳出土土器(80～82・86～88)

土師器・壺 80は、偏球形の体部で、斜上方へ直線的にのびる口縁部をもつ。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はハケ調整である。体部最大径14.2cmを測る。

土師器・高杯 86は、浅い杯部から内湾する口縁部をもつ。脚柱部は徐々に開き、屈曲しラップ状に開く。口径14.2cm・8.8cmを測る。81の杯部口縁部は、86に比して内湾度が高いが、全体的なプロポーションは酷似している。口径14.8cm・脚径8.7cmを測る。82は、脚径10.2cm、88は、脚径8.4cmを測る。

12号墳出土土器(74)

須恵器・杯蓋 74は、丸い天井部から屈曲せずに口縁部に至る。口縁端部は尖頭状に処理しており、天井部と口縁部を分ける稜は沈線化する。口径14.1cm・器高4.4cmを測る。

壺棺墓(S X111)出土土器(92・93)

土師器・甕 92は、半球形の体部で、頸部直上で短く外反した後、斜上方に直線的にのびる口縁部をもつ。口縁端部には面をもち内面へ肥厚する。体部外面は、横・右下がりのハケ目、内面はへら削りで器面調整を行う。口径33.4cm・最大径34.8cmを測る。

土師器・二重口縁壺 93は、肩が張り、やや長胴ぎみの体部で、口頸部は、頸部で屈曲し外反した後、ほぼ直立する口縁部をもつ。口縁端部には面をもち、外面へ肥厚する。体部外面は横・縦方向のハケ目、内面は体部下半と肩部を横へら削り、中央部は上方へのへら削りをして器面調整を行う。口径28.6cm・頸径21.4cm・最大径52.9cm・器高64cmを測る。

奈良時代の遺構に混入した土器

須恵器・杯蓋 83は、丸みを帯びた天井部と「ハ」字形に開く口縁部をもつ。天井部と口縁部を分ける稜は沈線化する。土坑(S K116)出土。口径15cm・器高4cmを測る。

須恵器・杯身 84は、平らな底部と直立する立ち上がりをもつ。受け部は短く水平にのび、口縁端部には面をもつ。井戸(S E315)出土。口径11.3cmを測る。85は、平らな底部と短い立ち上がりをもつ。土坑(S K375)出土。口径13.8cm・器高2.9cmを測る。

須恵器・高杯 89は、外反する脚部で、端部は肥厚し、四方透かし孔をもつ。土坑(S K375)出土。脚径11.6cmを測る。90は、三方透かし孔をもつ。脚径18.6cmを測る。

(小池 寛)

(2)鉄器類(図版第9・10)

7号墳出土の鉄器

7号墳主体部からは、鉄剣1・鉄製刀子5・鉄鏃5・鉄先3・鉄斧1・鉄鎌1・ミニチュア鉄鎌3・用途不明鉄製品2個が出土した。

**鉄剣F-21** 棺内右手側で出土した。全長560mm・刀身425mmとやや小ぶりである。刀身の断面は菱形を呈しているが、鏑の有無は不明である。関部は、刃部と茎部との境に5mm程の明確な段差をつける。茎部の関に取り付く台形の部位には繊維質が認められる。

**鉄製刀子**は、棺内から1本、副室から4本出土している。棺内出土のものは、F-2で遺骸の左胸の位置から出土した。残存長60mmで、茎先が欠損している。副室出土の刀子は、鉄先や斧、ミニチュア鎌とともに把手付椀に重なって出土した。F-3とF-4の大きさはほぼ同じで、全長はF-3が73mm、F-4が75mm、刃部はF-3が52mm、F-4が53mmを測る。片関、平造り、柄部に木質が残存する。F-5は、両関、平造りで、柄部には柄材が残存する。F-6は、残存長79mmを測る。形状、木質の付着状態から刀子と判断した。片関、平造りと思われる。

**鉄鏃** 平根式2本、尖根式3本に大別できる。

平根式は2本とも銹化欠損が著しい。F-19は、全体の約1/2を欠損しており、柳葉式である。刃部下方両側に35mmの切り込みを入れ下半下端を外反させた腸挟りをもつ。篋被は関篋被で、篋代には木質、樹皮が残存する。F-20は、1/3が欠損し、銹化が著しい。全体の形状は先端の方に最大幅をもつ。柳葉式と思われ、腸挟りは鈍角の段差でF-19のような切れ込みは認められなかった。篋被は、関篋被である。

尖根式は、棺の下方で先端を下に向け、東になった状態で出土した。頭部の欠失したものがほとんどであるが、完形に復原されるものが1点、頸部まで完全に復原できるものが1点である。いずれも長頸篋被柳葉式で、短い腸挟りをもち、篋被は関篋被である。F-17の篋代には木質、繊維質が残存し、F-19には木質、樹皮が残存する。

**方形板耕具刃先** 副室から3個出土している。F-6は縦32mm・刃幅56mm、F-7は縦29mm・刃幅57mm、F-8が縦34mm・刃幅42mmを測る。いずれも厚さ1.5mm程の鉄板の両端を折り曲げたもので、F-6とF-7は横：縦＝2：1の横長で、F-8はほぼ1：1の正方形を呈する。いずれも木質が残存し、木鉄の先端が5～10mmほど、挿入されていたと考えられる。

**鉄斧F-10** 副室から1個出土している。鉄板の上部を折り曲げ、袋部を作ったもので、縦52mm・刃幅28mmと極めて小形である。また、袋部には木質が残存する。

**鉄鎌F-9** 全長140mm・幅30mm、基部の側縁全体を上方に折り曲げ、刃部先端を内側に約90°湾曲した形態をとる。刃部は湾曲の始まる部位まで直線的にのびる。基部には、木質

が残存する。

**ミニチュア鎌** 副室から刀子に混じって3個出土した。F-13とF-14がほぼ完形で、全長は、F-13が74mm、F-14が70mmを測る。最大幅はF-13が11mm、F-14が12mmである。厚さはともに1mmと薄い。F-13の背は、湾曲が始まる部位まで直線に走り、刃部の中央が「く」の字に突出する。基部には木質が残存するが、折り曲げはない。F-14は、基部から1/3直線にわたるの外反しつつ内湾する。基部には木質が残存し、折り曲げはない。F-15は、先端の湾曲部を欠失していると思われ、残存長67mm・最大幅14mm・厚さ1mmを測り、背は直線である。基部に木質が残存し、折り曲げはない。

**用途不明鉄製品** 棺内頭部位置から出土した。F-11は、三角形の底辺に断面が四角形の線材が取り付く形で、一見三角形式の鎌のようである。F-12は、円弧を描く線材に、直線の線材の端が接着された「Y」字形を呈する。線材の断面は円形である。F-11・F-12ともにガラス小玉が出土した範囲内で検出した。

#### 8号墳出土の鉄器

8号墳主体部からは、鉄斧2個・鉄鎌2個・鑿1個・鍬先1個・蕨手刀子5本・鉄鎌16本が出土している。

**鉄斧** 2個体出土している。F-61は、全長71mm・刃幅30mm・袋部最大内径14mmを測る小形品である。外形は、肩部の張り出しがなく、やや刃部の広がる長方形である。

F-62は、全長62mm・刃幅34mm・袋部最大内径14mmを測る。F-61に比べてやや刃部が広く三角形に近い外形である。

**鉄鎌** F-60は刃先を欠損し、残存長は67mm・幅25mmを測る。上端部を刃のラインと斜行するように、直角に折り曲げる。柄は表裏から挟み込むように刃に対し135°開いた角度で、幅16mmのものが装着されていたことが木質の残存状態から確認できる。また、堅櫛の痕が刃部に残る。

**鑿** F-58は、残存長74mmで断面が長方形の棒状を呈する。茎部と頸部の境には篋被状の段をつけ、茎部はやや細くなる。刃は片切り刃である。

**方形板耕具刃先** F-57は、方形の鉄板の両端を折り曲げて本体に装着する方形板耕具刃先である。縦35mm・横90mmの残存を測り、厚さは1mm程度だったと思われる。

**蕨手刀子** 5本出土している。5本ともほぼ一致する同形同大で一括生産品と考えられる。F-52は、全長95mm・刃の長さ約25mm・幅6mm、柄頭の渦状部が直径約9mmを測る。柄部に繊維等の痕跡は認められなかった。

**鉄鎌** いずれも長頸鎌であり、平根式2・尖根式15に大別できる。

平根式F-35は柳葉式に属する。篋代の先を失っているが、残存長137mm、頸部長72mm、

鋒部長42mm・幅21mm、腸挟りの長さ30mmを測る。この鉄鏃は全長の1/3を占める長い頸部、鋭い腸挟りを有する。筥被は関筥被で、鋒の断面は片丸に近い両丸である。

F-56は刃部先端のみ遺存する。残存長46mm、偏平な断面形を呈し外形から三角形が想定できる。有茎か無茎かは不明である。

尖根式(F-36~47)は、茎部を折損する個体が多いが、およそ全体形が窺える資料が多い。いわゆる典型的な長頸鏃で、小形の鏃身部は関を設けず緩やかに頸部に移行する。頸部長は9.2~12.5cmの間に収まり、その発達が著しい。頸部関は、台形関が大半を占めるが、中には斜関状を呈するもの(F-40・47)もある。鏃身の造りは、F-36が片丸造、F-37・38が両丸造であるほかは、偏平な鑄丸造である。

(中井英策)

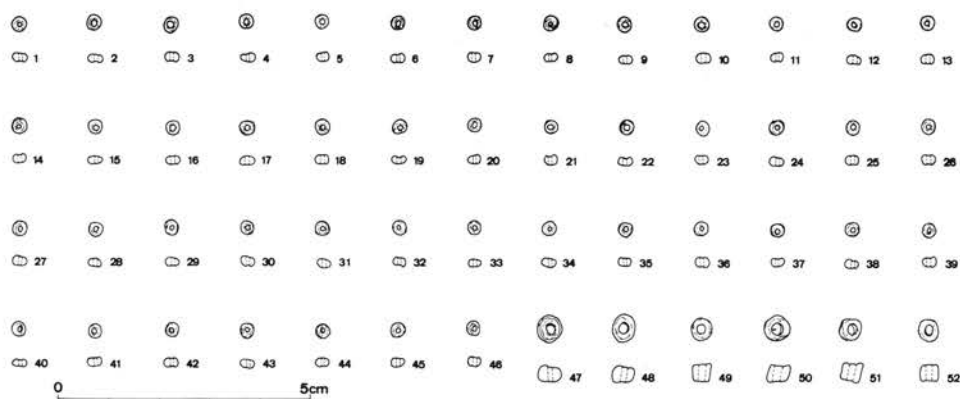
### (3)玉類

玉類は、7号墳の棺内とS X 111から出土した。

7号墳棺内出土の玉類は、ガラス小玉で頭部位置周辺から合計46個出土した。玉類の大

付表4 ガラス製小玉計測表(単位cm)

No.	直径	長さ	孔径	色彩	No.	直径	長さ	孔径	色彩
1	0.30	0.20	0.10	淡緑色	27	0.30	0.19	0.05	淡緑色
2	0.30	0.17	0.10	淡緑色	28	0.30	0.15	0.08	淡緑色
3	0.30	0.20	0.11	淡緑色	29	0.29	0.18	0.05	淡緑色
4	0.30	0.17	0.05	淡緑色	30	0.29	0.20	0.05	淡緑色
5	0.29	0.20	0.05	淡緑色	31	0.29	0.16	0.08	淡緑色
6	0.29	0.18	0.05	淡緑色	32	0.29	0.18	0.05	淡緑色
7	0.30	0.18	0.08	淡緑色	33	0.29	0.18	0.08	淡緑色
8	0.30	0.16	0.05	淡緑色	34	0.30	0.18	0.05	淡緑色
9	0.30	0.18	0.10	淡緑色	35	0.29	0.16	0.05	淡緑色
10	0.30	0.20	0.10	淡緑色	36	0.29	0.19	0.05	淡緑色
11	0.30	0.19	0.08	淡緑色	37	0.30	0.16	0.05	淡緑色
12	0.30	0.20	0.10	淡緑色	38	0.29	0.19	0.05	淡緑色
13	0.30	0.20	0.10	淡緑色	39	0.28	0.18	0.05	淡緑色
14	0.30	0.19	0.05	淡緑色	40	0.30	0.15	0.08	淡緑色
15	0.30	0.16	0.10	淡緑色	41	0.30	0.18	0.08	淡緑色
16	0.29	0.18	0.10	淡緑色	42	0.30	0.18	0.05	淡緑色
17	0.30	0.17	0.05	淡緑色	43	0.30	0.18	0.05	淡緑色
18	0.30	0.20	0.10	淡緑色	44	0.29	0.16	0.05	淡緑色
19	0.29	0.15	0.10	淡緑色	45	0.30	0.19	0.08	淡緑色
20	0.29	0.16	0.08	淡緑色	46	0.30	0.19	0.10	淡緑色
21	0.29	0.20	0.10	淡緑色	47	0.50	0.31	1.50	コバルト・ブルー
22	0.29	0.18	0.08	淡緑色	48	0.51	0.30	1.50	コバルト・ブルー
23	0.29	0.19	0.08	淡緑色	49	0.42	0.35	1.50	コバルト・ブルー
24	0.30	0.18	0.08	淡緑色	50	0.53	0.32	2.00	コバルト・ブルー
25	0.29	0.20	0.08	淡緑色	51	0.45	0.38	1.50	コバルト・ブルー
26	0.30	0.20	0.05	淡緑色	52	0.45	0.30	1.50	コバルト・ブルー



第64図 S X111・7号墳出土玉類実測図

半はその多くが散らばった状態で出土したが、数個に連なった状態のものもあった。小玉は淡緑色で直径2.2～2.5mm・長さ1.5～2.0mmを測る。

S X111の壺棺の棺内からガラス小玉9点が出土した。小玉はコバルト・ブルーで、直径4.2～5.3mm・長さ3.0～3.8mmを測る。

(石井清司)

#### (4) 埴輪類(図版第11～50)

埴輪類は、11～13・18～20号墳の6基を除いて大半の古墳から普遍的に出土しており、古墳の築造順序を含めた上人ケ平古墳群の性格を考える上で、重要な指標となる。

古墳から出土した埴輪類の大部分は円筒埴輪であるが、各種形象埴輪も古墳の規模や形態に関係なく出土した。

##### 1. 円筒埴輪

###### ① 古墳出土の円筒埴輪

まず、比較対象として有効な円筒埴輪をみると、それぞれの形態的特徴や、製作技法の相違などから、各古墳のもつ固有の埴輪相にも還元できる4つの類型を抽出することが可能である。まず、その類型設定の分類基準となる要素(属性)を以下に示す。

**A類** 器高60～70cm・底径25～30cm前後の埴輪一般からみると中型の規模を有し、籠状突帯(以下タガと略称する)を6条めぐらせているといった形態的特徴をもつ。さらに、外面にタガ成形後の調整(2次調整)として連続的のヨコハケ(川西宏幸氏の<sup>(社7)</sup>分類によるB種ヨコハケ)を画一的に用いて、器面を最終調整することを分類の指標とする一群。5・7・8・16・17号墳の埴輪相がほぼその類型に対応する。

**B類** 器高50cm・底径17cmの小型品で、タガを3条配するもの。製作技法はA類と共通



付表5 普通円筒埴輪類型設定基準表

分類基準	A 類	B 類	C 類	D 類
器高	60~70cm	50cm	50cm	40cm
口径	30~40cm	30cm	30cm	20cm前後
タガの条数	6	3	3	3
段幅	4~10 (8.0) cm	11~14cm	9~11cm	7~9 cm
タガの形状	台形・M字形	台形	台形・低平台形	小形台形・三角形
口唇部形状	直口系・屈曲系	直口系	直口系	直口系
透孔穿孔方式	隔段・交互	隣接段・交互	隣接段・交互	隣接段・交互
乾燥工程	2回(複数工程)	1回(複数工程)	1回(複数工程)	0回(単一工程)
外面調整(1次)	タテハケ	タテハケ	タテハケ	(口縁段付加)
外面調整(2次)	B種ヨコハケ	B種ヨコハケ	省略	B種ヨコハケ
内面調整	ハケ・ナデ	口縁段のみハケ	口縁段のみハケ	省略
倒立調整	なし	なし	なし	一部あり
焼成	須恵質(硬~軟質)	須恵質(軟質)	須恵質	須恵質(硬~軟質)

する一群。14号埴出土の埴輪がこれにあたる。

**C類** 全体形を窺える個体は少ないが、規模やタガの条数がB類と共通する反面、その製作技法が前二者より簡略・粗雑な一群。とりわけ、外面2次調整の省略はこの類型を特徴づける重要な要素である。6・15号埴出土の埴輪相がこれに対応する。

**D類** 規模・タガの条数はB・C類と変わらないが、さらに製作技法が簡略化された一群。焼成法の違いによる器体の著しい変形などがこの類型を特徴付ける。

このタイプの埴輪をもつ古墳として1・9・10号墳があげられる。

次に、ここで分類した各類型について検討する。

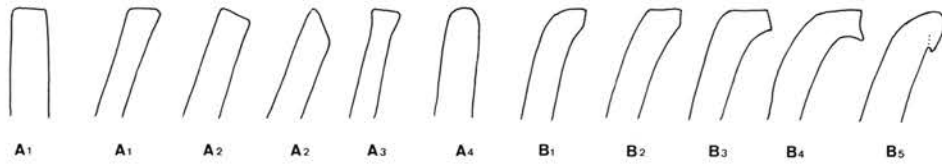
#### (a)A類

完形品(主として5号墳の埴丘をめぐる埴輪)を多く含むこの類型は、観察対象が他に比べてめぐまれている。

**形態** 全体の形状は、底径(20~30cm)に比べて、口径(30~40cm)が1対1.2の割合で大きく、これに器高(61~73cm)を加味すると、側面形はわずかに口径が広がる逆円錐台形を呈する。ただし、その側面ラインを詳細にみると、一律(直線状)に広がるものと、途中で内方にやや屈曲して樽形に近い形状を示すものがある。後者は、その屈曲ラインを境に調整技法等が変化する場合が多く、<sup>(注8)</sup>小工程(乾燥工程)の境と一致するものも少なくない。

横断面形は、底部・口縁部とも正円を基本とするが、わずかに楕円を呈するものも散見される(製作段階の不慮によるもので、意図的に楕円形に造形したもではない)。

タガは6条をほぼ等間隔に配するが、それに画された各段の幅は一般的に狭い。図示した個体で計測すると、その幅は4.0~10.2cmの範囲内で、平均8.0cmを測る。その内訳は、5号墳で7.7~8.6cmが最も多く、計測個体の約36%、次いで6.8~7.6cm及び8.8~10.2cmがともに30%、8号墳の場合、6.7~7.9cmが71%で多く、10.2cmが27%となる。次に、最上



第65図 円筒埴輪口唇断面形態分類図

段(以下これを口縁段と称する)・最下段(以下これを基底段と称する)と、上記の体部一般段との規模を比較すると、全体として口縁段は一般段より狭い場合が多く、また、基底段は一般段と同等か、あるいはより広いものが多い。その詳細をみると、口縁段の場合、一般段より広いもの(一般段と同等あるいは1.2倍程度まで)は全体の20%で、他はすべて狭く造形される(一般段の長さの約2/3程度までが50%、同じく1/2程度までが30%を占める)。一方、基底段の場合、一般段とほぼ同じ間隔のものが82%で、残る20%弱の個体が一般段の約1.2倍程度長い。

口縁部(最上段)の形状は、体部から屈曲することなく口唇端に至るものと、最上段タガあるいは口縁段中位を境に緩く外反するものがあり、両者はほぼ同率の割合を示す。

口縁端部(口唇部)は、その断面の示す形態から、口縁部が直線的に立ち上がる直口系(A)と、端部が外方に屈曲する屈曲系(B)に分類できる(第65図参照)。このうち直口系は、端面が水平のもの(A<sub>1</sub>)、端面が外傾するもの(A<sub>2</sub>)、端部が肥厚するもの(A<sub>3</sub>)、端部が面をもたず丸く終わるもの(A<sub>4</sub>)に細分できる。また、屈曲系は、端部を側方に屈曲させるもので、屈曲度が弱く屈曲部内面が丸みを残すもの(B<sub>1</sub>)、同じく屈曲部内面に稜を残すもの(B<sub>2</sub>)、屈曲度が大きく、その内面が水平面を形成するもの(B<sub>3</sub>)、内面に丸みを残して大きく屈曲し、その突出度が高いもの(B<sub>4</sub>)、端部を外方に折り込むように肥厚させるもの(B<sub>5</sub>)などの形態が確認できる。後者は、全体として見かけ上7段タガをめぐらせることを意図して造形したものと考えられる。

タガは、側面幅と高さがほぼ一致する規模の台形断面を基本とし、その整形の際の指頭ナデの強さによって側面がやや内方にくぼむものが多い。また、ほとんど例外なく側面が外下方に傾き、さらにタガ下縁の不完全な整形・接合のために、下面が不整形を呈したり、タガ下縁に遊離痕が残る例が散見される。この他、特殊な例として擬似三角形(タガ下面が異常に狭い)の17・45や、幅の広い台形(下縁幅3cm前後)の46があるが数は少ない。タガの成形及び器体への接合は主としてヨコナデを用いて行うが、多くの場合、貼り付け位置にあらかじめ棒状工具で凹線を1条刻印して位置を明示している。また、接合・整形に際して器体が重圧で内方にくぼむのを防ぐため、内面には指頭によるヨコナデ・連続ユビオサ

エ・両者の併用などを施す。

透孔の形状は、円形に統一している。ただ、段幅が狭いため、相対的に小規模(直径5～7cm)で、段間のほぼ中央にやや横長円形に穿孔する。穿孔方式は、3段と5段(隔段)に段を違えて交互に段間2個宛対向方向に穿孔するのを基本とする。中には6段目に円孔1対(10)や小規模な縦長方形(4・5・22)を穿孔するものがある。さらに、2は、円孔を直角の方式で配する以外に、6段目に小規模な縦長方形の透孔を1孔のみ軸線をずらして加えている(副次的穿孔)。

**成形** 円筒部の成形・調整は、複数の工程(=乾燥工程)によって分割的に行う。それは、不明瞭ながら器表に残る成形・調整手法の差異等によって部分的に判別できる。2～3例をあげると、1の場合、内面下段に残されたナナメハケ調整は、2段目タガ以上で行われず、そこには成形段階のタテナデが残るにすぎない。つまり、2段目タガ位に乾燥単位面を想定できる。2では、内面を基本的にナデ調整で仕上げるが、4段目タガ位内面の部分的なタテハケを境にナデを施す方向が変化する。4段目タガ内面の顕著なタテハケは、乾燥単位間の接合を目的にされたものと考えられる。7の場合、内面のハケ調整を施す方向が、4段目タガ位を境にタテ方向からヨコ基調に変わり、その移行部分ではヨコハケを特に強く施す。また、これと対応するように外面全体に施行されたB種ヨコハケの1回の施行幅(休止痕の間隔)が4段目タガを境に大きく変化する。31の場合、基本的には内面調整を省略する中で、4段目タガ位置に工具単位がわかるほど強く施したナナメハケを局部的に施し、また、外面2次調整もこれを境に、B種ヨコハケの施す方法が変化(より上位では休止痕が不明瞭となり1回の施行間隔が長くなる)する。36では、内面には基本的に調整は行わないが、2段目タガの位置を中心に上下5cmの幅で強いヨコナデを施す。

このように乾燥単位が判明する数例をみる限り、乾燥単位間の接合にはハケとナデを用いることがわかる。また、小工程の単位が2段目及び4段目タガの位置に集中することから、6段タガをもつこのタイプの埴輪の場合、おそらくその多くは、少なくとも3回の小工程(乾燥単位)をもって分割して製作したことが類推される。

各工程毎の製作は、粘土紐の積み上げ一器体を整えるための成形一器表面を平滑にする調整の順で行われる。もちろんこうした成形・調整作業の中には小工程単位で完結するものと、複数の工程間にわたって統一的に行われるものがある(後者が乾燥単位面の識別を不明瞭にしている<sup>(注9)</sup>)。

まず、第1段階としての粘土紐の積み上げは、最下部(底部輪台)が、その上部に積み上げる粘土紐より幅広であるのが一般的で、中でも約2倍程度(5～8cm)の粘土帯(板)を使用することが多い。底部輪台は、ほとんどが1枚の粘土帯を使用し(一帯づくり)、上から



左巻き一帯づくり



右巻き一帯づくり



二帯づくり

第66図 底部  
輪台の接合法  
分類図

みて粘土帯の右端を左端の外縁に接合する方法(左巻一帯づくり)を採る個体が、接合法のわかる資料の70%を占め、他は右巻一帯づくり技法で輪台を製作している(第66図参照)。中には、1点(34)だけ2枚の粘土帯を連繋させるもの(二帯づくり技法)があり、その個体のみ輪台幅と一般の積み上げ粘土紐が同じ幅の粘土を使用している。<sup>(注10)</sup>

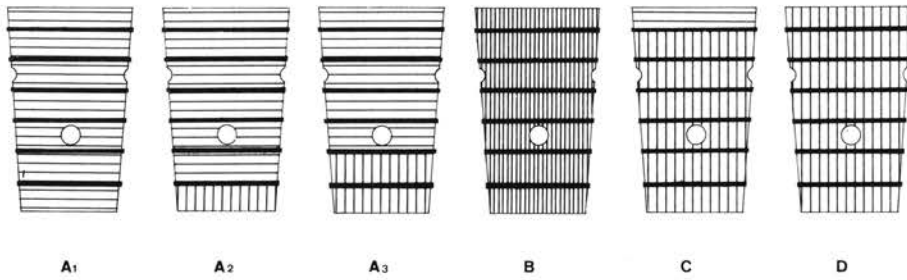
器体を整美な円筒形に仕上げる成形手法としては、ほとんど例外なく、タテナデを用いる。ただし、ほとんどの場合、調整を省略することの多い内面で観察されるにすぎない。成形用タテナデは、布を介在させた指頭ナデが一般的で、内面の底端部を開始点として<sup>(注11)</sup>間断なくつねいにナデ上げる。そして、その多くは、上位が左に傾き、口縁に近づくにつれ傾度を強めるのが通例である(右利きの工人が想定できる)。

**調整** 器面の凹凸をなくし平滑にする調整には、ハケとナデを用いる。

外面調整(第67図参照)に関しては、タガ貼り付け製作以前に<sup>(注12)</sup>施す1次調整には、全個体に例外なくタテ基調のハケメを用いて、器壁面に残る粘土紐積み上げ痕を完全に消している。その方法は、外面の底端部あるいは下端の数センチ上位から開始し、上からみて右回りに先行するハケに重複するようつねいに施すものが多い。また、開始部付近は垂直に近くても、上位ほど傾度を強め(左傾するものが多い)、中には、ナナメハケに近くなるもの(6・10・169)もある。

タガ製作以後の調整(2次調整)には、ほとんどの場合、工具を器壁から離さず休止痕をとどめながら連続的に施すヨコハケ(川西氏分類のB種ヨコハケ)を画一的に用いる。その施す範囲は、基底段を残す資料でみると、基底段を省略する個体(53%)が、基底段から口縁段までもれなく施す個体(41%)よりわずかに多い。中には、34のように例外的に2段目までヨコハケ調整を省略するものもある。また、施行方式として、工具原体が器壁に残す休止痕は、全体の2/3が鉛直線に対して左右に傾斜しており(左傾39%・右傾27%)、タガに対して垂直方向に休止線を残す個体(27%)を上回る。これは、タガに画された段幅が相対的に狭いことから、ハケ工具原体を水平に用いられなかったことと関係すると考えられる。このため、段間の施行回数はほとんど、1段あたり1回に限られる<sup>(注13)</sup>(46・165は例外的に狭い幅の工具を用い、段間で上下に重なるよう2回にわたりヨコハケ調整している)。

この他、2次調整にタテハケを用いる個体がわずかに存在する(6・168)。このうち、6は、タガの整形も含めてやや特異な製作技法を採るので、これを紹介する。すなわち、外面1次調整のタテハケの後、5段タガまで貼り付け成形し、5段目まで段間に通有のB種ヨコハケによる2次調整を施す。ただ、5段目タガから口縁部までは、再度タテハケ(2次



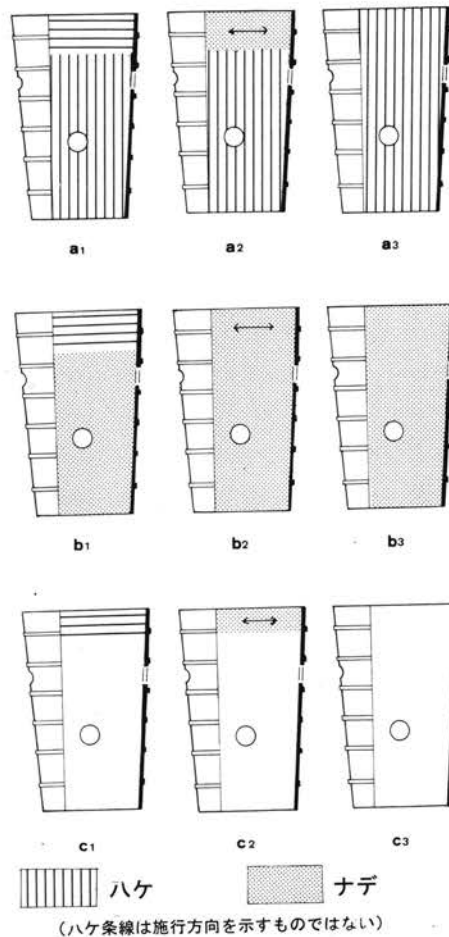
第67図 普通円筒埴輪(A類)外面調整手法分類図

調整)を用い、その後最上段タガを貼り付け  
する方法を採る。この場合6段目タガは、  
2次調整後に製作されたことになり、他に  
例をみない。

次に、内面調整に関しては、内面全般に  
わたる調整と、口縁段付近の内面に施す調  
整に大別でき、その手段としてハケとナデ  
を主に用いる。上記の調整のいずれか、あ  
るいは両者を省略するものも少なからず含  
まれ、これらを基本に、これらの資料群の  
内面調整技法を分類すると以下のように細  
分できる(第68図参照)。

a<sub>1</sub>: 内面全般をハケ調整した後、口縁段  
内面にさらにハケ調整を加えるもの(6・7・  
10・20・22・168・170)。a<sub>2</sub>: 内面全般をハ  
ケ調整した後、口縁段内面にヨコナデ調整  
を施すもの(4・6・11)。a<sub>3</sub>: 内面全般に  
ハケ調整をした後、改めて口縁段に調整を  
加えないもの(33)。b<sub>1</sub>: 内面全般にナデ調  
整を施した後、口縁段付近にハケ調整を加  
えるもの(2・3)。b<sub>2</sub>: 内面全般にナデ調  
整を施した後、口縁段内面にヨコナデ調整  
を加えるもの(本資料中には存在しない)。b<sub>3</sub>:

内面全般にナデ調整を施した後、改めて口縁段に調整を加えないもの(165・169)。c<sub>1</sub>: 内面全般にわたる調整を省略(整形のみ)、口縁段内面のみハケ調整を施すもの(5・13・263)。



第68図 普通円筒埴輪内面調整手法分類図

c<sub>2</sub>: 内面全般調整を省略し、口縁内面のみナデ調整を施すもの(12・16・17・19・21)。c<sub>3</sub>: 内面調整を完全に省略し、整形段階で終了するもの(1・9・14)。

これら諸類型のうち、内面全般に施す調整は、その手段を問わず縦基調に施し(口縁段調整の付加のみられない個体はヨコ方向)、タガ製作以前の1次調整の場合が多い。これに対し、口縁段内面調整は、例外なく内面全般調整に後出して付加するもので、その多くがタガ製作後の2次調整である。

底部調整は、粘土紐積み上げによる底部の自重による歪み(内外への肥厚)を軽減する目的で施すもので、大部分の個体にみられる。そして、すべての個体が、円筒部を正立させた状態で、1ないし数乾燥単位の工程内で実施している<sup>(注14)</sup>。施行方法は、外面では1次調整のタテハケを外面底端部の肥厚部から始めて平滑にするのが通例で、ごくまれに局部的なヨコナデを加えるもの(167)がある。内面に関しては、内面一般にタテハケを用いる個体は、外面同様ハケの開始部を強く器壁に押圧して肥厚部をおさえる。それ以外の場合、内面調整後に改めて底部調整を加える。その方法は、ヨコナデと連続ユビオサエ(横方向にすき間なく指による押圧を加える)を用いるものが多い。

口縁部の整形は、2次調整後に直接ユビナデにより行う(布を介在させるものは少ない)。その施す範囲は、直口系は、端面付近あるいは端面のみ、屈曲系は内外面数cmの範囲に及び、この部分の先行する調整を消している。

ヘラ記号 ヘラ記号は、記号的なもの(16・166・171・253)と、複雑で絵画的なもの(15・25・26)がある。施文位置は、口縁段か6段目の外面に限られる。通常は先細りのヘラ状工具で施文する(条痕幅1～2mm)。しかし、253は、先の丸い幅のある棒状工具(条痕幅10mm)を用いて段間いっぱい描く。今回の資料の中には、同じ記号を共有するものはなかった。

焼成 焼成は、ほぼ広義の須恵質の範疇に入るが、個体によって堅緻に焼成され暗灰色を呈するものから、遺存状態にもよるが、ほとんど土師質の軟質に近いものまでかなり差がみられる。黒斑を有する個体は全くなく、窖窯(登り窯)による焼成法を採用する(後述する埴輪窯の灰原からこのタイプの埴輪片が出土している)。また、基底部の一側面が内外ともに半円形に変質・変色する個体がある(2・3・28)。これは焼成における火廻りの差(この部分が、遮蔽されて火が廻らなかった)を示すもので、登り窯の傾斜する焼成部床面に埴輪を正立させて焼成した結果生じた現象と考えられる。

顔料 器面塗彩を施すものは、全体に少ないながらも、1では、外面全体に赤色顔料(ペンガラ?)を薄く塗抹し、3では外面全面に化粧粘土(塗土)を施す(このため調整痕が不明瞭になっている)。

(b)B類

この類型の出土例は今のところ14号墳に限られる。細片資料が多いが、東周溝内に倒れ込んだ状態で出土した個体(281)は、ほぼ完形品で、観察対象として良好な資料である。

**形態** 全体形は、底径と口径の差が1:1.5の割合でA類より大きく、全高(49.3cm)の相対的な低さを加味すると前者と比較して口広がり感を与える(外傾指数は8.8)。

横断面形は、底部・口径部ともやや不整円形(口径24.0~27.3cm・底径16.7~17.3cm)で製作にやや粗雑さが認められる。

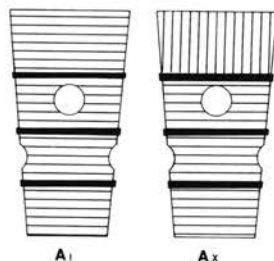
タガは、3条をほぼ等間隔(タガ間に挟まれた段幅は約10.7cm等間)に配するが、口縁段は約14.0cmとやや幅広い。A類に比べ器高が低い(A類の約70%)にもかかわらず、タガの条数の減少(約半減)により、結果として各段の幅が広くなる。口縁段は円筒部一般段から屈曲することなく直線状にのびるが、263のように外傾した後内湾するものもある。口唇部の大半は、端部が水平な面状になる直口系で、少数ながら屈曲するタイプ(265)もある。

タガの形状は、基本的にはA類と変わらず、側面幅と高さがほぼ一致する規模の台形断面が基本で、側面のみが強い指頭ナデで幾分くぼむもの(いわゆる「M」字形)が大半を占める。その他の特徴もほぼA類に準じている。

透孔に関しては、円形であることに変わりはないが、その穿孔方式がA類と大きく異なる。すなわち、A類では隔段交互配列であったのが、B類では隣接する2・3段目に各段対向する位置に2孔ずつ段間交互配置で穿孔する(隣接段交互配列)。また、断幅が広いこともあって透孔の規模が大きい(短径の最小値6.5cm・長径の最大値8.3cm)。穿孔は内外の最終調整後に外面から刀子状工具でくり貫く。

**成形・調整** 基本的にはA類の技法に準じている。すなわち、器体の成形・調整は、複数の小工程により分割的に行う(器体を倒立させて底部を調整することはない)。ただ、その乾燥単位間の調整手法は、器面に明瞭には残っていない(おそらく2段目タガ位に乾燥単位面があり、2回の小工程を経て全体を成形したものと思われる)。

各工程間で行う手順もA類と同様、粘土紐の積み上げ一器面の成形一調整を経て次の工程に移行する。粘土紐積み上げは、幅約6cmの1枚の粘土板を右巻き一帯造技法で接合し(底部輪台)、その上位に幅2~5cmの粘土紐を積み上げて円筒の素形を造り上げる。器面の成形は、ていねいな左に傾くタテナデを用いて(実際には内面に観察されるにすぎない)粘土紐間の凹凸を平滑にならす。



第69図 B類円筒埴輪  
外面調整手法分類図

調整は、内外面ともにハケを用いて行う。

外面調整は、タガ接合以前の1次調整には底端部から口縁端にタテハケをていねいに施す。タガ成形後の2次調整にはB種ヨコハケを用いる。このB種ヨコハケは施す範囲が全体に及ぶもの(第69図A<sub>i</sub>)と、少なくとも口縁段を省略するもの(263・第69図A<sub>x</sub>)に分かれる。前者の281の場合、基底段が段間1回の施行であるのに対し、その他の段では上下に重複する2回の施行がみられる。これは、ハケ工具原体の幅がタガに画された段幅より狭いため、1回の施行では段間をくまなく調整できなかったことによる。したがって、工具の休止痕も傾斜する必要がなく、タガに対して垂直方向に止まっている。また、ハケを2段に重ねるときに、休止線を上下で同じ位置に揃える工夫をしている(休止幅2～4cm)。

内面調整は口縁段に限り施し、それ以下は未調整で整形痕が残る。1次調整は、口縁段をわずかに越える範囲に左上がりナナメハケが施される(タガ貼り付けの際の内面のヨコナデで消されていることから1次調整であることがわかる)。その後、口縁段の上半(口唇端より6cmの範囲)に休止痕をとどめない連続的ヨコハケを加える(おそらく2次調整)。このような調整技法は、先のA類の埴輪の内部調整のC<sub>1</sub>技法に相当する。

底部調整は、器体を正立させたままで内面の下端に連続ユビオサエを施す。ただし、外面は1次調整のタテハケ後特に調整を加えないので、外方にやや肥厚する。

口唇部の成形は、内外の最終調整後、ヨコナデで行う。このため口縁段のハケメの上端が1～2cm幅で消される。

ヘラ記号 ヘラ記号は、全く同じ意匠の記号状のものが複数確認でき(266・281)、いずれも口縁段外面にヘラ状工具で線刻する。

焼成 黒斑がなく広義の須恵質の範疇に入るが、軟質で器表面は淡黄灰色を呈する。

#### (c)C類

上人ケ平古墳のうち6・15号墳の周溝内から出土した埴輪に代表される。

形態 出土個体は、いずれも小片化したものが多く、完形はおろか段以下の単位で完周するものもない。したがって、その全体形を知ることはできない。ただ、底部・口縁の復原径やタガに画された各段の規模等が先のB類とほぼ近い数値を示すことから、ほぼB類と同様のプロポーシオンを呈するものと推定される。すなわち、器高50cm程度の小形品で、タガを3条等間隔に配する形態を示す可能性が高い。

円筒部の断面(横断面)形状は、破片の円弧をみる限り、基本的には正円形に製作しており、意図して楕円形に造り出す個体はない(こうした中で、318のような焼成時の変形によって口縁断面が直線状を呈する個体がわずかに認められる)。

タガに画された各段の規模(幅)は、個体間に多少の差違があるものの、一般には口縁段



が基底段も含めた他段の幅(約9.0~10.0cm)に比べ、わずかに幅広い(10.0~11.0cm)。

口縁段の断面(横断面)形は、3段目以下から屈曲することなく直線的にのびるもの(292・316・318・320・323)と、3段目タガ付近から屈曲してわずかに外反するもの(317・319・321・322・324)に大別でき、ほぼ同率の割合を示す。

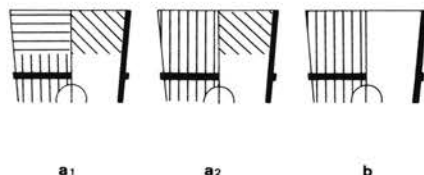
口唇部は、端面が横方向を向くような屈曲系がみられず、すべて直口系で占められ、器面の最終調整後にユビナデによって整形する。直口系の中では端面を肥厚せず水平に整形するもの(a<sub>1</sub>類)が大半を占め、少数ではあるが端部内面を強くヨコナデした結果、口唇部全体が逆「S」字状に内湾するもの(321)や、端部内面のヨコナデを端面にまで連続的に施して、鋭角的な屈折稜を端面外端に1か所のみ残すもの(320)などの、変形式が含まれる。

タガは、粘土紐を用いてユビナデで器面に貼り付けて製作するが、その断面形は、すべて台形を基本としている(中には側面が指頭ナデによって窪む「M」字形を呈するものも存在するが、A類の埴輪に比べその比率は低い)。そして、先のA・B類に比べて突出度が低下し、かなり低平な感を与えるもの(326など)も存在する(324はこの類型の埴輪中では「M」字形断面で突出度の高いタガを備えているが、他に類例はない)。この他、305はタガの基部幅が3.1cmの幅の広い特異な断面形を示す。

透孔は、全形のわかる個体はないが、上下のタガにごく近接した位置に穿孔痕を残すことから、タガ間の段幅に近い規模(直径8~9cm程度か?)の円形透孔を段宛対向する位置に各2孔ずつ、隣接する2段目と3段目に段を違えて交互に配する方式を採ったことが推定される。

**成形・調整** C類の埴輪群は、B類にプロポーシ<sup>(註15)</sup>ョンの上で共通する内容をもつが、外面における2次調整の有無で区別できる。すなわち、C類では少なくとも外面にタガ製作後の調整(ヨコハケなど)は一切施さない。ただ、すべてが細片資料であるこの類型では、埴輪1個体に施される製作手順を総合的に抽出し理解することは困難であり、例えば小工程間にみられる調整の不連続や、工程間の接合に用いられた手法を見い出せなかった。

ここでは器面に残された各種技法のうち、口唇部・底部・タガ成形に係わる調整を除外した上で、基本的にナデは成形段階、ハケは調整段階に用いられた手法と理解しておきたい。まず、成形手法として、調整が省略されることの多い内面では例外なくタテ基調のいねいなユビナデが観察できる(おそらく外面も同様にタテ基調



第70図 C類普通円筒埴輪  
器面調整手法分類図

のナデを行い、粘土紐間の凹凸をならしたものと推察される)。通常このナデ技法は、左上がりに施し、口縁に近づくにつれ傾度を強め、また右回りに行う(このことから右利き工人が想定される)が、328のみ右上がりに施す。

次に調整技法に関しては、口縁段の内面に施される方法(口縁段調整)によって2種の手法に大別できる(第70図参照)。すなわち、口縁段内面にヨコハケまたはナメハケを加えるもの(a類)と、口縁段も含めて内面調整を省略するもの(b類)であり、確認できる個体でのその出土比率は9:1と前者が圧倒的に多い。a類は更に口縁段外面にヨコハケを加えるもの(a<sub>1</sub>)と、外面は1次調整のタテハケのみで終わるもの(a<sub>2</sub>)に細別できる。

a類の内面調整やa<sub>1</sub>類の外面ヨコハケ調整は、口縁段の上半部に施される場合が多いため、タガ製作との前後関係が不明瞭であるが、ともにタガ製作以前の1次調整である可能性が高い(320などはタガ接合の際の器面ナデによって、口縁段調整の一部が消されていることによる)。また、その施す方法では断続的なものが多く、1回に施す距離も短い。ただ、例外的に外面に休止痕をとどめた連続的ヨコハケ(B種ヨコハケ)を用いた例(320・321)がある。

1次調整のタテハケも含めてハケ工具原体の条線密度は概して高く、15号墳出土埴輪は、すべて同一工具で製作した可能性が指摘できる。これに対して、6号墳の場合、工具の条線密度が個体間でばらつき、複数の工具原体を用いて器面調整したことが推定できる。

底部調整は、数少ない個体をみる限りではあるが、すべて正立した状態で施す。その方法は、器体を正立させたままの状態、底端部の両面のみ指頭による連続オサエを用いる(306)。底部外面は、1次調整のタテハケを底端部から開始するため、この段階で肥厚部がある程度なされるので、あらためて底部調整を行わない(306)。ただし、300ではヨコナデを加える。

ヘラ記号 種類には絵画的なもの(297・335)と、記号的なもの(301・316)がみられる。前者のうち335は、一端を欠損するが、四本脚の動物の可能性が高い。また、後者のうち297は×印にその交点を通る垂線を1本加えたもので、複数存在する。このほか、295・296は透孔の線に2条の同心円を加えたもので、穿孔位置の明示あるいは透孔の装飾であろうか。いずれも基底段を除いた外面に、先端のとがったヘラ状工具で線刻する。

焼成 広義の須恵質に入るが、一部を除いて黄灰色を呈し、A類に比べ軟質である。黒斑はない。

顔料 口縁付近の外面にベンガラと思われる赤色顔料が薄く残る個体が認められる。

#### (d)D類

9号墳から出土した埴輪を標式とし、出土量は少ないが1・10号墳もこれに含める。こ

のうち10号墳から出土した埴輪は、焼成の面で本類型の典型例と異なった様相を示すが、他の属性が共通することから、D類の垂式としてとらえることとする。

**形態** 全形のわかる個体はないが、タガに挟まれた段の規模や口径と底径の比、及び透孔の位置などから、B・C類と同様に3条のタガをめぐる器高40cm前後の小形品に復原できる。ただ、多くが高温による焼き歪みで著しく変形しており、本来の形状(焼成前の形状)を残すものはむしろ少ない。それでも底径(14cm前後)と口径(20cm前後)の差が相対的に小さく、器高の低さを加えても、他の類型に比べてより正円筒形に近い側面を呈する。段の規模は、個体間に多少の差があるが、各段を3条のタガによってほぼ均等に割り付けたものが多く、その幅は約7～9cmを測る。口縁段付近の縦断面は一般段から直線的にのびるもの(346・352・354・356・363・364・365・366)が圧倒的に多く、最上段タガ付近で屈曲して外反するものは極めて少ない(353)。口縁端部(口唇部)の断面形は、例外なく直口状を呈し、屈曲系は存在しない。

口唇端部は、ヨコナデにより平坦な面をなすが、その端面は水平を基調とするものの、内外に傾斜するものも少なくない。

タガは、粘土紐を用い、ヨコナデにより器面に成形するが、貼り付けの際に用いる粘土量が他の類型に比べて少なく、このため非常に小振りな形状を呈する。

その断面形は、通常の台形を呈するものと、突出度が極めて小さくタガの下面が形骸化してほとんど三角形状を呈するものがある。前者は、突出度こそA類のそれと大差ないものの、規模が全体に縮小しており、側面幅が異常に狭いもの(353)もある。後者は、主として10号墳出土埴輪に多くみられ、一見、2条のユピナデによってその内方に削り出したように見えるが、これも補充粘土によるものである。また、1号墳出土例の中には、A類と同様の規模の大きな台形断面を呈するもの(340・341)が含まれている。

透孔は、隣接する段に、段宛対向する位置に2孔ずつ、隣接する段(2・3段目)に段を違えて交互に配している。その形状がすべて円形で、段の幅に近い規模(直径5～7cm)を有する。

**成形・調整** 器面に残された成形・調整手法は、基本的にはC類と変わらず、外面の2次調整は省略される場合が多い。ただ、この類型にとって重要な要素として、比較的完形に近い個体をみる限り、小工程間の接合を目的とする局所的な技法や各種調整技法の不連続は認められないことがあげられる。このことから、この類型の普通円筒埴輪は、全体的な規模の縮小にともない、一回の工程内で製作された可能性を指摘できる(単一工程)。

内外面の成形には、タテ基調のていねいなユピナデを用いる(このナデは調整が省略されることの多い内面で観察できる)。その施行方法は、上からみて左回りに回転し、また上位

ほど傾度を強めて左上がりに行うことが多く、この場合右利きの工人が器体を正立させた状態で製作したことが想定できる。

器面調整に関しては、C類同様、2次調整を省略することを基本とする。

外面調整は、大部分がタテ基調のハケメを最終調整として用いる(1次調整)が、少数ながら2次調整を加えるものがある。2次調整を省略するものの中には、口縁段にタガ製作前に複次の調整(口縁段調整)を行う個体がかかなり含まれる(1次調整)。例えば、347・351は、外面全面に垂直に近いタテハケを施した後、口縁段を想定し、その部分に左に傾けてナナメハケを加え、最後にタガを製作する。また、344・365は、逆に全面に上位ほど傾きを強める左に傾けたナナメハケを施し、口縁段部分にあらためて垂直方向にタテハケを加える。このように、外面調整が1次調整だけで終わるものの中に、後述する内面調整に連動して、口縁段部分を複数にわたって調整するものがある。

一方、2次調整を加えるもの(358・363・367)は、休止痕をとどめる連続的なヨコハケ(B種ヨコハケ)を行う。この場合、段間1回の施行に限られるが、工具原体が段幅より狭く、段間すべてを調整しない。

内面調整は、それを全く省略するもの(354・356・362・364)と、口縁段付近に行うもの(いわゆる口縁段調整で、全体の6割強を占める)がある。内面における口縁段調整は、最上段タガの位置に規制されず、口縁付近に施される(このため1次調整の可能性が高い)。調整の範囲は、結果として口縁段の範囲におさまるものと、より広い範囲に及ぶものがある。また、その方法は左上がりのナナメハケが過半を占め、わずかにタテハケやヨコハケを用いるものもある。そして、外面に口縁段調整(複次的な調整)を加える個体はすべて、内面にも口縁段調整を行う傾向がみられる(344・347・351・365)。

底部調整に関しては、この類型を規定する要素である倒立調整(いわゆる川西氏のいう底部調整技法)が認められる。これは、器体の小形化に伴う乾燥工程を省略したことに起因する調整法で、完成させた器面を調整した後、間をおかずに器体を倒立させ、底端部の肥厚を調整する。その方法は、(355・372・373)にみられるように内面は指頭により、外面は板状工具を介在させて横方向に押圧を加え、それから底端部に指ナデあるいは板オサエを用いて水平にする。

ヘラ記号 事物を形象した絵画的なものではなく、すべて記号的なものに限られる。352・361は、2本の円弧を重ねただけの単純な構図を示し、366は逆「U」字の中央を支線を派生させる垂線が貫く。いずれも口縁段の外面に先端の細いヘラ状工具で線刻する。

焼成 1・9号墳出土例は、堅緻に焼成されたものが多く、高温で焼き歪んだ個体も少なくない。これに対し、10号墳出土の埴輪は、器表が黄灰色系を呈し、須恵質の範疇に入

るが前者に比べ軟質である。

**顔料** 10号墳出土の埴輪にのみ、その外面(口縁段付近)に薄く赤色顔料が遺存している(344・345・347・350・351)。

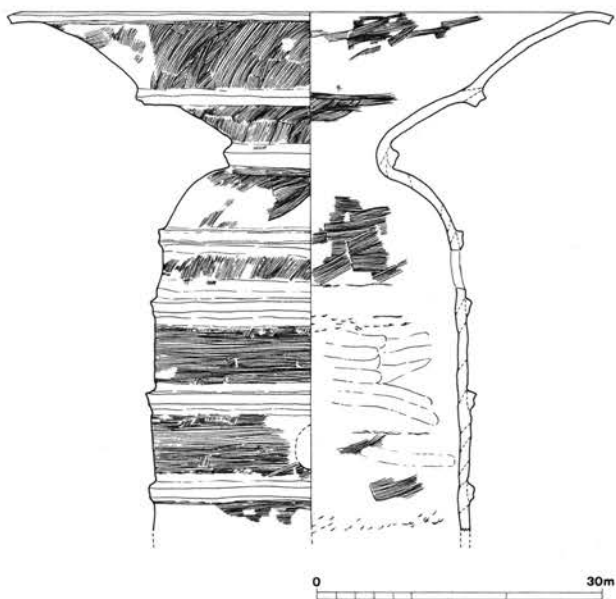
**b. 朝顔形円筒埴輪**

次に、普通円筒埴輪の、各類型に共伴する朝顔形埴輪について触れてみたい。

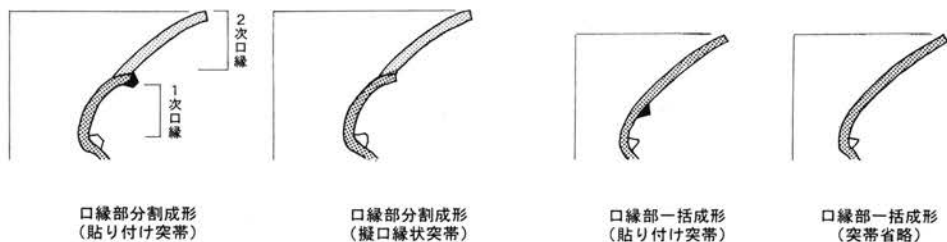
**(a) A類に共伴する朝顔形円筒埴輪**

7条のタガをめぐらせた円筒部の上部に内湾する肩部を介して大きく外反する二重口縁がとりつく。円筒部(=器台部)は、基本的にはA類の普通円筒埴輪そのもので、形態や各部の製作技法が共通する。ただ、円筒部の7段目(普通円筒の口縁段)付近は、その上部に内湾する肩部がとりつくため、通有の普通円筒と異なった製作手法(調整技法)を用いる。

例えば、8号墳出土の朝顔形埴輪(172)の場合、7段目から肩部にかけての調整は、円筒部が7段目まで完成した段階で、外面に1次調整のタテハケを施し6段目タガまで製作した後、6段目まで段間宛1回のB種ヨコハケを加え乾燥工程に入る(この段階ですでにA類の普通円筒埴輪の体裁を整えている)。続いて、肩部を粘土紐の積み上げによって成形し、6段目タガ上位から肩部下端にかけて、B種ヨコハケを施し(この場合、休止痕はほぼ垂直に残る)、その後7段目タガ(円筒部最上段タガ)を粘土紐の貼り付けによって



第71図 16号墳出土朝顔形埴輪実測図



第72図 朝顔形埴輪口縁部製作概念図

製作する。肩部には外面にさらに間断なくていねいなタテハケを行い、その後部分的に断続的なヨコハケを加えて整美な半球形状に仕上げる。

内面調整は、円筒部には一般に施さない(普通円筒のC<sub>3</sub>技法)が、肩部を成形した段階で、6段目から肩部にかけて乾燥単位間の接合を目的としていねいなタテハケを施し(7段目のタガ貼り付け前に施されたことが、内面のヨコナデによってタテハケが消されていることからわかる)、さらに肩部に限り断続的なヨコハケを加える。

一方、16号墳出土の朝顔形円筒埴輪(第71図)では、円筒部の6段目まで外面調整として通常のタテハケ(1次)→B種ヨコハケ(2次)を用いるが、7段目以上は、肩部にかけて大きく右に傾くタテハケ(1次)を施した後、円筒部最上段タガ(7段目タガ)を製作するが、その後、円筒部最上段(7段目)外面には調整を加えない(2次調整の省略)。これに対して、肩部は、7段目のタガ製作後1次調整に重複するように、さらにていねいなタテハケを重ね、その上端付近にB種ヨコハケを加える。

内面は、8号墳例と同様、円筒部における調整は行わない(C<sub>3</sub>技法)が、7段目以上の肩部内面にかけて休止痕をとどめる断続的なヨコハケを用いて乾燥単位間の接合を強化し、その後、肩部内面に断続的なヨコハケを用いて調整する。

口縁部の製作手法に関しては、すべての個体が1次口縁(頸部)と2次口縁(口縁部)の製作の境に乾燥工程を設ける(分割成形)手法を採用している(第72図参照)。すなわち、1次口縁は、粘土紐の積み上げによって、肩部上端のくびれ部から直立ぎみに立ち上がり、やがて大きく外反するように造る。特に、8号墳例(172)や16号墳例(第71図)の場合、その端部内面が水平に近くなるほど外に傾く。1次口縁を形成した段階で、外面にタテハケ(上位が左右に傾き、斜放射状を呈する)、内面にはくびれ部付近をヨコハケした後、1次口縁全面にナナメハケ(上位が大きく左右に傾き、断続的に施す)を用いて器表を平滑にする。1次口縁の口唇部は、ユビナデにより角頭状に成形する。乾燥後、1次口縁上端の内面にヘラ状工具で刻み目(斜平行線または交差する線)を入れ、これを基礎に再び粘土紐を積み上げて2次口縁を造る。2次口縁は1次口縁の内端から積み上げるため、その基部付近は1次口縁上端から傾度を弱めて立ち上がり、やがて大きく外反して端部内面は水平に近くなる。このため口縁全体は1次口縁と2次口縁の境で緩く屈曲し、全体として「く」字形を呈する。

2次口縁が形成されると、1次口縁との接合部の外面に粘土紐を補充して突帯を製作する。この場合、多くは1次口縁の口唇部の突出する部分を覆うように粘土帯を貼り付けし、断面台形状に造るが、8号墳例(172)では、1次口縁端部の突起を擬口縁として生かし、その口唇部外面にさらに粘土紐を補充して垂下する形状の突帯に仕上げている。

2次口縁に施す調整は、外面は突帯製作後、上位が傾斜するタテハケ・ヨコハケを1～2回施して器面を仕上げる(口縁部2次調整)。一方、内面は、1次口縁と2次口縁の接合部内面を断続的で強く施すナナメハケを用いて補強し、突帯を製作する前に、上位が傾斜するタテハケ・ナナメハケを全面に施す(口縁部1次調整)。突帯製作後は、2次口縁の上半部に限り、やや傾斜するヨコハケを加え、最後に口唇部をヨコナデ調整する。

#### (b)B類に共伴する朝顔形埴輪

円筒部の規模の縮小に伴い、朝顔口縁部も口径50cm前後に縮小する。

口縁部以下の資料を欠き、その製作法等の詳細は知ることができない。口縁部について図化復原可能な個体をみると、口縁部の形状及び製作技法は基本的にはA類と共通する。すなわち口縁部は、1回の乾燥工程を挟む分割成形によって製作しており、1次口縁と2次口縁の境に屈曲点を設け、全体としては大きく外反する形状を呈する(分割成形)。ただし、その外面に造形された突帯の製作に関しては、2種の製作法のあったことがわかる。1つはA類と同様に、粘土紐を貼り付けて断面台形状に仕上げるもの(282・284)で、282の場合、1次口縁口唇端面を利用してうまく台形状におさめている。今1つは283にみられるように、外面に粘土紐は補充せず、1次口縁の口唇端をそのまま突帯として利用するものである(擬口縁状突帯)。この場合、口唇部の端面と下面を斜辺とする断面三角形状を呈し、突出度も低い。

器面の調整には、すべてハケメを用いる。外面調整は、282・283では乾燥単位ごとにそれぞれ上位が左に傾くタテハケを全面に施し、282の場合、2次口縁上半にヨコハケを加える。284ではヨコ基調のハケが優勢で、休止痕をとどめない断続的なハケを施す。いずれの場合も、2次調整はタガの製作後に行う。内面調整も乾燥単位ごとにナナメハケ・ヨコハケを用い、各乾燥工程間の接合部には断続的で強く行使したハケ(ヨコハケ・ナナメハケ)調整が残る。

#### (c)D類に共伴する朝顔形埴輪

C類に共伴する朝顔形埴輪は細片が多く、検討できる資料を欠くので省略する。D類に共伴する資料は、焼き歪みによる変形を受けた個体が多いが、全体の形状をみると、肩部があまり内湾せず肩部の幅(円弧長)も小さいため、くびれ部と円筒部上端との口径差があまりない。口縁部は、くびれ部で鈍く屈曲し途中で屈曲することなくそのまま外上方に立ち上がって外反する。口縁径は35～40cm前後を測る。

口縁部中位外面の突帯は、存在するものと、それを省略するものがある。前者は、358のように、口縁部全体のかなり下方に偏っており、極めて突出度が低く、断面形も三角形状を呈する。また、後者は、くびれ部に三角形断面の突帯を付すのみで、口縁部外面には突

帯は存在しない(357)。口縁部中位の突帯は単なる装飾ではなく、口縁部が分割成形された際の1次口縁端部の擬口縁部を強調したものと考えられ、こうした突帯の形骸化や省略は、口縁部全体の製作手法が変化したためであると推測する。そこで、D類の朝顔形埴輪の口縁部の形状をみると、途中で屈曲することなく一律の外反度をもって外上方に開いている。すなわち、この類型の場合、口縁部は、途中で乾燥工程を設けず、頸部くびれ部から一気に口縁端まで粘土紐を積み上げて口縁部全体を製作している(口縁部一括成形)。したがって、358にみられる低平な三角形断面の突帯は、本来の意味を失って形式的につけられたものとみられよう(第72図参照)。

口縁部の調整技法は、主としてハケを用い、単一工程内で一気に調整する。外面は、くびれ部から口縁端にかけて上位ほど傾度を強めるタテハケを用いるが、1回の施行で完了するもの(358)と、口縁上半にナナメハケを重ねるもの(357)がある。

内面は、直接目に触れるため入念に調整する。例えば358では、タテハケを上下に重ねる手法を採り、357の場合、全面を左に傾くタテハケ調整した後、徐々に施す範囲を上位に遷すように、左上がりヨコハケーB種ヨコハケー断続的なヨコハケ(口縁端付近)を重複させていねいに仕上げる。突帯製作(ヨコナデによって器面に貼付する)後の調整は行わない。

## ②埴輪窯出土の円筒埴輪

### a. 普通円筒埴輪

#### (a)第3次床面出土の円筒埴輪

形態 全形を窺える個体はないが、破片資料に残された透孔の穿孔方式や、口径と底径の法量比、あるいはタガに画された各段の規模などが、先の上人ヶ平古墳群出土埴輪で分類したB・C類と近い内容を具えている。すなわち、第3次床面出土の埴輪の多くは比較的良好に遺存する393に代表されるように、器面に3条のタガをほぼ等間隔に配した器高50cm前後の小形品に復原できるものと考えられる。

円筒部の横断面形は、断片資料も含め基本的には正円(弧)を呈し、焼き歪んで変形したものは含まれない。

各段の規模(幅)は、3段相当が遺存する393をみると、一般段が約9cmであるのに対し、口縁段は約12cmとやや広く造られている。この口縁段の数値は、そのみ依存する個体でもほぼ同値を示す。

器体の側面形(縦断面)は、口縁段が屈曲せず直線的にのびるもの(390)と、最上段タガを境に緩く外反するもの(393)が確認できる。

口唇部の形状は、屈曲系(390・395)と、直口系(393・396・397)がある。前者は、いずれ



も屈曲度が非常に弱く、端面が極端に傾斜する直口系(類 b<sub>1</sub>)と捉えることもできる。後者の直口系は、端面がやや外傾するのが一般的である。いずれも器面の最終調整後に直接ユビナデによって成形する。

タガは、下底幅(2.0~3.0cm)に対し、高さの低い(0.2~0.6cm)低平な台形断面を呈するもの(390・391・393・398)と、突出度がなく比較的規模の大きな台形断面を呈するもの(395・396)がある。

透孔の形状は、断片も含めすべて円形であり、段間にほぼ一致するほど規模が大きい(393では直径7.5~8.0cm)。穿孔方式は、隣接する2段目と3段目に、段宛対向する位置に2孔ずつ、段を違えて交互になるように配置している。

**成形・調整** 埴輪窯出土の資料は、完全に復原できるほど良好に遺存する個体がなく、ほとんどが小片資料のため、資料中に乾燥工程の差に伴う各種技法の不連続などの徴候が認められない。ただ、器体の倒立による底部調整技法がみられる個体はなく、少ないながらも、複数の乾燥工程を経て製作されたことは確実である。例えば393では、外面にみられる1次調整のタテハケが約15cm単位で休止している。このことから、393は少なくとも2回の乾燥工程を設けて製作した可能性が高い。

器面の成形は、基本的にははいねいなタテ基調のナデを用いる(実際は調整が省略されることの多い内面でだけ観察できる)。このタテナデは、上位が左に傾くものが多く、口縁に近づくとつれ傾度を増し、395のように、ナナメ方向に移行するものもある。また、特例として392は、ナデに加え1段目中位からナナメハケで器体を成形する。

調整技法はハケメに限られる。外面調整に関しては、1次調整は、すべての個体がタテハケを用いる。それは底端部から開始し(392・399)、口縁端部に至るまで間断なく施す(一気に行うものではなく、数回に分けて施す)。また、392のように先行するハケの上位に後出するハケを半分以上重複させるものもある。タガ製作以降の2次調整については、破片が多いため、同列には扱えないが、それを行うもの(a類)と、全く省略するもの(b類:392・393)に分別できる。a類は、さらにその行使する部位(範囲)によってa<sub>1</sub>:全般に2次調整を施すもの、あるいはその可能性が高いもの(390・391・395・398・399)、a<sub>2</sub>:少なくとも口縁段を省略するもの(396・897)に細別できる。外面に2次調整がみられるもの(a類)は、すべてヨコハケを用い、398は休止痕を残すB種ヨコハケを施す。ただ、その施し方は、やや粗雑で、間断なくくまなく調整するものは少ない(398の場合、段幅に満たない幅の工具原体を用いているが、段宛1回の施行のみで、調整しない部分を残している)。

内面調整は、それを行うもの(a類:390・396・397)と、全く省略するもの(b類:393・395)がある。a類の調整する範囲は、ほとんど口縁段内面に限られ(いわゆる口縁段調整)、

その上半を中心に、主としてヨコハケ(多くは左上がり)で口縁部分を平滑に仕上げる。

底端部の肥厚部の調整(底部調整)は、倒立して行うものはない。多くは正立した状態で器面調整終了後に底端部内面にヨコナデを加えて、この部分の肥厚をならしている(外面は1次調整のタテハケの開始部を強く押えてならしており、あらためて調整しない)。

ヘラ記号 393の口縁段外面に、やや先端の太いヘラ状工具の線刻による蛇行する曲線と、これから派生する2本1組みの直線を加えた絵画的な構図のものがみられる。

焼成 器表は、すべて淡黄灰色～淡黄褐色を呈し、須恵質でもかなり軟質に仕上がっている。黒斑はない。

#### (b)第2次床面出土の円筒埴輪

形態 すべて小片で、全形を知ることはできない。それでも断片的な要素を総合すると、口径は19cm前後(406)で、各段の規模は、口縁段を除く各段(8.0～9.0cm)より口縁段(11.0～12.0cm)が幅広く造られていることがわかる。

タガの条数は、透孔の穿孔方式が不明なため確証を欠くが、上記の法量などから3条めぐっていたと推定可能で、上人ヶ平古墳群の埴輪類型のB・C類に近い形態に復原できる。

横断面を故意に楕円に造り出すものはなく、また焼き歪みによって変形した個体も含まれない。

口縁段は、他の各段から屈曲しないもの(408)と、わずかに外反するもの(407)が認められ、口唇部の断面形は、すべて直口系(端面は水平か、わずかに外傾する)に限られる。

タガは、側面幅と高さがほぼ同値(0.5～0.9cm)のやや規模の大きな台形断面を呈するものが大半を占め、低平な台形断面を呈するもの(412)よりはるかに多い。

透孔は、すべて円形で、上下のタガに近接した位置から穿つので、その規模(直径)は、段幅に近い数値を示す大形のものである。穿孔方式は、観察対象が小片のため不明である。

調整 器面の調整にはすべてハケメを用いる。外面調整は、すべての個体に2次調整が認められる。すなわち1次調整のタテハケ後、各段ごとにヨコハケの2次調整を加える。このヨコハケは、多くがB種ヨコハケで、その休止痕はタガに対して垂直か、右に傾くものが多く、段宛1～2回の施行で段間をもれなく調整している。また、この2次調整は、基底段を省略する個体(411)はあっても、口縁段を省略するものはなく、全般に施すことが基本であったようである。

内面調整は確認できる個体すべてが口縁段調整で、主に口縁段上半部に限り左上がりのヨコハケを用いる。その他の内面調整は省略され、そこには整形段階のタテ基調のナデが顕著に残る。

焼成 須恵質だが全体に軟質なものが多。器表は淡黄灰色～灰色を呈し、黒斑はない。

## (c)第1次床面出土の円筒埴輪

第1次床面からは朝顔形円筒埴輪のわかる個体はないので、普通円筒埴輪について報告する。

**形態** すべて小片資料で全形はわからない。ただ、断片的な資料から、その形態的特徴をあげると、タガ間に画された断幅は、口縁段と基底段が、その他の一般段(幅9cm前後か)に比べ、やや広く造られる傾向がみられる(口縁段9.7~11.2cm・基底段10.5cm)。

全体形は、透孔の穿孔方式や体部復原径を含めた各部の規模などを参考にすると、413は3条のタガをめぐらせた小形品(上人ケ平古墳群の埴輪類型のB・C類に相当)に復原できる。これに対し他の資料は、復原口径が413に比べやや大きく、あるいはA類に近似した形態に復原できるかもしれない。特に、タガの断面形態をみると、突出度の高い台形あるいは「M」字形を呈し、中でも420は、接合幅が4cmを越える幅の広い台形に造り出している。こうしたタガの形態は、A類の属性である。

透孔は、確認できるものはすべて円形で、規模は段幅よりやや小さい(直径5.5cm前後)。413が2段目に位置する他は、穿孔方式を知ることのできる個体はない。

口唇部は、直口系(416)と屈曲系(414・415)が見い出せる。後者は、屈曲度が弱く、屈曲部内面が丸味を残す形態(b<sub>1</sub>)を呈する。

**調整** 2段以上残存する個体がないため、乾燥単位を示す調整の不連続や接合痕を見い出すことはできない。

器面を平滑に仕上げる調整には、内外面ともハケメを用いる。外面に関しては、すべての個体が1次調整にタテハケを用いる。中には、413のように底端部から開始して底部の肥厚を減少する施行法をとるものがある。

タガ製作後の2次調整にはヨコハケを用いる。ただ、全く省略する個体もある(417)。2次調整を加える中にも、全般にわたって施した可能性のあるもの(415・418・419)と、少なくとも口縁段あるいは基底段を省略するもの(413・414・416)がある。

内面調整は、それが認められず、整形段階のタテ基調のナデが残るものと、ハケメによる調整が施されるものがある。調整は、その範囲が体部一般に及ぶもの(417・420)と、口縁段付近に限られるもの(いわゆる口縁段調整414・415・416)が存在する。

**ヘラ記号** 415の口縁段外面には先端のとがったヘラ状工具を用いた「×」状の線刻がみられる。

**焼成** 広義の須恵質に焼成するが、器表は淡黄灰色~黄褐色を呈し、全体に土師質に近い軟質のものが多い。

ただ、415・419は比較的堅緻で、上人ケ平古墳群のA類の埴輪に近い焼成を示す。

## b. 朝顔形円筒埴輪

### (a)第3次床面出土の朝顔形円筒埴輪

口縁部のみの破片資料(394)をみると、口縁部は一括成形で製作される。すなわち、粘土帯の積み上げによる朝顔口縁部の成形が、頸部から一気に口縁部にまで至るもので、途中に乾燥工程を設けない。このため口縁部の側面形は、口縁部の中位外面をめぐるタガを挟んで屈曲することはない。また、中位タガは、1次口縁端の擬口縁ではなく、円筒部のタガと同様に粘土紐の貼り付けによって製作する。

外面調整は、全面に放射状のタテハケを施した後、タガを製作し、その後、2次口縁の部分にのみ左に傾くタテハケを加える。内面はタガ製作時のヨコナデで、それに先行する調整は不明だが、それ以後は、2次口縁の下半を中心に横基調の不規則なハケを用い、さらに口縁付近に左上がりのヨコハケを加える。

焼成は、須恵質の範疇に入るが軟質である。

### (b)第2次床面出土の朝顔形円筒埴輪

405は、朝顔形口縁部の上半(2次口縁)部の断片資料である。その下端の破面(接合面)に1次口縁側に施したヘラ状工具による線刻が陽刻されるかたちで残っている。接合面に刻目を施す行為は、乾燥単位間の接合にしばしば用いられる技法で、この場合も1次口縁と2次口縁の製作の境に乾燥工程が存在したことを示し、この埴輪の口縁部がいわゆる「分割成形」(第72図参照)によって製作された重要な根拠となる。

## 2. 形象埴輪

上人ケ平古墳群の調査では、家形・器財形(蓋・盾・靱など)・動物形(馬)・人物(巫女?)などの各種形象埴輪が出土している。

古墳別の出土状況を見ると、一般に、周溝が奈良時代に改修され、再利用された古墳(5・7・8号墳など)では、種類は豊富だが小片化したものが多く、再利用されずに整地された古墳(14・16号墳など)中に、完形品に復原可能な個体が含まれるといった傾向がある。

以下、各種形象埴輪ごとに、項目を設け、個々の項目内では、円筒埴輪の形式分類に即してその内容を紹介する。

### a. 家形埴輪

5・9・15・16号墳、及び1号埴輪窯床面・灰原で出土した。いずれも細片資料が多いが、16号墳や1号埴輪窯の最終床面(第3次床面)で全形のわかる個体が出土している。

#### (a)円筒埴輪A類に共伴する家形埴輪

5・16号墳出土例がこれに相当する。

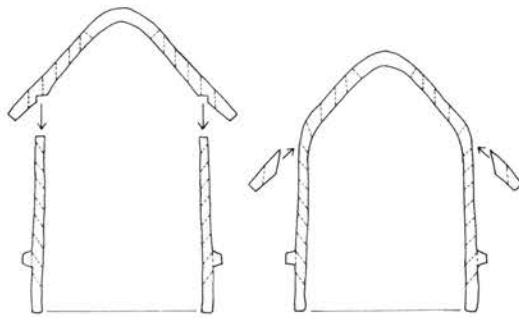
90は、寄棟造りあるいは疑似入母屋構造の屋根(下屋根)の隅角部分の小片である。軒先部分に線刻(軒縁と平行する水平沈線を設け、これと軒縁との間に垂線を連続的に配する構図)を施す。剝離面に残る痕跡から、軸部の壁体と軒先を除いた屋根部を粘土紐の積み上げによる一連の工程で製作してから、軒先部を後補する方法(これを屋根部分割成形と仮称する)<sup>(注16)</sup>を採っていることがわかった(第73図参照)。調整手法は器面が摩耗しているため不明である。

91~93は、軸部の壁体片である。このうち92は、粘土紐の積み上げにより成形し、内外面ともにハケメ調整を施した後、外面に線刻(直交する一方が中心軸のない綾杉文帯に表現されるもの)を加える。93は、線刻による1条の横走る区画直線の上下に交差する斜向線を複数配したもので、後述する16号墳例の壁体外面と近似する。

付表6 形象埴輪出土一覧表

古墳名 (遺構名)		1号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳	9号墳	10号墳	14号墳	15号墳	16号墳	17号墳	20号墳	上人ケ平	1号墳	輪窓			
														1床	2床	3床	灰原		
形象埴輪の種類	家	I									1			1					
		II		3		1		2			1			1		2	2		
		III		3		1	1				1							3	
	器財形埴輪	盾	I																
			II		4								1					7	
			III		1			2											2
		蓋	I						2		1		4						
			II	1	7			1	2			1					2	1	7
			III		2				1										1
	他	I					1												
		II																	
		III																	
		他	III		10			2									1		
	動物形埴輪	鶏	I																
			II					3										1	
			III																
		鳥一般	I																
			II		2			1											1
			III					3							1				
		馬	I											1					
			II		5	7		3							1		1	12	
III				3			1										1	11	
他			III		1	1		4	3						1	1		10	
埴人輪形	I																		
	II		2																
	III																		

I : 図上復原が可能なもの    II : 部位が明確なもの    III : 部位が明確なもの



屋根部一括成形

屋根部分割(付加)成形

第73図 家形埴輪制作技法分類図

252は、16号墳西辺溝下層で出土した。妻側の壁体の多くと屋根部の1/3を欠落するが、ほぼ図のように復原できる。切妻形式の屋根を具えたもので、屋根に対して軸部を高く誇張して表現し(屋根の高さは全高=39.5cmの約1/3にすぎない)、全体に縦長の印象を与える。軸部は横断面が、底部から屋根接合部に至るまで、一律に各辺不等長の矩形を呈し、平(長軸=約18cm)と妻(短軸=約16cm)の辺の長さがあまり変わらない。隅部の屈折は、丸味を帯び緩慢で、隅柱の表現は欠く。壁面には、ヘラ描きによる線刻と、窓あるいは入口を表現した縦長不整形の透しがある。線刻は、腰板以上の部位には水平基調の格子目(図示した平側に顕著で、密な水平線7条に3条の垂線を間隔を揃えずに交差させる)を重ねて板壁様に表現する。それより下位で裾廻板までの壁面(特に妻壁)には、連続する斜向交差線(前者に比べ乱雑)を線刻する。透孔は、図示した平側に、一方の妻側に偏在して1孔(7.5cm×3.5cm)、これに対向する面に2孔(6.0cm×4.5cm・5.6cm×3.5cm)存在する。裏面の1孔が入口、他は窓を表したものであろうか。また、裏面の裾部中央に小円孔(3.0cm×2.0cm)を1か所穿孔する。裾廻台は、円筒埴輪のタガのような突出度の低い台形断面を呈し、軸部裾に沿ってめぐるが、その隅角部をやや角張らせている。屋根部は、棟を丸く造り(丸屋根)、高く突出して妻のころびが著しい破風板を備える。破風板は、素文であり、その頂部内側に棟木を配する。棟木は、断面半円形を意図しているが、粗雑な造りで破風板とともに加飾しない。屋根の流れ部分も素文であり、押縁や網代などを表現しない。

この埴輪の製作に関しては、軸部と屋根部を別々に製作し、後で両者を合体させる方法を探っている。つまり、これを屋根部の製作の面からみると、裾部(軒先)も含めて一連の工程で屋根全体を製作し、一定の間をおいてすでに成形している軸部と接合する(このため、これを屋根部一括成形と仮称する<sup>(註17)</sup>・第73図参照)。

製作工程に即して説明すると、まず、軸部は、幅3.5cmの粘土板を一带造りで接合して輪台とし、それを基礎に約1.5cm幅の粘土紐を順次積み上げて内外面に左に傾くタテナデを加えながら軸部を製作する。その際、横断面が隅丸長方形になるよう成形する。そして、粘土紐を14~15単位角ばった輪状に積み上げた後、妻側の辺(短辺)にのみ屋根の流れに沿った妻壁上半部を粘土紐積み上げによって付加する(実際はその資料では妻壁部分は欠落して

いるが、別個体破片よりこのように推定できる)。一方、屋根部は、屋根裾から棟に向かって製作するが、屋根裾は、妻のころびに合わせるように徐々に長さを変えた粘土紐を3～4帯横位に積み重ねて逆台形状の粘土板を2枚製作する。次に、この粘土板を屋根の流れの勾配に合わせるようにして裏側からみて「ハ」字形に固定し、その上に短い粘土紐を軒と直交する方向に7～8帯橋渡し状に構架させて屋根上半部と丸棟を造る。さらに、屋根上半の妻側に上からみて三角形の粘土板を追加し、妻のころびによって生じる空間を充填する。破風板は、屋根部の妻側端部の外面に接合し、その内方に粘土を補充して接合を強化する。軸部との接合は、屋根部内面にあらかじめ妻壁上端が入る溝(衾溝)を設け、これに挿入するように両者を合体させる。接合の際の粘土の補充は、外側(軒先側)に限り行う。器面の調整に関しては、軸部外面はていねいな左上りナメナデ・ヨコナデ施行し、線刻施文を加えた後、透孔の穿孔、裾廻台の製作を行う。

屋根部は、流れの全面に横基調のハケメを施し、破風板には内面は布を介在させたナデ、外面はハケメをそれぞれ破風板の外縁線に沿った方向に施す。また、破風板側面・軒先側面・裾廻台側面には板状工具によるナデによって平坦に整形する。

#### (b)円筒埴輪C類に共伴する家形埴輪

15号墳より小片2点が出土している。

333は、切妻造(あるいは入母屋造りの上屋根)の屋根の妻端を含む軒先の断片である。妻縁に沿って屋根外面に剝離痕があり、破風板を流れの面に接合していたことがわかる。また、内面には平側の壁を受ける段と妻壁を挿入する溝を製作しており、屋根部を一括で整形した後、軸部と接合した状況がわかる。

334は、板状部の側面に横位に走る直線とそこから派生する垂直線をやや太い工具で線刻している。施文面には、ていねいなハケ調整を施す。確証を欠くが、家形埴輪の壁の可能性はある。

#### (c)円筒埴輪D類に共伴する家形埴輪

9号墳の周溝内より若干出土している。

382は、切妻構造の屋根部の妻端を含んだ棟寄りの部分である。妻のころび(傾斜)が緩慢で、棟の横断面のカーブは丸味を帯びるものの、やや鋭角的に屈曲する。屋根の流れの面には、二重の平行する沈線により押縁を表し、妻縁に沿って破風板の剝離痕が残る。妻壁の上端には、円筒形で側面を平坦に成形した小規模な棟木を屋根側に貼り付けて表現している。軸部(妻壁)との接合は、屋根裏面に衾溝を穿って、そこに妻壁の上端を挿入し、内面に補充粘土を加えることで行う。屋根外面には、ハケメ調整(全面にタテ基調のハケを施した後、棟部分にヨコハケを加える)を施し、その後、線刻による施文を加える。

384は、粘土紐を短く裁断して特に端面を成形することもなく、その中央部を両側からつまんだだけの個体で、その形状からみて軽木と考えられる。

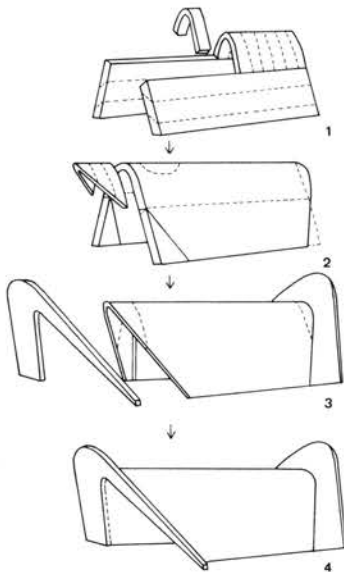
(d) 1号埴輪窯出土の家形埴輪

第1・3次床面及び灰原から若干量出土している。

400は、第3次床面(最終床面)に残されたもので、軸部の片側1/2と屋根の一端を欠損するが、ほぼ完形に復原できる。ただ、全体に器表の摩耗が進行し、細部の調整等は正確には観察できない。

切妻構造の屋根を備えたもので、側面からみて破風板も含めた屋根高と壁高がほぼ等しく均整のとれたプロポーションを呈する。軸部は、横断面が隅丸長方形を呈し(長軸約35cm・短軸約29cm)、隅部は緩慢に屈曲して稜角を残さない。立面形は各辺の長さが上に向うにつれ、わずかに縮小する台形状を呈する(軒先までの高さは約27cmを測る)。軸部の側廻り(壁面)には、縦長方形の穿孔による窓の表現以外、突帯や線刻はみられない。このため単調な外観を呈する。透し窓は、平・妻各面の中央に1個ずつ穿孔する。透し窓の規模は、窓枠の四辺を完全に備えるものがないため不明確である。いずれも下縁が裾廻台から同じ高さにあることから同形状を呈するものと思われる(ちなみに妻側の1個は幅8.5cm、平側の1個は高さ10.5cmの規模を測る)。

裾廻台は、円筒埴輪のタガに近い台形断面を基本とするが、全体に上面が水平に近く平坦面を呈するのに対し下面が丸味を帯び、かつ粗雑に造っている(接合部幅3.5cm・高さ約2.0cm・側面幅1.0cm)。



第74図 家形埴輪屋根部製作手順模式図

屋根部は、丸棟で妻のころびがやや大きな破風板を備える。破風板は、正面からみて大きく外下方に開く逆「U」字形を呈し、その下端は、水平に対し、わずかに上外方に傾くように直截的に終わる(実際は折損・摩耗して丸味を帯びている)。棟木は、妻壁上部が遺存しないので、その存否は不明である。屋根の流れの面には、屋根高さの中位やや上寄りで横向きに二重の弱い沈線があり、破風板にかたよったところに、この水平線から上位に派生する1条の垂線がわずかに認められる。これらは、押縁の痕跡と考えられ、特に横押縁は粘土帯の貼り付けによって表現した可能性が高い。また、この剝離痕に接して「X」



字状のヘラ記号が刻まれる。

製作は、基本的には前記の16号墳例(252)と同様の手法(屋根部一括成形)を用いている。すなわち、粘土紐の積み上げ(底部輪台の幅は5.0cm、他は2.0~4.0cmの粘土紐を使用)によって成形(器壁内外をタテ基調のナデで成形する)した軸部に、2枚の粘土板(数本の粘土紐を積み上げて製作)を屋根下半として、その上位に粘土板と直交する方向の粘土紐を横向きに架して製作した屋根部を合体させる。ただ、詳細にみると16号墳の例と異なった手法が何点か指摘できる。例えば、屋根の棟部(上半部)を製作する際、この資料では、横に架けた粘土紐を一気に全面に渡す一方の妻側に偏した位置に9cmほどの空間を残し、これを調整孔として利用した後、粘土塊を内方から充填して埋めている。また、屋根部本体と破風板は、はじめから、屋根部本体を破風板の形状に合わせて製作するのではなく、上方からみて長方形に仕上げた屋根部の四隅をヘラ状工具で斜めにカットし、さらに妻側の中央部に平面三角形状の粘土板を補充して三角形状の妻面を形成する。破風板は、この屋根部の妻縁の流れ面に接合するのではなく、屋根部本体の断面(端面)に貼り付ける。この際、破風板と屋根上面との間に粘土を補充するため、棟から破風板にかけての屈曲は緩いカーブを描く(ただし、屋根板の妻側中央部の三角板は、破風板接合後、そこに空いた空間を埋めるべく補充した可能性がある・第74図参照)。

器面の調整は、軸部・屋根部ともに外面にのみ施す。いずれも不明瞭ながら、タテハケ調整後にナデ(屋根部はヨコナデ)を加えて器壁を平滑にする。線刻・穿孔・裾廻台の製作は器面の調整後に行う。

401・404は、妻壁の上半部で、400と同一個体の可能性がある。中央部に直径6.0cmの円孔を穿ち、その直下に梁材を表わす沈線を2条線刻する。沈線を境にこれより下は平側の壁体と接続していたことが破面から推測できる。3.5~6.0cm幅の粘土帯(板)を3枚貼り合わせて成形し、山形の上端面は、板状工具で押圧を加えて平滑に仕上げる。

425~427は、第1次床面で採取された小片である。このうち425・426は、破風板の断片と考えられ、425は、遺存する部分に限ると、屋根板の妻部分を折り返すように成形して破風板としている。内面に妻壁との接合痕が残る。

427は、一辺25cm程度の辺長を有する軸部(16号墳例よりやや大きい)に付された裾廻台の断片で、側面が外下方に傾く低い台形断面を呈する。上面のみヨコハケ調整で平滑にし、側面は、隅部に稜角を設けるように板状工具でナデて仕上げる。

452~456は、灰原より出土した。452は、直角に鋭く屈曲する板状部の外面に、屈曲稜線と平行する線刻を縦横に施したもので、屋根もしくは壁の隅部と考えられる。器面にはハケ(内面はタテハケ、外面はヨコハケ)を施した後、ナデ(外面はタテナデ)を加えていね

いに調整している。

453～455は、裾廻台の一部、456は、壁に比定できようか。

436は、窠体内堆積土中より出土した。板状の側面をヨコハケーナデでいねいに調整した後、横向する2～3条の平行線の中を交差する斜向線で充填する構図の線刻を施す。側廻り(壁)の一部であろうか。

## b. 蓋形埴輪

上人ケ平古墳群出土の形象埴輪の中で最も量が豊富で、およそ各古墳から普遍的に出土している。

### (a) 円筒埴輪A類に共伴する蓋形埴輪

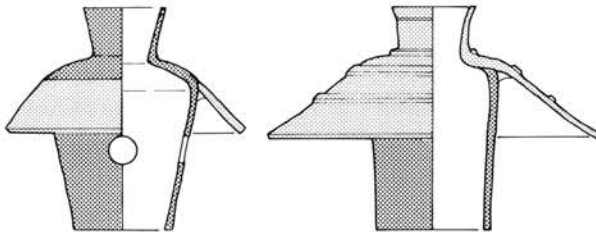
16号墳から完形もしくはそれに近い状態に復原できる個体が4個体出土している。

251は、笠部最大径55.6cm、立ち飾りも含めた高さ約70cmを測る中形品である。笠部本体の形状は、肩部にやや内湾するカーブを残すものの、全体としてやや外反ぎみに広がる笠部を有する(軸受部を除いた笠部高÷笠部径×100=23.38)。その上端に、接合部径が相対的に広く口縁に向かって直立ぎみに緩く外反する軸受部が取り付く。円筒形台部(以下台部と記す)は、底径20.6cm・器高約31cmを測り、一律の勾配(外傾指数)で緩く外傾する側面形を呈し、笠部高(笠部下縁から軸受部との接合部までの高さ)の1/2よりやや上で笠部と接する。

笠部本体の装飾として、低平な突帯が笠部下縁・同中位・軸受部との接合部(以下、頸部と記す)・軸受部口縁端部のそれぞれ外面に造形し、台部には円形透孔を四方に穿孔する。このうち、頸部突帯は、屈曲部の笠部側に位置し、一辺を水平にとる低い断面<sup>(注18)</sup>三角形を呈する。その他の突帯は、幅2cm前後・高さ0.2～0.5cmの低い断面台形を呈し、笠部の中位突帯は台部接合点に位置する。笠部の中位突帯と笠縁部の突帯との間の笠部外面には、放射状の線刻沈線は施さず無文のままである。また、台部の穿孔は、直径6.0cm前後の円孔を、

台部下寄りで等間隔に穿つ。

笠部本体は、いわゆる笠部分割成形技法によって製作する(第75図<sup>(注19)</sup>参照)。すなわち、笠部と台部を別個に製作して合体させるのではなく、台部と笠部上半を連続的に製作し、これに笠下

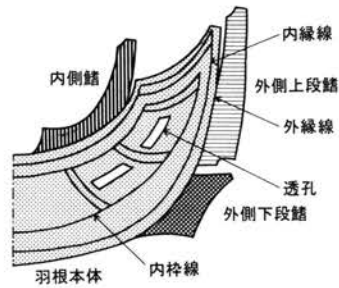


笠部分割成形(16号墳例)

笠部一括成形(9号墳例)

第75図 蓋形埴輪笠部成形概念図

半部(以下笠縁部と記す)を後から付加する方法を採る。具体的にみると、まず、輪台(一帯造り)を基礎に粘土紐を積み上げ、内外にていねいな右に傾くタテナデ(成形用)を施して台部を造る(調整は省略)。続いて、短時間の乾燥工程を挟んで、粘土紐の積み上げによって笠部上半及び軸受部を連続して製作する。この際、器面の成形としてヨコナデ(笠上半部)・タテナデ(軸受部)を用いるが、笠部内部は施行が粗雑で粘土紐の接合痕



第76図 立ち飾り名称図

を十分ならしきれてない。器面調整は、外面のみ施行し、突帯製作前の段階で完了する。つまり、笠上半部はヨコハケ後軽いユビナデを、軸受部はタテハケの後、口縁内面に至るヨコナデ調整を加えて器表を平滑に製形する。その後、長時間の乾燥工程を経て、台部と笠上半部との屈曲部の外側面を基礎として外下方に垂下する笠縁部を付加する形で製作する。その方法は、粘土紐を順次継ぎ足していねいなヨコナデ成形を加えて笠縁部を造り、接合部下面に粘土を補充することで安定をはかっている。笠縁部の調整は、器表摩耗のため観察できないが、少なくとも内面調整は省略している。

立ち飾りは、四方に展開する「J」字形羽根本体の内側辺に1か所(内側鰭)、外側辺に2か所(外側上段・下段鰭)誇張された鰭が取り付く(第76図参照)。各鰭の端部は、面取りするため鋭角的には終わらず、特に、内側鰭と外側上段鰭の上端には内傾する段状の造形を施し、外側上段鰭の下端にも段状の表現を造る。「J」字板本体は、上段鰭より低く表現し、その最上辺は、内外の鰭上端を結ぶように弧状にえぐっている。

羽根板面の線刻は、各羽根の表裏とも共通しており、上方にのびる内外の鰭部と羽根本体を分割する切り込みの先端を始点に、羽根本体と形骸化した鰭を分離する界線(外縁線)を設け、そのすぐ内側に沿って内縁線(縁採り線)を表わす。さらに、その内方の本体中軸寄りに内縁線ラインに沿った枠線(内枠線)を加え、その内側に、本体上辺ラインに沿った2本組の円弧線を3単位配し、この円弧線に挟まれた外側の2空間に長方形透孔を穿つ。

立ち飾りの製作は、「U」字板の中軸の表裏に「J」字板を接合することで造形している可能性が高い。各羽根は、接合部から外上方に向かっていねいにハケ調整した後、ヘラ状工具で各鰭を切り出して造形し、穿孔して最後に線刻を施す。<sup>(註20)</sup>

248は、251に比べやや規模が小さく、笠部最大径49.0cm・笠部本体高さ46.0cm・立ち飾りも含めた総高約70.5cmを測る。

笠部本体は、丸味を帯びて深い菅笠状を呈する笠部を有し(軸受部を除いた笠部高÷笠部径×100=31.43)、その上位にやや外傾するように直線状にのびる軸受部が取り付く。底径

19.5cm・器高約31cmを測る台部は、上位に緩く外反しながら、笠部高の2/3付近で笠部と接合する。

笠部本体外面には、低平な突帯が、笠縁部・笠中位・頸部・軸受部口縁端に合計4条めぐり、台部には器高の1/2よりやや上に横長円形(7.0cm×6.0cm)の透孔を穿つ。笠部突帯のうち、頸部のそれは笠部側に位置し、その内側面は軸受部に重なるように融合するため、上面が内湾する低い三角形断面を呈する。その他の突帯は、接合部幅1.6cm～2.8cm、高さ0.4cmの低平な台形断面を呈し、軸受部口縁を除き粘土帯を貼り付けて製作する。軸受部の口縁突帯は、本体から粘土を押し出して造る。

笠部の中位突帯と笠縁突帯に挟まれた笠部下半外面には、沈線を放射状に施す。その内容(原理)は、突帯間の施文帯を上下に二分する1条の沈線(界線)で2段に分割し(下6：上4の割合)、上下段で交互に3本1組(3線帯)の放射状沈線を13単位配している。なお沈線による施文は突帯製作後に行う。

笠部本体の製作は、笠部分割成形による。

器面の調整は、笠部外面(断続的でないヨコハケ)及び軸受部(内面は左上りヨコハケ、外面はタテハケ)にいずれも突帯の製作前に施し、それ以外のところには成形段階のナデ(台部内外面はタテナデ、笠縁部内面はヨコナデ)を施すのみで、調整は省略する。

立ち飾り部の形態及び線刻による文様は、基本的には251と共通する。ただし、羽根板の中軸上に透孔はなく、全体に左右の羽根板の内湾度が増して、その分最大幅が減少している。内側鱗は、一層誇張し、その上端は「J」字板本体より大きく突出する。また、羽根板の線刻は、251では外縁線と内縁線を接近した複線として表現しているのに対し、248は、外縁線に内縁線及び内枠線を上縁部でほぼ均等に割付けている。

立ち飾りの製作技法は251と共通しており、外上方へのハケ調整の後、鱗を含めた外形ラインを切り出して造り、最後に線刻を加えて完成させる。<sup>(注21)</sup>

249・250は、笠部下半(笠縁部)のみの資料だが、いずれも完周し、笠部径は、249が48.3cm、250が47.7cmを測る。いずれも248と近い丸味を帯びた逆碗形の断面形を呈し、笠縁部外面には同様の放射状沈線を線刻する。ただ、249の場合、上段の放射状単位を一部2線帯に省略している。

器面の調整は、外面(笠縁部)にのみ緩い円弧を描きながら前後に重なるでないヨコハケを施し、内面は省略する(整形段階の粗いユビナデが残る)。笠縁部の内面には、台部との接合の際の補充粘土が残り、笠部分割成形で製作したことを示す。<sup>(注22)</sup>

この他、249・250のいずれかに接合すると考えられる軸受部がそれぞれ存在する。わずかに外傾ぎみに立ち上がる断面形を呈し、口縁外端部に押し出し成形による突帯をめぐら

せる。器表外面にはタテハケ・ヨコハケの複次的な調整が認められる。また、これに組み合う立ち飾りは、248と全く同形態で、線刻による文様の内容や製作技法も共通する。

この他、5号墳・8号墳の周濠(溝)内より断片資料が出土している。

このうち、5号墳では、立ち飾り部・軸受部・笠縁部が確認できる(図版第17参照)。

立ち飾りは、その形態や施文方法から2種類に分けられる。その一は、羽根板の中軸線上に長方形の透孔を穿ち、基本形態や線刻は16号墳例の251に共通する。ただ、5号墳例の場合、全体に規模が大きく、82のように線刻に粗雑さが認められる個体も含まれる。

これに対して、84は断片資料で全形がわからないが、前者と全く異なった形態及び施文方法を採用している。すなわち、羽根板は、前者に比較して幅が狭く、内側に上端が鋭角に終わる鱗を配する(外側鱗は不明)。羽根板本体の施文は、粘土塊を貼り付けて表現する。つまり、本体の外縁線に断面台形の突帯を設け、上下(内外)両突帯間に円形浮文を軸線に沿って連続的に配する。また、各突帯及び浮文の外縁にはヘラ状工具で縁取り線を刻む。

立ち飾りの製作は、前者の場合、86にみられるように「U」字板の中軸の表裏に「J」字板を貼り付けて四方に展開する四枚羽根の基礎を造り、羽根板面に中軸を始点として外上方に向って、下位から重複するようにハケメを重ね(85より)、その後、鱗などを含めた外形ラインを切り出して、線刻・穿孔を加えて仕上げる。

軸受部(87)は、頸部から緩く外反した後、口縁端でわずかに内湾する断面形を呈し、口縁端部外面に丸味を帯びた突帯がめぐる。器壁外面は端部に至るまでヨコハケ調整し、その後、粘土帯を貼り付けて突帯を製作する。笠縁部(88・89)は、笠縁端部外面に幅2.0cm・高さ0.5cmの突帯をめぐらせ、3本1組の放射状沈線を線刻する。外面の装飾は、器面を調整(ヨコハケ)した後、まず突帯を貼り付け、その後線刻を加える。

8号墳からは、長方形の透孔を有する立ち飾り片が出土している(209)。この破片の場合、外縁・内縁・内枠線を等間隔に配している。

#### (b)円筒埴輪B類に共伴する蓋形埴輪

14号墳から完形に復原できる個体が1点出土している(285)。

285は、笠部最大径49cm・笠部本体の高さ23cm・立ち飾り部を含めた総高約72cmを測る。笠部本体の形状は、やや内湾ぎみに外上方に開く台部(底径15.3cm・高さ27cm)に、その接点を境にして、「S」字状にカーブする笠部(笠部上半部は内湾し、笠縁部はわずかに外反する)がとりつき、その上に外上方に直線的に開く軸受部を設ける。台部の接点は、笠部高の約1/2位にある。

笠部本体の装飾として、4条の突帯が笠縁部下端・笠部中位・頸部・軸受部口縁端のそれぞれ外面に横方向にめぐる。このうち、頸部突帯は、屈曲部の笠部側に位置するため、

その内側面が軸受部に重なって、上面が長く外傾する三角形断面を呈する。この他の突帯は、いずれも低平な断面台形を呈するが、台部との接合部上面の笠部中位突帯を粘土帯の付加によって製作しているのに対し、端部に位置する他の2者は、器壁の押し出しによって成形している。

台部には、相対的に規模の大きな円形透孔(直径7cm前後)を対向するように穿孔するが、その位置が上に偏る(円孔の中心が台部高の約2/3の高さにくる)ため、その上半部は、真横から見ると笠縁部に隠れてみえない。

笠部中位突帯から笠縁部突帯までの笠縁部外面には、線刻による放射状表現はみられず、無文のままである。

笠部本体の製作は、笠部分割成形による(第75図参照)。この個体の台部から笠上半部に至る製作は、台部上端部を外上方にひねり出し、その端部内面をベースに粘土紐を積み上げて笠部上半を成形している。

器面には、台部は内面のみタテハケを施し、外面は成形段階のタテナデのみで、調整は省略する。笠部の調整は外面にのみ施し、分割成形に対応し上下別に行う。笠部上半は、放射状ハケ(タテハケ)の後、右下りのナナメハケを加える。笠縁部外面は、放射状ハケ(タテハケ)の後、断続的で円弧を描きながら施行方向に重なるヨコハケ調整を行う。笠部内面は、ハケメが認められず、上半部は、粘土紐接合痕を十分ならしきらない粗雑なナデ・オサエ(成形用)がみられ、笠縁部には粗いユビナデ(斜基調)を施す。軸受部は、内外面とも調整を施す。外面は、笠部上半から連続するタテハケ調整した後、軸受口縁突帯を成形し、ヨコハケを加える。内面は、ていねいなヨコハケの後、部分的にヨコハケを加える。

立ち飾り部の形態や文様の内容は、基本的にはA類の共伴資料のそれを踏襲している。ただ、形態的には鰭部の誇張がさらに増し、本体の形骸化が一層進行している。また、羽根板の線刻をみると、羽根本体と鰭部を分離する界線を1本で表し、A類にみられる内縁線が、ここでは省略される。内枠線内には2本一組みの円弧線を3単位配し、円弧線間は穿孔しない。<sup>(註23)</sup>

この資料は、受皿部が良好に遺存し、羽根部との接合方法が観察できる。すなわち、「十」字板として完成した羽根部の中軸寄りの底部に、あらかじめ、凹レンズ状のえぐりを入れ、えぐりの下面に刻み目を入れておく。一定の乾燥後、このえぐりのカーブに合わせるように受皿部を粘土紐を積み上げて製作し、両者を接合する。最後に外傾する受皿部口縁の側方の羽根部に生じた三角形の間隙に粘土を補充し、羽根板下縁部が受皿側面から派生したように造る。

立ち飾り部の調整は、各羽根とも断続的なハケメを用い、その手順は、内側から序々に

外側に向かって展開し、各単位内は上位から下位に進行する。

受皿部は、羽根部に接合した後、口縁部のみ内面にヨコナデ、外面にヨコハケを<sup>(註24)</sup>施す。

(c)円筒埴輪C類に共伴する蓋形埴輪

15号墳から立ち飾りの羽根板1枚分が出土している(332)。

羽根板の軸部寄りと先端部を欠くが、形態や線刻表現はA類共伴の蓋と変わらない。

羽根本体と内外の鱗を限る界線は二重線で表し、B類の共伴資料のように内縁線を省略することはない。相対的に厚手の造りで、器面の調整には中軸から外上方に指向するハケメを施す。

(d)円筒埴輪D類に共伴する蓋形埴輪

1号墳及び9号墳から断片資料が出土している。

笠部(375・376)は、焼け歪みによる変形がみられるが、頸部より緩くカーブする肩を経て、外下方にわずかに外反ぎみに垂下する断面形を呈し(笠部最大径は375で46.5cm、376で46.8cmを測る)、その上端に接合部の直径が相対的に小さく(頸部径は375で9.3cm)緩く外反する軸受部が取り付け(336・374)。

台部(377)は、底径15.0cmで、口の余り広がらない形状を呈し、笠部とは、笠部高の3/4にあたるかなり上位の内方にかたよった位置で接している。

笠部本体外面の装飾は、いずれも横方向に突帯を貼り付けたのみで、線刻表現はみられない。突帯は、笠部中位と頸部、軸受部上端のそれぞれ外面に造形され、375の場合、笠の肩部外面にも存在する(笠部下縁には突帯は付さない)。このうち、軸受部上端の突帯は、外方にわずかに肥厚する程度で、その下面にヨコナデを強く施すことで器壁を押し出して成形する。その他の突帯はいずれも比較的小ぶりで、粘土帯を貼り付けて製作する。このうち頸部突帯は、屈曲部の笠部側に位置し、丸味を帯びた断面台形を<sup>(註25)</sup>呈する。笠部中位の突帯は、台部との接合部よりかなり下位にめぐり、375の場合、肩部突帯が通常の中位突帯に代わってこの接合部の外面に<sup>(註26)</sup>位置する。

立ち飾りは、2種のタイプが確認できる。1つは、378～380にみられるように、形態的特徴や線刻方法に前記の立ち飾りの特徴が痕跡的に残るものである。それでも、その形骸化は著しく、鱗の造形に関しては、羽根板上面の切り込みが内側鱗にしかなく、外側鱗は、外側面中位に切り込みを入れることで外側の上下鱗を分割しているにすぎない。また、内側鱗のさらに内方に突起を設け、別の小さな鱗状に造り出している(内側下段鱗)。

羽根板面の線刻についても縁線と枠線の区別がなく、本体を囲む複線(部分的に単線に省略したところがある)間に、本体上辺と平行する2本一組みの円弧線を4単位橋渡ししている。この立ち飾りは、すでに述べた個体と同じ方法で四枚羽根状に成形し、その下部に受

皿部を接合した後、各羽根面のハケメ調整(中軸線から外上方へ施した後、さらにやや傾くタテハケを加える)を施し、線刻を加える。そして、最後に刀子状工具で各羽根の外形を切り出して鱗部等を表現する(外形切り出しと線刻施文を施す順が従来とは逆転している)。

一方、381の立ち飾りは断片資料であるため全形を知ることはできないが、その形態や線刻が一般のものとは比べ全く異質である。残存部をみると、外縁には側方からの切り込みが入り鱗状に表している。羽根本体に相当する部分は1条の沈線で囲み、内側上は斜交軸をもつ直弧文風の線刻を充填し、部分的な穿孔(形状不明)を加える。器表にはハケメ調整を施し、その後線刻による施文を行う。

焼成は、笠部本体が硬質の須恵質であるのに対し、立ち飾りは土師質で黒斑を有するものもある。<sup>(注27)</sup>

#### (e) 1号埴輪窯出土の蓋形埴輪

第1・2次床面及び灰原から小片資料が出土している。

421・422は、第1次床面で出土した。421は、受皿部で、体部と口縁部の境がわずかに屈曲する断面形を呈する。笠部との移行部内面に断面三角形の帯状粘土をめぐらせて受皿底部を造るが、中央部は埋めず、水抜きのためのすきまを残す。器面は、外面全体をタテハケした後、口縁内外にヨコハケを加えて調整する。

422は、笠縁部の小片で、その外面下縁に低平突帯を付加している。突帯製作には布を介させたヨコナデを用い、このため細い条線が残る。

429は、第2次床面出土の笠縁部の小片で、外面に放射状沈線と笠縁突帯をめぐらせる。

457～464は、1号窯前面の灰原で出土した蓋形埴輪片で、笠部(457～459・462～464)と立ち飾りの鱗部(460・461)が確認できる。複数存在する笠縁部の大部分には、外面に3線帯による放射状沈線が認められ、いずれも笠縁部外面に低平な突帯がめぐる。459は、笠部上端の小片で、低平な台形断面の頸部突帯が、受部との屈折点から離れて笠部側に独立してめぐる。

### C. 盾形埴輪

5・8・17号墳及び1号埴輪窯の窯体埋土・灰原から小片が出土している。大半が鋸歯文を盾面の主文様とするタイプである。<sup>(注28)</sup>

#### (a) 円筒埴輪A類に共伴する盾形埴輪

上人ヶ平古墳群では、円筒埴輪A類が出土する古墳にのみ盾形埴輪の出土が確認できる。

94・96～98は、いずれも盾面の側辺(側縁)の断片で、盾面に鋸歯文系の線刻を施す。<sup>(注29)</sup> 94・96・98は、文様内容が共通しており、直線状をなす盾縁ラインに沿って2条の平行する縁



取り線を入れ、内区との界線(94で1条確認できる)との間(外区は94では幅11.3cmを測る)に鋸歯文を配する。外区の鋸歯文は、外郭線(三角形の斜辺)の頂点(交点)よりのびる垂直二等分線を明確に設定していない。このため外郭線内を埋める充填線は、斜辺に平行して垂直二等分線を境に反転する通常の構図をとらず、頂点に収束するように乱雑に配している。また、鋸歯文の方向は、94・98が外向き(底辺を内方に向ける)であるのに対し、96は内向きに配す。

製作にあたっては、円筒支持部の前面をも利用し、その両側に側縁部を鱗状に付加して盾面を造形する方法を採る。また、両者の接合部は、円筒側に接合傷(斜行沈線)を刻んでいることから、一定の乾燥工程を経ている円筒部に、長軸方向に粘土紐を積み上げて成形した外縁部を内側に補充粘土を介して接合する。

97は、側縁を欠損しているが、盾面には1条の縁取り線で区画された内区に、平行沈線を充填する菱形文を配している。

95は、やや湾曲する板状部の一面に直線状の外縁線に平行する二重の縁取り線と、その内区に直線と弧線からなる線刻(直弧文?)を配している。盾である確証はない。

8号墳出土資料(212)は、器表が著しく摩耗しているため、線刻は全く残らない。製作は、円筒支持部に外縁部を鱗状に付加し、盾の裏面側にのみ粘土を厚く補充して接合を補強する。外縁部は、粘土紐を縦に並べて成形する。

#### (b) 1号墳輪窯出土の盾形埴輪

434は、窯体内堆積土中から出土した。外縁線が円弧を描くことから、上縁が弧状に膨らむ形式の盾形埴輪の頭部(上辺から側辺に移行する部位か)に相当する。盾面外区には、外縁に沿って一単位の綾杉文帯で縁取り線を設け、その内方に外向きにして鋸歯文を配している。さらに、この鋸歯文内には垂直二等分線を設けないが、それを仮想して屈折する斜辺に平行する相似形条線で充填している。器面調整は、線刻前に外面にはハケメ、内面は指頭ナデ(内外とも施行方法は一致する)を用いる。これと接合する個体が灰原から出土しており、両者を接合した実測図を図版第48に掲げる。

435も綾杉文帯で外区外縁を縁取りしており、前者と同一個体と考えられる。

465～472は、1号窯灰原から出土した。465・466は、同意匠の線刻を有し、同一個体とみられる。465は、盾面の左側縁と上縁部の交差する隅部に相当する。両者とも盾面の施文内容は共通しており、直線状を呈する外縁に沿って2条の平行条線による縁取り線を配し、内区との境は上辺・側辺ともに1条の沈線で外区(上辺・側辺)と界している。上辺と側辺は、内向する鋸歯文を横に連接させるが、上の鋸歯文帯が側辺のそれを覆い隠す構図(いわゆる<sup>(註30)</sup>Ⅱ字形)は採らない。ただ、側辺の鋸歯文が優先され、上辺と重なる部分で、上辺の鋸

歯文を矮小化させている。外区の鋸歯文は、垂直二等分線を設け、これをもとに屈折する斜辺に平行する相似形条線で充填する。また、側辺に限り、隣接する鋸歯文間を平行沈線（上辺と重なる部分のみ横方向、他は縦方向）で埋める。内区は、縦横に等間隔に割り付けられた格子状の平行線（横方向の線は、側辺の鋸歯文の垂直二等分線に一致し、縦方向の線は上辺の鋸歯文間の界線となる）によって分割されたそれぞれの方形区画の対角線を結び、隣接する区画との間に生じる菱形文を市松状に接続する。この菱形文は、さらに方形区画を縦に二等分する線（上辺の鋸歯文の垂直二等分線と一致）によって四分割し、この分割線を折点とする相似方格文で内部を充填する。また、菱形文間は、側辺と同じく縦の平行線で埋める。なお、465では、内区菱形文の割り付け線が、鋸歯文の線刻に先行して上辺部分に残る。

製作は、円筒支持部に外縁部を鱗状に付加し、接合部内面に補充粘土を施す（ただし466は、補充粘土を用いず、器壁を押し出して接合している）。器面は、外面では、ヨコハケ後ナデを加えて盾面を平滑に調整している。

470は、盾面に2条の平行線間に直交する橋渡し線を接続させる「はしご状」の縁取り線を設け、これを底辺としてその内方に内向する鋸歯文を配する。鋸歯文は、垂直二等分線で屈折する斜辺平行相似形条線で充填する。円筒支持基台への接合は、補充粘土を用いず、外縁部の器壁を押し出して接合する。

467・471・472は、いずれも外縁部の破片で、前記のものとは比べ単位文様がひとまわり大きい。線刻に精緻さが無い。外周の縁取り線は3本の平行線で、内部を綾杉状に分割するか、内側2本間に斜線を接続させる。鋸歯文間は465・466と同じように充填するが、充填線が乱雑で、472は、内湾するカーブを描く。盾面は、いずれもハケ調整しており、裏面は整形段階のナデ（縦位主体）のみで調整は加えない。

#### d. 靱形埴輪

5・8号墳から出土している。

8号墳例(173)は、矢筒部(筒部)の上縁を飾る背板部分に相当する。ただし図示したものは、断片資料を図上で復原したもので、特に側方に展開する上縁背板は直接接合しない左右の個体間に、胎土や施文内容の差異が認められないことから、別個体の可能性を残し、したがって復原図の横幅は推定の域を出ないことをことわっておきたい。

残存部は、全体として1枚の平板な板状材の周縁を切り出すことで大小の鱗状に造形し、その一側面にヘラ状工具による線刻を施して、各部の表現及び文様帯を構成する。

筒部の上位を囲む部位には、2本の平行する直線帯が筒を覆うように「冂」状にめぐり、

いわゆる「背負板」の外縁を表現している。この場合、背負板の側縁は、下方に向かって内湾することなく、直線状に緩く内傾している。また、この「背負板」上辺部の両側端の外縁に、この区画にその1/4を被覆された小さな円形区画(いわゆる「肩かけ紐」<sup>(注31)</sup>の表現)を配している(外周の径は約5cmを測る)。この円形区画は、数条(左側で3条)の圈線で構成され、その最も内方を背負板の角を残して穿孔する。

背負板や肩かけ紐と同一面で、これを取り巻く外縁部(これを「翼状部」と仮称する)は、平面逆台形を呈し、直線的に内傾する側辺の下端は、内方に屈曲するように切り込んで、背負板の側縁に取り付く。翼状部の上辺には、左右に展開する一対の鱗飾りを表現し、またその内部には、外周ラインに沿って1条の縁取り線を配し、さらにその内方を綾杉文に近い形骸化した直弧文で充填する。その充填文の構成は、翼状部の形状に規制されることが大きい。これを綾杉文の変形とみた場合、その中心軸線が複雑に交錯するため、2本1単位の子葉線が不規則に配される繁雑な構図になる。

製作手法は、幅のある粘土帯を横位に積み重ね、内外にタテ基調のナデを施して板状に成形し、外面に左上りのヨコハケ、内面にユビナデによる調整を施した後、ヘラ状工具を用いて外形を切り出す。線刻及び穿孔は調整後に行う。

支持基台となる背面の半円筒部(基台)は、裏面に残された接合部の補充粘土の痕跡から、背負板の両側辺より内方で、本体の板状部と接合しており、筒部と幅を揃えて一括成形した後、背板を鱗状に付加する製作方法を採用したものと考えられる<sup>(注32)</sup>。

#### e. 鶏・水鳥形埴輪

量的には少ないが、5・8・9号墳及び1号埴輪窯から出土している。

##### (a)円筒埴輪A類に共伴する鶏・水鳥形埴輪

5・8号墳例がこれに相当する。118~121は、5号墳の周濠から出土した。118は、造り出し部の北側のくびれ部付近で出土したもので、大形の鶏形埴輪の頭部である。頭頂から前方のとさかと、喉元に垂下する肉髯を欠損しているが、その存在を示す痕跡を残している。頭部本体は、嘴に向かって収束する琵琶形を呈し、嘴の上端から後頭部にかけて、上辺が大きく鋸歯状に切れ込んだ単冠のトサカを大きく表わす。頭部両側面には、竹管状の刺突(直径約0.9cm)による目と、円盤状粘土(直径約2cm、高さ0.5cm)を貼り付け、その中央部に軽く円形刺突を加えた耳を表現する。嘴は、その先端部が摩滅しているが、やや下方に垂下するように尖り、側面に1条の沈線を入れて写實的に造形する。

製作技法は、粘土紐積み上げによる頭部の一端(嘴側)に、上からみて三角形を呈する粘土板を付加して下顎部とし、この上部に粘土紐を横位に渡して頭部を形成する。トサカは、

板状粘土を貼り付け、接合部の両側には粘土を補充して固定する(補充粘土は、ユビナデによって基壇状に成形する)。

119は、118に比べると小規模なトサカの断片で、その一辺が浅く鋸歯状にえぐられている。断面形は、頭部との接合部に向かって徐々に幅を広める三角形を呈する。

120は、横方向に緩く内湾する板状部の外面にカーブを描く平行沈線を充填した規模の大きな破片で、大形の鳥(鶏)の胴部または、尾部の可能性もある。製作は、横位に粘土紐(幅約3cm)を積み重ねて成形し、外表面にていねいなナデ調整を加えた後、ヘラ状工具で線刻を施す。

121は、突出する嘴を失うが、円頭状に丸く終わる頭部を有し、水鳥と考えられる。頭部の両側面には、棒状工具(直径0.8cm)の刺突穿孔による目と、竹管状刺突(直径0.3cm)による耳孔を表現する。製作は1枚の板状粘土を鳥の前方側を合わせ目に接合して円筒形とし(このため前方に稜角を残す)、円筒部の上端を粘土で埋めて閉塞し、周囲に若干の粘土を補足して頭部をかたち造る。表面をナデで平滑に調整した後、耳・目を付加する。

221～223・225・227は、8号墳の周溝から出土した鳥(鶏)形埴輪の小片である。221は、トサカで、円弧を描く上辺が、浅く鋸歯状にえぐられている。

227は、鶏の頭部の断片で、外面に円盤状粘土(直径1.8～2.1cm・高さ0.4cm)を貼り付け、その中央に円形刺突を加える耳と、棒状工具(直径0.5cm)の刺突穿孔による目を表現する。

222・223・225は、板状粘土面に直接、あるいは別の粘土板を貼付成形した表面にヘラ描きによる平行沈線を加えたもの(223・225は、縁取り線を有す)で、鳥(鶏)形埴輪の胴部の羽根を表したものと考えられる。

#### (b)円筒埴輪D類に共伴する鶏(鳥)形埴輪

9号墳の周溝内より若干出土している(383・385・388)。

このうち、383は小形の鳥(水鳥か)の頸部から頭部にかけての破片で、そのほとんどの部分が粘土塊の手づくね成形により忠実に造る。ただ胴部に繋がる部分は中空の輪状を呈し、粘土紐の巻き上げで造形した胴部の前方を丸く収束させ、ここに別の粘土塊を用いて製作した頭部以上の部分を付加するように接合したものと思われる。遺存部の器表には縦方向に稜角を残す板状工具を用いたナデで調整する。頭部には目や鼻の表現を施さない。胎土は精良で、赤褐色の土師質に焼成しており、埴輪というより土製品と呼んだ方がふさわしい。

385は、頸部上半から頭部にかけての破片資料で、頭部は大きく破損して全形を窺えないが、その側面に円盤状粘土の貼り付けによる耳(直径2.0cm・高さ0.25cm、中央に径0.6cmの竹管文を刺突)を表現していることから鶏とわかる(図は右手が前方にあたる)。この個体の

製作は、粘土紐の積み上げにより成形した頸部の上端を大きく外反させ、その内端部を基礎に粘土紐を横方向(両耳を繋ぐ方向)に渡して頭部の上半を造る。器面の最終調整には、頸部は縦基調、頭部は横基調のていねいなナデを加えて仕上げる。

388は、確証はないが、口径を一定に保つ小規模な円筒部の上端が大きくラップ状に開いて、板状部に移行する破片で、馬形埴輪にしては脚径が小さい(直径約3.5cm)ことから鳥(水鳥)の脚部の可能性がある。器表の摩耗が激しく調整手法等は不明である。なお、脚部付け根に、棒状工具による円形貫通孔が1孔存在する(その性格については不明である)。

#### (c) 1号埴輪窯出土の鶏形埴輪・水鳥形埴輪

確実に鳥と判明する個体は窯体内(焼成面)にはみられず、窯体内堆積土中、及び灰原から出土している。

432は、緩い円弧を描く粘土板(本体部分)の側面に板状粘土を貼り付け、その下半部を本体から離反させ直線状に垂下させた個体である。その製作手法は、馬形埴輪の障泥や盾形埴輪の外縁部に似るが、その外面に横方向のヘラ描きによる平行沈線を線刻しており、鳥(鶏)の羽根部を表現したものと考えられる。

437は、1号埴輪窯の東南東40mの谷水田部に設けた試掘トレンチの河道状遺構から出土した。嘴の大部分と後頭部を失うが、器表の残りがよく、トサカや肉髯の痕跡が全くないことから水鳥の頭部とみてよい。頭部は、前頭部から嘴にかけて、その頂部に稜線を造り出して写實的に表現する。目は、竹管状の刺突(径約0.4cm)によって丸く表す。製作は、頸部を粘土紐の積み上げにより円筒状に造り、その上端の顔面側(前方側)に、平面隅丸長三角形の粘土板を貼り付けて頸部とし、これを基礎として、その上に前方からみて山形の粘土紐を載せるように2～3単位渡して頭部を製作する。その後、器面を丁寧にナデ調整して丸味をもたせ、最後に目を刺突している。

500～502は、1号窯灰原から出土した。このうち500は、鶏形埴輪の頸部下端から頭部にかけての資料で、嘴とトサカの上辺を欠損する。ほぼ実物大の大きさで、残存高(=頸下端から頭頂部までの高さ)は、約12cmを測る。トサカは単冠で、嘴の付根から後頭部にかけて別の粘土を貼り付けて製作するが、厚み(幅)が少なく、上端は、尖りぎみに終わる。耳は、直径1cm程の円盤状粘土を、かなり前方寄りの頭部の側面に貼り付け、その中央部に円形刺突(直径0.2cm)を加える。目は、器表が摩耗していることもあって残らない(ただし、先の耳が前方に偏って造ることから、これを目として意図した可能性もある)。製作は、全体が閉塞しているため詳細を知ることはできないが、少なくとも頸部は、幅3cm前後の粘土紐を積み上げて成形する。器表(外面)は、縦基調のハケメを施し、頸部上半から頭部にかけて丁寧なナデ調整を加える。

501は、板状粘土に別の薄板状粘土を貼り付けて段差を造り、上段外面に緩く円弧を描く平行沈線を線刻したもので、羽根を表現したものと考えられる。

502は、やや内傾する円筒部の外面に鏢状の突帯を付加したもので、この突帯の上面に三本指の足を表現している。鳥(鶏)形埴輪の台部にあたり、突帯は、とまり木が形骸化したものと考えられる。

#### f. 馬形埴輪

蓋形埴輪と同様、各古墳から普遍的に出土する形象埴輪であり、5・6・8・9・16・17号墳、及び1号埴輪窯の床面と灰原から出土している。

##### (a)円筒埴輪A類に共伴する馬形埴輪

5・8・16・17号墳出土個体がこれに相当する。

255は、17号墳の北側周溝斜面に横たわった状態で出土したもので、いずれも小片資料が多い中で、唯一全体を知ることのできる残存状態を示している。それでも馬体の一側面を完全に失い、残る側も脚部や尻尾など欠損する部位が少なくない。さらに、胴部と頸部間をはじめとして、直接接合しないか所をいくらか残すため、図示した実測図は若干の復元の根拠を欠くことをことわっておく。

個体の保存状態は、良好とはいえず、剝落や器表摩耗によって細部の表現や製作手法の詳細を知ることはいえない。

復元した規模は、全長83cm・残存高40cm・最大幅28cmを測り、馬形埴輪としては中形に属す。馬体そのものの表現は残存部をみる限り、比較的写実的で、例えば頭部は、頬骨や鼻梁の屈曲、あるいは鼻孔周りやまぶたの膨らみなどの微妙な表現などにみられるように、実物の馬の形態を忠実に模したものと考えられる。

馬装は、ヘラ描沈線と帯状粘土貼り付けの併用及び別の粘土による造形によって表現する。鞍部は、比較的残りが良く鞍本体以外に鞍褥、障泥が表現されている。前輪・後輪は素文で、それぞれ前後に磯金具を付設する。鞍褥は、薄板状粘土板を貼り付けて下方に突き出した匙状の形態に造り、その内部をヘラ状工具の刺突文で充填する(その方法は、匙状を呈する下半部の輪郭に沿って刺突を縁取り状に2列配し、その内部を横方向に連続させる)。障泥は、方形板の上部を本体に貼り付けて造り、その上辺を一段高くして1列の横に走る刺突文を加えて縁(金)具を表現する。鐙は、本体部分を欠損するが、これを懸垂する釣手が、鞍褥から障泥上部にかけて2条の平行沈線として残る(平行線間に粘土紐の剝離痕が残ることから、本来は粘土紐の貼り付け成形によって釣手を表していた可能性がある)。前輪・後輪は、馬の背中部に湾曲する粘土紐を積み上げて造る。磯金具は、別の粘土を接

合部に補充するように貼り付け、木葉形に成形した後、その輪郭に沿って連続刺突文による縁取りを施す。三繫は、面繫と尻繫が断片的に確認できる。このうち頭絡については、手綱と面繫が表現され、轡などの別個体の粘土の貼り付けによる立体的造形は現存しない(ただし、頭部先端の側面に長さ約8cm・幅約3cmの長円形の剝離痕が残り、轡の鏡板が貼り付けられていた可能性がある)。面繫は左右の頬帯とその背後にのびる項帯、目の上で頬帯の前面に渡す額帯、顔面の中軸を通る鼻梁帯をそれぞれ2条の線刻によって表現する(実際は、粘土帯を貼り付けて表現し、現状では、すべて剝落してその側面を成形する際の条痕が器壁に弱い線刻として残ったものと考えられる)。鼻帯は、その痕跡すら確認できないが、顎帯の痕跡がわずかに認められることや、鼻梁帯の存在から、備わっていたものと思われる<sup>(注33)</sup>。一方、尻繫は、やはり痕跡(2条の平行する条痕)にすぎないが、胴部の一側面に、後輪の磯金具の上下の位置から尻部に向かって平行する2条の帯状部がみられ、途中、雲珠から派生したであろう(雲珠は欠損する)縦方向の帯状部と交差する表現が認められる。垂下する帯状部の先端には、杏葉を表現したものと考えられるが、欠損して残らない<sup>(注34)</sup>。

109~116は、5号墳周濠内より出土した部位の判明する馬形埴輪の小片である。109~111は、鞍の前輪(後輪)の一部で、いずれも内外に磯金具を表現している。磯金具は表裏で形状が異なり、一方が大形で扁平であるのに対し、他方が小形で前後輪に対し垂直方向にのびている。後者は、鞍の内側にあたり、実物では存在しないが、前後輪を胴部に接合する際の補強として埴輪に形象する際に、造形上追加したものであろう。その製作は、胴部の背に沿って粘土紐を積み上げて成形し、表面をていねいなヨコナデで仕上げた前後輪の表裏に別個体の粘土を補充し、ナデで成形した後、その縁に沿ってヘラ状工具を垂直に押し当てる連続刺突文を配す。この刺突縁取帯は、109・110にみられるように、下弦の中央付近で途切れ、また、内方では、垂直方向に屈曲している。これは、尻繫が後輪の磯金具に取り付いていた痕跡と考えられる。

112・113は、板状部の一端に斜めに切れ込む接合痕があり、馬体胴部に斜めに接合した障泥と考えられる。粘土紐を横方向に重ねて板状にし、表面をナデ調整して、両端に連続刺突文を1条ずつ施文する(112)。

114~116は、小円筒形を呈し、脚部と考えられる。114・115は、脚底部で、蹄を表現している。このうち114は、通常脚部下端に、より口径の大きな円筒部をはめ込むように装着し、その後、側面を直角に切り取って蹄を極めて写實的に表現している。また、接地面の増大をはかって底面に粘土を補充している。一方、115は脚底部を外側に曲げるように広げ、外面の屈曲部に強くナデを加えて一段突出させ、蹄を表現する。116は、復原直径が約10cmを測り、さらに上端が外上方に広がる。胴部(腹部)との接合部付近の脚上半部である。

製作は、幅1.0～3.5cmの粘土紐を積み上げ、内面にヨコナデを加えて成形する。上端にはその内側にのみ補充粘土を加え、腹部に接合する。外面はタテハケを施した後、それをていねいにナデ消して平滑に仕上げている。

215は、8号墳周溝内より出土した脚底部である。蹄は、小円筒部の下端に帯状粘土を付加し、ユビナデを加えて段状に表現している<sup>(註36)</sup>。

(b)円筒埴輪C類に共伴する馬形埴輪

307～314は、6号墳より一括出土した断片資料で、胎土や色調等から同一個体と考えられる。

307は、顔部の小片で、口と鼻の表現がある。頭部の基部となる小円筒部(上半部のみ残存)の先端を上下2枚の粘土板で塞ぎ、外面にナデ調整を加えた後、その下半部を刀子状工具で前面から側面にかけて直線状(一文字状)に切り取って口部を表現する。鼻孔は断面が不整形を呈する棒状工具を刺突して穿孔する。

308は、一端が円錐状に徐々に狭まる形状の尻尾である。製作は、棒状工具を軸にして粘土紐を巻き上げて成形し、外面に布を介在させたナデを長軸方向に施して調整する。また、幅1cm程度の粘土紐を尾の周囲約1/3周にわたり螺旋状に巻き上げて、皮紐結束を表現する<sup>(註37)</sup>。

309～311は、脚部である。このうち309・310は、同形態を呈し、脚底から脚中央までは、脚の径をほとんど変えず、それより上位で緩く外反して胴部へ移行する。脚底は、円筒下端を外方に広げるとともに、補充粘土を付加することで周囲を肥厚させて、形骸化した蹄を表現する。脚部の製作は、口径を一定に保つ部分は、縦位に走る接合痕から、1枚の粘土板を輪状に接合して円筒部を造り、それより上は通常の粘土紐積み上げにより製作する。外面はていねいなタテナデを施し調整する<sup>(註38)</sup>。

312は鞍の前輪、313は同じく後輪である。ともに胴部と湾曲する粘土紐(幅約1.5cm)を3～4単位積み上げて三日月形に成形し、器面は、外縁ラインに沿った方向のユビナデで最終調整する。また、胴部との接合部は鞍の外方(前輪は馬の前方、後輪は馬の後方)にのみ補充粘土を加え、安定をはかっている。外縁の側面は特に調整を施さないため、丸く終わる。磯金具を表現しないが、後輪の外面には、尻繫を表現した幅1.5cm程の粘土帯が鞍状の表現を介さず直接取り付いている。

314は、短い粘土紐をその内面同志を合わせるように環状に繋いだ小片で、その上位を折損する。裏面が平坦で、何かから剝離した形跡を示すことや、その形状から輪蓋を形象したものかもしれない。

(c)円筒埴輪D類に共伴する馬形埴輪

385は、9号墳周溝内より出土した脚部で、上位に向かって直線的に径を増していく形状



を呈し、脚底部は全く肥厚しない(脚高17.5cm)。製作は、基底から8cmの高さまでは、粘土板を軸状部に巻きつけて成形し(内面にしぼり目が残る)、それより上位は幅2.0~2.5cmの粘土紐を4単位積み上げる。外面は、最後はタテナデを用いて平滑に仕上げる。器表の約1/2の範囲に黒斑がみられる<sup>(註39)</sup>。

#### (d) 1号埴輪窯出土の馬形埴輪

1号埴輪窯からは、灰原を中心に馬形埴輪の小片が多数出土している。ここでは、その部位がわかる資料を中心に図示し、それについて説明を加える。

402は、第3次床面より出土したもので、縦横の軸が天地・左右ともに内湾する板状部の外面に、上幅1.5~1.7cm・高さ0.7cmの低平な台形突帯を縦2条・横1条交差するように貼り付けしたもので、その形状から尻繫を装着した馬胴部と考えられる。その製作にあたっては、粘土紐を横方向に積み重ねて板状とし、外面にハケ調整を加えた後、ハケを完全に撫で消す。突帯(=尻繫)は、縦方向の突帯を平行するように貼り付けて製作した後、横帯をこれと重複する部分を除いて貼り付ける。突帯はナデにより台形状に成形する。

430・431は、第1次床面より出土したもので、430は、鐙を表現した鞍の障泥、431はたてがみの一部と考えられる。

430は、粘土紐を横方向に重ねて成形した板状部にナデ調整(外面のみ)を加え、別個体の粘土を貼り付け、内外をユビナデで成形して鐙を輪状に表現する。裏面には、胴部本体への接合のための補充粘土とその剝離痕が残り、本体から離反して垂下する部分は、わずか2cm程度を測るにすぎない。

431は、上縁が緩い円弧を描く幅2cmの板状埴輪片で、その形状からたてがみと判断した。実測図の右側を前部とみれば、頭頂部から円弧を描くように立ち上がり、背部に至って徐々に高さを減ずる側面形を呈する。

473~495は、1号窯全面の灰原から出土した馬形埴輪の小片である。

473は、目の穿孔部が下縁にくる頭部(顔部)の小片で、面繫として額帯と鼻梁帯を正面からみて「T」字形に表現する。顔部本体は、湾曲する粘土紐を横方向に積み重ね、最終的にはナデ調整を加えて造形する。面繫は別の粘土帯を本体に貼り付け、ユビナデによって低平な断面台形に仕上げる。目は刀子状工具で切り抜いて穿孔し、その上縁に粘土を補充してまぶたを表現する。

474~476は、板状部の一端が円弧を描き、他方に接合痕を残すものでたてがみの一部と考えられる。このうち475・476は、外縁線が強く湾曲することからたてがみの前端に近い部分と考えられる。製作の方法は、431と共通だが、474の場合、器面にハケメを施した後、それをナデ消している。

477は、頭部側面の一部分と考えられ、側面に横に走る頬革と、その右端で交差する鼻革(顎革)を粘土帯の貼り付けで表している。その製作は、上に開口する半截円筒部の上位に、より直径の大きな下に開口する半截円筒部を被せるように接合して頭部本体を成形し、表面をナデで仕上げた後、面繫を造る。面繫は、鼻革を製作した後、頬革を貼り付け、重複する部分を上重ねする。顎革は、頭部(下側の小円筒部)にまでのびない。

478は、円弧を描く板状を呈し、その一端が剝離面となる小片で、小規模な鞍の前後輪の可能性はある。器面は、円弧に沿う方向のナデで調整している。磯金具の表現はない。

479は、湾曲する板状部の一面に低平な台形断面を呈する直線状の突帯を貼り付けたもの。具体的な部位は不明だが、三繫の革紐の表現と思われる。

480・481も、縦横に湾曲する板状部の一面に一筋の突帯を貼り付けたもので、具体的な部位は不明である。突帯は両者とも、粘土紐を貼付してユビナデで軽く成形した後、ヘラ状工具で上面と側面を撫でつけて平坦にしている(側面の整形の際、工具の先端が板状部本体に至り、沈線を残す)。また、上面には先端の細いヘラ状工具によってその中軸に1条の沈線を入れ、これと直交する方向の刺突をこの沈線上に連続的に重ねる装飾を施す。

482は、鞍の後輪で、その片側部が残っている。後輪本体は、角に丸みを残す他は比較的直線的な外縁ラインを示す。後面(実測図の左側)は、磯金具とそれに取り付く尻繫の革紐及び後輪の外縁を縁取る帯状表現を、別個体の粘土の貼り付けによって表現する。磯金具は、素文で加飾しない。一方、前面には、その内側に磯金具のような補充粘土の剝離痕が残る。また、外縁に沿って1条の沈線を線刻する。

485も、鞍の前後輪の断片で、一面に磯金具を別の粘土貼り付けにより造り出す(裏面にも剝離痕が残る)。この磯金具状の隆起部の縁辺には、5号墳出土例(109~111)と同様、連続刺突文をめぐらせ、また上縁には1条の沈線を加えて縁取っている。

483・484・487は、鞍部の側面を示す断片である。このうち483・484は、下方に垂下する匙状の鞍褥を、馬体本体より精良な薄板状の粘土の貼り付けにより表現する。鞍褥の表面には、その外縁ラインに直交する方向に施行した1列の連続刺突文で縁取り、その内部を縦位の刺突文で充填する。484の場合、鞍褥の前方側に刺突文で縁取った方形の別区を設け(内部は充填しない)、この別区を起点として鐙の釣手が垂下する。この釣手は鞍褥製作後、粘土帯を貼り付け、ヘラ状工具を用いて断面方形に整形する(側面整形の際、本体に沈線を残す)。別区の縁取刺突文は、釣手成形後に施す。487は、輪鐙を粘土の貼り付けにより表現した個体である。鐙は、輪郭を杓受け部を表現するようにやや横長楕円形(長軸4.3cm・短軸3.0cm)で、その上部に上端が円頭状に終わる短い柄部を輪部と同一面で表現する。釣手は柄部より細く、その上面に1列の刺突文を配す。上端には、障泥面に線刻による鞍褥

の下縁を刻む。この個体の製作にあたっては、馬本体(胴側部)に、より精良な粘土を板状に貼り付けて障泥とし、その上面に線刻による鞍褥と別粘土の貼り付け成形による鐙を表現する。鐙は、表面は指頭ナデで平滑にするが、内外両側面はヘラ状工具の押圧で平坦にする。釣手は鐙本体製作後に粘土帯を貼り付けて造る。

489～495は、小円筒状を呈する脚部である。このうち489・491・492は、脚底部で、円筒下部を外方に押し広げ、その屈曲部外面にヨコナデを強く施すことで段状に成形して蹄を表現する。<sup>(注40)</sup>493・494・495は、脚の中央部あるいは胴部接合部付近と考えられ、徐々に口径を変化させている。製作は、幅1.5～2.5cm程度の粘土紐を積み上げ、押圧やヨコナデを加えて成形する。器面調整は外面のみで、タテ基調のナデを最終的に用いている。ただ494などは縦方向の稜角を残して断面が多角形状を呈するので、ナデに先行してタテハケ(タテ板ナデ)調整を施しているものと思われる。

(伊賀高弘)

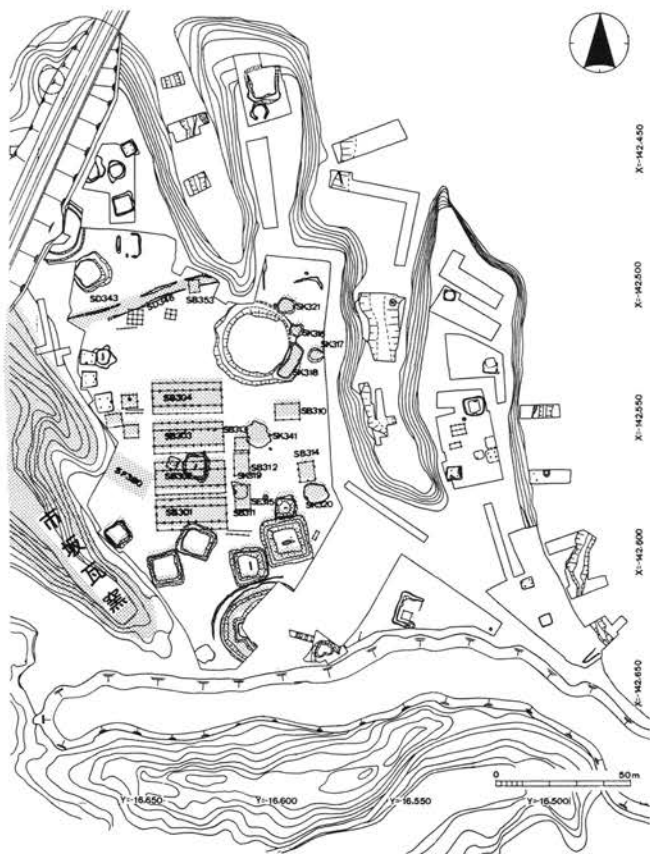
## 第5節 第Ⅲ期の遺構

奈良時代の遺構には、掘立柱建物跡・井戸・溝状遺構・土坑のほか、性格不明のピットなどがある。上人ヶ平遺跡が立地する台地上での奈良時代の遺構の分布をみると、Ⅰ支尾根・Ⅱ支尾根・Ⅲ支尾根の各先端部にはなく、台地中央部とⅡ支尾根の基部に集中する傾向がある。

### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は付表7のとおり、13棟の建物跡がある。各建物跡は、その分布・規模等から4棟の大形建物跡からなるA建物跡群(S B 301・302・303・304)、A建物跡群の東側にあるB建物跡群(S B 310・311・312・313・314)、A建物跡群の西側にあるC建物跡群(S B 307・308・309)に大別できる。

以下、各建物跡の規模等その概略を説明する。なお、各建物跡の掘形及び柱穴の説明に際しては、建物跡の南東隅の掘形を「一イ」とし、南北方向に一、二、三……、東西方向にイ、ロ、ハ……で表示する。



第77図 第Ⅲ期の遺構概念図

### ① A 建物跡群

A 建物跡群は、台地中央部の中心にあり、2間×9間の身舎に、南北両面に廂をもつ建物跡で、4棟が整然と配置されている。

S B 301 S B 301は台地の中央部で、4棟の大形建物跡群の南端にある。

S B 301は、9間(26.19m)×2間(5.82m)の東西棟の建物跡で、南・北に各1間の廂をもつ。柱間寸法は桁行・梁間・廂とも2.91m(10尺)の等間隔である。

身舎の柱掘形は、一辺0.61～1.1mの方形で、検出面から掘形底部までの深さは38～84cm(平均68cm)を測る。一方、廂

の柱掘形は、一辺(あるいは直径)37~80cm(平均48cm)・深さ24~70cmであり、身舎に対し廂部分の掘形規模が一回り小さく、その深さも全体に浅い。

身舎及び廂部分の掘形内の柱痕(明瞭とはいえない)は、身舎部分が直径20~40cm(平均28.3cm)、廂部分は直径14~24cm(平均20.3cm)を測る。

身舎及び廂部分の掘形の埋土は、3~4層に大別でき、掘形内から出土する瓦の多くは上層(暗黄褐色土)に多く含まれる場合が多い。掘形内の柱の抜き取り穴は、「三・イ」の掘形をのぞき、明瞭に残るものはない。

S B 301の特徴として、身舎・廂のほか、棟通り(三列・ロ〜リ列)にも4か所の小ピットが短辺の柱筋に揃えて並び、その配列は、長辺の柱配列(9本)に対し1本飛び置きに配されている。

棟通りの柱掘形は、廂部分の掘形よりさらに小さく、直径26~46cm・検出面からの深さ27~42cm(平均36cm)を測る。棟通りの柱掘形の埋土は淡黄褐色粘質土で、柱痕は不明瞭であった。この棟通りの柱の性格については、後述するように、梁を支えるための補助柱であった可能性が高い。

S B 301には、東及び南の一部に建物に沿う形で、上面幅20~50cm・深さ5~10cmの溝(S D 306)があり、建物敷地内への悪水をふせぐための施設と思われる。また、後述するように、北廂(五列)のホとへ・へとト・トとテの間に青灰色粘土を含んだ黄灰色粘質土を埋土とする楕円形土坑(S K 360・361・362・363)がある。

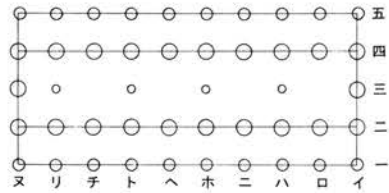
S B 302 S B 301の北に配された同規模(9間×2間の身舎、南北両廂、柱間間隔2.91m)の東西棟の建物跡である。S B 302とS B 301は、1.65mの狭い間隔をおいて位置しており、その間には「L」字形に屈曲する溝(S D 305)がある。

S B 302の身舎・廂・棟通りの各掘形規模は、S B 301とほぼ同じであり、身舎一廂一棟通りへと掘形規模が小さく、その深さも浅くなる傾向は同じである。

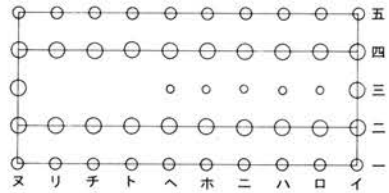
棟通りの柱穴は、S B 301のように1本おきに配されるような傾向にはなく、東側に偏って配されている。

各掘形の埋土はS B 301と同様で、瓦片は掘形埋土内の上層に含まれる場合が多い。

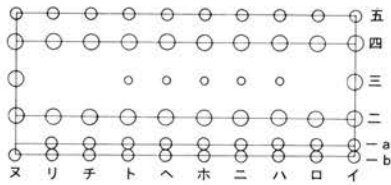
S B 303 A建物跡群の南から3棟目にあり、その規模はS B 301・302と同様、9間×2間の身舎と南・北に各一間分の廂をもち、棟通りにも小ピットが配されている。



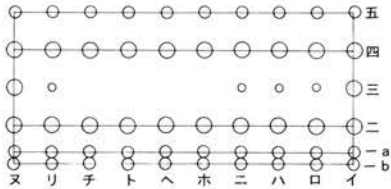
第78図 S B 301模式図



第79図 S B 302模式図



第80図 S B 303模式図



第81図 S B 304模式図

柱間間隔は、身舎部分が2.87mの等間隔であるのに対し、南・北の廂部分は廂の出が2.50mとなる。また、S B 303は南廂のみ建て替え(あるいは廂の補強)により、2.50mから2.87mに拡張している。

棟通りの小ピットは、ハ・ニ・ホ・ヘ・トの列に配されており、S B 302の配列とは若干相違する。

掘形内の埋土上層からは、丸・平瓦が廃棄された状態で出土する例があり、「四り」の掘形内の柱穴からは、底部を穿孔した須恵器長頸壺の

体部片(図版第75、186)が出土した。

S B 304 A建物跡群の北端にあり、掘形の配列は、9間×2間の身舎と、南・北各1間の廂をもつもので、柱間間隔は、身舎及び北廂が2.87mの等間隔であるのに対し、南廂は当初2.50mであったものを2.87mに拡張している。

棟通りの小ピットは、ロ・ハ・ニの三列とり列にある。

S B 304の東及び北には、掘形から10~30cmの間隔をおいて隣接した位置に、「L」字状の側溝S B 305(上面幅約0.4m~1.4m・深さ約20cm)がある。このS D 305の側溝は、後述する20号墳の周溝に悪水が集まるように掘られている。

S D 305 A建物跡群であるS B 302・303・304を取り囲むように掘り込まれた溝である。この溝は本来、S B 302・303・304を取り囲んでいたものと思われるが、A建物群の東側の遺構検出面にくらべ、西側検出面が低く、本来、西側にもあった溝が後世に削りとられたものと思われる。このため、現状では「コ」の字形を呈し、南北は43.4m、東西方向に走る北溝は23.5m、南溝は10.2mを測る。南北方向の溝は、S B 302とS B 303の間でわずかに屈曲し、その部分を溝より新しい土坑(S K 372)に切られており、S B 302からS B 303の間で溝が連結するかどうかは厳密には明らかでない。溝の上面幅0.4~1.4m・深さ約20cmを測り、溝内には多くの瓦片が含まれている。

なお、先述したようにS D 305の溝は、20号墳の周溝とつながっており、水を古墳の周溝内に流し込むように造られている。

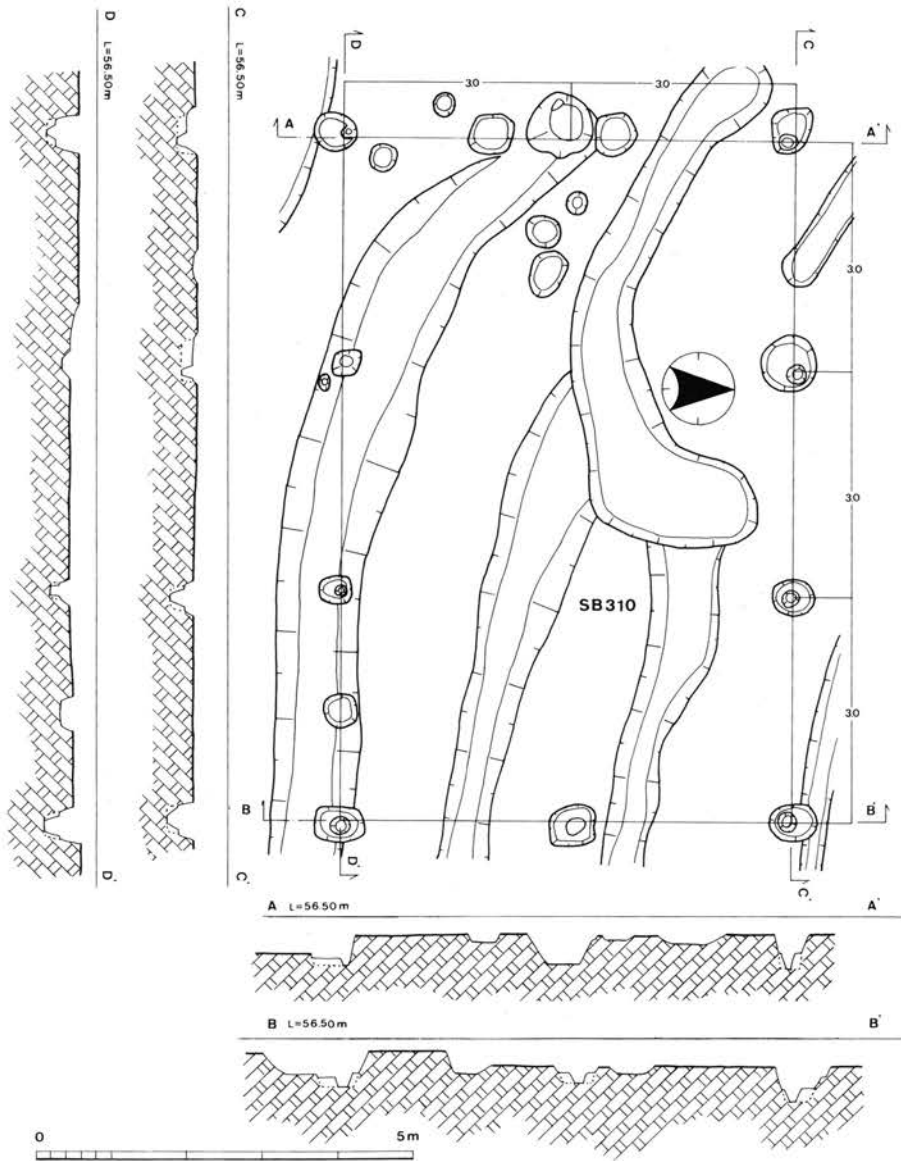
S D 306 S D 305と同様、S B 301を取り囲むように掘られた溝と思われるが、西と南辺の半分が削られ、現状では、南東隅を中心に「L」字状に曲がる。S B 301の短辺に平行する溝の検出長14.9m、長辺に平行する溝の検出長7mで、溝の上面幅は20~50cm・深さ約5~

10cmを測る。

S D306はS D305を切っている。S D305・S D306の溝をA建物跡群に関連した溝(側溝)と考えれば、S B302ののちS B301が造られたことが考えられる。

S B306の埋土からは、少量の瓦が出土した。

S A327 S B301・S D306の北側にある柵列で、検出長8.4m(4間分)、柱間間隔は2.1mの等間隔である。S A327の方位はS B301・S D306と異なり、N 2°30' Eを測る。

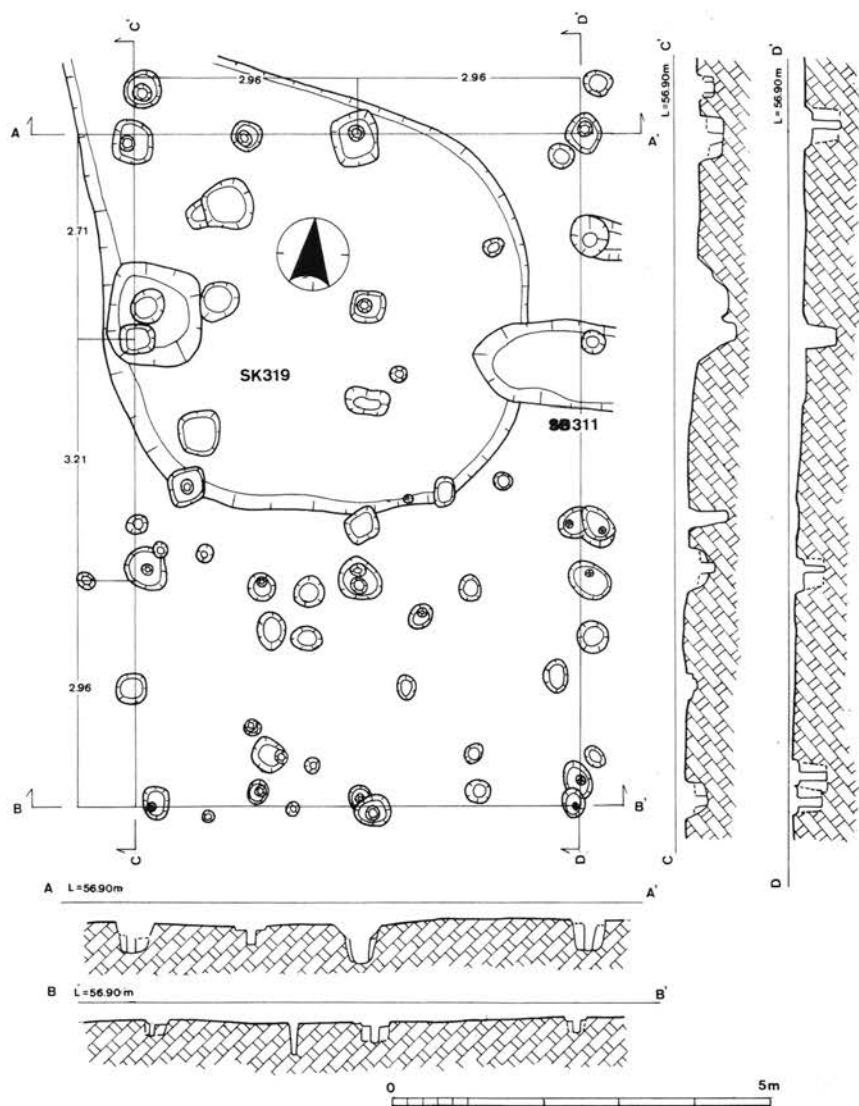


第82図 S B310実測図

②B建物跡群

B建物跡群は、A建物跡群の東側にあり、A建物跡群に近接する南北棟の建物跡(S B311・312・313)と、A建物跡群からやや離れてあるS B310・314・353がある。

S B310 A建物跡群の西側で、S B304の東柱列(イ列)から東に約19.5mの位置にある。S B310は、3間(9.00m)×2間(6.00m)の東西棟の建物跡で、掘形は一辺(あるいは直径)0.35~0.7mを測る。掘形の深さは、四隅が深くその間は浅い。各掘形内の埋土は、2~4層に細分でき、上層の暗黄褐色土から多くの瓦が出土した。これらの瓦は、建物の廃棄後、



第83図 S B311実測図



柱を抜き取ったあとになげ捨てられたものと思われる。

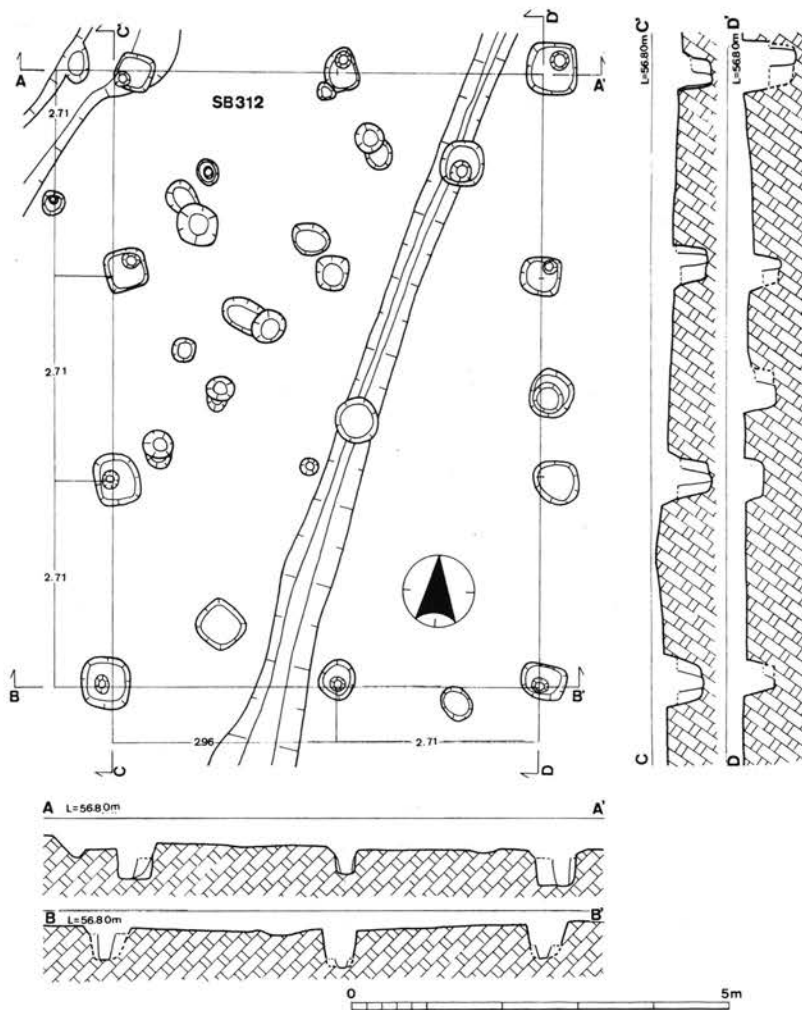
S B310の南柱列(一列)は、S B303の北廂の柱列(五列)と柱筋を揃えている。

S B311 A建物跡群のS B301・302の西側約3.15mにある、2間(5.92m)×3間(8.88m)の南北棟の建物跡である。

柱間間隔は、長辺が2.71m・3.21m・2.96m、短辺が2.96mの等間隔である。掘形は方形(あるいは円形)で、一辺(あるいは直径)約30~60cmを測る。掘形内に瓦を含むものが多い。

なお、後述する瓦溜まり(S K319)は、S B311の廃絶後に掘り込まれた土坑である。

S B312 S B311の東側柱列と柱筋を揃え、また、A建物跡群のS B302の北廂の柱列



第84図 S B312実測図

(五列)とS B312の三列の柱列が柱筋を揃えている。S B311とS B312の間は約3.56m、S B302とS B312の間は3.35mを測る。

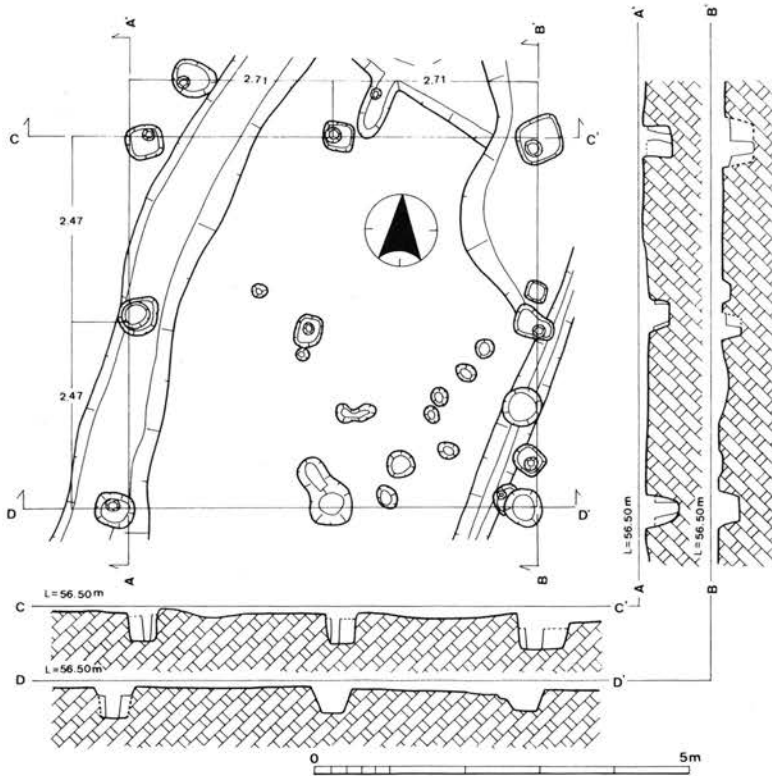
S B312は、2間(5.67m)×3間(8.13m)の南北棟の建物跡で、柱間隔は長辺が2.71mの等間隔、短辺は2.71m・2.96mを測る。掘形は方形で一辺30~65cmを測る。掘形内埋土は、2~3層に細分でき、「四口」の掘形の上層から軒丸瓦(6133A b型式)が出土した。

S B313 S B303の東側約4.25mにあり、S B303の南廂列(I a 列)がS B313の南列(一列)に柱筋を揃える。

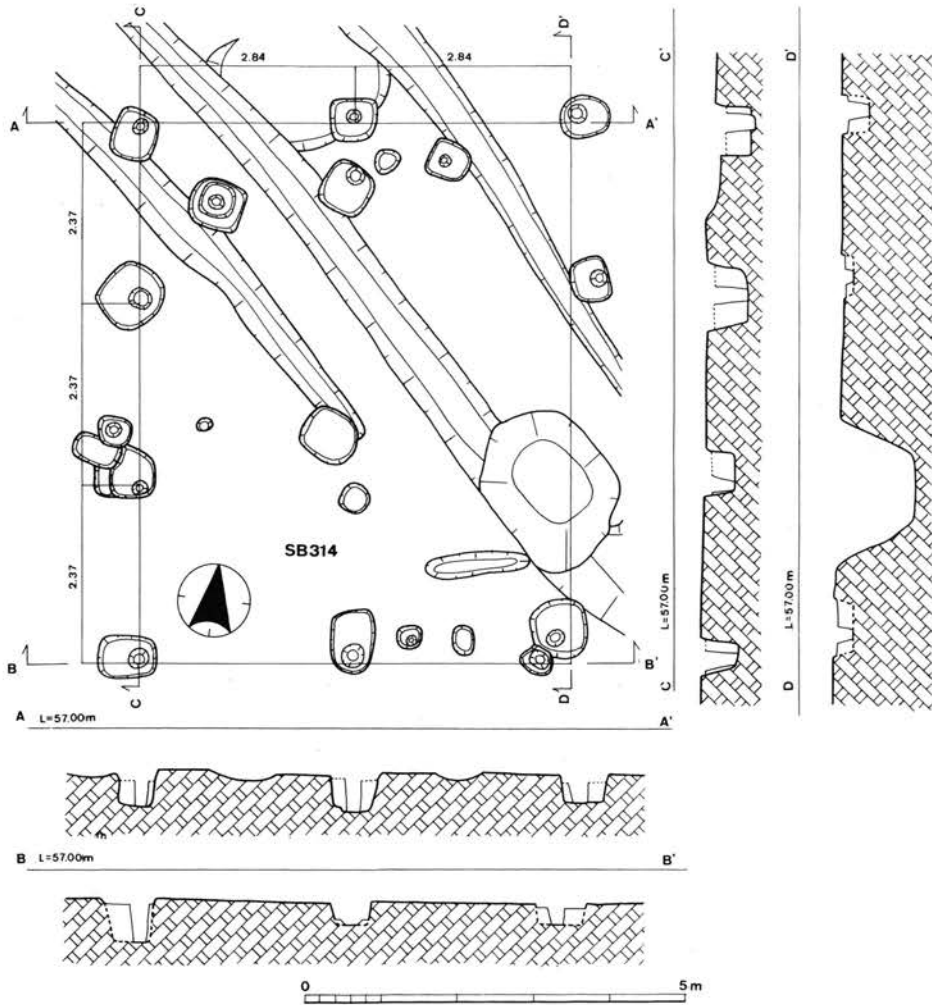
S B313は、2間(5.42m)×2間(4.94m)で、長辺は2.71m、短辺は2.47mの等間隔である。掘形は方形で一辺約30~65cmを測る。

S B314 1トレンチの東端で見つかった3間(7.11m)×2間(5.68m)の南北棟の建物跡である。柱間隔は長辺が2.37m、短辺は2.84mの等間隔である。掘形は方形で一辺約55~85cm・深さ約20~60cmを測る。埋土内には一部瓦片を含む。

S B314の建物方位は、A建物群とは異なっていて、S B307・S B308に近いN8°45'Wを測る。



第85図 S B313実測図



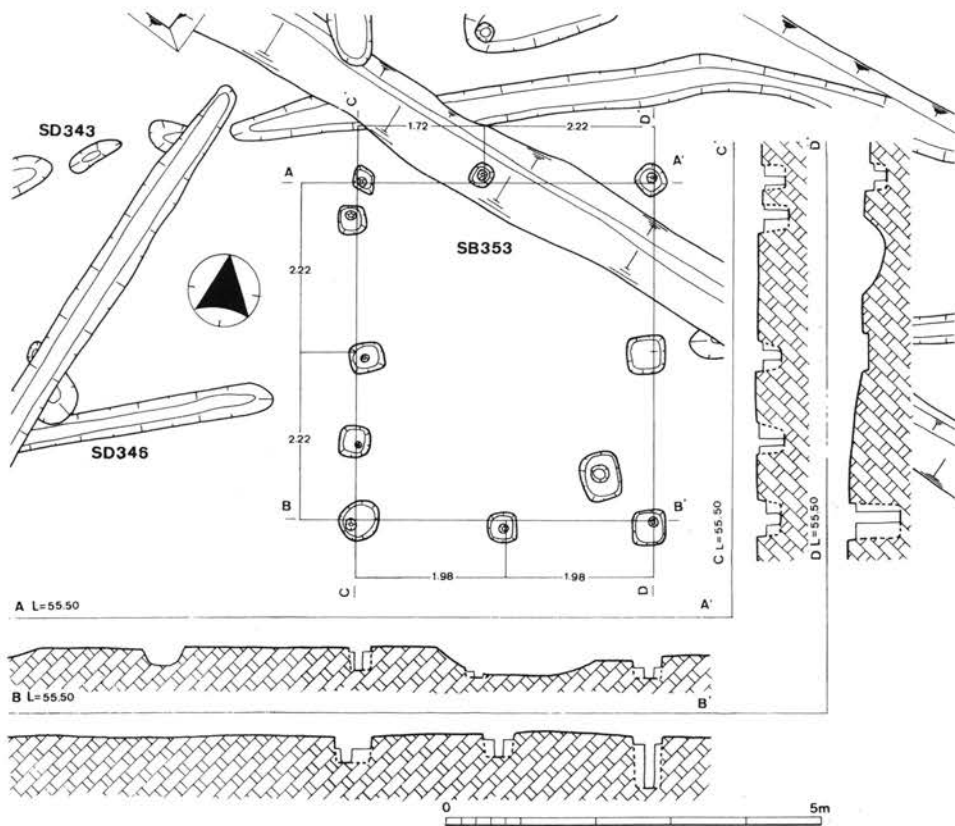
第86図 SB314実測図

S B353 1 トレンチの北端でみつかった建物跡で、他の建物跡群とは離れた位置にある。S B353は、2間(4.44m)×2間(3.96m)で、柱間間隔は長辺が2.22m、短辺が1.98mの等間隔である。掘形は方(あるいは円)形で、一辺(あるいは直径)約25~55cm・深さ約30~70cmを測る。S B353の方位は、S B307・308・309に近いN 6°00' Wを測る。

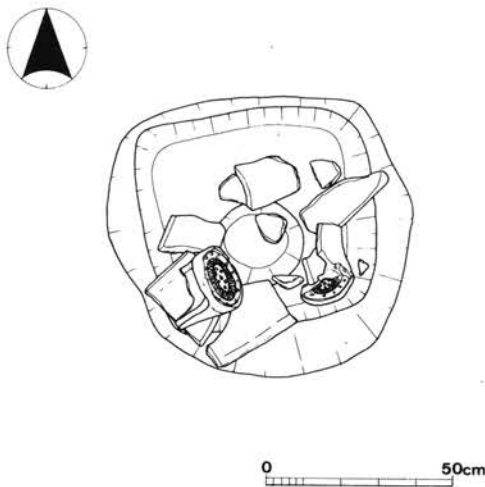
なお、S B353の西側にのびる路面の両側溝と思われる2条の溝(S D343・346)が、S B313と重複するような状態である。

S D325 S D306に直交するように掘り込まれたもので、S B311の短辺に平行して走る溝である。S D325の検出長約11m・上面幅40~50cm・深さ約5cmを測り、S D325の東端は不整形土坑と重複する。

S A324 S B311とS D325の間にある柵列で、検出長約4m(4間分)、柱間間隔は約1



第87図 S B353実測図



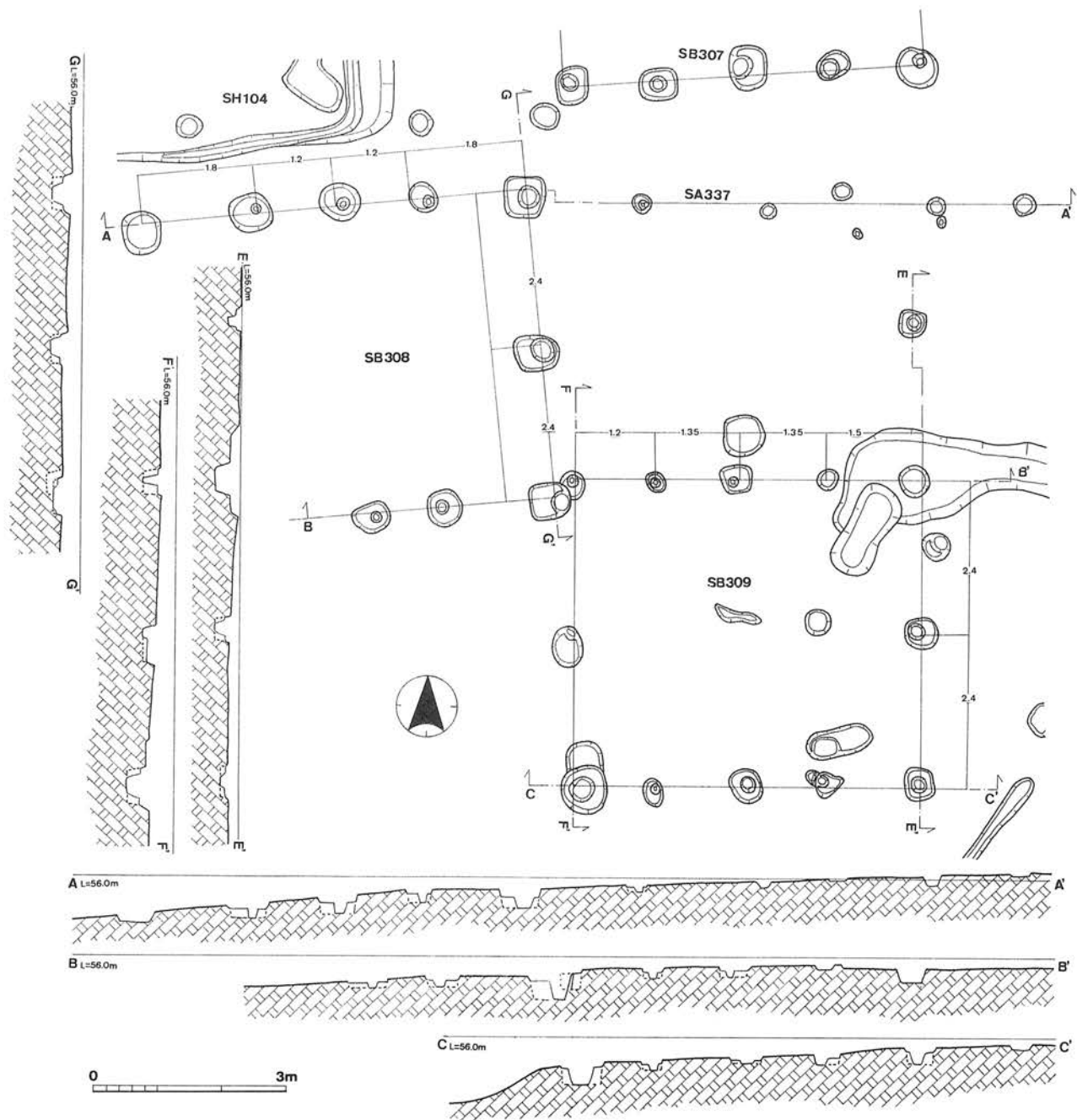
第88図 S B307北西隅柱内  
遺物出土状態実測図

mの等間隔である。S A324はS B311の方位と平行する。

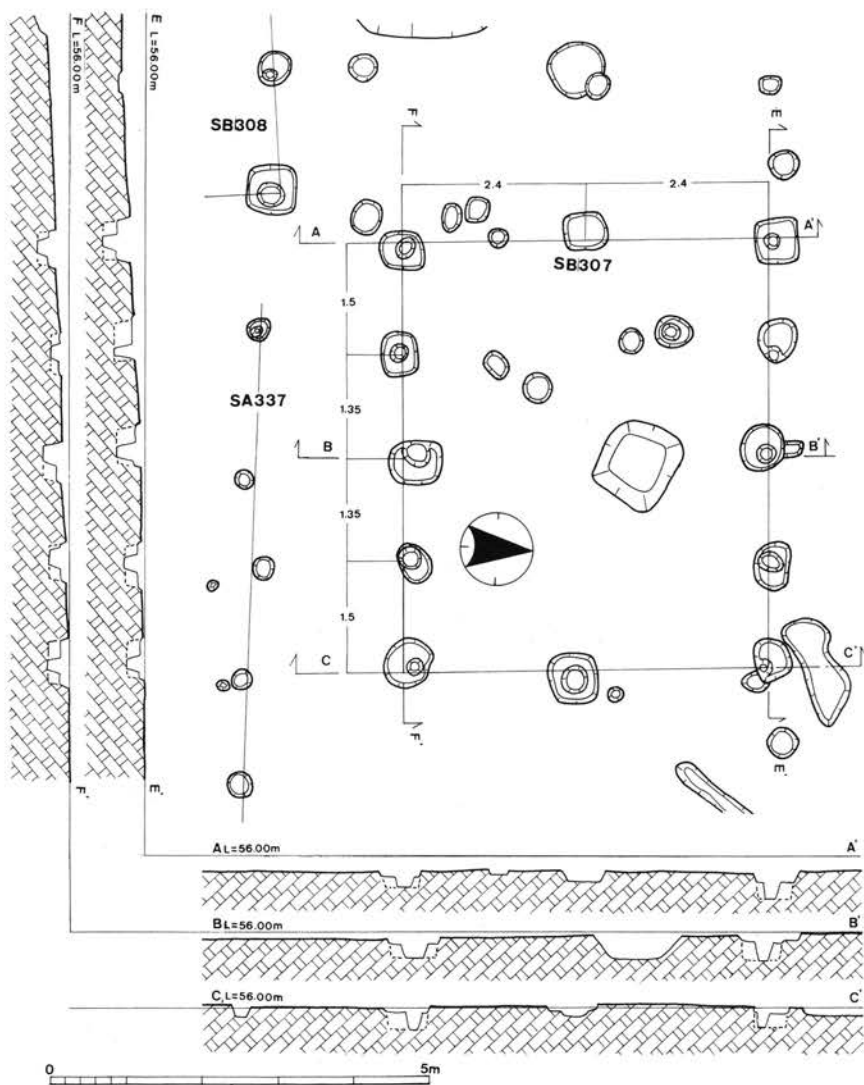
### ③C建物跡群

C建物跡群は、A建物跡群の西側にある3棟の建物跡群と柵列からなる。

S B307 4間(5.70m)×2間(4.80m)の東西棟の建物跡で、方位はA建物跡群と異なり、後述するS B308に近い。長辺の柱掘形は、イ・ハ・ホ列の掘形規模が60~80cmに対し、ロ・ニの柱掘形が50~60cmと一回り小さく、その深さもイ・ハ・ホ列に対しロ・ニ列が浅い傾向にある。柱間間隔は、長辺が1.5・1.35・1.35・1.5m、



第89图 S B 308 · 309实测图



第90図 SB307実測図

短辺が2.4mの等間隔である。北西隅の柱穴内に軒丸瓦(平城宮瓦型式の6235M a・6133A b型式)2点を含む瓦が柱痕上面で出土しており、建物の廃絶後、瓦を廃棄したものと思われる。

なお、SB307の敷地内に焼土坑があるが、建物に関連するかどうかは疑問である。

SB308 SB307の南西に隣接しており、SB307と同規模(4間×2間)の建物跡と思われるが、長辺の西側が後世に削平を受け明らかでない。

SB308の長辺のロ・二列の掘形の深さが、SB308と同様、イ・ハ・ホに比べて浅い。

柱間間隔は、長辺が1.8・1.2・1.2・1.8m、短辺が2.4mの等間隔である。掘形内からの遺物の出土は極めて少ない。

なお、S B 308は、後述するS B 309の掘形を切っている。

S B 309 4間(5.4m)×2間(4.8m)の東西棟の建物跡で、長辺の掘形はS B 307・308と同様、ロ・ニ列の掘形がイ・ハ・ホの掘形に比べ規模が一回り小さく、掘形の深さも浅い。柱間間隔は、長辺が1.5・1.35・1.35・1.2m、短辺は2.4mの等間隔である。

なお、S B 309の北列(三列)がS B 303の北廂の柱筋と並び、A建物跡群との関連が指摘できる。掘形内の遺物は極めて少ない。

S A 337 A建物跡群であるS B 304の西側で、S B 304の南廂(一a列)と柱筋を揃えてある。掘形は直径約25~30cmの円形で、柱間間隔は13~20mでバラツキがある。

## (2)路面

路面は2条を検出した。S D 343・S D 346は、Aトレンチの北西部、III支尾根の基部で

付表7 掘立柱建物跡一覧表

(単位：m)

遺構	規模	棟方向	方位	廂	桁行全長	梁間全長	廂	柱穴(廂・柱穴)
S B 301	9×4	WE	N 1°45'W	N・S	26.19	5.82	2.91	身舎0.61~1.10(0.818) 廂0.37~0.80(0.543) 東柱0.25~0.46(0.349)
S B 302	9×4	WE	N 1°40'W	N・S	26.19	5.82	2.91	身舎0.47~0.96(0.710) 廂0.10~1.30(0.497) 東柱0.27~0.50(0.378)
S B 303	9×4	WE	東N 1°45'W	N・S	25.83	5.74	北廂 2.87 南廂 a 2.50 b 2.87	身舎0.55~0.89(0.713) 北廂0.32~0.92(0.599) 南廂 a 0.25~0.75(0.406) 南廂 b 0.27~0.70(0.399) 東柱0.27~0.56(0.419)
S B 304	9×4	WE	N 1°45'W	N・S	25.83	5.74	北廂 2.87 南廂 a 2.50 b 2.87	身舎0.50~1.15(0.774) 北廂0.43~0.96(0.569) 南廂 a 0.30~0.50(0.398) 南廂 b 0.16~0.80(0.435) 東柱 0.30~0.54(0.4289)
S B 307	4×2	WE	N 3°45'W		5.70	4.80		0.45~0.65
S B 308	4×2	NS	N 7°00'W		6.00	4.80		0.45~0.6
S B 309	4×2	WE	N 1°15'W		5.40	4.80		0.35~0.7
S B 311	2×3	NS	N 1°40'W		8.88	5.92		
S B 312	2×3	NS	N 1°40'W		8.13	5.67		0.45~0.7
S B 313	2×2	WE	N 1°40'W		5.42	4.94		0.30~0.65
S B 310	3×2	WE	N 1°15'W		9.00	6.00		0.35~0.7
S B 353	2×2	NS	N 6°00'W		4.44	3.96		0.25~0.55
S B 314	2×3	NS	N 8°45'W		7.11	5.68		0.55~0.85

検出した東西方向にのびる路面の両側溝である。S F 380は、S B 301・302の西側から市坂瓦窯にのびる切り通しの路面である。

S D 343・346 S D 343と346は、幅3～4mの間隔をおいて北東方向から南西方向に向かって平行してのびる溝で、道路の両側溝と思われる。S D 343はS D 342・344と、S D 346はS D 345・347と同一の性格をもった溝であり、その総延長は約54mを測る。各溝の上面幅0.6～1.0m・深さ10～20cmで、一部途切れながらも1トレンチを縦断し、前述した近世以降の盛り土である4号墳の下面へと続く。S D 346とS D 347の途切れた位置にS B 353がある。両側溝の埋め土(暗褐色粘質土)からは、須恵器・土師器のほか、少量の瓦が出土した。

S F 380 A建物跡群から台地の西南斜面の瓦窯(市坂瓦窯)へ続く路面である。この遺構は、S D 343・346のような明確な側溝がなく、遺構として分別しにくい。地山が切り通し状に掘り込まれていること、その切り通し面の底部平坦面にあたかも荷重により、踏み割られたかのような状態で、瓦片が小石とともに散布していることから路面と考えた。この路面の切り通しは上面の幅約10mを測る。路面には、丸・平瓦のほか、軒丸瓦(6133系)2点が出土した。

### (3)井戸

井戸は、B建物跡群のS B 311の東約5mにあるS E 315と、上人ヶ平遺跡が立地する台地の下、B谷部にあるS E 382の2基がある。

S E 315 掘形は上面が方形で底部近くでは円形に変わる。上面での規模は一辺約2m、下面では1.1mを測り、検出面からの深さは約1.5mである。

井戸内の埋土は、暗茶褐色粘質土(上層)・灰褐色粘質土(中層)・灰褐色砂質土(下層)で、中層内から整理箱にして20箱を数える瓦埴類が、下層から土器がまとまって出土した。土器の中には、外底面に「司」と墨書された須恵器杯A(図版第75、183)も出土した。S E 315からは井戸枠に関連した木片は出土していない。

S E 382 I支尾根とII支尾根の間のB谷部で検出した木枠の井戸である。

S E 382は、B谷部にあるためこれまでの概要報告では、瓦谷遺跡の中で扱っていたが、井戸枠内から布目瓦1点が出土しており、上人ヶ平遺跡と同時期と思われるため、ここでは、上人ヶ平遺跡の関連遺構として取り上げる。

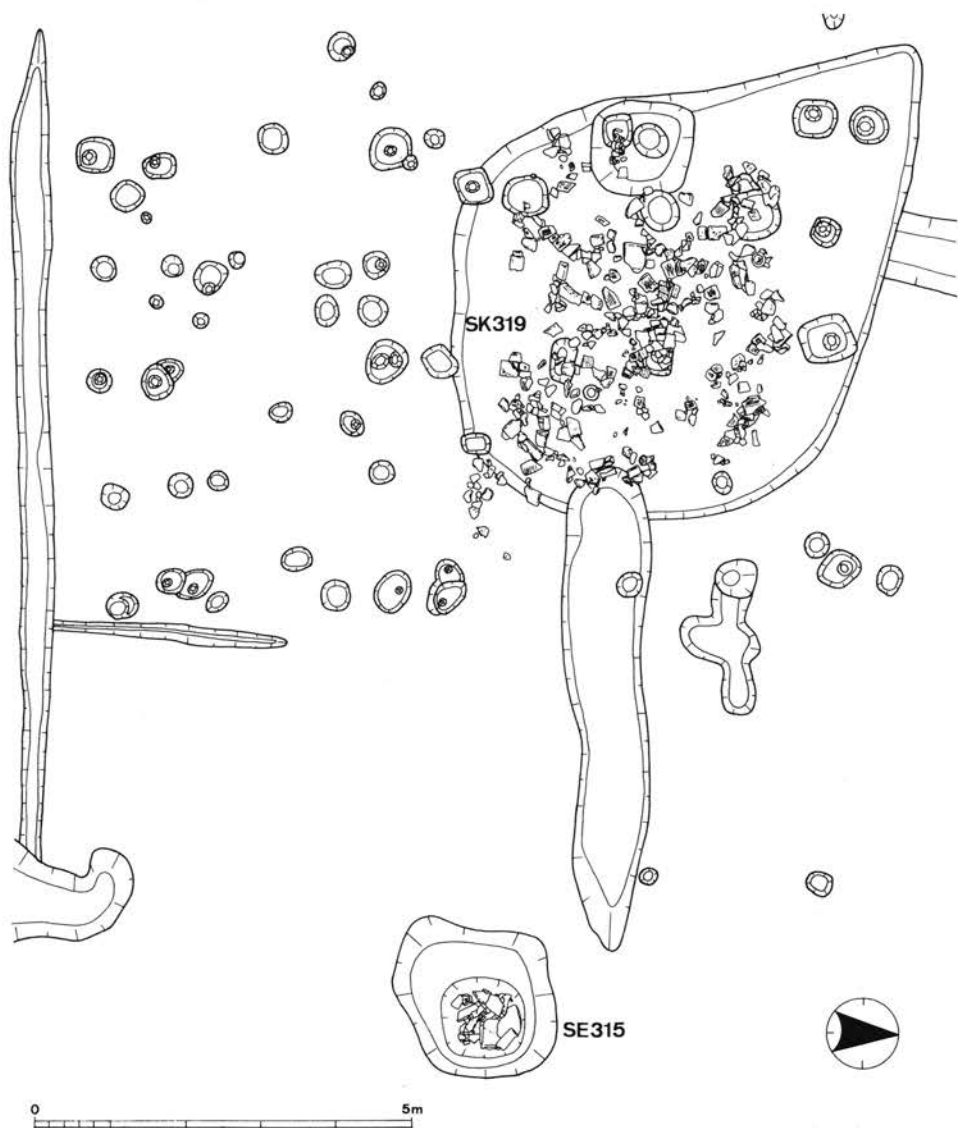
S E 382は、旧谷地形の東側斜面に位置し、ここに不整円形の掘形(復原径約2.5m)を設けて構築しており、木枠は、底板を除いた唐櫃の身の部分を掘形の底(若干の置き土をして水平にする)に据える。この場合、櫃の四隅の接合部に釘が残っていないことから、一端、側板の4枚を分解した上、裏込め土をいれながらほぞを組み合わせて再構築した可能性が



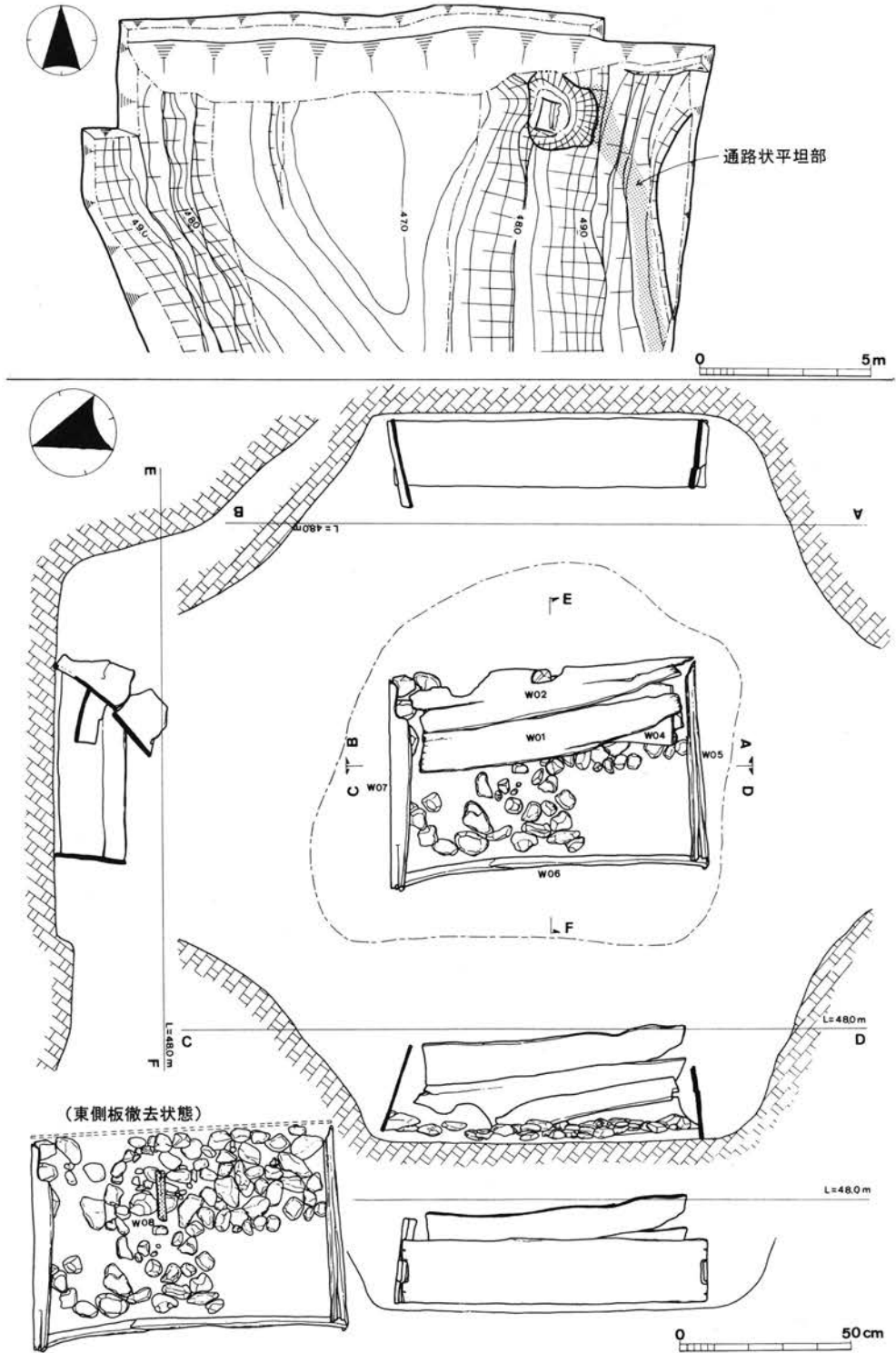
ある。木枠の内方には拳大の自然石(チャートの亜円礫が主体)を敷きつめて井戸底を造っている。

井戸に伴う遺物はごく少なく、わずかに井戸底の敷石直上で短冊状木製品・布目瓦少片1点が出土したのみである。

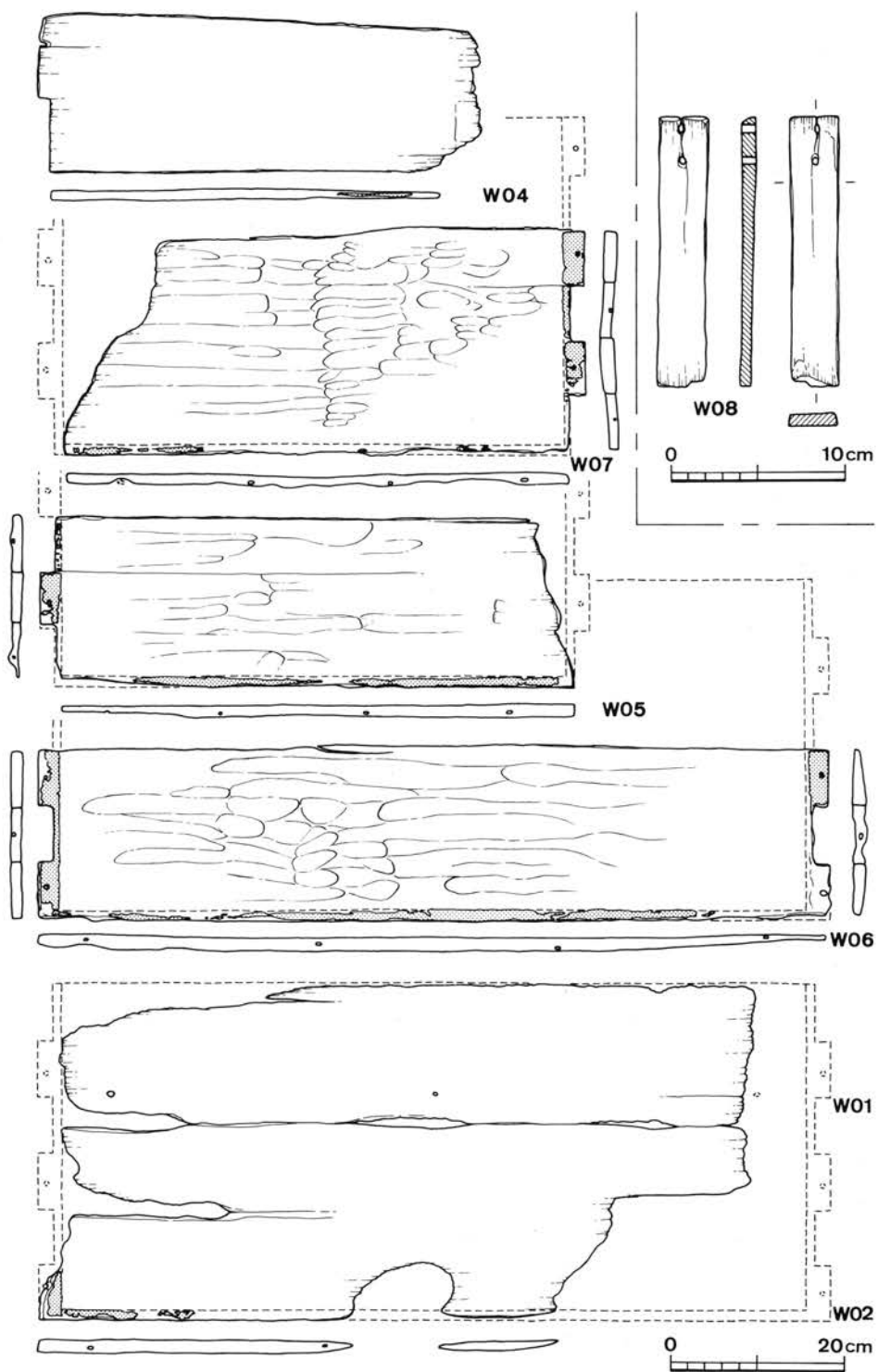
井戸に転用された唐櫃は、底辺が91cm×63cm・深さ38.6cmが残存しており、板の厚さ1.8cmを測る。これに底板の厚さを仮に1.8cmとして加えると、91cm×63cm×42.6cmの唐櫃の身が



第91図 S E 315・S K 319遺物出土状態実測図



第92図 S E 382実測図



第93図 S E382井戸枿実測図

復原できる。

残存している部材を観察すると、いずれの板も柂目材を用い、側板を底板の上面に当て、底板下面より長辺・短辺とも4本の釘を打ち固定している。側板の組み手は6枚組み接ぎで、各6本の釘を打ち固定している。また、各稜の角四周には、幅3cmの蔭切(黒色の漆で縁取りを施すこと)を施している。

長側板の上寄りには、横に配した少し大きめの穴が穿たれている。これにより、横棧を取り付けた唐櫃であることがわかる。

#### (4) 土坑

奈良時代の土坑は、台地中央部(1トレンチ)で、1トレンチのなかでも、A建物跡群の西側に集中する傾向がある。各土坑の規模は大小さまざまであるが、全体に浅く、皿状の底部を呈するものが多い。

S K 319 S B 311を切った土坑であり、直径約6.0m・短径約5.5m・深さ約10cmの不整形土坑で、底部は皿状を呈する。このS K 319からは少量の土器と軒丸瓦(6133A・B・C、6133B)、軒平瓦(6732C)のほか、丸・平瓦・鬼瓦・埴などが多く出土した。

S K 320 S B 314の南側で検出した、直径約9.0m・短径約8.0m・深さ30cmを測る不整形土坑である。土坑の底部からは、建物としてはまとまりにくい小ピットが多くある。S K 320は、後述する溝S D 355を切っている。

この土坑からは瓦・土器のほか、銅銭(神功開宝・萬年通宝)が出土した。

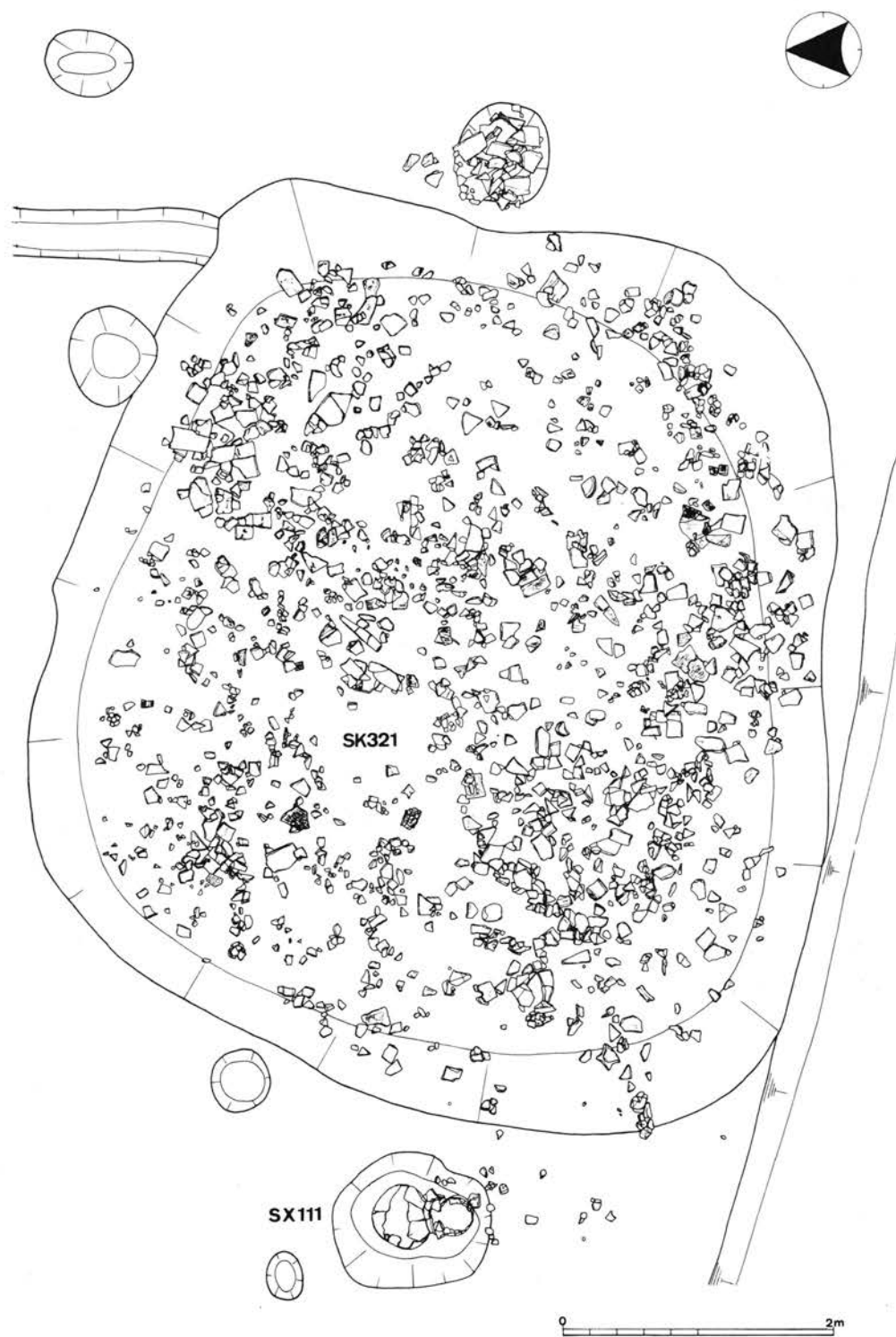
S K 316 後述するS K 318と同様、20号墳の周溝を再利用して掘り込まれた不整形土坑(長径1.3m・短径1.1m・深さ0.5m)である。この土坑からは少量の土器のほか、軒平瓦(6732系)・丸瓦・平瓦などが出土した。

S K 318 20号墳の周溝を拡張、再利用した土坑である。

S K 318は、長軸14m、短軸5.0mの不整形土坑で、土坑底の深さは、20号墳の周溝底よりも約30cm低く掘り込まれており、A建物跡群の側溝から流れ落ちた水が周溝をつたわり、S K 318に集まるように掘り窪められている。S K 318からは軒丸瓦を含めた瓦のほか、土器がややまとまって出土した。

S K 317 S K 318の東側に隣接して掘り込まれた直径約6.0m・深さ約30cmの円形土坑である。S K 318からは、少量の土器とともに軒丸瓦・軒平瓦を含む瓦が出土した。

S K 321 20号墳の北側で、古墳の周溝を切った一辺6.75m・深さ約25cmを測る隅丸方形の土坑である。S K 321は肩部がなだらかに傾斜し、底部は平坦である。この土坑からは、土師器(鉢・甕・高杯)・須恵器(杯・皿・甕等)のほか、瓦類(軒瓦・平瓦・丸瓦)などが多量に出土した。出土遺物の大半は遺存状態が悪い。



第94図 SK321遺物出土状態実測図

S K 322 S B 301(A建物跡群)の西側約1.5mにある、直径約3.3mの円形土坑である。S K 322は肩部がなだらかに傾斜し、底部は平坦である。

S K 341 S B 303(A建物跡群)の東約9mで、長軸約10m・短軸約8mの不整形土坑である。土坑の深さは検出面から5~10cmと浅く、底部は平坦である。S K 341からは、少量の瓦片が出土したのみである。なお、S K 341はS B 313を切っている。

S K 339 S B 303の西側で、S B 309の建物と重複する、長軸1.4m・短軸0.8m・深さ約10cmの隅丸長方形土坑である。S B 339は後述するS K 340を切っている。

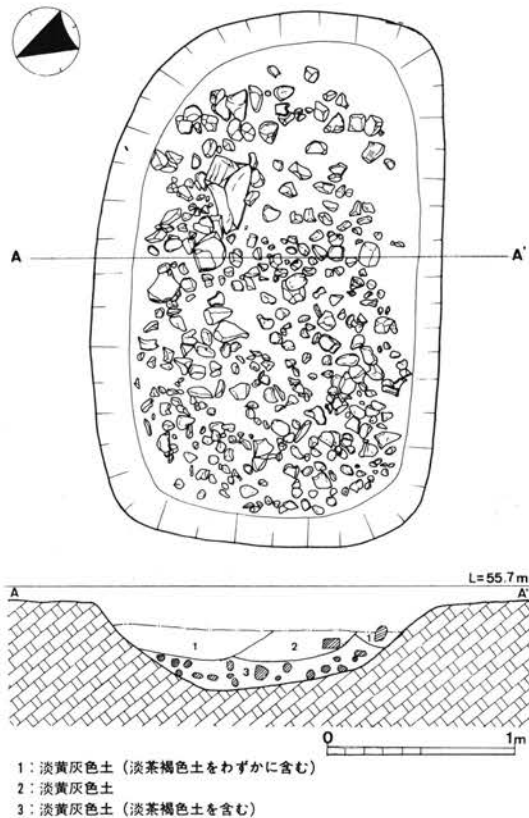
S K 340 S K 339と一部重複する土坑である。S K 340は「L」字形に屈曲し、一辺約5m・幅0.7~2.0m・深さ5~10mを測る。S K 340からは遺物は出土していない。

S K 349 S B 304(A建物跡群)の北約13mにある、長軸1.42m・短軸0.84m・深さ0.24m隅丸長方形の土坑である。S K 349は、底部近くに厚さ10cmにわたり、細かな玉石を敷きつめており、石に挟まった状態で瓦片が出土している。土坑からは瓦片以外遺物は出土しておらず、時期及びその性格については不明である。

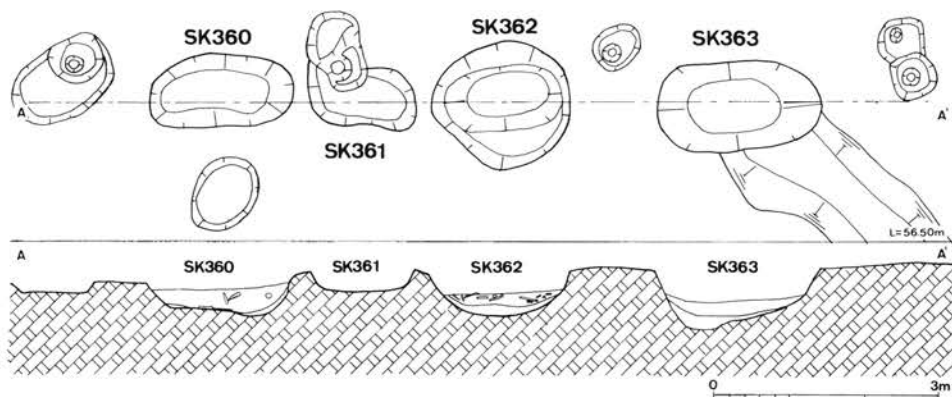
S K 350 S K 349の西約2mにある直径0.8m・深さ5cmの円形土坑である。S K 350は出土遺物がなく、時期は明らかでない。

S K 359 S B 301(A建物跡群)の北廂(五列)のり・又柱穴間にある、直径約1.4m・深さ40cmの円形土坑である。埋土内から丸・平瓦が出土した。

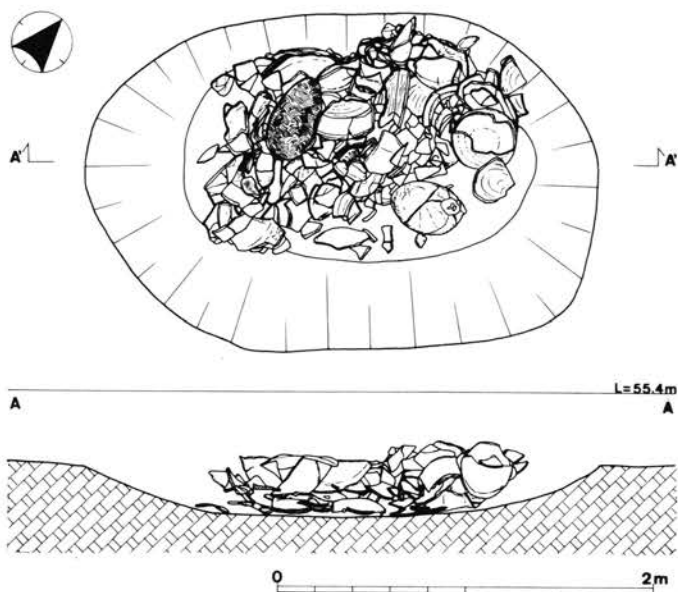
S K 360 S K 360は、S B 301の北廂(五列)のト・チ柱穴間にあって、長軸1.6m・短軸0.7m・深さ約4.0mを測る楕円形土坑である。S K 360の埋土は、淡黄灰色粘質土(上層)と黄灰色砂質土(下層)で、青灰色粘土をブロックで含んでいる。この土坑は、埋土内に良質の粘土を含んでいることから、なま瓦を成形する際に使用した土坑と思われる。



第95図 S K 349実測図



第96図 SK360・361・362・363実測図



第97図 SK375遺物出土状態実測図

なお、SK360埋土内（上層）から瓦片が出土した。

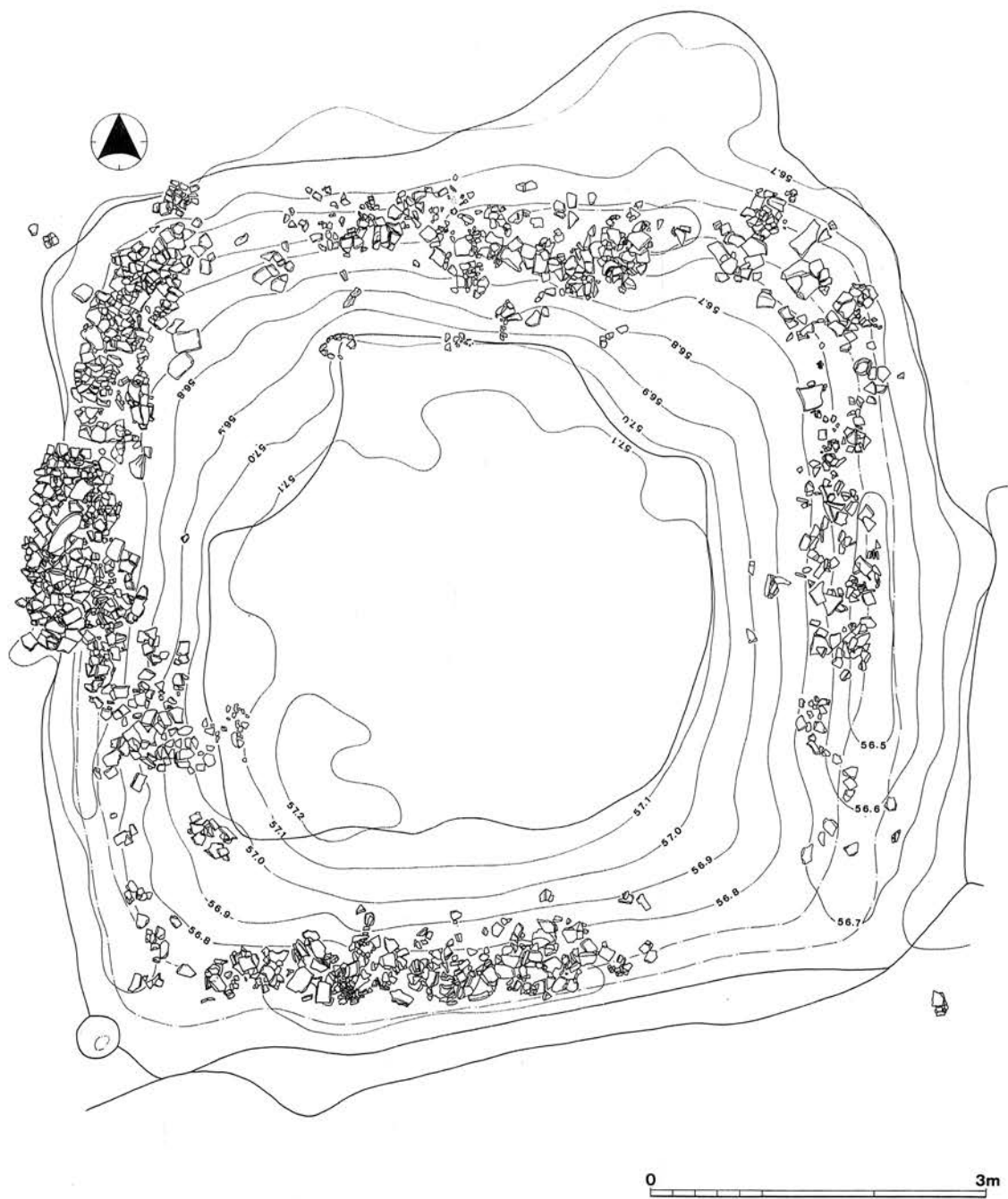
SK361 北廂の柱穴（五ト）を切った、長軸1.1m・短軸0.6m・深さ約30cmを測る楕円形土坑である。

SK362 SB301の五列のへ・ト柱穴間にある、長軸1.4m・短軸0.6m・深さ約0.5mの楕円形土坑である。

SK361の埋土はSK360と同層で、上層の青灰色粘土を含んだ淡黄灰色粘質土層から多量の瓦が出土している。SK361はSK362と同様で、なま瓦を成形する際に使用した土坑と思われる。

SK363 SB301の五列のホ・へ柱穴間にある、長軸1.8m・短軸1.0m・深さ0.65mの楕円形土坑である。SK362の埋土はSK360・SK362と同様で、土坑底部から瓦がまとまって出土した。

SK360・SK362・SK363は、いずれもSB301の北廂の柱穴間に建物と平行して掘り込まれており、かつ同層の埋土であることから、これらの建物に関連した同じ性格の土坑と考えられる。



第98図 16号墳墳丘上面遺物出土状態実測図



S K 364 直径約3.0m・深さ0.7mの土坑で、底部に桶状の板材があり、近世以降の野ツボあるいは水桶と思われる。

S K 365 直径約1.6m・深さ0.7mの土坑で、S K 364と同様、近世以降の野ツボと思われる。

S K 375 Ⅲ支尾根の中央、10号墳と11号墳の間に位置する、長径2.73m・短径1.74mの楕円形土坑である。この土坑からは須恵器長頸壺・杯・高杯・甕・鉢、土師器皿等が多く出土した。

#### (5) 溝状遺構

溝状遺構には、前述のA建物跡群をとり囲む溝S D 305・306、路面の側溝(S D 343・346)のほか、奈良時代に古墳の周溝を再利用するために、各古墳の周溝を結ぶかのように掘り込まれた溝(S D 357)、各建物跡を検出する面より上層で、主要建物群とは方位を異にする溝(S D 352)などがある。

S D 356 5号墳と8号墳の周溝を結ぶかのように掘り込まれた溝で、検出長約6m・上面幅約70cm・深さ約30cmを測る。S D 356の埋土からは瓦が出土しており、奈良時代に古墳の周溝を利用するために掘られたものと思われる。

S D 357 5号墳と7号墳の周溝を結ぶ溝で、S D 356と同じ性格の溝と思われる。S D 357の検出長約2.5m・上面幅約90cm・深さ約20cmを測る。

S D 383 8号墳と周溝西辺と7号墳の周溝北東隅をつなぐ溝で、検出長40cm・上面幅40cm・深さ25cmを測る。S D 383の埋土は、炭混じりの暗褐色灰色粘質土と褐色灰色シルト層にわかれる。埋土内から土器の小片が出土した。

S D 355 8号墳の周溝から、唐櫃の井戸(S E 382)を検出したB谷部の方向に向かって掘り進められた溝で、検出長約16m・上面幅30~110cm・深さ約20cmを測る。S D 355は、8号墳の周溝に溜まった水を谷に流すために造られたものと思われる。なお、S D 355を切って、S K 320の土坑がある。

S D 352 丘陵に直交するかのように掘られたもので、検出全長約60m・上面幅0.7~1.0m・深さ約15cmを測る。S D 352からは瓦が出土しているが、S B 304の掘形(三又)を切っており、S B 304の廃絶後に掘られた溝と思われる。

S D 374 S D 352の上面で検出しており、各建物跡群よりも一段上面で検出した東西方向の溝である。溝の検出長約40mで、上面幅約3m・最大深32cm前後を測り、溝の断面は「V」字形である。溝の埋土は黄褐色砂層で、埋土内に瓦片が含まれている。

S D 386 S D 374と平行するかのように掘り込まれた溝で、検出長約52m・上面幅50~100cm・深さ約10cmを測る。S D 386は、A建物跡群を囲む溝(S D 305)、及びS B 302の掘

形(三イ・二ロ)を切っており、溝は近世以降の土坑(S K 364)で途切れる。S D 386の埋土からは瓦片が多く出土した。

#### (6) 古墳の再利用

第3節の(1)、古墳で記したように、古墳の周溝(あるいは周濠)の一部を、奈良時代の瓦生産に伴って再利用した痕跡がある。

5号墳の周濠は、周濠の内外傾斜面が2段に傾斜しており、周濠内からの瓦の出土と考え合わせ、奈良時代に周濠の再利用をしていることは、第3節(1)の5号墳で説明した通りであり、貯水等を目的に周濠を再掘削したものと思われる。また、20号墳の周濠は、A建物跡群のまわりをめぐる溝(S D 305)に集まった汚水が、周濠内に流れ込むように掘り込まれている。そして、20号墳の周濠に集まった水が、周濠の東側に集中するように、周濠の底部よりもさらに深く掘り込まれた土坑(S K 318)がある。

A建物跡群の南側の古墳(6・14・15号墳)の周溝には、埴輪とともに、あたかも敷きならべたかのような状態で瓦が出土しており、墳丘の一部を削り、凹んだ周溝内に瓦をつめて人為的に造成したものと思われる。これは、瓦屋であるA建物跡群と焼成窯である市坂瓦窯の間を平坦にして、作業しやすいようにその間にある方墳を削り、さらに溝を埋め戻したものと思われる。

A建物跡群の西側にある16号墳では、周溝の上面及び低い墳丘斜面に瓦が集中していた(第98図)。瓦は、敷きつめたかのような状態であり、さらにその敷きつめた瓦の上に、何らかの重いものが乗って、重圧で割れたかのような状態で瓦が出土した。

(石井清司)

### 第6節 第三期の遺物

#### (1) 瓦磚類(図版第58～70)

瓦磚類は、整理箱にして700箱を数え、上人ヶ平遺跡の出土遺物でもその大半を占める。

この瓦磚類の構成は、軒丸瓦136点・軒平瓦61点・鬼瓦8点・磚16点で、その他は丸及び平瓦の破片が大半である。

瓦磚類の説明に際しては、各遺構ごとに出土瓦の説明を行うことはせず、瓦、特に軒丸・軒平・鬼瓦・磚についてその型式ごとに説明を行ったのち、その型式にそって各遺構の出土点数について若干の説明を行う。ただし、丸・平瓦については包含層内からのものが多く、かつ出土量が莫大なため、比較的まとまった資料であるS E 315・S K 319の資料を中心にその説明を行う。

なお、後述するように、上人ヶ平遺跡(市坂瓦窯)で生産された瓦の大半が平城京(宮)へ

供給されていること、平城宮の調査で軒瓦の型式が確立していることも考え合わせ、上人ケ平遺跡出土の軒瓦については、平城宮瓦型式名をそのまま使用する。<sup>(註41)</sup>

a. 軒丸瓦

軒丸瓦は、3型式6種136点が出土している。

6133A a型式(単弁12葉蓮華文) 直径16.5~17.4cm・中房径3.4cmを測り、圏線で囲まれた中房内に1+5の蓮子を、内区には先尖りの単弁12葉を、外区には13個の珠文を配する。外縁は斜縁である。

瓦当外周の下半は、横方向のケズリののち一部ナデ調整を加え、外周上半は縦方向のケズリののちナデ調整を加えるものがある。筒部外面は縦方向のケズリ、内面は筒部中位までを縦方向のケズリあるいはナデ調整し、中位から玉縁部先端にかけ布目圧痕をとどめる。

瓦当と筒部の接合方法には、瓦当範型に薄く粘土をつめ平坦にしたのち、筒部を定位置につけ、その後、分割範に粘土を補充、さらに筒部の内・外面に補強粘土を施すもの(a手法)のほか、分割範の外周分に粘土を補充し、中央部には補強粘土のみを施す(a'手法)がある。前者の瓦当裏面は比較的平坦であるが、後者は瓦当裏面が中凹みとなり、補強粘土が厚い。筒部の着装位置は、第2圏線を中心にしたものが多い。

6133A b型式(単弁12葉蓮華文) 直径16.5~17.2cm・中房径3.4cmを測り、文様構成は6133A aに同じ。

6133A bは、6133A aの瓦範の多用により、範がやせ、新たに彫りなおしたもので、花卉の高まりが低く、中房の圏線も正円ではなくやや変形しており、全体に木目が残るものが多い。瓦当と筒部の接合方法は6133A aと同じ。筒部の着装位置は、第2圏線を中心にしたものが多い。6133A b型式の瓦は、6133A a型式の瓦より出土量が多い。

6133B型式(単弁12葉蓮華文) 直径16.0cm前後・中房径約3.6cmを測り、圏線で囲まれた中房内に、1+6の蓮子を、内区には先尖りの単弁12葉を、外区には15個の珠文を配する。外縁は斜縁である。瓦当裏面は平坦なものの中凹みのものがある。

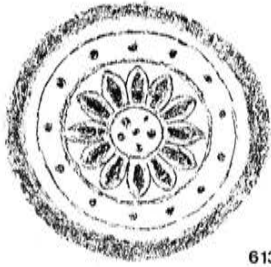
瓦当裏面と筒部の境の角度は、直角のものと直角に近い鈍角のものがある。

6133C型式(単弁13葉蓮華文) 直径16.8cm・中房径約3.8cmを測り、圏線で囲まれた中房内に1+6の蓮子を、内区には先尖りの単弁13葉を、外区には18個の珠文を配する。

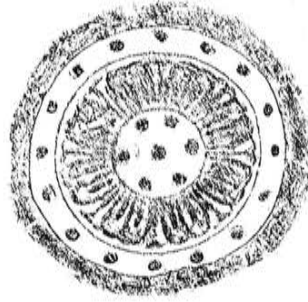
瓦当裏面は平坦なものの中凹みのものがある。6133C型式の瓦は出土量が多い。

6130B型式(単弁12葉蓮華文) 直径14.2cm・中房径約3.0cmを測り、突出した中房内に1+8の蓮子を、内区には各弁が2本の界線で囲まれた12葉の花弁を、外区には24個の珠文を配する。外縁は斜縁で、凸線鋸歯文が施されている。瓦当裏面は平坦である。

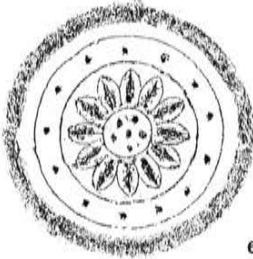
筒部は、第2圏線と第3圏線間の珠文を中心に着装する。



6133Aa



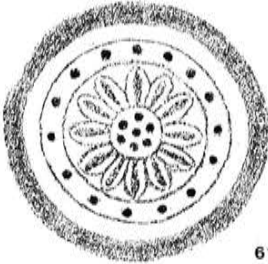
6235 Ma



6133Ab



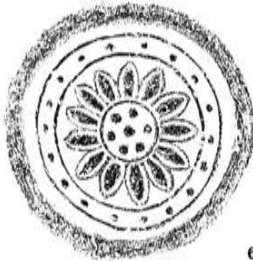
6732A



6133B



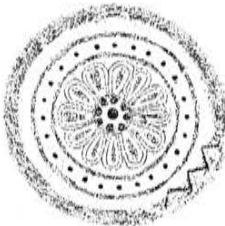
6732C



6133C



6725Ba



6130B



6725Bb



6718A

第99図 軒瓦型式図

付表8 瓦埴類集計表

	軒 丸 瓦								軒 平 瓦								鬼 埴				集計	
	6133				6130	6235	不	6732			6725			6718	6691	不	瓦	A	B	不		
	A a	A b	B	C	系	B	M a	明	A	C	系	B a	B b	系	A	B						明
SE315	1	3		1	1	2		1	2	4			3				2	1	1	1	2	25
SK319	2	3	3	1		1				3				1	2			1	1	1	2	21
SK321		3	1	3	8																	15
A建物群上面	3	1	2	3	4				2	1	1								1	1	2	21
16号埴周溝内		4	1		3					3	5	1	1					4	1			23
6号埴周溝内		1		2	11							1					1					16
15号埴周溝内			1		9				1	1												12
8号埴周溝内				1						1							2	1				5
14号埴				1				1							2							4
SB301				1				1		2												4
SB302					1																	1
SB304		1																				1
SD305	2		1		3																	6
SB312	2				1																	3
SB310				1															1			2
SB307		1			1		1															3
SB314		1																				1
SB353				1																		1
20号埴周溝内					2	2			1	1												6
SK318	1		2	1												1						5
SK317					1				1													2
SK316											1											1
SH104上層			1	1	1			1									1					5
SD346					1																	1
SD380					2																1	3
SK365	1		1																			2
SK382			1														1					2
SK363		1								1			1				1					4
SD379										1												1
SK381					1																	1
SD352																				1		1
その他	1		2	3	6	2			2	1	2	1			1		2					23
集計	13	19	16	20	56	7	1	4	9	18	10	2	4	3	5	1	9	8	5	4	7	221

6130B型式の瓦は出土量が少なく、7点を数える。

6235M a 型式(複弁8葉蓮華文) 直径19cm・中房径6.5cmを測り、弁区より一段低い位置に圏線で囲まれた大きな中房で、1+6の蓮子を配する。内区には肉厚で8葉の複弁の間に弁間を入れる。外区には16個の珠文を配する。外縁は斜線で鋸歯文は施さない。

瓦当と筒部との間に剝離面がなく、その接合方法は明らかでない。

瓦当裏面は中凹みで、瓦当裏面と筒部側面との境の角度は鈍角である。

6133M型式は東大寺<sup>(注42)</sup>頭塔などから出土しているが、頭塔出土の同型式の瓦は文様がやや不鮮明であり、箔ぎずがあることから、上人ケ平遺跡出土の瓦の彫り直しと思われる。

6235M a 型式の瓦はSB307の掘形内から、6133A b型式の瓦とともに1点出土したのみである。

b. 軒平瓦

軒平瓦は、4型式6種61点で、軒丸瓦の1/2の出土量である。

6732A型式(均整唐草文) 中心飾りは、下から上へ巻き込む唐草で、小さなパルメットを囲み、さらにその上に両側から内包するように松葉状の葉を対向させた対葉花文である。唐草は3回反転で、主葉・支葉の別がはっきりしており、第2単位第2支葉が二股に分かれる。第3単位は脇区界線に取り付かない。上・下外区の珠文は9、脇区の珠文は3である。顎は曲線顎である。凹面は、瓦当近くの5~10cmを横ケズリするほかは、布目圧痕を残す。凸面は、短辺に対して縦位の縄叩き目を残す。

6732C型式(均整唐草文) 6732C型式は、6732A型式に比べやや小ぶりで、唐草の主葉・支葉の巻が6732A型式に比べ弱い。顎は曲線顎である。凹面は瓦当近くの10cmまで横ケズリするほか、布目圧痕を残す。凸面は縦位の縄叩き目とともに瓦当面から6.5~8cm狭端面寄り、幅5~10cmにわたり横位の縄叩き目を残すものがあり、後者の出土例が多い。

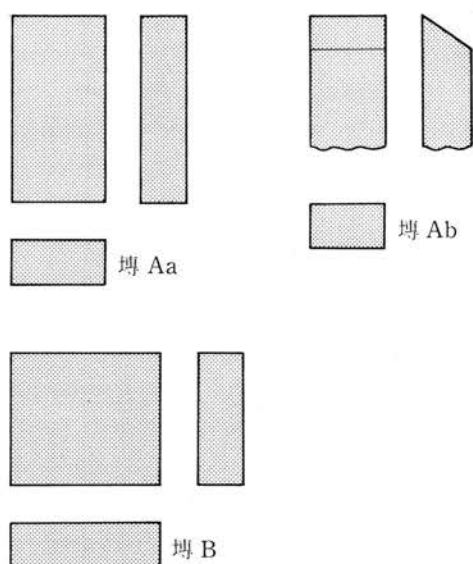
6725Ba型式(均整唐草文) 中心飾りは、6732型式と同様下から上へ巻き込む唐草で、小さなパルメットを囲む。唐草は3回反転で、主葉と上・下に分かれる支葉とからなる。第3単位の主葉から脇区界線、上方の隅部にだけ1本の短い支葉がのびる。上・下外区の珠文は13、脇区の珠文は3で、脇区上の珠文は円形とはならず菱形に近い形で掘り込まれている。凹面は、瓦当近くの5cmを横ケズリするほかは布目圧痕を残す。凸面は、縦位の縄叩きの上に横位の縄叩き目を加えるものがある。顎は曲線顎である。

6725Bb型式(均整唐草文) 6725Ba型式の範に、第1単位の主葉から分かれた支葉を1本、主葉より下に彫りたしている。6725Ba型式と同様、中心飾りの下端と第1主葉とその支葉がほぼ接している。凹面・凸面の調整方法は、6725Baと同じ。顎は曲線顎である。

6718A型式(均整唐草文) 中心飾りから4回反転の唐草文で、主葉と支葉の区別が不明瞭である。上・下外区の珠文は20、下外区及び脇区の珠文の数は不明である。中心飾りは平城宮出土同型式の瓦によると、下から上へ強く巻き込む唐草文である。6718型式の中には、輪積み成形によるものもある。凹面は瓦当近くの5cmを横ケズリするほか、布目圧痕を残す。凸面は、縦位の縄叩き目のち横位の縄叩き目を加える。顎は曲線顎である。

上人ヶ平遺跡出土の6718A型式の軒平瓦は、6732型式の瓦に比べ小ぶりで、全体に焼成が甘い。

6691B型式(均整唐草文) 中心飾りは、「C」字上向内に花頭形を垂飾するものと思われるが、欠損しており不明である。唐草文は中心飾りから3転半で、主・支葉の巻き込みは強い。平城宮出土の同型式の軒平瓦の例では、上外区の珠文は17、下外区の珠文は16を数える。



第100図 磚模式図

付表9 磚法量表

遺構名	型式	長辺	短辺	厚さ
S E 315	B	31	—	7.2
S E 315	—	31	—	6.4
S E 315	—	31	—	7.2
S E 315	A	—	15	7.8
S K 319	A	—	14	—
S K 319	—	25	—	7.3
S K 319	B	31	—	6.6
S K 319	—	—	—	5.1
S D 352	B	25	24	7
S B 310	A	—	14	6.3
12-13bt包含層	A	—	14	7.2
20bt暗茶灰色土	A	—	14	6.7
20bt暗茶灰色土	—	—	—	7.2
18号墳	A	—	15	5
16号墳	A	—	14	10
S F 380	—	—	—	—
20bt包含層	—	—	—	6.8
20bt包含層	B	32	—	7

上人ケ平遺跡出土の6691 B型式の軒平瓦は1点(S K 318出土)(図版第63、25)で、その調整は凹面を瓦当近くの5 cmを横ケズリするほか、布目圧痕を残す。凸面は、縦位の縄叩きののち、横位の縄叩き目を加える。顎は曲線顎である。

### c. 鬼面文鬼瓦

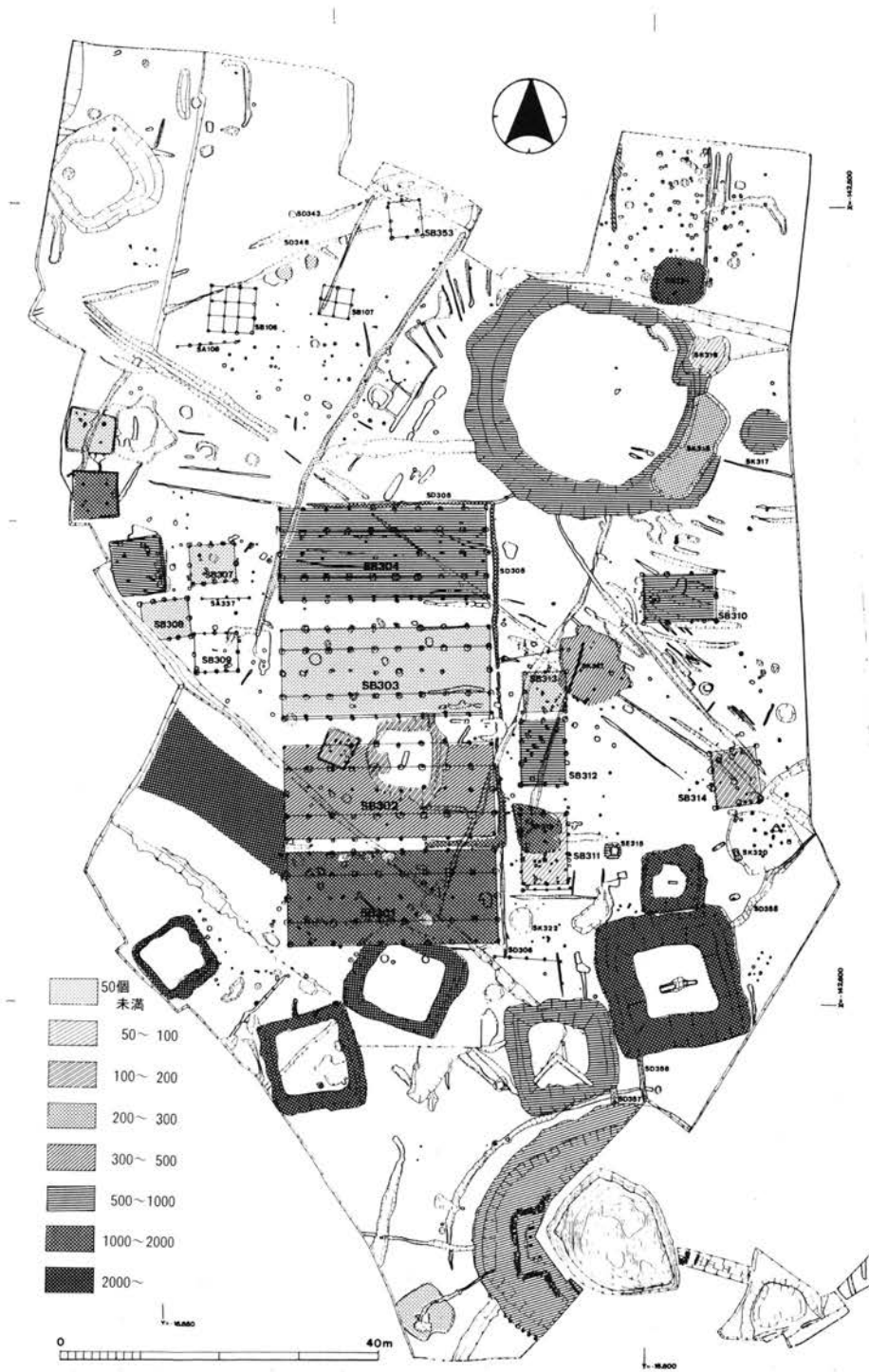
下顎部を省略し、顔面上半のみを表現したもので、三葉形の鼻、木葉形の耳で、額と頬の周囲に複線で構成された蕨手状の巻毛で表現する。上人ケ平遺跡では、鬼瓦は1型式のみで、この型式は毛利光敏彦氏の分類による平城宮瓦式-Bに相当する<sup>(注43)</sup>。この型式の鬼瓦には、眉間の部分にくぎ穴のあるものとなないものがある。

### d. 磚類

磚は、長方形のもの(A類)と正方形のもの(B類)がある。そのうち、A類は短辺が直角なもの(Aa)と斜めに切っているもの(Ab)、2個一對の円穿を焼成前にあけているものがある。磚は、いずれもブロック状の粘土を型枠の中につめこんで成形し、そののち外面をヘラで調整したものと思われる。

### e. 瓦の分布

上人ケ平遺跡が立地する台地上での瓦の分布は、奈良時代の遺構の分布状況と同様、台地中央部の1トレンチに集中する。この1トレンチ内での瓦の分布をさらにみていくと、A建物跡群の上面・A建物跡群の南東側に分布する古墳の周溝・B建物跡群の南半部に、特に集中する傾向がある。



第101図 遺構別瓦分布図



包含層を除いた遺構から出土する瓦の分布をみると、後述するようにSK321(第Ⅱ支尾根の基部)の瓦及び土器だまり、SB311の建物の廃絶後に掘られた土坑(SK319)、台地中央にある井戸(SE315)、A建物跡群を取り囲む溝(SD305・306)のほか、5・6・14・15・16号墳の周溝から、埴輪とともに多量の瓦が出土した。このうち、SK321・SK319などから出土する瓦は細片が多いため、比較的良好な出土状態であったSE315の瓦磚類を取り上げ、上人ヶ平遺跡の瓦磚類の説明にかえる。

#### f. SE315出土の瓦磚類

SE315は、上面での長さ一辺約2.0m・深さ約1.5mを測る方形の井戸である。

この井戸内からは、上層で瓦磚類、下層で土器が出土した。

瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・鬼面文鬼瓦・丸瓦・平瓦がある。

軒丸瓦は、付表8のとおり9点を数え、その内訳は、6133Aa型式1点・6133Ab型式3点・6133C型式1点・6130B型式2点で、他に細片のため、型式が明らかでないものが2点(そのうち6133系1点を含む)ある。軒平瓦は、11点で6732A型式2点・6732C型式4点・6725Bb型式3点で、他に細片資料が2点ある。

鬼面文鬼瓦(図版第60、26)は1点、完形に近い状態で出土した。SE315出土の鬼瓦には、眉間の位置に目釘穴がある。

丸・平瓦は整理箱にして10箱を数え、丸瓦と平瓦の割合は、丸瓦片136点に対し平瓦片284点と、1:2の割合で平瓦が多い。

平瓦は、広端面の幅28.5cm、狭端面の幅23cm、長さ36.7cm、厚さ2cm以上を測る平瓦A類と広端面23.0cm、狭端面の幅21.5cm、長さ35.4cm、厚さ2cmのやや小ぶりな平瓦B類に大別することができる。A類の胎土は砂粒を多く含む。焼成は甘く、色調が黄灰色～白灰色であるのに対し、B類の色調は黒灰色で、焼成がA類より良好であり、細片でもA・B類を識別することは可能である。

このA類の瓦の破片数は136点で、1枚の重量2.5～3.0kgで換算すると、28～33枚の瓦の破片数となり、同じくB類は248点で1枚の重量2.0kgで換算すると、45枚分の瓦の破片となる。このA類の平瓦は軒平瓦では6732型式に、B類の平瓦は6725型式の瓦と法量・焼成が酷似する。

丸瓦はいずれも玉縁部を有するもので、玉縁部の破片数36点を数える。

この瓦も平瓦と同様、法量・焼成等によりA類とB類に大別することができる。

A類は幅17cm・厚さ1.4～2.1cmを測り、平瓦A類と同様、焼成が甘い。色調は黄灰色～白灰色のものが多い。これに対して、B類は平瓦B類と同様、焼成が良く色調は黒灰色である。丸瓦の調整は凸面を縦方向の縄タタキののち、不定方向のナゲ調整を施す。

磚は、長方形のもの(A類)と正方形のもの(B類)がある。

A類(33)は残存長26.0cm・幅14.6cm・厚さ8.2cmを測る。

B類(28)は長さ31.5cm・残存幅16.5cm・厚さ6.6cmを測る。

A・B類ともケズリ調整のあとがみられる。

#### g. SK319出土の瓦磚類

SK319からは、少量の土器とともに瓦が多く出土した。

軒丸瓦は、付表8のとおり総数10点で、その内訳は、6133Aa型式2点、6133Ab型式3点、6133B型式3点、6133C型式1点、6130B型式1点である。

軒平瓦は、6732C型式3点、6718A型式2点、その他に、細片のため型式の明らかでないもの1点(6725系)がある。

鬼面文鬼瓦は、顔面右側の蕨手状の巻きの部分の細片が1点出土した。

磚は4点出土した。磚Aの中には、A建物群上面(29)、SB310掘形内出土(30)の磚と同様、焼成前に円孔を穿っているものがある。

## (2) 土器類(図版第71～75)

上人ケ平遺跡が立地する台地上には、前述のように奈良時代の遺構が広く分布している。各遺構からは、多量の瓦が出土しているが、土器の出土量は以外に少なく、整理箱にして20箱にも満たない量である。

奈良時代の土器は、各地点で広く分布することはなく、SE315の下層、一辺6.75mを測る隅丸方形土坑(SK321)、長径2.73m×短径1.74mの楕円形土坑(SK375)の各遺構で、比較的まとまって出土している程度であった。ここでは前記の遺構から出土した遺物を中心にその概要を説明する。

### 1. SK321出土の土器

SK321からは、付表10のとおり、須恵器108個体以上、土師器160個体以上が出土した。このうち、土師器は杯・皿の細片が多く、個体数として数えられない細片が多いため、実数以上に杯・皿類はあったものと思われる。

#### ①須恵器

杯A(94～99)は、平らな底部から外反する杯部へ続き、口縁部は杯部から直線的に終わるもの(94)のほか、わずかに外反するもの(95～98)、内湾ぎみに立ち上がるもの(99)がある。

杯B(100～103・115・116)は、平らな底部で、杯部が直線的に立ち上がるもの(101・102・115・116)と、内湾ぎみに立ち上がるもの(100・103)がある。高台の位置は、底部と杯部

の屈曲部付近に

付表10 SK321土器集計表

貼り付けるもの

(100・101・103・115)のほか、屈曲部より内側に

貼り付けるもの

(102・116)がある。

杯蓋(113・

114)は、平坦な

頂部から屈曲す

る縁部へ続き、縁端部が鋭く屈曲する。頂部中央には高い宝珠形つまみを貼り付ける。縁部内・外面はロクロナデ、内面中央は一方向のナデ調整を施す。

皿A(118~120)は、平底の底部から斜め上方に短く立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部が尖りぎみのもの(119)、平坦面をなすもの(120)、外反ぎみに屈曲するもの(118)がある。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面は一方向のナデ調整を施す。

皿蓋(121)は、大皿の蓋である。平坦な頂部から緩く屈曲する縁部へ続き、縁端部は垂直ぎみに屈曲する。頂部中央にはやや偏平な宝珠形つまみを貼り付ける。縁部内・外面はロクロナデ、内面中央には一方向のナデ調整を施す。

壺(107・108・110)は、平底の底部から、斜め上方に直線的に立ち上がる体部へ続き、口縁部は、内側に鋭く屈曲したのち、直立ぎみに短く立ち上がる。口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

壺蓋(106)は、水平な頂部から、口縁部は鋭角ぎみに垂下する。口縁部内・外面はナデ調整を施す。

壺(111)は、体部最大径が中位よりやや上方にあり、口縁部はナデ肩の体部から外反ぎみに短く立ち上がり、口縁端部は外方に肥厚する。口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

短頸壺(122・123)は、偏球形の体部で、口縁部はナデ肩の体部から外反ぎみに短く立ち上がる。口縁部内・外面はナデ、体部外面は平行のタタキののちナデ、体部内面下半は青海波文のタタキを残す。

壺L(109)は、肩部の張った偏球形の体部で、底部には底部と体部の屈曲部にふんばった形の高台を貼りつける。

	須恵器	個体数	個体数(比率%)
食器	杯A	36	84 (95.5%)
	杯B	33	
	杯蓋	15	
	皿A	2	
	皿B	1	
貯蔵器	皿蓋	1	4 (5.5%)
	壺A	6	
	壺A蓋	1	
	壺E	2	
	壺L	3	
計	壺X	1	14 (70%)
	平瓶	1	
	甕A	6	
	計	108	

	土師器	個体数	個体数(比率%)
食器	杯A		
	杯B	2	2 (3.4%)
	椀	32	32 (54.2%)
	皿A	17	23 (39.0%)
	皿C	6	
	片口鉢	1	
煮炊具	高杯	1	1 (1.7%)
	甕A a	67	100 (99%)
甕A b	33		
甕	1	1 (1%)	
計	計	160	

平瓶(105)は、平らな体部と注口部・把手からなる。105の製作方法は、他の平瓶と同様、体部下半をロクロで引き上げたのち、粘土をつぎ、中央に径1.4cmの穴が残る段階まで成形し、別に製作した注口部と手づくねによる把手を貼り付ける。

壺底部片(104)は、倒卵形の体部と思われ、底部は平底である。

壺口縁部片(112)は、細頸壺あるいは長頸壺の頸部片である。

甕口縁部片(124・125)は、外反ぎみに立ち上がる口縁部から、口縁端部は上方(125)あるいは上・下方(124)につまみ出す。口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

鉢(126)は、平底の底部から、内湾ぎみに深く立ち上がる体部へ続き、口縁部は内湾ぎみに短く立ち上がる。端部は丸くおさめる。口縁部はひねり出して片口をつくる。体部外面下半はヘラ削り、内面はナデ調整を施す。

不明瓦質土器(136)は、裾開きの高い脚部で、台部は短く立ち上がる。全体に器壁が厚く、作りも粗雑である。この土器の用途については瓦生産にかかわる道具と思われるが、その用途は不明である。

## ②土師器

杯A(127・128)は、平底ぎみの底部から、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。口縁部はヨコナデ調整を施す。

杯B(132)は、平底ぎみの底部から、内湾ぎみに立ち上がる杯部へ続き、口縁端部は内側に丸くおさめる。底部には断面が方形に近い高台を貼り付ける。杯部外面には横方向のていねいなヘラミガキ調整を施す。

椀(129～131)は、平底あるいは上げ底ぎみの平底の底部から、斜め上方に内湾ぎみに立ち上がる体部へ続き、口縁部は直立あるいは外反ぎみに立ち上がる。体部外面は不調整で、指頭圧痕が残る。体部内面はナデ調整を施す。

皿(137～140)は、平らな底部で、口縁部は斜め上方に内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は肥厚し丸くおさめる。口縁部外面はていねいな横方向のヘラミガキ調整を施す。口縁部内面には放射状の暗文が認められるもの(138)もある。

鉢(141)は、内湾ぎみに立ち上がる体部から、口縁部はさらに内湾ぎみに立ち上がる。口縁部内・外面はナデ調整を施す。

甕(133・142～144)は、偏球形(142)あるいは長胴ぎみの体部で、口頸部は「く」の字形に屈曲する。口縁端部は内・外方に肥厚するもの(133・142)、直立ぎみにつまみ上げるもの(143・144)、がある。体部外面は、縦方向のハケ(133・143・144)、あるいは指頭圧痕を明瞭にとどめるもの(142)がある。体部内面は、横方向のハケ(133)あるいは不調整(142～144)。口縁部は外面ナデ、内面はナデあるいは横方向のハケ調整をとどめるものがある。

甑(134)は、直立ぎみに深く立ち上がる体部で、口縁端部は内方にわずかに肥厚する。体部外面の中位には2個一対の把手を貼り付ける。体部外面はハケ、内面は指頭圧痕が残り、上半部に一部横方向のハケ調整が認められる。

## 2. S K375出土の土器

S K375は、長径2.37m×短径1.7mの楕円形土坑である。この土坑からは多量の瓦のほか、須恵器壺・杯身・杯蓋・高杯・甕、土師器杯・甕などが出土した。

### ①須恵器

杯A(147・148)は、平らな底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみに終わる。口縁部内・外面にはロクロナデ、内底面には一方向のナデ調整を施す。

杯B(150・151・153～155)は、平らな底部から斜め上方に直線あるいは内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続く。底部と口縁部の屈曲部よりやや内側に高台を貼り付ける。口縁部内・外面はロクロナデ調整、内底面は一方向のナデ調整を施す。

杯B蓋(149・152)は、平坦な頂部から屈曲する縁部へ続き、縁端部は丸みをもって終わる。頂部中央には扁平な宝珠形つまみを貼り付ける。縁端部内・外面はロクロナデ調整、内面中央には一方向のナデ調整を施す。

長頸壺(145・158)は、体部最大径付近に明瞭な稜線の入る算盤玉形の体部で、直立ぎみに長く立ち上がる頸部へ続く。底部と体部の境付近に断面台形の高台を貼り付ける。(158)は、肩部外面に3条の鋭い沈線がめぐる。

高杯(159・160)は、筒状の柱状部から裾開きの脚部へ続き、脚端部は内側に折り返す。杯部は水平ののびたのち、口縁部近くで斜め上方に立ち上がり、口縁端部は内側に丸く折り返す。口縁部内・外面はロクロナデ、内面は一方向のナデ調整を施す。脚部外面には斜め方向の指頭圧痕が残る。

平瓶(171)は、注口部のみである。外反ぎみに立ち上がる頸部から、口縁端部は外方に肥厚する。

甕(161)は、肩部の張った球形の体部で、口頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面にはへら状工具で横方向に圧痕を入れる。体部内面には青海波文のタタキ目を残す。

### ②土師器

杯(146)は、平らな底部から、斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は内側に丸くおさめる。口縁部内・外面はヨコナデ調整を施す。

甕(156・157・173・178・179)は、長胴形の体部で、口縁部は「く」の字形に屈曲した

のち、口縁端部は内側につまみ上げる。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整を施すものと不調整で指頭圧痕を明瞭にとどめるものがある。口縁部外面はハケののちヨコナデ、内面は横方向のハケ調整を残す。

### 3. SE315出土の土器

SE315からは、上層で多量の瓦が、そしてその下層から少量の土器が出土した。

土器は、須恵器壺L・杯A・杯B・杯B蓋・皿A・盤、土師器甕などが出土した。

壺L(187)は、肩部の張った球形の体部で、直立ぎみに立ち上がる頸部へ続く。底部と体部の屈曲部にやや踏んばった形の高台を貼り付ける。

壺底部片(188)は、平底ぎみの底部で、体部は内湾ぎみに長く立ち上がる。

杯身(183)は、平底の底部で口縁部は、斜め上方に立ち上がる。口縁端部は内側にわずかに肥厚する。外底面には「司」と墨書されている。183は、口縁部内・外面をロクロナデ調整、内底面はナデ調整を行う。

杯B蓋(193)は、水平な頂部から屈曲する縁部へ続く。縁部内・外面はロクロナデ、内面中央は一方向のナデ調整を施す。SE315では図示していないが、杯B蓋とセットになる杯Bの底部片も出土している。

皿A(194)は、平らな底部で、口縁部は斜め上方に短く立ち上がり、縁端部は面をつくる。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面はナデ調整を施す。

盤(189)は、丸底ぎみの底部で、口縁部は斜め上方に長く立ち上がる。口縁端部は外方にわずかに肥厚し、丸みをもって終わる。内・外面の調整は遺存状態が悪く不明である。

甕(196)は、肩部の張った長胴形の体部で、口頸部は、外反ぎみに立ち上がる頸部から大きく屈曲する口縁部へ続き、口縁端部は上・下方に肥厚する。体部外面は、斜め方向の平行タタキののちナデ、体部内面は青海波文のタタキ目を残す。口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

土師器甕(184・190・195)は、長胴形の体部で、口頸部は「く」の字形に屈曲したのち、口縁端部でわずかに内湾する。口縁端部は内方にわずかに肥厚する。体部外面は、縦あるいは斜め方向のハケ調整を施すもの(190・195)、ナデ調整を施すもの(184)がある。口縁部はハケ調整を施すもの(190・195)がある。

### 4. 6号墳出土の土器

6号墳の周溝内には埴輪とともに奈良時代の瓦・土器が出土した。そのうち、土器は須恵器杯A・杯B・壺・甕がある。

杯A(162・164・169・176)は、平らな底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部で、口縁端部は尖りぎみで終わる。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面は一方向のナデ調整

を施す。

杯B(163・167・168・170)は、斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部で、口縁端部は丸みをもって終わる。底部と口縁部の屈曲部より内側にふんばった形の高台を貼り付ける。

壺(174)は、肩部の張った球形の体部で、口頸部は直立ぎみに短く立ち上がる。

壺口縁部片(165・166)は、長頸壺の口頸部片である。頸部は直立ぎみに長く立ち上がり、口縁部は強く外反したのち、口縁端部を直立ぎみにつまみ上げる。口縁部内・外面はロクロナデ調整を施す。

甕(177)は、外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁部に続き、口縁端部は外方に肥厚し水平面をつくる。体部外面には斜め方向の、内面には青海波文のタタキ目が残る。

#### 5. SB304掘形内出土の土器

壺(186)は、掘形の柱穴の真上から底部を上にした状態で出土した。186は、丸底ぎみの底部から、斜め上方に立ち上がる体部へ続き、体部上半で大きく屈曲する長頸壺と思われる。底部と体部の屈曲部には、断面長方形の高台を貼り付ける。186は、焼成後、底部を打ち欠いている。

#### 6. SB301掘形内出土の土器

杯蓋(180)は、水平の頂部から、屈曲する縁部へ続き、縁端部は丸みをもって終わる。縁部内・外面はロクロナデ、内面中央は一方向のナデ調整を施す。

土師器(181・182)は、内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部は尖りぎみに終わる。口縁部内・外面はナデ調整を施す。

#### 7. SK319出土の土器

SK319からは、多量の土器とともに少量の須恵器が出土した。

杯A(185)は、平らな底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみに終わる。口縁端部内・外面はロクロナデ調整、内底面は一方向のナデ調整を施す。

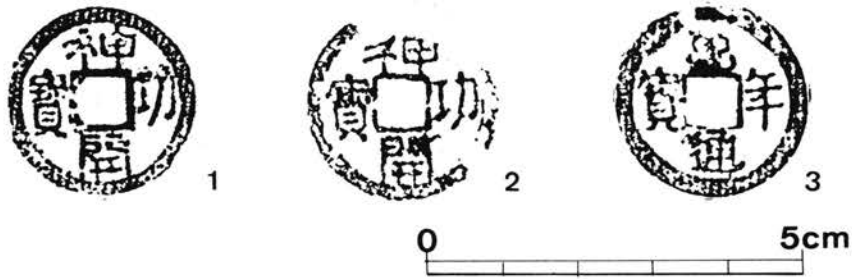
杯B(191)は、平らな底部から丸みをもって屈曲する口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみに終わる。底部と口縁部の屈曲部より内側に断面台形のふんばった高台を貼り付ける。口縁部内・外面はロクロナデ、内底面は一方向のナデ調整を施す。

平瓶(192)は、肩部の張った偏平な体部で、外反ぎみの注口と把手を貼り付けている。

### (3) 銭貨

銭貨は、1トレンチの東端SK320から4枚以上出土した。

神功開寶(1)は、「功」の字が「刀」に、「開」の字は「開」となる。外径2.5cmを測る。



第102図 銭貨拓影

神功開寶(2) は、2枚の銭貨が付着しており、裏面の銭貨の銘文は不明である。

神功開寶(2) は、「功」の字が「カ」で、「開」の字は「開」となる。外径2.6cmを測る。萬年通寶は、「年」の字が「年」となる。外径2.55cmで、外縁幅が0.25cmと広い。

#### (4) 小結

奈良時代(第Ⅲ期)の遺物は、台地中央部の1トレンチに集中する傾向にあり、その遺物は瓦類が大半で、調査面積に対して土器の出土量は少ない。

瓦、特に軒瓦をみると、軒丸瓦136点・軒平瓦61点と、2：1の割合で軒丸瓦の出土量が多い。軒丸瓦は、6133型式系が特に多く、彫り直しを含めた6133Aa型式・Ab型式は、軒丸瓦の23.8%を占める。軒平瓦は、6732型式系が、軒平瓦の60.1%を占め、6732型式系の内でも、6732C型式のものが多く、上人ヶ平遺跡における軒瓦の主流は、軒丸瓦が6133A型式、軒平瓦が6732C型式となる。この傾向は、上人ヶ平遺跡の焼成窯である市坂瓦窯から採集された出土軒瓦でも同じである。

この軒丸瓦6133A型式、軒平瓦6732C型式の瓦が平城宮内で多く出土する地点は、平城宮大膳職地域であり、上人ヶ平遺跡(市坂瓦窯)が、大膳職所用瓦窯<sup>(注44)</sup>として位置づけられる。

平城宮瓦編年によると、軒丸瓦6133A型式・軒平瓦6732C型式は、平城宮軒瓦の編年では、第Ⅲ期の天平17(745)年以後の平城還都後の造作にかかわるもので、天平勝宝年間(756年まで)の時期に相等し、この時期に上人ヶ平遺跡(市坂瓦窯)が操業されていたものと思われる。なお、最近の平城宮での調査成果によると、軒丸瓦6133A型式・軒平瓦6732C型式の組み合わせは、一時期新しい平城宮軒瓦型式の第Ⅳ—1期(天平宝字元(757)年から、神護景雲元(767)年)に相等する可能性が高く、天平宝字元(757)年5月の「大宮改修」、同5(注45)年(762)年の「平城宮改修」に伴う瓦工房の可能性もある。

(石井清司)



## 第7節 第Ⅳ期の遺構・遺物

第Ⅲ期の遺構が台地中央部の1トレンチに集中するのに対し、奈良時代以降の第Ⅳ期の遺構は、台地中央部より東で、I支尾根基部の第7トレンチに集中する傾向がある。

### (1) 遺構

第Ⅳ期の遺構には、掘立柱建物跡(S B502)と、S B502をとり囲む溝状遺構(S X501)、柵列(S A503・504)、溝状遺構(S D505・507・509)、不整形の土坑(S K506・508)などがある。また、1トレンチ及び7トレンチでは、性格不明の焼土坑(S K510・511・512・513・514)がある。この焼土坑には遺物が含まれておらず、その時期が明らかでないため、ここでは第Ⅳ期の遺構として取り上げる。

S B502 S B502は、1間×1間(東西3.3m・南北3.1m)のほぼ正方形の小規模建物跡である。各掘形は、隅丸方形プラン(一辺30cm前後)で、柱痕跡(径15cm前後)がある。

S X501 S X501は、S B502の建物と主軸をそろえた「コ」の字状にめぐる溝で、東辺が掘られずに開放されている。S X501は溝の中軸で測ると、西辺長1.8m・北辺長7.5m・南辺長5.0mを測る。溝は、底部が若干の平坦面をもたず逆台形状で、上縁幅約1.5m・深さ0.4mを測る。各溝は、粘土系の土を埋土とし、溝底より高い位置で人頭大の自然石が転落した状態で出土した。遺物は、溝の埋土内から少量の土師皿・土師質鍋が出土した。前述のS B502建物跡は、基壇状に掘り残された空間に位置する。

S A503 S X501の北溝の東端から、南にのびる柵列である。この柵列はS B501建物の東辺を画する柵列と考えられるが、建物前面にはつづかない。

S K510 S K510は、7トレンチの東端で検出した焼土坑で、側壁のみ硬く焼きしまっている。焼土坑は、他にS B307の中央など5か所で検出しているが、S K510を含め、埋土内に遺物を含まないため、その時期については不明である。

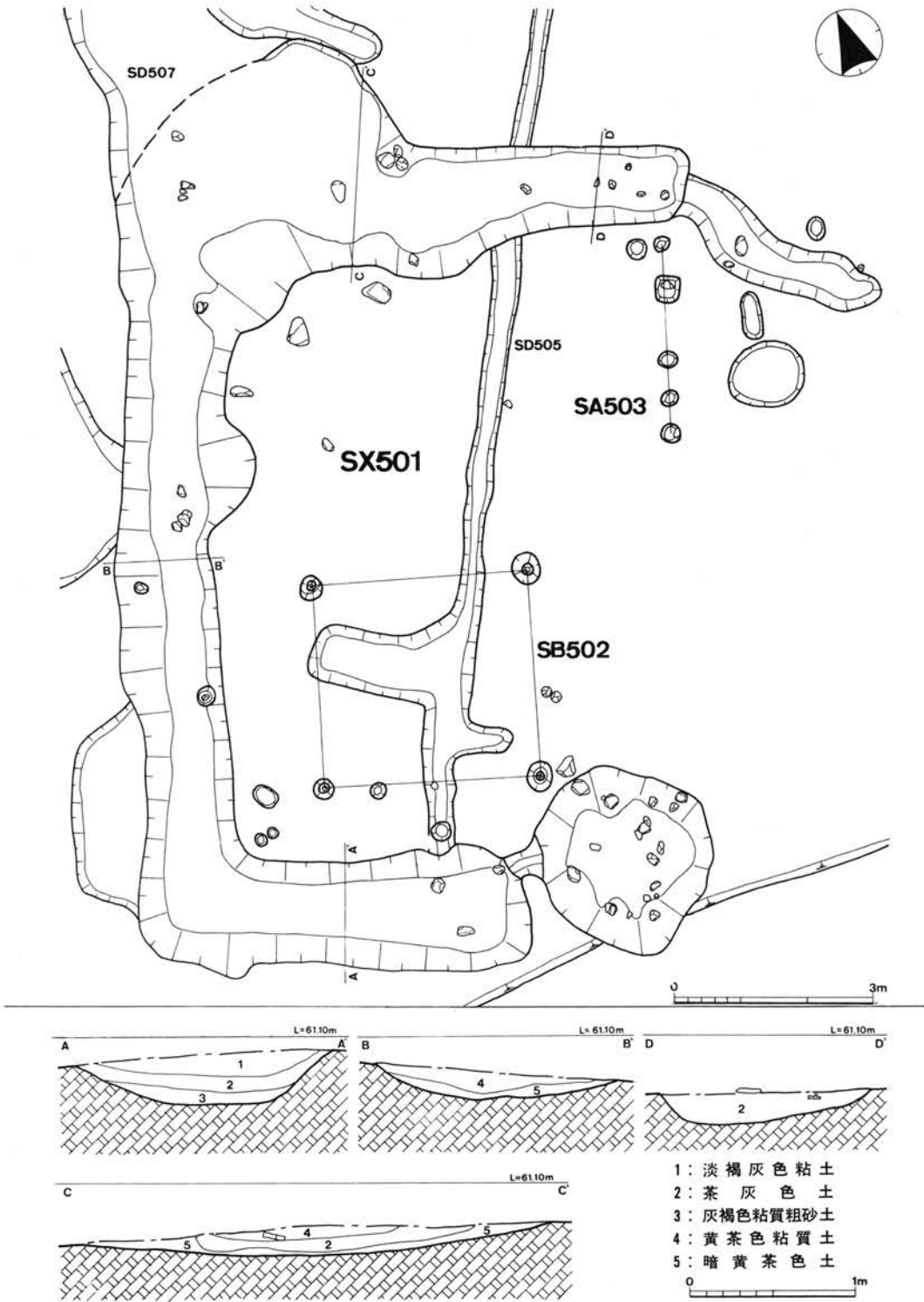
### (2) 遺物

第Ⅳ期の遺物は、第1・7トレンチの粗掘り中のほか、明確な遺構から出土したものとしてS X501の埋土内からがある。

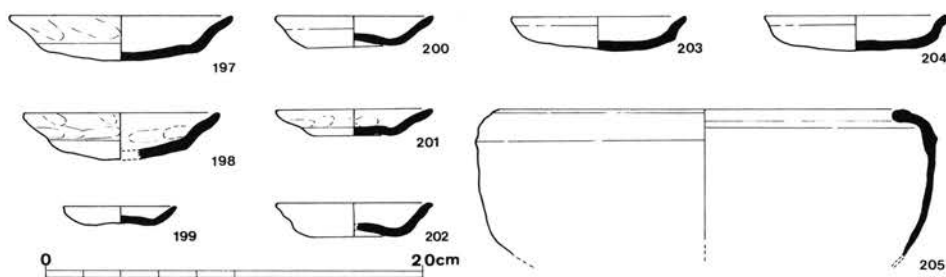
#### 1. S X501出土の土器

S X501からは少量の土師皿が出土した。

197・198は、やや丸みをもった底部で、口縁部は斜め方向にやや湾曲してから立ち上がる。口縁部内・外面はヨコナデ、他は不調整、197は口径11.7cm・器高2.45cm、198は口径



第103図 SX501周辺実測図



第104図 第IV期の遺物実測図

197・198・200～202：S X 501 199・203・204：1トレンチ粗掘り中 205：7トレンチ粗掘り中

10.2cm・器高2.55cmを測る。

## 2. 包含層出土の土器

第1・7トレンチの粗掘り中からも第IV期の遺物が出土した。

土師皿(199・203・204)は、口縁部が短く上方につまみ上げたもので、口縁部内・外面はヨコナデ、他は不調整である。199の口唇部には一部ススが付着している。199は口径6.1cm・器高1.1cm、203は口径9.0cm・器高1.85cm、204は口径9.5cm・器高1.9cmを測る。

鍋(205) 鍋あるいは羽釜と思われる。直立ぎみに立ち上がる深い体部から、口縁部は内側に強く屈曲する。口縁部内・外面はヨコナデ、体部内・外面は摩滅のため調整不明。大和産か。205は、第7トレンチS X 501周辺で出土した。

## (3) 小結

第IV期の遺構・遺物は、第7トレンチで集中してみられる。そのうち、明確な遺構は、方形の建物とそのまわりを囲む溝で、祠あるいは墳墓堂の性格をもった遺構<sup>(注46)</sup>と思われる。そしてS X 501から出土した土師皿からみると、その造営時期は14世紀と思われる。他に、遺構には伴わない土師皿(203・204)は、12世紀後半のものと思われるが、それに関連した遺構はみつかっていない。

(石井清司)

## 第4章 考 察

### 第1節 遺跡の変遷

上人ヶ平遺跡は、昭和59・61・62年度の3か年にわたる試掘調査と、昭和63・平成元年の2か年にわたる本調査により、ほぼその全容が明らかとなった。

遺跡は、弥生時代後期から室町時代にいたる遺構・遺物が錯綜しているが、この上人ヶ平遺跡での土地利用をみていくと、4期に大別することができる。

すなわち、第Ⅰ期は竪穴式住居跡と倉庫跡で構成される「ムラの時代」、第Ⅱ期は古墳が順次築造されていく「墓(古墳)の時代」、第Ⅲ期は瓦生産を行った「瓦屋の時代」、そして第Ⅳ期は中世以降現在に至る時代である。

以下、各時期ごとにその概要を説明していく。

#### 第Ⅰ期 ムラの時代—3世紀から5世紀まで—

弥生時代後期から古墳時代前半にかけて、この台地上は生活の場=集落(ムラ)として活用されている。ただ、弥生時代後期の遺構は1基の竪穴式住居跡と2基の周溝状遺構、土坑が尾根先端部にかたよって存在するにすぎず、ムラの実態はやや不明瞭である。

古墳時代前半のムラは、竪穴式住居跡15基と倉庫5棟で構成されているが、それぞれが台地全体にまんべんなく配置されるのではなく、大きくは2グループに分けることが可能である。

Aグループは台地の東端のⅠ支尾根に立地し、背後には瓦谷古墳・幣羅坂古墳がある。

Aグループのムラの構成は、建て替えを含め11基の竪穴式住居跡と3棟の倉庫跡からなり、倉庫を中央に、その周辺に竪穴式住居跡が配されている。竪穴式住居跡はⅠ支尾根東斜面にかたよって立地する傾向にある。

Bグループは、台地中央部の西端にかたよってあり、竪穴式住居跡4棟と2棟の倉庫跡からなる。Bグループのムラは、Aグループと同様、倉庫跡が台地の中央やや西寄りに、そして倉庫跡を取り囲むように竪穴式住居跡が台地の南側にかたよって存在する。

竪穴式住居跡及び倉庫跡のほかには、焼土・炭を含んだ土坑などがある。これらの土坑についての性格は明らかでない。

Ⅱ支尾根の先端にある方(あるいは円)形周溝状遺構は、墓となる可能性が高い。また、Ⅱ支尾根の基部にある20号墳も時期を決定するだけの出土遺物がないため、第Ⅰ期に含めるか、第Ⅱ期に含めるか、議論が分かれている。ここでは、S X 119・120、20号墳の墓が

第Ⅰ期に含まれる可能性もあることを指摘するにとどめる。

#### 第Ⅱ期 墓(古墳)の時代—5世紀後半～6世紀前半まで—

ムラの衰退・廃絶と入れ替わるように5世紀中頃以降、上人ケ平遺跡が立地する台地上は墓地(墓域)に変化する。

第Ⅰ期のムラの時代にも、上人ケ平遺跡の周辺では、瓦谷古墳・幣羅坂古墳などの古墳は築造され続けるが、上人ケ平遺跡の台地上では、時期が不確定な20号墳などを除き、まだ墓域としては確立していなかった。これが第Ⅱ期には、居住空間から墓域へと大きく変化する。

上人ケ平遺跡では19基の古墳が造られており、そのうち17基の古墳の調査を行った。17基の古墳は、現地表面に現われており、調査前の段階でも確認できるもの(A類)、墳丘が検出面より高く残るが、現地表下に埋没しており、調査段階で墳丘を確認したもの(B類)、墳丘が検出面まで削られており、周溝のみを確認したもの(C類)がある。埋葬施設が確認できたのは、A・B類の大半とC類の一部の総計5基(1・5号墳は未調査)であった。古墳からの出土遺物は、埋葬施設から出土した少量の鉄器、玉類のほかは、周溝内からの埴輪が大半であった。

古墳の立地をみると、台地中央部とⅢ支尾根に大別することができ、第Ⅰ期のムラの時代にみられたⅠ支尾根では、古墳は造られていない。

古墳の配列をみると、1号墳(円墳)を中心に小形方墳がそのまわりを取り囲むⅢ支尾根の地域と、5号墳(造り出し付き円墳)を中心に小形方墳がそのまわりを取り囲む台地中央部の地域に分けることができ、後者から前者へ移動したかのような時期変遷がある(第4章 第3節「上人ケ平遺跡の第Ⅱ期の遺構(上人ケ平古墳群)について」参照)。

第Ⅱ期では、古墳のほかに、古墳へ埴輪を供給するために造られた埴輪窯が台地の東南端に3基築かれており、埴輪生産における生産場所とその供給先が一遺跡内で、一時期完結することが明らかとなり、埴輪生産を考える上にも重要な遺跡である(第4章 第6節「上人ケ平1号埴輪窯について」・第7節「上人ケ平埴輪窯の製品の供給先について」参照)。なお、第Ⅱ期の集落については現在のところ確認していない。

#### 第Ⅲ期 「瓦屋の時代」—8世紀後半—

古墳の築造をやめた6世紀中頃から8世紀中頃までは、遺構・遺物ともなく、この時期は上人ケ平遺跡の空白期間であるが、8世紀中頃以降大きく変化する。

8世紀前半(708年)、平城京の造営の詔が出され、大和北部は大きく変化する。そして、この都の造営工事に連動して平城山丘陵に須恵器及び瓦窯が築かれる。

上人ケ平遺跡も平城山丘陵の一画にあたり、都の造営及び改修工事の一端を担っていた。

上人ケ平遺跡及び台地の南西斜面にある市坂瓦窯で出土する瓦は、主に平城宮瓦編年のⅢ期(745~757年)、あるいはⅣ-1期に相当し、聖武天皇の平城遷都以降に相当する。

第Ⅲ期の遺構は、9間×4間の大形掘立柱建物跡4棟と2間×4間の小形掘立柱建物跡9棟のほか、井戸・溝状遺構・土坑などがある。

第Ⅲ期の建物跡は、方位・基準尺・建物配置などから4期に細分することが可能であり、当初2棟の大形建物を造ったのち、順次1棟づつ大形建物を増設し、Ⅲ-3期の段階には4棟の大形建物が同時併存していたものと思われる(第4章 第8節「奈良時代の遺構について」参照)。

ただ、遺構は4期に細分しえても、各遺構から出土する遺物を見るかぎり大きな時期差がなく、軒瓦も大半が平城宮瓦編年のⅢ期(あるいはⅣ-1期)のものであることを考え合わせ、短期間の間に瓦工房は廃絶したものと思われる。

第Ⅲ期の遺構の特徴として、瓦工房の造営の際、大きく古墳を削平し、平坦面を造っているが、5・7・8・16号墳は墳丘の削平をまぬがれている。これは後述するように、瓦生産に関連して古墳の周溝を利用していることが考えられる。

#### 第Ⅳ期 上人ケ平遺跡の衰退—13世紀末から現在まで—

第Ⅲ期の瓦工房が短期間の間に廃絶し、それ以降の台地の利用方法は明らかでないが、台地の中央部の東端・Ⅰ支尾根の基部にあたる7トレンチで、祠あるいは墳墓堂と思われる方形建物跡とそのまわりをとり囲む溝があり、中世以降も小規模ながら何らかの遺構があったものと思われる。

なお、上人ケ平遺跡の調査着手前は畑地と竹藪であり、中世以降の台地の利用方法の一端を窺うことができる。

(石井清司)

## 第2節 集落遺構について

上人ケ平遺跡が立地する台地上に集落(ムラ)が形成されるのは、弥生時代後期に入ってからであり、それ以前の状態は明らかでない。

弥生時代後期のムラには、Ⅲ支尾根の先端近くで1基の竪穴式住居跡と、Ⅱ支尾根先端にある方(あるいは円)形周溝状遺構があつて、家と墓が尾根を別にして造られた可能性がある。ただ、方(あるいは円)形周溝状遺構を墓とするには、根拠がやや乏しい。

Ⅲ支尾根の先端に造られた弥生時代後期の竪穴式住居跡(S B101)の立地をみると、木津川を見下ろす良好な位置にあり、南山城の代表的な高地性集落である城陽市森山遺跡・田辺町飯岡遺跡・同天神山遺跡などとよく似た様相を示している。

続く古墳時代前半は、上人ヶ平遺跡のムラが栄えた時期であり、I支尾根の11基の竪穴式住居跡と3棟の掘立柱建物跡、台地中央部の4基の竪穴式住居跡と2棟の掘立柱建物跡が、建て替えを含めながら造り続けられている。

この上人ヶ平遺跡の立地する台地上には、古墳の造営、奈良時代の大規模な建物の造営によって、古墳時代前半のムラが大きく改変されていた可能性が高いが、SH105にみられるように、奈良時代の掘立柱建物跡群の下からも竪穴式住居跡がみつまっていることを考えあわせると、今回検出した状態が当時のムラの状況と大きくかけ離れてはいないものと思われる。

古墳時代前半の遺構の分布状況を見ると、前述のように、台地の東端のI支尾根(Aグループ)と台地中央部西端(Bグループ)に大別することができる。

各住居跡からは、古墳時代前半の時期を示す土師器が出土しているが、いずれも細片資料が多く、各住居跡の前後関係を検討し得るだけの資料とはいえない。また、遺構の切り合い関係では、SH122→SH123・SH128A→SH128Bという前後関係は認められるが、他の竪穴式住居跡では認められない。このため、同時期に何棟の竪穴式住居と倉庫(あるいは平地式住居)で構成されていたかは明らかでないが、Bグループの4棟の竪穴式住居跡と2棟の倉庫という組み合わせが、ムラの構成単位であった可能性が高く、Aグループの竪穴式住居跡と掘立柱建物跡は、2時期にまたがるものと思われる。

Aグループの竪穴式住居跡は、SH128Bの5.0m×5.9m(床面積29.5㎡)を最高に、一辺3～5m前後の小規模な竪穴式住居跡である。一方、Bグループの竪穴式住居跡は、ややグループから離れたSH105(3.6m×4.5m)の小形竪穴式住居跡を除き、いずれも一辺5m以上を測る中規模なものであり、規模でみるかぎり、Aグループの集落よりもBグループの集落が優位であった可能性が高い。

このAグループの集落は台地の東端部で、前面に相前後した時期に築かれた幣羅坂古墳を見上げることができ、幣羅坂古墳の築造時期よりも古い瓦谷古墳(径30m)から、遠くは木津川を見下ろせる位置にある。

一方、Bグループの集落は台地の西端で、木津川や南山城の広い平野を見下ろせ、また木津の平野から奥まった狭い範囲にまで視界は開ける。このBグループの集落から見下ろせる狭い視界には、京都府(南山城)から平城山を越えて奈良(大和)に向うための比較的起伏の少ない幹道があって、その幹道をおさえるような位置にBグループの集落は立地している。

(石井清司)

### 第3節 上人ヶ平遺跡の第Ⅱ期の遺構(上人ヶ平古墳群)について

これまで上人ヶ平遺跡で検出された遺構を概観すると、種々の内容を持ち、それらは弥生後期から中世にいたる時期に造営されたことが判明した。しかし、こうした遺構は必ずしも時間的に連綿と継続するものではなく、いくつかのピークや断絶、あるいはその内容(性格)の変化をみいだすことができることから、これをもとに、Ⅰ～Ⅳ期の時期区分を設定して遺構の内容を紹介した。

本節でとりあげる第Ⅱ期とは、5世紀後半から6世紀前半に相当し、台地上から第Ⅰ期の集落遺構が姿を消し、代わって中～小規模の古墳が継起的に複数築造される時期にあたる。すでに述べたように、これまでに総数17基の古墳を確認しており、それらが一つの閉鎖された空間ともいふべき上人ヶ平の台地上に面的に分布することから、これを上人ヶ平古墳群と認識することにする(かつて、5号墳をはじめ地表上でみられる5か所の古墳状隆起を指して上人ヶ平古墳群としていたが、発掘調査の進行に伴って多数の埋没した古墳の存在が明らかとなり、これらも含めて一つの古墳群として扱うことにする)。

この台地上の古墳群内における古墳の分布をみると、台地の北東縁に分岐するⅠ・Ⅱ支尾根上には存在せず、Ⅲ支尾根を含めた台地中央部に集中して分布する。しかし、詳細に観察すると、個々の古墳は、その分布域に面的に散在するものの、均一に分布せず、台地の中央部(5・6・7・8・14・15・16・17・18号墳)と、その先端(1・2・3・9・10・11・12・13・19号墳)の二つの領域に集中する傾向が容易に判別できる。それぞれの領域に築かれた古墳は、単に、墓域を集中させるだけでなく、一定の共通する要素が認められることから、これを政治的紐帯を有するまとまり、いい換えると古墳群を構成する支群として捉えることができる。ここでは、その位置から台地の基部側にかたよって存在する一群を南支群、台地の先端部(Ⅲ支尾根)の一群を北支群と仮称する。

各支群の構成は、盟主墳ともいふべき1基の中規模な円墳と、複数の小規模な方墳からなり、前者を中心に、その周囲に小規模な方墳が群在するという共通点がある。すなわち、南支群では、直径25mの造り出し付き円墳である5号墳を中心に、8基の小規模な方墳が主として北西方に群在しており、北支群では、直径20mの円墳である1号墳の周囲に、6基の小規模な方墳がこれをめぐるように分布する。

ところで、Ⅱ支尾根の基部に位置する20号墳と、その先端に築かれた2基の古墳状遺構(SX199・120)は、以下の点で、これまで述べてきた古墳とは異質の内容をもつ。つまり、20号墳は直径20mを測り、規模・墳形の上では各支群の盟主墳と変わらない反面、単独で存在し、これに付随する小規模な方墳がみられないことや、群内で普遍性をもつ埴輪を有



さないこと、また、周溝内に設けられた土器棺(S X111)の年代観(布留式併行期)などから、やはり同時期の可能性が高いS X199・120などとともに、台地上に継的に築かれた他の多くの古墳との、系譜的な繋がりを想定することは困難である。出土遺物を重視すれば、先行する時期(弥生後期～布留式併行期)に築かれた古墳(墳墓)とみられ、第I期の集落遺構に併行するものと考えられる。したがって、本項の考察の対象からは除外する。

このように、古墳の現象的側面をみる限り、上人ヶ平古墳群は、古墳の分布のかたよりに、大きく2つの支群に分けられる。そして、各支群は、円墳と複数の小規模な方墳からなるという点が共通する。

それでは次に、古墳の築造順について考察を進めたい。この場合、ほとんどの古墳から普遍的に出土した埴輪類が有効な資料となる。

第3章・第4節の出土遺物の項目で述べたように、各古墳から多量に出土した埴輪のうち、普通円筒埴輪については、形態的特徴や製作手法の相違などからA・B・C・D類の4つの類型に大別することが可能で、基本的に、同一古墳内に複数の類型が混在しないことを根拠に、各古墳がもつ「埴輪相」と言い換えることができる。

ここでは、円筒埴輪の類型の分類基準や内容は再論しないが、各類型と埴輪を有する古墳を対照させると、A類：5・7・8・16・17号墳、B類：14号墳、C類：6・15号墳、D類：1・9・10号墳、という対応関係が指摘できる。

そこで、これら諸類型を既知の編年観に対比させると、A・B類は、川西宏幸氏編年の<sup>(註47)</sup>IV期、赤塚次郎氏編年の<sup>(註48)</sup>Ⅱ期—2～3段階、C・D類は、川西編年のV期、赤塚編年のⅢ期—1段階にほぼ比定できる。絶対年代は、川西氏の年代観からB類は5世紀後半、同じくC・D類は6世紀前半に求められよう。さらに、A・B類とC・D類は、製作方式の省力化(簡略化)を指標として、A—B、C—D類の編年的な序列の細分が可能で、普通円筒埴輪の類型区分がA類からD類に至る時期区分としても有効であることがわかる。

朝顔形円筒埴輪の口縁部の製作技法をみると、普通円筒埴輪のA・B類に共伴する朝顔形埴輪の場合、分割成形を用いるのに対し、D類の共伴例は一括成形により製作される(本文参照)。ここに、口縁部製作における乾燥工程の減少という製作の省略化が認められるわけで、先の円筒埴輪の編年観を傍証するものである。

こうしてみると、A～C類の埴輪が出土する古墳がいずれも南支群に属し、最も新しく位置付けたD類は北支群の古墳からしか出土しないという事実が判明する。次に、そうした円筒埴輪の編年観を他の遺物から検証し、さらに細分を試みる。

まず、形象埴輪のうち、最も資料が豊富で、比較的多くの古墳から普遍的に出土している蓋形埴輪をみる。笠部の製作技法が元来、分割成形されていたが、時代が下るにしたがっ

て埴輪そのものの規模が縮小した結果、より簡略な製作法である一括成形に移行したとすれば、上人ヶ平古墳群の場合、9号埴出土例が笠部一括成形技法を採用し、それ以外はすべて分割成形技法で製作している。すなわち、笠部製作技法によると9号埴例が最も新しく位置付けられることになる。さらに、9号埴出土の立ち飾りは、鱸と本体の区別が困難なほど著しく形骸化しており、新しい要素となる。

次に、分割成形で製作された資料を検討すると、その形態的特徴に差異が認められる。例えば14号埴例の場合、笠部は突帯以外が素文であるのに対し、5・16号埴例では、規模がやや大きく、笠縁部外面に線刻による笠骨を表現したものが大半を占める。<sup>(注50)</sup> また、立ち飾りの形態や施文の内容は両者とも基本的には共通するものの、14号埴例はやや小形で、鱸の誇張が一層進行している。羽根板の透孔は、初源的な蓋にはみられない要素だが、装飾のため付加したものと考えられ、5・16号埴にみられる。特に、5号埴ではほとんどの個体に透孔がみられる。ここに挙げた笠縁部の線刻や立ち飾り部の透孔は、より古い要素<sup>(注51)</sup>と考えられ、このことから5→16→14→9号埴出土の蓋形埴輪の新古関係を確認できる。

その他の形象埴輪は比較資料が少ないが、馬形埴輪をみると、5・17号埴の鞍は、前後輪の前後にヘラ状工具の連続刺突による縁取帯で加飾した磯金具が粘土の貼り付け成形によって表現されるのに対し、6号埴出土例では前後輪を三日月板状に成形するのみで磯金具を省略している。また、脚底部の変化はさらに顕著で、5号埴出土例の場合、付加粘土に切り込み造作を施して蹄を極めて写實的に表現しているのに対し、8号埴出土例では粘土帯を付加し、段状に成形して蹄を表わしている。6号埴例では、粘土による付加を施すものの、脚底を肥厚させて馬体の安定をはかるのみで、蹄状には造らない。さらに、9号埴例では、もはや粘土の付加も行われず、脚底は単純な円筒形で終わる。<sup>(注52)</sup>

次に、土器資料をみると、少量の土師器に加え、各古墳間で須恵器が少なからず出土している(第63図参照)。それらは、明らかに副葬品、あるいは供献品として元位置を保って検出されたものや、周溝内や盗掘坑埋土中に包含されたものがあるように、その出土状況がさまざまに厳密な対比はできない。それでも同一古墳内での土器間に著しい型式差が認められないので、その古墳の土器相をある程度反映していると考えられる。具体的に既存の編年に対比させて検討すると、8号埴の盗掘坑からTK216型式前後の杯蓋・甕<sup>(注53)</sup>、7号埴の主体部(副室)からTK208型式前後の把手付碗、同周溝内から同期の樽形甕・壺、18号埴の周溝北東隅に掘り込まれた土坑(SK113)の坑底に据え置かれた状態でTK208型式の甕・壺が出土している。

一方、土師器は、須恵器ほど時期を特定できないにしても、10号埴の1段深く掘り込まれた西辺溝から、布留式土器の影響を残しつつ須恵器が定型化して以降に位置付けられる

高杯・直口壺が出土している、とくに直口壺は、近年の研究によると、主に埋葬儀礼に伴う儀式に用いるために製作された器種とする<sup>(註54)</sup>説があり、その編年観からこの資料は6世紀前半期に位置づけることができる。さらに20号墳の北側周溝内に設定された土器棺(SX111)には、布留式段階(中相以降か?)の大形の二重口縁壺が転用されている。

さらに、内部施設が遺存していた7・8号墳から副葬品としての鉄器資料が出土しており、同じA類の普通円筒埴輪を具える両者の先後関係を比較検討できる。まず、両古墳とも鉄鏃・刀子・方形板工具刃先・鎌の組成は変わらないが、7号墳ではこれに鉄剣とミニチュア鎌が加わる。そこで、両者に共通する鉄器を対比する。

鉄鏃は、いずれも頸部が発達した(頸部長10~13cm)長頸鏃群で、7号墳例の場合、鏃身部を折損するものが多いものの鏃身は両丸造で、逆刺を有する個体が目立つ。これに対して8号墳出土例は、鏃身関が斜め関を呈して頸部に移行し、鏃身部は小形であるがより重厚な造りのものが大半を占める。また、8号墳出土のF-35は長い逆刺を有する大形の鏃身を有し、頸部は相対的に短い。同じくF-36~38は鏃身部は小形であるが、その片面に鏃を痕跡的に残す。両古墳例ともにはっきりとした時期差は不明であるがここに記したことから、8号墳例に若干の古い要素が指摘できる<sup>(註55)</sup>。

刀子は、7号墳では通常形態を示すのに対し、8号墳例では蕨手刀子が残存する。

鎌は、7号墳例が曲刃直角鎌であるのに対し、8号墳からは曲刃直角鎌よりも古相の直刃鈍角鎌が出土している<sup>(註56)</sup>。

以上、各古墳から出土した埴輪類や副葬品などの考察を通じて得られた古墳の相対的な築造過程を示すと、5号墳—8・16号墳—7号墳—14・18号墳—6・15号墳—(1号墳)—9・12号墳の築造順を確認することができる(1号墳と9・12号墳の先後関係は出土遺物からは決定できないが、1号墳が中規模の円墳であり、東に接する9号墳の周溝が1号墳に接する側で狭く規制されていることから、1号墳が先行すると考えた)。

こうしてみると、初めの5号墳から15号墳までの8基はすべて南支群であり、これに北支群の1・9・12号墳が続くという支群間の先後関係が判明する。そして、両支群間には、時間的な重複がみられず、南支群の築造が終わって間もなく北支群の築造が開始されるといった連続性が存在する。

すなわち、古墳群全体を通してみると、まず、南支群の盟主墳ともいふべき中規模円墳の5号墳が築造され、これを契機として、間もなく小規模な方墳である8・16・7号墳が主として5号墳の北西側の縁辺部に築かれる。さらに、墓域をやや遠ざけて西方の領域に14・18・6・15号墳が継続して築かれ、南支群の形成を終える。その後、墓域は大きく北方に移動して台地の先端に円墳の1号墳が築かれ、やがて9・10・12号墳がこれに続くもの

と考えられる。北支群の遺物を残さない小規模な方墳(11・13・19号墳)には、当初から埴輪が樹立されていなかった可能性がある。これを墳頂部に円筒埴輪をめぐらせ、聖域を区画するといった埴輪祭祀が終焉して以降の所産とみれば、やはり盟主墳たる1号墳の築造を契機に9・10号墳に続いて、その周囲に連鎖状に築造されたものと推定される。

このように、上人ヶ平古墳群を構成する各支群は、まず盟主墳たる中規模の円墳の築造を契機に、その周囲に小規模な方墳が複数継続的に連なるといった築造原理を持ち、そうした原理をもつ支群2単位の集積とみることができる。

それでは、こうした小支群を構成する「中規模な円墳」と「小規模な方墳」との間には、いかなる性格の相違が存在するのであろうか。近年、こうした分野の研究は同じような築造原理をもつ古墳群の調査例の増加によって進展しており、これをめぐって一定の理論的な解釈が示されている。なかでも、古墳時代の「小規模な方墳」の理解については、とくにその被葬者像を中心に研究が進展している。

代表的なものを示す。まず、千葉県佐倉市に所在する飯合作遺跡の調査報告書で執筆者沼沢 豊氏は、この遺跡において前方後方墳が築造されるようになる古墳時代以降も、方形周溝墓と異ならない「小規模方墳」が造られるが、弥生時代の方形周溝墓の被葬者に対応し、その延長上にあるものは、前方後方墳の被葬者であって、「小規模方墳」の被葬者は、これに従属的立場にあって、新たに造墓を許容された階層と理解した。<sup>(注57)</sup>

一方、細川修平氏は、こうした「小規模方墳」を丘陵上に築かれる小古墳などとともに「古式小古墳」と規定し、その性格が時間的な変遷の中でいかに変化していくかを総合的に論究し理論化した。同氏によると「古式小古墳」は、当初は、非常に限定された墓制で、複数の集落からなる小地域を統治する首長の墓であったのが、やがて集落内の階層分化にともない、集落内の個別の存在(小レベルの共同体)が古式小古墳の新たな造墓主体として加わるようになる(家族体首長墓)という方向性を提示し、その過程を明らかにした。すなわち、中期段階においては、古式小古墳は、副葬品や埴輪を有する点において、ヤマト王権の個人身把握の指向を背景とした官僚制的側面をもつ一方、上部集団の盟主墳を核として群を形成することにみられるように、依然として同族的関係を保持する側面を有していたと捉え、王権の地域支配が、この段階においては上部集団を媒介とする集落等の集団を単位として行われていたと説く。さらに後期段階に至って、古式小古墳は、小支群という単位を形成することで、職能的・地域的に組織され管理された集団として、より直接的に王権から支配される単位に発展するようになるが、その一方で、伝統的墓域から隔絶できないなど、依然として集団関係を基礎として同族関係を表出していたとする。そして、この両者の間の矛盾の解決策として、後期群集墳が成立すると理解した。<sup>(注58)</sup>

寺沢 薫氏は、矢部遺跡の考察の中で、後期に残存する小規模な方墳(寺沢氏は「方形区画墓」と表記する)について、細川氏と若干異なった見解を示した。同氏は、後期群集墳と時間的に併行する「方形区画墓」の存在を指摘し、後期群集墳の成立の背景となった従来の諸説のうち、共同体内部の家父長層の台頭による家族墓的側面を文献史学の立場より否定し、後期群集墳は、王権の国家的身分制度の拡大の中で、ヤマト政権の軍事的編成を目的とした政治的紐帯を示す標徴として成立するとした立場を採った。ただ、その政治的紐帯は、一方で旧来の擬制的同祖同族関係という形で現出したために、すべての家長層にまで及ばない場合があるとし、6～7世紀代の方形区画墓は、生産地や集落に近接する伝統的な墓域に形成されることから、こうしたヤマト政権との関係性の及ばない集団(家長及び<sup>(注60)</sup> 成員)の墓制であると理解した。

このように古墳時代の小規模な方墳に関しては、一定の理論化が進んでおり、以下こうした先学の研究成果をふまえて上人ヶ平古墳群の性格について若干の考察を加えてみる。

上人ヶ平古墳群を構成する2単位の支群は先の出土遺物の考察から、いずれも1基の中規模な円墳の築造を契機に造営を開始し、続いてその周囲に、小規模な方墳がそれを取り囲むように順次築かれるという事実を確認することができた。このことを小規模な方墳側からみると、方墳は、中規模な円墳によって表出される上位の首長墓の先導により、はじめて自ら造墓活動を実施し得るといった築造規制を受けており、そういう意味で小規模な方墳は、中規模な円墳(=盟主墳)に対して著しく従属性を示すものと捉えることができる。

一方、上人ヶ平古墳群における2単位の支群(造墓主体)は、時間的な並行関係の中で、数世代にわたって造墓を実施したのではなく、5号墳から1号墳へと連なるより上位の2世代にわたる首長墓(盟主墳)の系譜が、そこに存在し、それぞれの盟主墳に対して、複数の小規模な方墳が依存的な造墓を展開していたのである。

それでは、こうした主—従関係にある中規模な円墳と小規模な方墳の間にはいかなる相違が存在するのであろうか。

両者の間には、墳形や規模の差だけではなく、少なくとも、墳丘の構築原理や外部施設等に本質的な相違が見い出せる。すなわち、墳丘の構築は、円墳である5号墳の場合、段築(おそらく2段)を設けて築いているのに対し小規模な方墳では段築工法を採った形跡は認められない。また、外部施設として、埴輪の存在は、その出土状態からみて、墳頂平坦部における樹立に関しては両者ともに想定できる。これに加えて5号墳の場合、段築の有無とも関連して、段築により生じるテラス面と、周濠を挟んでこれと対峙する部分(外堤)において埴輪列を確認している。さらに、葺石は、5号墳の2段目墳丘斜面に本格的に敷設されるが、他の古墳ではその形跡すらない。

このような5号墳が具備する段築・埴輪列・葺石といった属性は、本来は前方後円墳を頂点として重層的に連なる墳墓体系において、欠くべからざる要素である。そして、この前方後円墳を頂点とする体系については、畿内を中心とする政権(ヤマト王権)と在地首長層との間の連合関係を、墓制を媒介として表出した極めて政治的な秩序体系であるとする立場がある。すなわち、各地の在地首長層は、上記の古墳の属性を備える形で、共通の葬送祭祀様式を受け入れることで、擬制的同祖同族関係の設定を媒介とする血縁原理の政治的秩序に組み込まれるのである。上人ケ平5号墳の場合も、中規模な円墳という前方後円墳を中心とした古墳秩序の中では、相対的には下位に位置する内容をもつもの、確実にこうした政治的秩序に組み込まれたものと理解できる。

それでは、こうした古墳秩序の基本的な属性を完備しない小規模な方墳については、その被葬者像も含めていかなる性格が付与されるのであろうか。まず、小規模な方墳は、形態や規模あるいは一定の領域に群在する点では、弥生時代の方形周溝墓の延長線上にあるといえる。ただ、方形周溝墓では同一墓内に複数の埋葬施設が存在するのが通例であるのに対し、古墳時代の小規模な方墳は単葬を基本としている。前者が特定の家長の死を契機に造られ、続いてその家族構成員が同一墓内に追葬されるといった「家族墓」的側面をもつものに対して、小規模な方墳は一個人の墓であり、そこに家族墓的な性格を見出すことはできない。

この点において、小規模な方墳は「特定個人墓」と規定することができる。典型的な古墳の属性である埴輪の樹立や、日常什器として定着していない古式須恵器の副葬が一般に認められることは、こうした現象をヤマト王権の使用許可あるいは配布行為とみた場合、小規模な方墳も、「上位の古墳」と同様、王権の規制下におかれた墓といえる。しかし、一方で小規模な方墳は、以下の点において「上位の古墳」から隔絶される側面をもつ。

それは、上人ケ平古墳群に限られた現象ではなく、他の多くの調査例にも共通していることだが、小規模な方墳は、ほとんど例外なく複数が群在するといった存在形態を示し、多くの場合、より上位の古墳に現象的に従属するかたちを採って存在する。つまり、小規模な方墳は、単独では存在できないのであり、複数が群在する形態をもってはじめてヤマト王権の墓制を媒介とした政治秩序に参加できたのではないだろうか。すなわち、ヤマト王権は、墓制を媒介とする秩序編成の中で、個別の小規模な方墳の被葬者を直接の政治単位としないで、より上位の首長墓を通じてそれに連なるものとして間接的に小規模方墳との間に政治的関係を結んだものと考えられる。

上人ケ平遺跡では、古墳が発見される可能性の高い5号墳東側に未調査地区を残しており、詳細な検討は、5号墳本体の調査も含めこの地区の調査を待って考えたいと思う。(伊賀高弘)

## 第4節 古墳出土の土器について

### (1) 須恵器

古墳出土の須恵器には、蓋杯・壺・甕・甗・鉢・高杯がある。また、各古墳から出土する須恵器には、陶邑編年TK216からTK209に至るまでの型式があり、型的に古い順序で概観しておきたい。なお、同一器形での比較検討が行えないため、蓋杯以外の器形の型式設定は、時期幅をもって解釈しておきたい。

8号墳の杯蓋(71)は、天井部が平らで「ハ」字形に開口縁部をもつ。また、口径に対して器高が低いなど、古式須恵器の特徴をもっており、TK216前後に比定できる。7号墳の把手付鉢(68)は、粘土を巻き込んだ把手が付くことや、底部調整・口縁部の形態からTK208前後に比定できる。18号墳の甗(78)は肩が張り、頸部に波状文が入る点、そして口縁部の形態から、7号墳の鉢と同じくTK208前後に比定して大過ないであろう。14号墳の杯蓋(72)は、天井部と口縁部を分ける稜はにぶく、口縁端部も内傾していない点から、7・18号墳出土土器群よりは後出する要素もあるが、天井部に1cm当り16条の細いカキ目が観察できるなど、古い要素も残存している。また、共伴する高杯(77)は、鋭い2条の凸線下に波状文が施されており、これらの要素から、TK208前後に比定することが妥当であろう。6号墳の杯蓋(59)は、天井部が平らで天井部と口縁部を分ける稜が明瞭である。また、杯身(61)は、平らな底部と直立し内傾する口縁部であることから、これらをTK23前後に比定できる。一方、他の杯蓋は、59に比べて口径が大きく、稜が明瞭でないことから、TK47前後に比定できる。15号墳の杯蓋(73)は、全体の形態から、6号墳出土土器群と同じくTK47前後に比定できる。9号墳の短頸壺(75)は、それ自体の器形的変遷を追うことは困難であるが、9号墳を含む北支群は、南支群より後出すると考えられ、両者には相当の時期差が設定できる。また、壺の口縁部が直立し、肩の張りがTK209の壺に比べ小さいことから、TK43前後に比定しておきたい。なお、本資料の口縁端部が外傾する特徴は、TK10～TK209の類例にはあまり見られず、個体差として認識できよう。12号墳の杯蓋(74)は、天井部から口縁端部まで同様なカーブを描いており、TK209に比定できる。

### (2) 土師器

10号墳の壺・高杯(80～82・86～87)は、それ自体では、編年的位置付けを行うことは困難であるが、10号墳がTK209前後に成立する12号墳と接近した時期に築造された可能性が高く、また、12号墳の周溝は、隅丸の方形を呈していることから、TK209を含む直前の土器群として、捉えることができる。一方、14号墳の甕(91)は、共伴した須恵器の杯蓋(72)・高杯(77)からTK208前後の土師器として捉えうる。球体の体部と内湾する口縁部は布留式

土器の形骸化した特徴を残す部分であるが、短く面をもつ口縁部は、TK208併行期の土師器がもつ一つの特徴であろう。

壺棺墓(SX111)出土の甕(92)は、山陰系の影響を色濃く残している。また、二重口縁壺(93)は、頸部で短く外反し、擬口縁部でわずかに外方へ直線的にのびる口縁部である。これらの要素から、布留式併行期の中にあっても、中段階の特徴をもつ土器群として捉えられよう。

(小池 寛)

## 第5節 上人ヶ平遺跡出土の古墳時代の須恵器をめぐって

### (1)はじめに

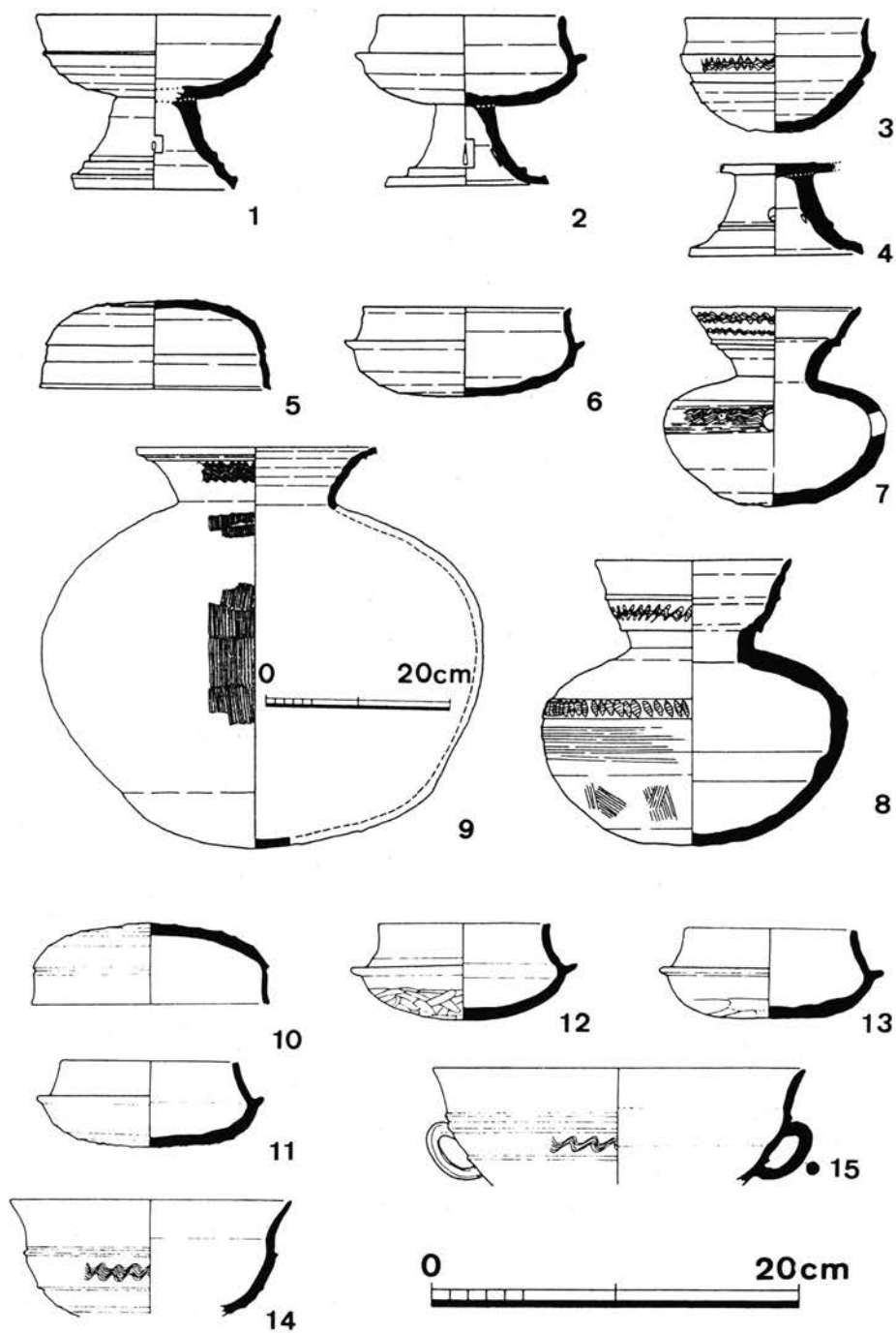
上人ヶ平遺跡から出土した古墳時代の須恵器は、断続的ではあるが、陶邑編年TK216からTK209までの型式が認められ、器種としては、蓋杯・高杯・壺・甕・鉢・甕・甕形甕がある。これらの須恵器群を南山城地域の中で見た場合、次の2点の大きな特徴を見出すことができる。まず、8号墳から出土した杯蓋(71)は、事実報告でも記述したように、天井部が平らで「ハ」字形に開く口縁部をもち、口径に対して器高が低い点から、TK216前後に比定できる。現時点において、南山城地域の他の遺跡では、同型式に比定できる資料は出土しておらず、最も古い資料と言える。次に、本遺跡で検出した方墳群は、出土須恵器でも理解できるように、古式須恵器の段階からTK209前後に至るまで断続的ではあるが築造されており、副葬ないしは供献される須恵器の器種構成が、どのように変遷していったかを考える上で良好な資料と言える。

ここでは、この2点の特徴を念頭におき、南山城における須恵器導入の動態について、若干の類例とともに私見を提示しておきたい。類例としては、城陽市宮ノ平遺跡低墳丘方形墓SX08・SX09出土例と八幡市新田遺跡の竪穴式住居跡SB01出土例をとりあげることにした。なお、相伴する須恵器群と埴輪群を考慮に入れ、両面からの検証が必要ではあるが、ここでは、須恵器を中心に論じていくことにする。また、各個体の形態的特徴についての解説は、基本的には事実報告に譲るが、比較検討する個体については、重複して説明しておきたい。

### (2)上人ヶ平遺跡出土の古式須恵器概観(図版第7・8)

出土須恵器の形態的特徴については、本文ですでに記述しているが、ここでは、特に古式須恵器に比定できる7号墳・8号墳・14号墳・18号墳出土須恵器について概観しておきたい。なお、近年、大阪府大庭寺遺跡の発掘調査によって、TK73よりもさらにさかのぼる須恵器群が確認された。これらは、朝鮮半島の陶質土器に、より近い形態的特徴をもつ





第105図 南山城地域出土の古式須恵器

ており、日本における須恵器生産の上限年代について再考を促す契機ともなった。また、この発見は、従前から想定してきた古式須恵器の概念にも微妙に影響することは必至である。本来、古式須恵器の動態を考える場合、その概念について十分な検討を行う必要があるが、ここでは、従前の古式須恵器の概念、具体的に言えば、TK208前半段階以前の須恵器を古式須恵器として捉えておく。今後、その概念については、修正される必要性を指摘し、以下の記述を進めていきたい。

本古墳群出土の古式須恵器の中で、最も古く比定できるのが、8号墳の杯蓋71である。この杯蓋の特徴は、天井部が平らで、「ハ」字形に開く口縁部をもつことにある。他の杯蓋と比較すれば形態的相違は明確であり、TK216前後に比定できる。これと共伴する甕76は、2条の凸線間に波状文を施す口縁部をもっている。後述する18号墳出土の甕70は、3条の凸線間に2条の波状文を施しており、頸部の波状文の条数の相違が、新旧を表現している可能性も考えられる。8号墳の西側に隣接して築造されている7号墳からは、把手付鉢68・樽形甕69が出土している。樽形甕69は、周溝内から出土しており、把手付鉢は、埋葬主体部の北側の副葬品埋納坑から鉄製品とともに出土している。把手付鉢は、北部九州地域において朝鮮半島の陶質土器の副葬が見られ、以後、陶邑編年TK73・216・208まで確認できる器種であり、古式須恵器を特徴づける器形として認識されている。また、その把手の形状も特徴的であり、厳密に分類すれば系譜を解明できる可能性も指摘されている。本資料は、把手上部に粘土紐を巻き込んだ装飾が付されており、近畿地方を中心とする地域に多く見られる。底部調整・口縁部の形状から、TK208前後に比定できる。なお、周溝内から出土した樽形甕69については、残存率が20%にすぎず、法量については、明確にし得ないが、施文などから考えて、把手付鉢と同じくTK208に比定できる資料である。14号墳の杯蓋72は、全体的な特徴から見るとTK23前後に比定できるが、天井部を1cm当たり16条の細かいカキ目で調整している点から、TK208前後に比定して大過ないであろう。なお、14号墳出土の高杯77は、口縁部の凸線が明瞭であることから、杯蓋72と同じ型式として認定できる資料である。最後に18号墳の甕78は、肩が張り、鋭く外反する口縁部の形態などからTK208前後に比定でき、共伴している甕70も同型式と認定しておきたい。

### (3) 墳墓出土の類例(第105図1～9)

以上は、上人ヶ平遺跡で確認した古式須恵器の形態的特徴である。埋葬主体部からの出土は、7号墳・8号墳のみで、他の須恵器群は必ずしも明確な一括資料とは想定できないのが現状である。しかし、全体的に見れば、TK208段階の須恵器が、器種構成の上でもバラエティーが豊富であり、TK208の次段階以降には、蓋杯の副葬ないし供献が増加する傾向が指摘できる。この傾向は、TK208以降に葬送儀礼に用いる須恵器の器種構成の固定化

があったとも解釈でき、また、須恵器自体の儀礼での用いられ方とも深く関連するものと言えよう。この問題に一定の解釈する場合、同時期・同規模の古墳の出土例を検証する必要があるが生じてくる。ここでは、墳墓出土の類例として城陽市宮ノ平遺跡<sup>(注62)</sup>内の低墳丘方形墓S X08・S X09の出土遺物について説明を加えておきたい。

城陽市には、比較的規模の大きい前方後円墳が集中することで著名な久津川古墳群が所在し、宮ノ平遺跡は、その南端に位置している。A地区の調査においては低墳丘方形墓が2基確認され、東側のS X08は南北20m×東西19m、西側のS X09は南北12.5m×東西13mの規模をもっている。双方とも後世の削平を受けているため、埋葬主体部は残存していない。東側に位置するS X08の周溝内から転落した状態で高杯・鉢・埴輪が出土している。無蓋高杯1は、杯部下半外面をヘラ削りによって調整し、脚端部に面をもっている。脚部透孔は楕円形の細い棒により穿っている。無蓋高杯2は、端部を丸く仕上げた口縁部と水平にのびる受部をもち、脚部下半にはヘラ状工具による透孔を穿っている。これら高杯の形態は、TK208前後に比定できる資料である。鉢3は、口縁部と体部に比較的鋭い稜をもち、稜下に1条の波状文帯を施している。鉢3は、全体的にシャープであるためTK208以前に比定することも可能であるが、鉢自体の編年が進展していない現状では、高杯群と同じ型式と考えておきたい。これらの遺物は、周溝内に転落した状態で出土しており、原位置を推定することは不可能であるが、一括性の高い遺物群であることに留意すれば、蓋杯の多用が固定化しない段階のものと解釈でき、上人ヶ平遺跡のTK208前後の器種構成と共通する部分も少なくない。

一方、西側の低墳丘方形墓S X09では、周溝の東辺中央から原位置を保った状態で、北から甕・壺・蓋杯・甕が出土している。杯蓋5は、内傾する口縁端部をもち、杯身6は、明瞭な内傾面とやや上方にのびる受部をもっている。甕7は、口縁部外面と胴部最大径部に波状文を施している。肩部が張り、口縁部が2段に屈曲する特徴は、上人ヶ平遺跡18号墳出土例に酷似する特徴である。壺8は、口縁部に波状文、胴部最大径上位に刺突文を施している。底部外面を不整方向のカキ目によって調整している。甕9は、口縁部に3条の凸線をもち下段に波状文を施している。胴部外面は縦方向の叩き目が残り、内面をていねいにナデ消している。これらの須恵器群を同じ編年観で比較することは、困難であるが、甕の形態的特徴などからTK208前後と比定しても大過ない。これらの器種構成は、先述した宮ノ平遺跡S X08と比較すれば、明らかな相違を指摘することができる。上人ヶ平遺跡18号墳では、周溝内から甕・甕が出土しており、S X09と少なからず共通要素を見い出すことができる。このように、両遺跡出土の須恵器のパラエティーが豊富で、器種の固定化が見られないことは、墳墓で行われる葬送儀礼が、まだ、広い範囲にわたって規定されて

いないことを傍証していると解釈できる。

#### (4)住居跡出土の類例(第105図10~15)

古式須恵器が主に墳墓から出土する類例について、一例を記して説明を行ったが、ここでは、住居跡出土の古式須恵器について、解説しておきたい。なお、その一例として、八幡市新田遺跡の<sup>(注63)</sup> 竪穴式住居跡S B01出土の例をとりあげる。

八幡市新田遺跡は、木津川・宇治川の合流部の南東に開ける平野部の中央に所在している。Aトレンチで検出した竪穴式住居跡S B01は、南北主軸線をN30°W前後におく南北約5.3m・東西約4.8mの方形住居跡で、北辺に竈をもっている。遺構検出面から住居床面までは、20cmを測るにすぎない。住居跡床面には、放棄された状態の須恵器・土師器、そして焼土などが散乱しており、消失した可能性が指摘されている。杯蓋10は、内傾する口縁部と天井部と口縁部を分ける稜が比較的はっきりしていることから、TK208ないしTK23前後に比定できる資料である。杯身11は、内傾する口縁部とやや上方にのびる受部を有している。杯身12は、基本的な形態は、11と変わらないが、底部外面を不整方向のヘラ削りによって処理している。また、13も同じく、不整方向のヘラ削りによって底部外面を調整している。これらの蓋杯の形態から、若干新しい要素も含んでいるが、杯身12・13の底部外面の調整技法からTK208前後に比定しておきたい。無蓋高杯14は、住居跡埋土から出土したもので、外反する口縁部とその下方には、2条の凸線間に波状文を施している。これを上人ヶ平遺跡出土例に類例を求めるならば、14号墳出土の無蓋高杯77が最も類似している。上人ヶ平遺跡例と基本的な形態は、あまり変わらないことから本資料もTK208前後に比定しても大過ない。無蓋高杯15は、外反する口縁部下方に2条の凸線をもち、その間に波状文を施している。また、2条の凸線上に、一对の把手が付されている。破片資料のため、全体の形態などは不明であるが、一对の把手をもつことや口縁部の形状から、TK208前後に比定できる資料である。

以上のように上人ヶ平遺跡や宮ノ平遺跡出土例などの墳墓出土例では、器種構成にバラエティーが認められるものの、本住居跡例には、蓋杯を中心とする構成が主であることは、日常生活における須恵器の役割を考える場合、非常に参考になる事例と言える。今後、同時期の住居跡の出土例が増加すれば、導入段階の器種構成が、さらに明確になると考えられるとともに、墳墓での器種構成との違いが、より明確になるものと考えられる。

#### (5)まとめ

以上3遺跡について、墳墓・住居跡出土例について概観したが、墳墓では、比較的、器種構成が豊かであるのに対して、住居跡では、蓋杯を中心とする構成であることが判明した。これは、「土師器」が基礎であった生活空間や葬送儀礼に須恵器がどのように受け入れ

られたのかを如実に示す現象として重要であり、これらの類例が増加することによって、古式須恵器の概念規定に側面からアプローチできるものと言える。

上人ケ平遺跡が所在する木津町域には、古墳時代前期に成立する上人ケ平遺跡・瓦谷遺跡・相楽遺跡などが所在しており、畿内政権の中心的役割を果たした大和と隣接している。また、瓦谷古墳などの前期古墳なども所在しており、畿内政権が日本海側に代表される北部地域躍進のための一種の拠点であったことが容易に想像できる。

一方、宮ノ平遺跡が所在する城陽市域は、古墳時代前期から古墳が築造される地域であり、庄内式併行期の芝ケ原古墳や同時期の土器の出土が知られる塚本遺跡などが所在している。特に、森山遺跡では、地方有力者の居館を連想させる方形周溝状遺構とともに他地域の土師器も確認されており、豊富な農業生産に裏付けされた勢力基盤を想定できる。

最後に、八幡市域は、大阪方面や京都市内方面と南山城地域を結ぶ玄関口であり、その果たす役割は、地理的に極めて重要であったと考えられる。特に、木津川・宇治川・桂川の合流部一帯に広がっている木津川河床遺跡や三角縁神獣鏡などが出土した東・西車塚の存在は、畿内政権にとって非常に重要な意義があったと考えておくべきである。

このように、古墳時代前期において、これらの地域は、非常に重要な地域であることが考古資料により判然となったが、導入期の須恵器の分布が、前期集落・古墳の分布する地域とほぼ、一致する現象は、前期に形成された勢力基盤と無関係ではなく、何らかの関連があるものと推定しておきたい。今後、古式須恵器が、集落・古墳から出土する例が増加すれば、その輪郭がさらに明瞭になると考えられる。

なお、本文は共同研究「京都府の土師器・須恵器」の研究成果の一部である。

(小池 寛)

## 第6節 上人ケ平1号埴輪窯について

上人ケ平遺跡で検出した埴輪窯は3基で、そのうち北端にある1号埴輪窯のみ、窯体・灰原を含め発掘調査を行い、1号窯の南に位置する2・3号窯については、灰原の範囲確認のみ行った。

1号窯の埴輪窯は、丘陵斜面をトンネル状にくりぬいた地下式構造の窯で、その製品の大半は、台地上に立地する上人ケ平古墳群に供給されていることは、前述したとおりである。

京都府内で、発掘調査が行われた埴輪窯は、上人ケ平遺跡の埴輪窯が初めてであり、近畿地方でも埴輪窯の調査例は少なかった。ところが、上人ケ平遺跡の調査以後、高槻市新池窯跡(注64)や奈良市菅原東遺跡(注65)などで大規模な埴輪窯及び埴輪生産工房がみつかると、近畿地方

でも埴輪生産の実態が明らかになりつつある。ここでは、これまで調査された埴輪窯について若干の検討を行う。

### (1) 埴輪窯の分布

埴輪窯は、現在まで79遺跡で確認されており、そのうち、静岡県以東の東国、特に関東地方での調査例が大半である。ただ、埴輪をもつ大規模古墳の多くは、近畿地方に集中する傾向にあり、大規模古墳の外堤(仁賢陵古墳と野々上埴輪窯<sup>(注66)</sup>など)で築かれたか、あるいは高槻市新池遺跡のような大規模な埴輪工房が今後、近畿地方でみつかる可能性が高い。

### (2) 構築方法

埴輪窯は、須恵器窯と同様、トンネル状に丘陵をくりぬいた地下式と、丘陵斜面を溝状に掘ったのち、天井部を構築する半地下式窯がある。この地下式と半地下式の構築方法の差異には、1つの検討方法として地山土の性質が考えられる。これは各報告書で築窯時の丘陵の性質(洪積層かどうか等)の記載が少なく、また、私自身も埴輪窯の検出地点に立った例が少ないため明らかにしがたいが、トンネル工法として地山土が耐えうる地質かが問題となる。天井部が陥没しやすい土質であれば地下式窯にはしがたい。この地山土の性質とともに考えられるのが時期的変化である。5世紀後半に築かれた埴輪窯の調査例が少なく、6世紀以降の埴輪窯との比較検討資料に欠けるが、5世紀後半に築かれた福岡県立山山窯1・2号窯<sup>(注67)</sup>、京都府上人ヶ平埴輪窯が地下式構造である。6世紀以降では、ある地域、ある埴輪窯跡群で地下式構造の窯が集中、あるいは地下式構造と半地下式構造が併存する例(埼玉県生田塚窯跡群<sup>(注68)</sup>)などあるが、その多くは半地下式の窯体構造である。

### (3) 平面形態

平面形態については地域差が顕著である。

近畿・東海以西では、うなぎの寝床ともいわれるように、全長5～10m・幅2m未満の細長い平面形態のものが多い。灰原は焚口部から扇形に広がるものが大半である。

近畿以東、特に関東地方では塩野<sup>(注69)</sup>博・萩原恭一<sup>(注70)</sup>氏が形態分類されているように、4～5タイプに分かれる。

塩野氏の形態分類によると、Ⅰ.「焚口と灰原のプランが隅丸方形を呈し、その長さが焼成部とほぼ同じ」(馬室タイプ)、Ⅱ.「灰原部が燃焼部とほぼ直線的に直結し、袋状に浅く掘り込まれており、焚口部との区別が認められない」(公津原タイプ)、Ⅲ.「灰原が長方形プランを呈する」(富沢タイプ)、Ⅳ.灰原が扇形に広がる(馬渡タイプ)の4タイプに分かれる。萩原氏は塩野氏の形態分類に加え、焼成部が弾頭形のものや方形を示すもの、江南権現山1号窯のように「3の部屋に区別される」窯体構造のものを含めている。

この近畿・東海以西の埴輪窯が比較的統一された窯体構造に対して、東海以東、特に関

東地方では数タイプの窯体構造に分かれる。これは、丘陵の比較的急な斜面が立地条件として確保できる地域と関東地方、特に出生塚埴輪窯群に代表されるような、丘陵とはいいがたい台地のなだらかな斜面に造らざるを得なかったという立地・自然条件が考えられる。また、近畿・東海以西では埴輪生産のための專業窯、あるいは須恵器と併用して焼成する窯であるのに対し、東海以東では土師器と併用して焼く例が多く、須恵器生産者が関与したものと、土師器生産者が関与したものととの差異であるかもしれない。

#### (4) 床面構造

埴輪窯は、有階・有段の床面をもつものは少なく、大半が無階・無段である。このようなか中で一部床面の状況が特異なものを列記すると、破損した埴輪を製品の焼台として使用したり、あるいは埴輪片を用いて段状施設を設けるもの(唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡)がある。また、埴輪窯での製品(埴輪)の再利用例としては、福岡県立山山窯1号窯の側壁に近い部分に円筒埴輪の基底部をつなげて「入れ子」状に並べたもの、大阪府日置荘埴輪窯の、埴輪片を破砕し、床面に敷きつめたような遺構がある。この日置荘埴輪窯の床面の構造は、焼成部の燃焼効率を考えたものと考えられる。

床面は、2～3回の床上げを行っている例が多く、6回の床上げ(大阪府野々上1号窯・馬渡2号埴輪窯)をしたものもある。

#### (5) 窯の基数

埴輪窯は、数基の窯が接続して築かれる例が多い。大阪府菅田白鳥埴輪窯は全体の調査はなされていないが、11基以上の窯が接続してある。関東では茨城県小幡北山埴輪製作遺跡の59基以上、埼玉県割山遺跡の20基、同生出塚埴輪窯跡の31基などがある。この埴輪窯の基数も窯体構造の差異と同様、東海以西と以東とでは差異がある。

東海以西では数基の窯が何mかの間隔で整然と築かれているが、関東地方、特に埼玉県では生出塚埴輪窯に代表されるように、狭い範囲に2～5基の窯が重複してあり、古い窯を壊すかあるいはその一部を利用して新たに築いている。しかも、最終調査後の平面形態は、数基の窯が重複し、あたかも「ヤツデ」のような形となるものが多い。山崎 武氏の指摘によると、生出塚遺跡の埴輪窯では緩い傾斜地に窯を構築せざるを得ないため、窯本体よりも灰層の搬出に大きな労力を必要とする。このため、窯本体の掘り込み、あるいは前庭部の掘り込みを当初より深く広く掘り込み、これを利用して数基の窯本体を当初より計画していたため、最後の窯形態として「ヤツデ」のような形になったものといわれている。

山崎氏が調査された生出塚遺跡の埴輪窯では、「ヤツデ」状の埴輪窯とともに、近接したところにいわゆる「叢内型」の窯も築かれている。

### (6) 共伴遺物

埴輪窯は、埴輪を生産するための窯であるが、一部土器とともに埴輪を焼成している例がある。

福岡県立山山窯・島根県平所遺跡・大阪府野々上1号窯・京都府上人ケ平1号埴輪窯などは、埴輪のみ窯体及び灰原内から出土し、埴輪専業窯と思われる。関東地方では土師器(鬼高期)が共伴遺物として出土する例が多い。また、愛知県・三重県では須恵器窯の中に一部埴輪を含めて焼成する例がある。

### (7) 埴輪窯の工房跡

上人ケ平遺跡では、埴輪生産に関わる工房跡はみつかっておらず、これまでの全国の調査例でも埴輪の工房跡がみつかった例は、群馬県本郷埴輪窯跡・茨城県馬渡埴輪製作跡など、ごくわずかであった。そのため、一般集落と同様、小規模な竪穴式住居跡内で行われていたと考えられていた。ところが、高槻市新池遺跡では、台地斜面に埴輪窯を、そして台地の平坦面に一辺12.8m×10.7mを測る大形竪穴式住居跡が3棟みつかった。この3棟の大形竪穴式住居跡は、10本の柱で屋根を支え、床面には埴輪を成形するための粘土穴と作業用のピット等が出土している。この新池遺跡で生産された埴輪は、太田茶臼山古墳(全長220mの前方後円墳)へ供給されたと指摘されている。また、工房跡はみつかっていないが、焼成された製品(埴輪)を、一端保管しておく埴輪集積場も群馬県太田市駒形神社埴輪<sup>(注71)</sup>窯跡でみつまっている。

### (8) 時期

各窯の埴輪をみると、立山山窯1号窯・菅田白鳥遺跡・上人ケ平1号埴輪窯などは、川西編年のⅣ期に相当し、他の多くは川西編年のⅤ期に相当する。このうち上人ケ平1号埴輪窯は、その供給先と思われる上人ケ平14号墳でTK208の須恵器無蓋高杯・杯蓋などが出土している。また、ON-46型式の須恵器を生産した東山48(218-I)号窯の須恵器窯<sup>(注72)</sup>でも円筒埴輪が出土しており、前述のⅣ期の埴輪を生産する窯は5世紀後半と思われる。

関東地方では6世紀以降に埴輪窯の生産が認められ、共伴する土師器の編年から7世紀前半に含まれる埴輪窯もある。

### (9) 供給先

前述のように、上人ケ平遺跡では直線距離約80mにある上人ケ平古墳群に、その製品の一部が供給されているものと考えられる。上人ケ平埴輪窯のように、埴輪窯とその供給先である古墳が同時に調査された例としては埼玉県生田塚埴輪窯がある。

他の埴輪窯の調査例では、その供給先を近接する古墳等により、推定している例が多い。また、埴輪窯の成立の契機としては、新池遺跡と太田茶臼山古墳、上人ケ平遺跡とウワナ



べ古墳、出生塚遺跡と埼玉古墳群など、大形古墳の築造を契機として埴輪窯が築かれる場合が多い。

#### (10)小結

埴輪窯は関東地方で検出例が多く、埼玉県では12遺跡100基以上の窯の調査例が知られる。これに対して近畿以西では埴輪窯の調査例は少なく、京都府内でも上人ヶ平1号埴輪窯が初めての調査例である。

これら東海以西と以東、特に関東地方との比較検討は調査例の多寡により今後変化がみられるが、窯体構造、共伴遺物など地域性が認められる。

この地域性の差異は、現在の調査成果からみると、近畿以西で成立した埴輪窯が、時期をおって関東地方へと派生した時間的な変化だけではない。窯体構造に見られるように近畿・東海以西では須恵器窯とよく似た窯体構造で埴輪窯が築かれており、須恵器工人の関与が認められるのに対し、東海以东では土師器工人の関与が考えられる。そして各窯の築造方法に整然と並ぶ近畿以西の埴輪窯に対し、関東地方では「ヤツデ」のように狭い範囲に窯が築かれ、地域性の差異がある。

#### (追記)

埴輪窯の地名表については、『京都府埋蔵文化財情報』第32号に一部掲載しているので参照されたい。「埴輪窯跡地名表」作成以後、静岡県京貝塚埴輪窯・同有玉埴輪窯などの欠落が指摘された。さらに資料収集・検討を加えたい。

(石井清司)

### 第7節 上人ヶ平埴輪窯の製品の供給先について

上人ヶ平遺跡の位置する同じ台地の東縁の段丘崖に構築された埴輪の窯跡群では、本文でも述べたように、最も北に築かれた1号埴輪窯のみ、その前面に広がる灰原も含め発掘調査を実施し、多数の埴輪資料を得ることができた。

これらの埴輪の供給先に関しては、最寄りの古墳までわずか80mという至近距離に位置する上人ヶ平古墳群に供給されたとみるのが、ごく自然であり、埴輪の実見観察や自然科学的分析の結果も、これを否定するものではない。もっとも、より広範な地域への供給関係も考慮しなければならないが、現時点ではデータの蓄積が貧弱で考察に耐えないので、この点は今後の課題としておく。

そこで本節では、とりあえず1号埴輪窯で生産された埴輪が、上人ヶ平古墳群のどの段階の埴輪と対応するのかについて、各操業時の資料を分析して対比させたいと思う。

まず、各操業面で出土した埴輪の特質を簡潔にまとめた付表11を提示し、これに補足を

付表11 1号埴輪窯出土埴輪一覧表

作業面	第1次床面	第2次床面	第3次床面（最終床面）
全体形態	3条タガ(と6条タガ)(A) 口縁段と基底段が一般段より幅広	3条タガ? 底径20cm前後	3条タガ 器高50cm前後 (B・C)
口唇形態	直口系と屈曲系 (b1)	全て直口系	直口系と屈曲系 (b1)
タガの形態	突出度の高い台形・M字形断面 (A)	台形>底平な台形	底平な台形>台形
透孔	円形・穿孔方式不明	円形・穿孔方式不明	円形・隣接段に交互配置
調整	外面		
	1次	タテハケ	タテハケ
調整	内面		
	2次	ヨコハケあるいは省略	ヨコハケ
焼成	1次	ハケあるいは省略	口縁段のみハケ
	2次	ハケあるいは省略	口縁段のみハケ
焼成	須恵質(軟質あるいは硬質) 焼きひずみによる変形なし	須恵質(軟質) 焼きひずみによる変形なし	須恵質(軟質) 焼きひずみによる変形なし
朝顔形埴輪	資料なし	口縁部分割成形 (A・B)	口縁部一括成形
形象埴輪	家(裾廻台)、蓋(笠縁部)、 馬(障泥・たてがみ)	蓋(笠縁部・受皿部)	家(完形)、馬(尻繫)

加える形で考察を進める。

第1次床面で生産された普通円筒埴輪には、小片資料に限られるとはいえ、口径の大きな個体が含まれ、突出度の高いタガの形態や堅緻に焼成された須恵質埴輪が含まれるなど、上人ヶ平古埴群出土の埴輪分類のA類の属性を多分に備えた個体が目立つ。

一方で、口縁段と基底段が一般段と比して幅広く造られ、焼成が土師質に近いものもあり、必ずしもA類のみを焼成していたわけではない。

形象埴輪をみると、家の裾廻台は、突出度の小さい厚手の台形断面を呈し、16号埴例(252)と酷似する。蓋の笠縁部は、外面に3線帯による放射状沈線を線刻し、ともにA類の共伴例の典型的な要素を備えている。

次に、第2次床面の製品をみてみると、普通円筒埴輪の場合、底径が20cm前後と小さく、タガに挟まれた各段の規模や口縁段が一般段より幅広く造られていることから、3条のタガをめぐらせた小形品に復原でき、この点で少なくともA類とすることはできない。すべての個体にB種ヨコハケの外表面調整が施される点はA・B類の属性だが、2次調整が段間で重複するように施行される個体が含まれることや、先の全体形態の特徴から、B類の埴輪に最も近似する内容をもっている。共伴した蓋形埴輪をみると、口縁部と体部(底部)の境が緩やかな屈曲を示す受皿部や、外面に放射状の線刻を有さない笠縁部が含まれ、それが14号埴例(285)と一致する点は、これを傍証する有力な根拠となる。

第3次床面は、最終作業面にあたり、比較的残存度の高い個体が多い。まず、普通円筒

埴輪は、3条のタガをめぐらせた器高50cm前後の小形品に限られ、円形の透孔は隣接する段に段を違えて交互に段間対向2孔配している(以上は、B・C・D類の属性)。これに加え、タガは断面が低平な台形のもの、通常の台形の両者を含み、外面に粗雑なヨコハケの2次調整を加えるものが、それを省略するものより多い(C類の否定要素)。焼成は須恵質の範疇に入るものの軟質で、焼き歪みによる変形を受けた個体はない(D類の否定要素)。以上の特徴を有する埴輪は、古墳出土の埴輪分類のB類に最も近い。ただし、同じB類と考えた第2次床面出土の埴輪と比較すると、第3次床面の埴輪に製作技法上の省力化・形骸化の要素が認められる。たとえば、外面に施される2次調整をみると、第2次床面のそれは典型的なB種ヨコハケを複次的に用いて段間をくまなく調整しているのに対し、第3次床面の埴輪は、明確な休止痕をとどめず、段間1回の施行で未調整部分を残している。さらに、朝顔形埴輪の口縁部の製作技法をみると、前者が旧来の分割成形を用いるのに対して、第3次床面のそれは一括成形を新たに採用している。古墳群の埴輪の場合、D類の共伴例に一括成形の初源をみる(C類に共伴する朝顔形埴輪はない)が、窯の資料の考察を通じて、実際はB類の段階(川西編年のⅣ期の後半)で口縁製作技法の転換が行われていたことが予想される。

このようにみると、第3次床面で生産された埴輪は、内容的にはB類の埴輪に近似するものの、厳密には異なった類型であり、今のところ上人ヶ平古墳群では未確認ということになる。そして、この埴輪の類型は、上人ヶ平古墳群内に存在する未確認の古墳、あるいはこの古墳群以外の古墳に供給された可能性が想起される。

次に、この1号埴輪窯の前面に広がる灰原の埴輪資料について若干付け加える。もっとも、1号埴輪窯の前面には布留式併行期の土師器を包含する河道が段丘崖に沿って流下しており、窯に伴う焼灰層の堆積状況から、窯操業時にも流路としてある程度機能していたものと考えられる。したがって、灰原出土の埴輪類の中には、上流側に隣接する2・3号窯の製品が多分に含まれている可能性がある。こうした制約はあるものの、灰原出土の埴輪を概観すると、特に形象埴輪の中に上人ヶ平古墳群出土の埴輪と類似するものが多くみられる。例えば、蓋形埴輪の笠縁部(457・458・462・464)は杵骨を表現した3線帯の放射状線刻がみられ、A類の共伴例に共通している。また、馬形埴輪をみると、頭部(473)は、頭絡の結構方式や、目の上縁を肥厚させ、まぶたを表現する点が17号埴例(255)と共通する。鞍の各部の造りは、磯金具(482・485)や鞍(483・484)の表現にみられるように、5号埴例(109~111)や17号埴例(255)に酷似し、同一工人の製作を思わせるものである。このように、1号埴輪窯前面の灰原出土の埴輪は、A類に含まれるものが多い傾向にある。

(伊賀高弘)

## 第8節 奈良時代の遺構について

### (1) 奈良時代建物の配置

上人ヶ平遺跡における奈良時代の建物跡は付表7のとおり、大形建物跡(9間×4間)が4棟とその大形建物跡に隣接してある小形建物跡9棟からなっている。

これらの建物跡は、出土した少量の土器と瓦から築造開始後、短期間に廃絶したことが窺える。

ただし、この短期間にも遺構(柱穴)の切り合い、方位の相違あるいは建物配列などから、わずかながらも時期差が認められるため、以下に示す理由により、4小期に分けることができる。

#### 1. 建物跡の前後関係

##### a. 方位による時期差

建物跡の主軸をみると、真北に近い $N1^{\circ}15'W$ 前後を測るI群(S B301・302・303・304・309・311・312・313・310)と $N5^{\circ}W$ 前後を測るII群(S B307・303・314・353)に分けることができる。この2群の建物のうち、S B309の柱穴を切ってS B306の柱穴があることから、I群がII群に先行することは明らかである。

##### b. 基準尺による相違

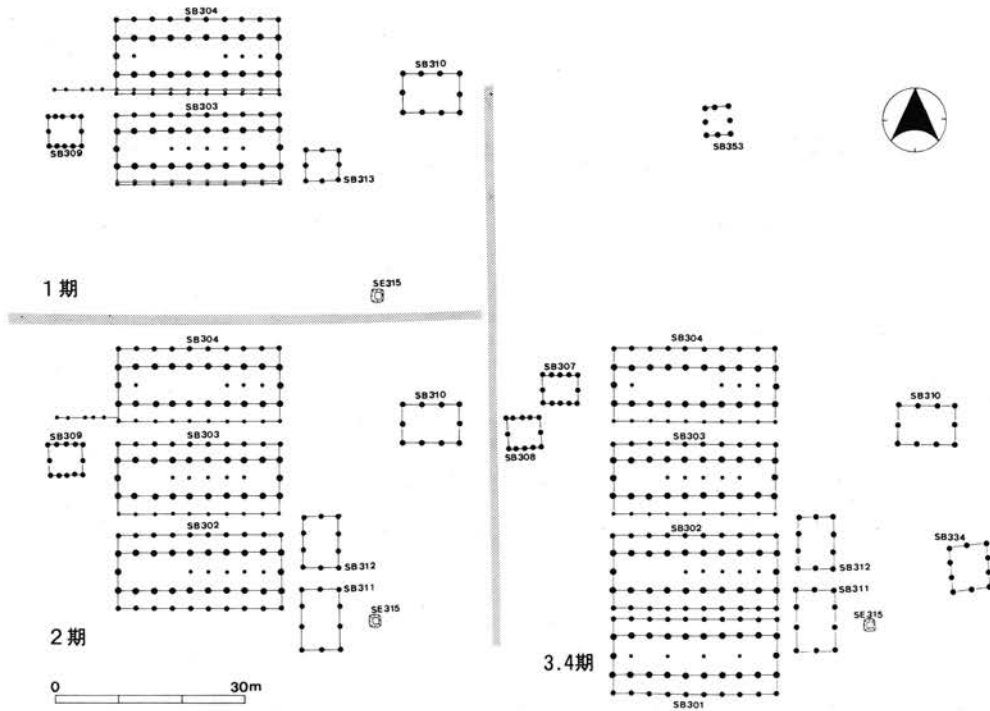
4棟の大形建物跡をとり囲む小形建物跡の柱間には、柱間間隔にバラツキがあり、基準尺を読みとれなかった。これに対して大形建物跡は、柱間間隔に基準が読みとれ、S B301・S B302の群とS B303・304の群では、わずかながらも相違がある。すなわち、S B304・303の北2棟は、柱間間隔が2.87mでほぼ等間隔に配されている。また、S B302・301の南2棟は、柱間間隔が2.91mの等間隔である。このため、北2棟の建物跡と南2棟の建物跡では、西隅柱筋(又列)は通っているが、東へ行くにしたがい徐々にずれていく。

##### c. 遺構の切り合い

S B309の掘形を切ってS B308の柱穴があることは先述した。このほかに各建物跡は整然と並んでいるため、直接的な切り合い関係はないが、S B304・S B303はいずれも南廂に建て替えがあり、南廂の—a列を切って—b列がある。

##### d. 遺構の配列

S B304の南廂—a列の延長線上に柵列(S A337)がある。S B303では、北廂(五列)の柱筋に揃えて、S B310の南側柱(一列)があり、その間は、S B303の柱筋(列)から東へ約19.5mの位置にS B310の西側柱(二列)がある。またS B303の—a列の柱筋を揃えS B313の南側柱(一列)があり、その間隔は4.25mである。S B309の二列もS B303の三列と柱筋を揃え



第106図 第三期の建物変遷図

ている。一方、SB302の北側柱(五列)がSB312の三列と、またSB302の二列がSB311の北側柱(四列)とほぼ柱筋を揃えている。このことから、SB303とSB310・SB313がSB302とSB311・SB312が同一時期の可能性が高い。

## 2. 建物の変遷

このように主軸方位・基準尺の相違・遺構の切り合い・建物の配列等をみていくと4小期に分けることができる。ここでは時期をおって建物跡の配置をみていく。

**1期** SB303・SB304の大形建物が築造された時期で、その西側にはSB304の南廂の延長線上に柵列(SA337)を、そして柵列の南側にSB309が配されている。また、大形建物跡の東側には、SB310・SB313が配されている。

なお、1期の大形建物跡は南廂の建て替えがあり、南廂が当初2.5mの出であったもの(一a期)を約0.37m拡張し、廂の出を2.87mに拡張している(一b期)。

**2期** SB303・SB304の2棟の大形建物跡に加え、SB303の南3.23mに新たに4間×9間の大形建物を増築している。この2期には建物配列からみて、西側の小形建物跡群(SB309)は残っていたと思われるが、東側に配された2間×2間の建物(SB313)は廃絶しており、新たに2間×3間の建物(SB313・SB312)に建て替えている。2期の大形建物跡

(S B 302・303・304)を「コ」の字形にめぐる溝(S B 305)は、S B 303とS B 302の間でやや曲折し、直線的にはならない。このS B 303とS B 302の間には、S D 305を切った不整形土坑があるため明確にはしえないがS B 303とS B 302の間にも両建物を区画する溝があったものと思われる。

3期 S B 302よりもさらに南側に4間×9間の大形建物跡S B 301を増築した時期である。S B 301の増築に際しては、「コ」の字状にめぐる溝S D 305に新たにS B 301を囲むようにS D 306を掘り加えている。なお、S B 302とS B 301の間は1.65mとかなり接近している。

4期 大形建物跡とは方位を異にした小形建物跡群が造営された時期であり、建物跡がやや散らばって分布している。この4期に大形建物跡群が存在していたかどうか検討を要するが、上人ヶ平遺跡全体が奈良時代の短期間に造営・廃絶したことから考え、大形建物跡群(A建物跡群)と同時に4期の小規模な建物があった可能性がある。

### 3. 各小期の年代

上人ヶ平遺跡からは土器類とともに瓦類が多く出土している。年代を決定する資料となる瓦、特に軒瓦は先述のとおり、平城宮瓦編年のⅢ期(745～757年)あるいはⅣ—1期のものが大半である。

また、直接建物跡とは関連しないが、S B 334の南に近接してある土坑(S K 320)から万年通寶(初鑄760年)、神功開寶(初鑄765年)が出土している。

#### (2) A建物跡群(大形建物跡群)の性格

上人ヶ平遺跡における奈良時代の建物跡が、4棟の大形建物跡群と、その三面(東・北・西)に小形の建物跡群を配していること、これらの建物跡群は、4小期に細分することができ、当初は大形建物(S B 303・304)を中心に東・西に小規模建物を配し、新たに南へ2棟の大形建物を順次増築していた可能性が高いことは前述したとおりである。

ここでは大形建物跡群の性格についてみたい。

A大形建物跡群(S B 301・302・303・304)は、2間×9間の身舎に、南北1間の廂をもつ4間×9間の掘立柱建物跡であり、S B 303とS B 304はいずれも南廂に建て替えが行われている。

各建物跡の柱間は、S B 303・304が約2.87m(約10尺)の、S B 301・302が約2.91m(約10尺)の等間隔で配され、前者(S B 303・304)の廂は、当初2.5mの廂の出であったものを、南廂のみ2.87mに拡張している。

身舎の間には束柱と思われる4～5個の小さな柱穴があり、総数50本に近い柱穴で1棟

の建物が構成されている。

### 1. 束柱の性格

この大形建物跡で検討を要するものに、各建物跡の三列のロ～リ列に配された小柱穴がある。この小さな柱穴が床を支えるための柱か、あるいは棟を支える柱かにより建物の構造・性格が大きく異なる。すなわち、前者であれば大形建物跡はいずれも床張りとなるが、後者とみれば土間となる可能性がある。

#### a 説 床を支えた柱か

床を支えるための柱とみた場合、三列の小規模な柱穴とともに、身舎(二・四列)の柱穴に重なるか、あるいは隣接して柱穴が検出できる可能性がある。これは、調査段階でいろいろな方の指摘を受け、身舎の柱穴あるいは身舎の柱穴に隣接した部分について、特に注意し精査を進めたが、三列目の小さな柱穴以外、明確な柱穴をみつけられなかった。

#### b 説 棟を支えた柱か

床を支えた柱のほかに考えられるものとして、棟を支えるための補助柱とみる説がある。これは各柱間が約10尺等間で、柱間が広いが、そのわりには宮殿遺構のような太い柱痕ではなく、棟を支えるためには柱は小さすぎる。このため身舎の部分の柱を補助する用途として、棟の中央に補助柱を建てたという説である。束柱と意味づけた小さな柱穴の位置をみると、身舎の中央(三列)で直線的に通るものは少なく、棟にそって(ロ～リ列)直線的にならぶ傾向にあり、この説の有力なよりどころとなる。

### 2. A建物跡群の性格

このように a 説とすれば A 建物跡群は床張りとなり、b 説ならば土間の 2 者が想定できる。この三列の柱の性格についてはなお検討を要するが、ここでは b 説が有力であると思われる。この b 説を採り入れ、A 建物跡群の性格を検討していくが、A 建物跡群は、掘形及び周辺から出土する瓦と考え合わせ、上人ケ平遺跡に隣接した市坂瓦窯と密接な関係があり、瓦窯との関係で A 建物跡群を検討していく必要がある。

#### ① A 建物跡群の特徴

A 建物跡群は、2 間×9 間の身舎に南北両面廂、身舎の間には補助柱をもつ建物跡群である。身舎・廂の柱痕をみると、柱直径 25～38cm(身舎)、20～25cm(廂)となり、10 尺等間のわりには柱の径は小さい。

この細い柱の径であるにもかかわらず、10 尺等間の柱間とせざるを得なかったことには、10 尺等間に柱間を最大限広げ、建物面積(空間)をできるかぎり大きくするという意図があったものと思われる。

また、最近の調査では、官衙建物跡が「コ」の字形をとり、中心建物を中心に、両脇に

脇殿を配するような建物配置が主流であるのに対し、上人ヶ平遺跡では、4棟の建物跡が南北に整然と並ぶこと、さらに特徴的なのは、S B 301とS B 302が同時併存であれば、軒を接するかなのような位置に配されていることである。この4棟が同時併存していた時期(3期)があると考えれば、4棟の建物跡はいずれも軒を接し、4棟がまとまって1体の構造物として使用された可能性がある。

## ②A建物跡群の復原

このA建物跡群(4間×9間)を市坂瓦窯との関連、特に瓦生産に伴う建物跡という前提条件にたてば、瓦の成形・なま瓦の乾燥を意図するための建物跡と考えることができる。

このA群の建物跡群を瓦の成形・なま瓦を乾燥するための建物跡と考えれば、

- (1) 10尺等間の幅広い柱間隔で各空間が広い作業が容易である。
- (2) 柱間隔を広くすることにより、少ない材料(柱)で建物を作ることができる。
- (3) 細い柱で10尺等間の柱間としたため、棟を支える補助柱が必要となった。
- (4) 南北に4棟を並列して建て並べることにより、4棟を一体の建物として利用できる。
- (5) S B 201の北廂(五列)の「ホ～チ」の間に各土坑(S K 360・361・362・363)があり、土坑底部に灰色粘土が堆積していることから、瓦成形の際の粘土溜とみることができ。

このように、A建物跡群は、瓦生産のための成形及びなま瓦の乾燥をするための建物となる可能性が高い。

## (3) 小形建物跡群の性格

A建物跡群が、瓦の成形あるいはなま瓦の乾燥を意図した建物の蓋然性が高いことは前述したとおりである。A建物跡群の東・西・北にある小規模建物跡群については、その用途を検討する資料が非常に乏しい。

この中で各小期を設定したように、S D 309・313・310はS B 303・304との関連性、S B 302とS B 312・311との関連性が建物配置から指摘することができる。

これらの建物跡群の周辺では瓦の出土が大半であり、生活用具である土器の出土は他の集落遺跡にくらべて非常に少ない。

この少ない土器のなかで、土器の分布状況を見ると、調査地の北東にあるS K 321が相対的に多く、次いでS E 315の井戸、16・8・7・6号墳の周溝内から出土している。

また、この大形建物の東側中央に井戸(S E 315)があることと考え合わせ、S B 311・312・313などは厨房的な建物跡とみることができる。一方西側の3棟の建物跡の周辺では、S B 307の西隣、S B 308北隣にある竪穴式住居跡(S H 103)を除き、土器の出土量は非常に少なく、瓦生産に関連した倉庫的な建物であった可能性が高い。



#### (4) 上人ヶ平遺跡(奈良時代)の復原

A建物跡群を瓦の成形、なま瓦の乾燥場、B建物跡群を厨房、C建物跡群を倉庫的な建物と想定したが、ここでは、上人ヶ平遺跡の官営瓦工場の復原を検討していきたい。

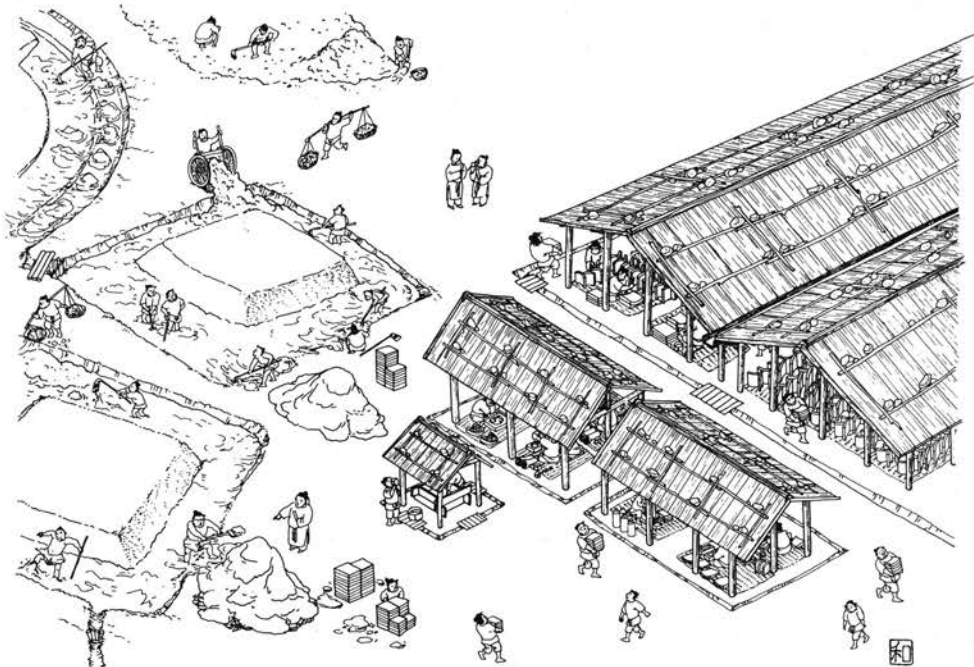
瓦作りの作業工程には、①粘土の準備(土取り・土打ち) ②なま瓦の成形・調整 ③乾燥 ④焼成・製品のチェック ⑤供給地への搬出がある。

##### ①粘土の準備(土取り・土打ち)

上人ヶ平遺跡では奈良時代以前、古墳時代(5世紀後半)に埴輪窯が隣接して造られており、奈良時代以前では、この周辺が窯の構築に適した地形であったと思われる。これは上人ヶ平遺跡に隣接した瓦谷遺跡周辺の田畑を掘削すると、良好な青灰色粘土を採集することができ、粘土が周辺で簡単に採集できたためと思われる。調査では粘土の採掘跡は確認できなかったが、市坂瓦窯の南にある「ふんどし池」と呼ばれる池が、丘陵に直交する形で不自然に掘られていること、明治時代の地籍図にもその記載があることから考え、粘土を採集したあとの窪地であったものを後世に池として使用した可能性がある。

##### ②なま瓦成形・調整

採集した粘土は、土打ち(粘土の水分を抜き、粘土を小さくずにする作業)を行い、そののち、砂や水を混ぜ、成形しやすい粘土に加工するが、この際、多量の水を必要とする。上人ヶ平遺跡では古墳の墳丘を削り、かつ周溝を埋め、平坦地を奈良時代に造っているが、



第107図 上人ヶ平遺跡の想像復原図

5・7・8号墳の墳丘は現在まで残り、他の古墳とは異なった扱われかたをしている。この3基の古墳の周溝の調査では、周溝が奈良時代に改修され、周溝の幅を拡張していることを考えると、5・7・8号墳の周溝を奈良時代の瓦生産に関連して利用したことが窺える。すなわち、この周溝を利用し、雨水の確保あるいは粘土こねに使用したと思われる。(粘土こねの施設としては、ほかにS K 320・322・341などの摺鉢状土坑がある。)このA建物跡群では直接瓦の成形・調整を行った痕跡を示す資料は少ないが、S B 301の北廂に接して、3つの楕円形土坑(S K 360・362・363)があり、その土坑の底部近くから青灰色粘土が堆積している。この土坑内に粘土をため、瓦工人が瓦の成形を行ったとも考えられる。

### ③乾燥

成形された瓦は、数日～10日前後乾燥させる必要がある。この乾燥にはこれまで天日で日干しするものと考えられていたが、上人ヶ平遺跡の調査により、ある程度の建物内に収納し、陰干ししたものと思われる。このA群の建物は、4棟全体で約1,485㎡(東西26.19m×南北54.7m)の空間を有している。1㎡あたり10数枚の瓦を乾燥できたとして14,850枚程度の瓦をこの建物内で乾燥することが可能である。

### ④焼成

乾燥した瓦は、上人ヶ平遺跡の南斜面にある市坂瓦窯へ運ばれ焼成される。

市坂瓦窯については発掘調査が行われていないため、その実態は明らかでないが、『木津町史資料編Ⅰ』によると6か所の陥没があり、6基程度の窯が想定されている。ただ、上人ヶ平遺跡の瓦工房跡の規模から考えると、さらに規模の大きな瓦窯群が想定できる。

なお、A建物跡群の西側(S B 301と302の間)で谷に向かって切り通し、瓦片や小石を敷いた路面(S F 380)があることから考え合わせると、この路面を利用して台地上(上人ヶ平遺跡)でなま瓦を成形・乾燥させ、瓦窯(市坂瓦窯)へ運んだものと思われる。

焼成された瓦は、一旦は、台地上の上人ヶ平遺跡に運ばれ、製品のチェックを行ったのち、供給地(主に平城宮)へ送られたものと思われる。これは上人ヶ平遺跡で整理箱700箱以上の、なま瓦でない焼成された瓦が出土していることから窺い知ることができる。

### ⑤供給地への搬出

市坂瓦窯あるいは上人ヶ平遺跡から出土する瓦は、軒丸瓦6133Aa・Ab・B・C型式、6235Ma型式、軒平瓦6732A、6732C、6725Ba、6725Bb、6718型式、鬼面文鬼瓦、磚などがあり、いずれも平城宮、特に大膳職に多く出土する瓦であることは、これまで指摘されているところである。上人ヶ平遺跡から平城宮へは直線距離にして約3.2kmであり、平城山丘陵を越え、平城宮へと瓦は運ばれたものと思われる。

(石井清司)

## 第9節 「造瓦所」について

上人ケ平遺跡では、前述のように大形掘立柱建物跡4棟と小形建物跡9棟のほか、古墳の周溝を利用した水溜め、あるいは粘土溜め施設、粘土を一時置いたと思われる小土坑がある。

この上人ケ平遺跡では、台地平坦面にある瓦工場の調査を行ったが、南側斜面にある瓦窯(市坂瓦窯)の調査は行っていない。そのため瓦窯の実態は明らかでないが、まず上人ケ平遺跡が市坂瓦窯に関連した瓦工場とみて間違いはない。

この瓦窯と瓦工場を総称して古代文献では「瓦屋」「造瓦所」などと記載されている。

ここでは、発掘調査で明らかとなった瓦窯・瓦工場<sup>(注73)</sup>を紹介し、上人ケ平遺跡の状況と比較・検討していきたい。

「瓦屋」「造瓦所」関係の調査例は以外に少なく、管見に触れた資料をみるかぎり12遺跡であり、近畿地方では上人ケ平遺跡を含め4例、他は関東・東北地方で、特に関東地方での調査例が多い。

以下、関連遺構を紹介していく。

### ①音如ケ谷瓦窯・大島遺跡 京都府相楽郡木津町

音如ケ谷瓦窯<sup>(注74)</sup>は、上人ケ平遺跡の立地する奈良山丘陵の一面にあり、出土した瓦等から上人ケ平遺跡(市坂瓦窯)に後続する平城宮瓦編年のVI期(757-700年)の瓦窯である。そして大島遺跡<sup>(注75)</sup>は音如ケ谷瓦窯の北300mにあり、出土した瓦を含め音如ケ谷瓦窯に関連した工房跡と考えられている。

音如ケ谷瓦窯の工房跡及び大島遺跡の奈良時代建物跡は、40棟の建物を数える。

音如ケ谷瓦窯の建物跡は、3間×1間の建物跡のほか、2間×2間で総柱の倉庫と思われる建物跡などがある。大島遺跡では、奈良時代の建物跡として掘立柱建物跡35棟、掘立柱塀8列などがある。そのうち6間×2間の大形建物跡もある。

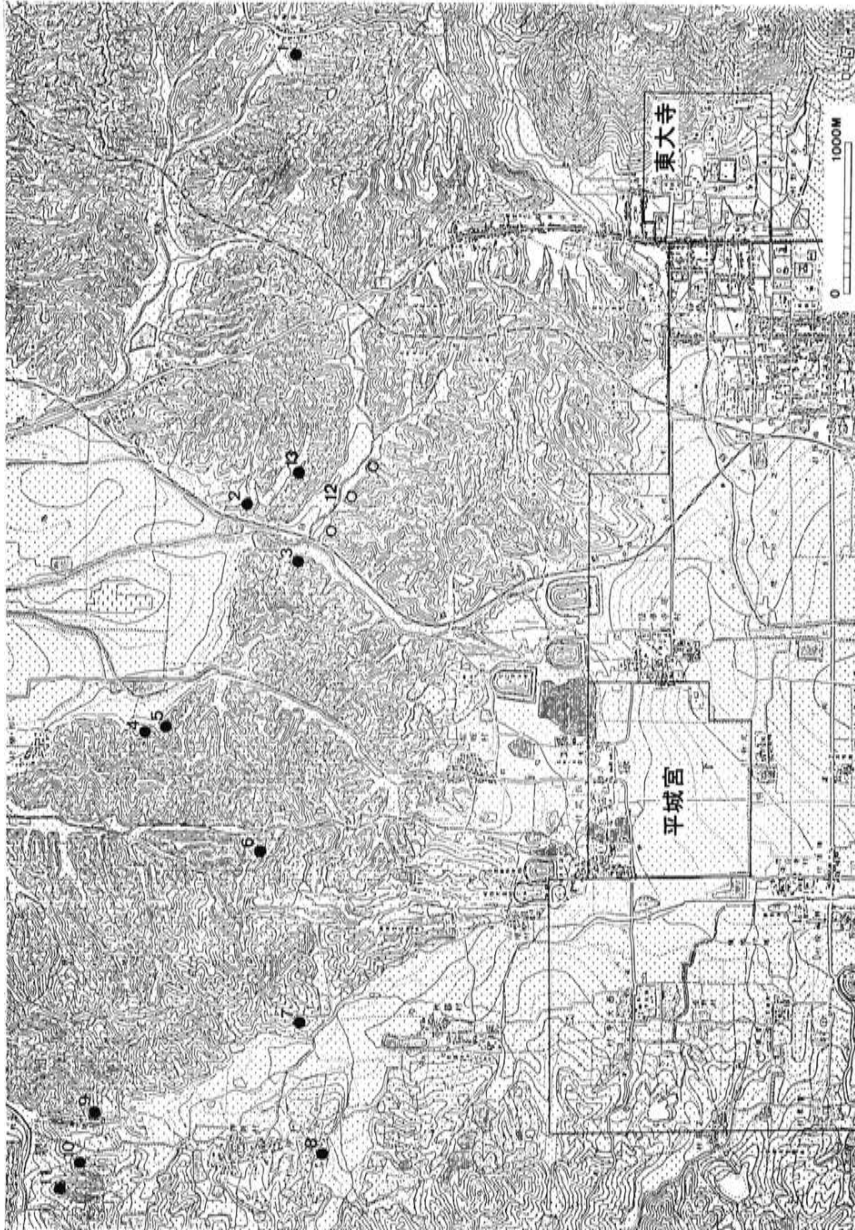
音如ケ谷瓦窯・大島遺跡では、瓦窯及び掘立柱建物跡のほかは、瓦生産に関連した遺構(粘土溜め土坑など)は検出されなかったが、「瓦屋」の遺構と思われる。

### ②宇治市隼上り瓦窯 京都府宇治市隼上り

隼上り瓦窯<sup>(注76)</sup>は、上人ケ平遺跡・音如ケ谷瓦窯と同様、南山城地域に所在する遺跡である。

隼上り瓦窯は、飛鳥・白鳳時代の寺院である奈良豊浦寺の創建に際して築かれた瓦陶兼業窯であり、生産地(隼上り瓦窯)から供給地(豊浦寺)までは直線距離約55kmを測り、遠隔地への瓦の供給が指摘されている。

瓦窯は4基を確認し、工房跡は瓦窯から西に約15m離れてあり、窯の焚口部よりもわず



- 1：梅谷瓦窯 2：市坂瓦窯 3：歌姫瓦窯 4：音如ヶ谷瓦窯 5：歌姫西瓦窯 6：山陵瓦窯
- 7：奈良山51・52号瓦窯 8：中山瓦窯 9：押熊瓦窯 10：乾谷瓦窯 11：得所瓦窯
- 12：歌姫東瓦窯 13：瀬後谷瓦窯

第108図 平城山丘陵の瓦窯分布図

かに低い位置にある。

工房跡として検出した遺構は、2時期に分かれ、a期は4間(7.2m)×2間(4.4m)の建物跡と粘土溜め土坑が、b期には規模を縮小し、3間×2間・2間×2間の建物跡が3棟と柵列がある。

隼上り瓦窯で粘土溜めと呼ばれている遺構(SK01)は、南北5.8m・東西2.4m以上の方形土坑で、黒灰色土(上層)と白色粘土ブロックと白色粘土シルト(下層)が堆積していた。またSK01を「L」字形に取り囲む溝などがある。

### ③ 榎木原遺跡 滋賀県大津市南滋賀

榎木原遺跡は、南滋賀廃寺の寺域の外側に隣接しており、大津宮時代から平安京時代にわたる瓦生産主体の遺跡である。

この遺跡では、A地区で瓦窯7基を、C地区では工房跡を確認し、瓦窯と工房跡は小さな谷川を境に区画されている。

工房跡は3期に大別でき、I期は大津宮時代(667~672年)に、II期は8世紀前半頃、III期は9世紀前半以降と考えられている。このうちI期の遺構は、登り窯5基と建物などの工房跡からなる。建物跡は9間×3間(SB103)と2間×2間(SB104)の建物跡が「L」字状に配置され、SB103の建物跡内には粘土溜Iが、SB103の東側に粘土溜IIがあり、SB103の西に池があった可能性がある。

粘土溜Iは、長方形で南北2.15~2.33m・東西2.5~2.71m・残存深度0.15mで、下部に自然石と平瓦をほぼ一面に敷いて床面とし、その上部に純度の高い灰色粘土が堆積(厚さ0.1m)していた。

粘土溜IIは、南北7.2m以上・東西13.0m・残存深度0.2~0.3mを測り、粘土は粘土溜Iと同様純度の高い灰色粘土と瓦片500点が出土した。

榎木原遺跡では、大形建物跡と粘土溜遺構があり、工房跡の実態をみる上にも重要な遺構である。

### ④ 柘江遺跡 宮城県仙台市原町小田原字柘江

柘江遺跡は、<sup>(注78)</sup> 台の原・小田原丘陵の南斜面にある遺跡である。

この台の原・小田原丘陵には、大蓮寺窯跡(須恵器窯-5世紀)のほか、奈良時代~平安時代の瓦窯(蟹沢中窯跡・与兵衛沼窯跡など)など、古代生産遺跡が集中するところである。

この台の原・小田原丘陵で生産された製品、特に瓦は、7km以内の距離にある多賀城・陸奥国分寺・国分尼寺などに供給されたものと思われる。

柘江遺跡で検出した建物は、竪穴式住居跡2基・掘立柱建物跡8棟のほか土坑・溝などがある。

竪穴式住居2基の周壁あるいは煙導部に瓦(平・丸瓦)を設け、暗渠等の施設がある。

掘立柱建物跡は3間×2間のもの、2間×2間で総柱のものなどがあり、後者は倉庫的な建物と思われる。また建物に関連した遺構として溝から水を集め、貯水用に利用されたと思われる土坑(第3号土坑一楕円形一径2.0~1.6m)などがある。

竪穴式住居跡及び掘立柱建物跡の性格については、瓦窯に隣接し、調査地からも多量の瓦が出土していることから、瓦窯に関連した工房跡と位置づけられている。竪穴式住居跡は、鍛冶施設をもった工房色が強く、掘立柱建物跡は住居に付随し、貯蔵・保管的性格をもつ建物群と考えられている。

栢江遺跡の建物跡群の時期は、多賀城のⅡ期(8世紀中頃~780年)~Ⅲ期(780~869年)に相当し、栢江瓦窯が使用されなくなった以降も建物跡群が存続しており、栢江遺跡の工房は蟹江中窯跡・与兵衛窯跡の工房としての性格を持ち続けたもので、いずれも多賀城等への瓦供給を意図した瓦工房であると考えられる。

#### ⑤小杉丸山遺跡 富山県射水郡小杉町青井田

小杉丸山遺跡<sup>(註79)</sup>の丘陵上には7世紀の瓦陶兼業窯1基・須恵器窯1基・竪穴式住居跡24基・段上遺構5基のほか、粘土採掘穴(穴群3か所・穴約75か所)などがある。

窯は完掘されていないが、1号窯の灰原を中心に多量の瓦が出土している。

建物跡は竪穴式住居跡と段上遺構(比較的簡易な竪穴状建物跡を想定)があり、竪穴式住居跡は丘陵平坦上に、段上遺構は丘陵斜面を長方形に削り出してある。

段上遺構は「窯で焼成する製品や、薪の仮置場的な施設」とともに「製品に係わる作業場跡としても使用されていた可能性が高い」と考えられている。また平瓦の分析から「少なくとも一つの叩き板しか確認されておらず」小規模な生産組織を想定している。

小杉丸山遺跡では建物跡のほか、粘土採掘穴が瓦陶兼業窯(1号窯)の前面にある谷部で多数確認されている。

なお、小杉丸山遺跡で生産された製品は御亭角廃寺(飛鳥Ⅲ期—その距離11km)に供給されている。

その他、すべて紹介しきれないが、埼玉県鳩山窯跡群<sup>(註80)</sup>では、須恵器窯を主体とした工房跡とともに瓦窯に伴う工房跡も一部含まれている。同遺跡では、500基以上の粘土採掘坑がみつまっている。また、同県新久窯跡・八坂前窯跡・新開窯跡などでも工房跡と思われる住居跡や、粘土採掘坑などがみつまっている。

各瓦窯に関連した工房跡は検出例が少なく、「瓦屋」に関連した工房跡についての実態が明らかになっていない。その点でも上人ヶ平遺跡の調査成果は「瓦屋」を考える上にも重要な遺跡であると思われる。以下、「瓦屋」の調査例を比較検討してみたい。

文献に見える「瓦屋」の構成としては、窯のほか、粘土溜め土坑・粘土採掘穴などが遺構として明らかとなっている。

#### 建物の立地

上人ケ平遺跡では窯を斜面に、工房跡を丘陵上部に造っている。これまでの窯生産に関連した工房跡は、窯の低位平坦面に築造されていると考えられていた傾向にあり、その例としては音如ケ谷瓦窯・隼上り瓦窯・榎木原遺跡などがある。一方、丘陵上部に工房跡があるものとしては上人ケ平遺跡のほか、小杉丸山遺跡・鳩山窯跡群などがある。

瓦窯ではないが、大規模な埴輪窯の工房跡である高槻市新池遺跡でも埴輪窯が斜面に、工房跡は丘陵上部にある。今後、全国での調査例が増加すれば、丘陵上部平坦面に工房跡が検出される例が増加するものと思われる。

#### 建物構造

上人ケ平遺跡は、掘立柱建物の工房であり、音如ケ谷瓦窯・榎木原遺跡も掘立柱建物である。近畿地方の瓦工房が掘立柱建物であるのに対し、北陸・関東・東北地方ではいずれも竪穴式住居である。

近畿地方の集落が古墳時代後期以降、竪穴式住居から掘立柱建物に移行する傾向にあり、その地域における一般集落のあり方を検討する必要があるが、関東地方で竪穴式住居を瓦工房に利用していることは、工房の性格を考える上にも重要であると思われる。

#### 建物の規模

これまでの調査例では大津宮あるいは南滋賀廃寺に瓦を供給したと思われる榎木原遺跡で9間×3間の建物跡を確認しており、大規模建物跡の存在は知られていたが、上人ケ平遺跡のように9間×4間の建物跡が4棟も並列して存在するという例はない。一般的には2間×4間程度の小規模建物跡が主体である。竪穴式住居跡は一般集落と異なった規模ではない。

#### 建物の性格

工房跡からみつける建物跡には9間×3間・4間×2間などの掘立柱建物跡とともに、2間×2間の総柱の建物跡があり、後者は倉庫と考えられている。前者の建物跡の利用方法は、居住のほかはその用途を特定した例はないが、榎木原遺跡では9間×3間の建物の内側に粘土溜め土坑があり、この建物跡内で粘土の生成・なま瓦の成形を行ったものと思われる。上人ケ平遺跡でもS B301の北廂の柱穴に接して粘土を溜めたと思われる楕円形土坑が3基あり、なま瓦の成形がこの建物跡内で行われていた可能性がある。

また、なま瓦の乾燥場には、これまで天日で干されていたかあるいは簡単な覆い屋を想定していたが、上人ケ平遺跡では、総面積約1,485㎡の一連の建物跡が覆い屋として想定で

きる。このような、なま瓦の乾燥場を想定した遺跡は上人ヶ平遺跡がはじめてである。

なお、粘土溜め土坑が建物跡に隣接する例は、隼上り遺跡にある。

#### 粘土採掘穴

粘土採掘穴と考えられている遺跡の例は多い。小杉丸山遺跡では窯の前面にある谷部、鳩山窯跡群では丘陵斜面などがある。また、直接粘土採掘穴ではないが、採掘穴の可能性のあるものとして榎木原遺跡の池遺構、上人ヶ平遺跡の「ふんどし池」などがこの粘土採掘穴の跡を後世に利用したものと考えている。

このように、瓦工房・「瓦屋」の実態については、徐々に明らかになりつつあるが、瓦窯本体の調査が主体であり、瓦工房の調査成果例が少ないため不明な部分が多く、その点からも上人ヶ平遺跡の調査は重要であると思われる。

(石井清司)

## おわりに

昭和59年度から始まった京都府木津町上人ヶ平遺跡は、5号墳の墳丘及び埋葬施設の確認・市坂瓦窯などの一部の調査を除き、調査地全域の約90%の発掘調査が終了した。

この長期にわたる試掘及び発掘調査の結果、ムラ(弥生時代後期～古墳時代前半)一墓域(古墳時代後半)一造瓦所(奈良時代後半)へと遺跡の性格が変化していくことは前述したとおりである。

現地調査の終了後、この報告書の作成に際しては、1,100箱以上に達する遺物があった。その整理・報告書準備作業も、整理員の方々の1年以上にわたる努力により、やっと実を結ぶことができた。

上人ヶ平遺跡の調査が長期にわたり、また各年度ごとに調査担当者が変わり、それぞれの遺構・遺物の性格等について、それぞれの調査担当者ごとに意見が異なることもあった。特に、Ⅱ支尾根の先端にあるS X 119・120と名づけた方(円)形周溝状遺構、20号墳とS X 111の土器棺など、その遺構の時期と性格については、それぞれの調査担当者で思うところが異なり、編集段階では各意見を十分に汲み取れなかった。

長期にわたる現地調査期間中、あたたかく見守っていただいた住宅・都市整備公団関西支社、関西西文化学術研究都市整備局、地元の方々には、末筆ではあるが、厚く御礼申し上げます。また、各年度ごとに変わる調査担当者のもとで、現地や整理室で調査に参加された調査補助員・整理員<sup>(注81)</sup>の方々や、現地作業に終始参加された梶樹太郎氏をはじめ、多くの作業員の方々にも厚く御礼申し上げます。

(石井清司)



- 注1 長谷川 達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会)1981、『京都府遺跡地図』第5分冊〔第2版〕 京都府教育委員会 1985
- 注2 上人ケ遺跡の位置する台地上には、部分的ではあるが広い範囲にわたって中世の包含層が分布し、後述する墓関連遺構とともに、当地が開墾された時期が中世であったことを知ることができる。
- 注3 この古墳を最初に紹介したのは吉田東悟『大日本地名辞書 第二巻 上方』 富山房 1900
- 注4 梅原末治「木津町市坂の一古墳」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20冊 京都府) 1940
- 注5 吉村幾温「市坂上人平古墳」(『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室) 1972
- 注6 清水眞一「土師器・長頸壺に関する一考察」(『橿原考古学研究所論集』第九 1985)
- 注7 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会) 1978
- 注8 ここでいう小工程とは、(半)乾燥工程をさす。この乾燥工程とは、赤塚次郎氏等が指摘しているように、円筒埴輪を製作する際、素材の粘土の性質から一気に全体を形造ると上部の重圧で下部がくずれてしまう。この防止策として複数の乾燥という間をもって分割的に製作するとされた。この乾燥から次の乾燥までの工程を乾燥工程と想定された。赤塚次郎「円筒埴輪制作覚書」(『古代学研究』第90号) 1979
- 注9 赤塚次郎氏は、個別の乾燥工程(乾燥単位の範囲内)で行う成形・調整技法と、複数の単位にまたがる技法があることを指摘し、前者を「下位手順」、後者を「上位手順」と規定された。赤塚次郎「はにわの製作者」(『古代学研究』第98・99号) 1982・1983
- 注10 底部輪台の制作手法の名称は、荻野 繁春「円筒埴輪成形技法の一断面一基部のつくり方について」(『福井考古学会会誌』第2号 福井考古学会 1984)による分類にしたがった。
- 注11 細かい条痕が認められること、及びタガ製作段階の指頭ナデと明かに異なる(条痕が粗い)ことから、布あるいは革を介在させた指頭ナデと考えた。
- 注12 1次調整・2次調整の定義は、川西宏幸「埴輪研究の課題」(『史林』第56巻第4号 1973)にて提唱されたもので、今日、埴輪の調整技法を表示する場合、通常に用いられる概念である。
- 注13 B種ヨコハケの細分については、以下の論考がある。赤塚次郎他『コナベ古墳前方部南外堤発掘調査報告書』 1980、一瀬和夫『允恭陵古墳外周溝・長持山古墳の調査』 大阪府教育委員会 1980、同『允恭陵古墳外堤の調査』 大阪府教育委員会 1981、若松良一「ヨコハケ調整円筒埴輪の技術史的検討—その細分と発展序列—」(『諏訪山33号墳の研究』1987)
- 注14 ここでいう底部調整は、円筒埴輪の底部に施された調整一般を意味し、川西宏幸氏のいう円筒埴輪を倒立させて行う調整(いわゆる「底部調整技法」)に限定したものではない。
- 注15 大村 直氏は、2次調整の本来的な要因を小工程(乾燥工程)単位の刷毛目の不連続の消去に求められ、2次調整が省略されることは、(半)乾燥工程の省略に連動する現象と理解された。大村 直「円筒埴輪編年の現状と課題—前期を中心として—」(『考古学ジャーナル』1985年10号通巻253号) 1985
- 注16 筆者は後述する「屋根部一括成形」とともに、主として屋根部の製作過程に視点を置いて分類したが、同様のことを岡村勝行氏は、屋根と壁の接合方法の違いによって分類し、

壁上接合(屋根部分割成形と同義)・壁隅接合(屋根部一括成形と同義)と呼称されている。  
岡村勝行「長原古墳群の家形埴輪」(『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ (財)大阪市文化財協会) 1990

注17 注16に同じ

注18 松木武彦氏は、頸部突帯(松木氏は、軸受部下端突帯と称す)笠部に降りてくるものはより新しい傾向があると理解している。松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期—畿内を中心に—」(『鳥居前古墳—総括編—』 大阪大学文学部考古学研究報告第1冊) 1990

注19 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪—14号墳出土の蓋形埴輪を中心に—」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989 にて用語を規定した。蓋形埴輪の笠部の製作技法については、市橋芳則「能田旭古墳—第1次発掘調査報告—」(『人類学博物館紀要』第8号 南山大学人類学博物館 1986年)や高橋克壽「器材埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第71巻第2号 史学研究会) 1988で指摘されている。

注20 251は田中秀和氏の分類の第Ⅰ類(細分類の中には該当類型はない)、高橋克壽氏の2類、松木武彦氏の第Ⅰ形式b類蕃上山タイプに該当する。田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」(『ヒストリア』第118号 大阪歴史学会) 1988、高橋克壽 前掲文献、松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期—畿内を中心に—」(『鳥居前古墳—総括編—』 大阪大学文学部考古学研究報告第1冊) 1990

注21 248は、田中秀和氏の第Ⅰ-B類、高橋克壽氏の2類、松木武彦氏の第Ⅰ形式b類はさみ山タイプに該当する。

注22 249・250は、田中秀和氏の第Ⅰ-B類、高橋克壽氏の2類、松木武彦氏の第Ⅰ形式b類はさみ山タイプに該当する。

注23 この立ち飾りと酷似するものが大阪府南河内郡美原町に所在する黒姫山古墳から出土している。森 浩一「河内黒姫山古墳の研究」(大阪府文化財調査報告第1輯 大阪府教育委員会) 1953

注24 285は、田中秀和氏の第Ⅰ-D類、高橋克壽氏の2類、松木武彦氏の第Ⅰ形式b類蕃上山タイプに該当する。特に松木氏は、本例を蕃上山タイプの全形がわかる典型例として紹介している。

注25 このような突帯は、朝顔形埴輪の頸部の突帯と形状が共通しており、従来の低平な突帯とは異質である。松木氏は、これを先行諸形式には認められない新しい要素と考えている。

注26 笠部中位の突帯は、台部と笠部の接合点より上位に位置するものが最も古く、やがて接合点付近に下降する。さらに笠部が一括成形されるに及んで、突帯の製作が笠部と台部の接合以前に行われるようになるため、笠部中位突帯は、台部の接合点と関係なくめぐらされるようになると考えられる。

注27 D類に共伴する蓋形埴輪は、田中秀和氏の第Ⅰ-D類、高橋克壽氏の2類、松木武彦氏の第Ⅰ形式b類に該当する。

注28 出土個体のすべてが、高橋克壽氏の分類による2類(盾面がⅡ字形の区画によって分割されているもの)に該当する。高橋克壽 前掲論文

注29 盾面の紋様に着目して楠元哲夫氏は、盾形埴輪を大きくⅠ型(直弧文系)とⅡ型(鋸齒文系)に大別した。上人ヶ平遺跡の資料は、すべてⅡ型-2類(内区を華々しく飾り立てるもの)に該当する。楠元哲夫「大和における盾形埴輪の系譜」(『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市教育委員会) 1985

- 注30 高橋克壽 前掲論文
- 注31 松木武彦氏は、これを筥と背負板を結ぶ革紐と考えている。「畿内における靱形埴輪の変遷—埴輪に描かれた鏃と実物の鏃—(『待兼山遺跡』Ⅱ 大阪大学埋蔵文化財調査委員会) 1988
- 注32 靱形埴輪の分類案の代表的なものとして、高橋克壽氏と松木武彦氏の論考がある。上人ヶ平8号埴例は、高橋分類のⅠ類2式、松木分類のⅡ式に該当する。  
高橋克壽 前掲文献、松木武彦 前掲文献
- 注33 面繫の名称については、増田精一「埴輪馬にみる頭絡の結構」(『考古学雑誌』第45巻第4号)1960年を参考にした。
- 注34 尻繫の構造については、千賀 久「古墳時代の初期馬装」(『橿原考古学研究所論集』第4) 1979年を参考にした。
- 注35 井上裕一氏は馬形埴輪の脚部の形態から分類している。これによると114の資料は、同氏の分類のA1類(削ったり粘土を付加して肉付けを行い、実際の蹄を極めて写實的に表現したもの)に該当する。井上裕一「馬形埴輪の研究—製作技法を中心として—」(『古代探叢』Ⅱ—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—) 1985
- 注36 井上裕一氏の脚部分類のA2類(脚底部の粘土帯を厚くしたり、回りに粘土帯を貼り付けることにより、脚底部を外に広げ一段突出させて蹄を表す)に該当する。同氏前掲文献
- 注37 井上裕一氏の尻尾分類のA類に該当する。同氏前掲文献
- 注38 井上裕一氏の脚部分類のA3類(最下部だけわずかに広がり蹄の形を留めるもの)に該当する。同氏前掲文献
- 注39 井上裕一氏の脚部分類のB類に該当する。同氏前掲文献
- 注40 井上裕一氏の脚部分類のA2類に該当する。同氏前掲文献
- 注41 『平城宮出土軒瓦型式一覧』 1978、『平城宮出土軒瓦型式一覧 補遺篇』 1984 奈良国立文化財研究所
- 注42 巽淳一郎「頭塔の調査」(『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所) 1989
- 注43 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」(『研究論集』Ⅵ 奈良国立文化財研究所) 1981
- 注44 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ 瓦編2 解説』奈良国立文化財研究所 1978
- 注45 毛利光俊彦氏の御教示による。
- 注46 森島康雄「中世墳墓に伴う建物」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注47 注7に同じ
- 注48 赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』第90号) 1979
- 注49 高橋克壽・前掲論文
- 注50 松木武彦・前掲論文
- 注51 松木武彦・前掲論文
- 注52 井上裕一・前掲論文
- 注53 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」(『研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ) 1966、他
- 注54 注6に同じ
- 注55 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」(『橿原考古学研究所論集』第8) 1988

- 注56 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」(『考古学研究』第13巻第3号) 1967
- 注57 畿内中枢部における埴輪祭祀の終息は、大形の横穴式石室墳の場合は6世紀後半期まで残るが、一般には6世紀前半期に求められる。
- 注58 沼沢 豊他『佐倉市飯合作遺跡』(財)佐倉市振興協会・(財)千葉県文化財センター 1978
- 注59 細川修平「古式小古墳素描」(『史想』第21号 京都教育大学考古学研究会) 1988
- 注60 寺沢 薫「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1986
- 注61 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会(「大庭寺遺跡(その6)発掘調査」現地説明会資料32) 1991.9
- 注62 長谷川 達「14.宮ノ平遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注63 奥村清一郎「2 八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』 京都府教育委員会) 1984
- 注64 森田克行他『新池遺跡』(『高槻市文化財調査概要XV 一発掘調査報告会一』 高槻市教育委員会) 1990
- 注65 奈良市教育委員会 菅原東遺跡現地説明会資料 1990
- 注66 笠井敏光他『古市遺跡群Ⅲ』 羽曳野市教育委員会 1982
- 注67 小田富士雄『立山山窯跡群』(『八女古窯跡群調査Ⅳ・総集編』 八女古窯跡調査団) 1972
- 注68 増田逸郎・山崎 武『生出塚遺跡』(『鴻巣市遺跡調査報告』第2集 鴻巣市教育委員会) 1981 山崎 武氏の御教示による。
- 注69 塩野 博「窯跡の構造について」(『馬室埴輪窯跡群』 埼玉県教育委員会) 1987
- 注70 萩原恭一「関東地方の埴輪生産遺跡」(『研究連絡誌』第5号 (財)千葉県文化財センター) 1983
- 注71 宮田 毅「太田市駒形神社埴輪窯跡埴輪集積場」(『考古学ジャーナル』No331 ニュー・サイエンス社) 1991
- 注72 荒木 実他「東山218号窯の古式須恵器について」(『古代人』33 名古屋考古学会) 1978
- 注73 毛利光俊彦「近畿地方の瓦窯」(『仏教芸術』148号) 1983  
『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会 1984
- 注74 岡本東三・田中哲雄・巽淳一郎・吉田恵二「音如ヶ谷瓦窯の調査」(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部編『奈良山一Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』 京都府教育委員会) 1979
- 注75 平良泰久「大島遺跡」(『木津町史 史料編Ⅰ』 木津町) 1984
- 注76 杉本 宏『隼上り瓦窯発掘調査概報』(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会) 1983
- 注77 林 博通他『榎木原遺跡発掘調査報告』Ⅲ 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1981
- 注78 結城慎一『析江遺跡発掘調査報告書』 仙台市教育委員会 1980
- 注79 上野 章他『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会 1984
- 注80 渡辺 一他『鳩山窯跡群Ⅲ』(『鳩山窯跡群発掘調査報告書第3冊—工人集落編(Ⅰ)—』

鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会) 1991

注81 調査参加者(順不同・敬称略)。

石原 順・岩前良幸・木下年史・木村和彦・滋井邦明・武田一郎・田中康夫・中塚 等・  
 前田 寛・宮本純二・村田和茂・村田和弘・石田真一・伊藤英樹・岩前忠英・植村滋人・  
 河野一臣・兼定信和・北埜善史・滋井雅明・多田誠一・辰巳龍郎・細川貴久・松田嘉之・  
 水野哲郎・森本祐一・井上直樹・大内一徳・大倉伸也・大谷健二・鎌田敏史・北川年彦・  
 金家真由美・小泉裕司・江 介也・斉藤和久・佐藤正之・滋井秀明・川本(旧姓：白石)由  
 香・鈴木祐司・田中達也・中井英策・橋本錦児・樋上知恵・藤本忠嗣・松本英人・丸田晃  
 弘・向井 斎・山本 力・湯浅研史・吉川啓太・泉 晶子・板野 史・井上陽子・大高小  
 百合・奥田維子・木村晶子・小嶋 亮・正寿 敦・杉原美智久・高田優子・高橋和湖・筒  
 井崇史・峠 美穂・豊福 孝・古木寿子・森元文子・八瀬正雄・吉田悦子・米田佳代・米  
 田希代・若松美智子・渡辺康子・五百磐頭一・遠藤七都子・小村 勉・服部直美・森武千  
 恵・山田哲也・新谷二三代・野村道江・林 恵子・柳沢洋子・乾 祥子・木下町子・木村  
 絹子・坂田千晶・島原みどり・谷口ゆかり・玉置真弓・辻 道子・早川和子・平岡佳代子・  
 藤井理絵・三谷育代・吉永清美・篠原恵子・庄司優理・中嶋昌代・中西 修・宮本久美子・  
 有馬三喜子・中村久登・林 益美・芳谷與子・古川良子・藤内朱實・伊賀(旧姓：和村)裕  
 紀子

付表12 新旧建物跡番号対照表

新規番号	旧遺構番号	地 区	本文	備考（古墳時代）
S H101	S H0305	B-4	P 15	旧3bt焼失竪穴式住居跡
S H102	S H8921	E-3	P 19	
S H103	S H8910	E-3	P 20	
S H104	S H8912	E-3	P 20	
S H105	S H8846	F-4	P 21	
S B106	S B8901	D-4	P 21	
S B107	S B8949	D-4	P 22	
S A108	S B8902	D-4	P 23	
S A109	S B8971他	D-4～E-4		6間分の柵列か？
S B110	S B8972	E-4		掘立柱建物跡か？
S X111	S X1920	D-5	P 85	土器棺墓
S D112		D-6		旧19bt L字溝、周溝遺構か？
S K113	S X8963	F-5	P 72	18号墳の関連遺構
S D114	S D2108	H-5	P 50	5号墳外周溝
S D115	S D8815・2108	H-4～H-5		造り出し部前面溝
S K116	S K8814	H-4～H-5		5号墳南側の方形土坑
S D118		G-4		15号墳西隣の周溝遺構
S X119	S D0603	B-5	P 17	古墳？
S X120	S D0604	B-5	P 17	古墳？
S H121	S H3401	D-8	P 24	
S H122	S H3501	E-8	P 24	
S H123	S H3502	E-8	P 24	
S H124	S H3620	E-8	P 25	
S H125	S H3604	F-8	P 26	
S H126	S H3605	F-8	P 26	
S H127	S H3606	F-8	P 26	
S H128	S H3608	F-8	P 26	建て替えあり
S K129	S K3601	F-8		S H124の南西の円形土坑
S B130	S B3602	F-7～F-8	P 28	
S B131	S B3603	F-7～F-8	P 29	
S H132	S H8960	H-9	P 27	
S H133	S H8961	H-9	P 27	
S X134	S X0307	B-3	P 23	隅丸方形土壇墓
S X135		I-5	P 52	5号墳南外堤上の土壇墓
S K136	S K8995	D-4	P 24	
S K137	S K8996	D-4	P 24	
S K138	S K8997	D-4		
S K139	S K8998	D-4	P 24	
S X140	S X3621	F-7～F-8		S H128の北の楕円形土坑
S K141	S K0601	A-5	P 17	S X119の関連遺構か？
S K142	S K0606	A-5	P 17	S X119の関連遺構か？
S D144	S D0602	A-5		
S K145	S D0605	B-5		

新規番号	旧遺構番号	地 区	本文	備考 (古墳時代)
S A146		F-8	P 29	S B 130と131の間仕切り柵
S B147		F-8	P 30	S B 130と重複
1号墳		C-3	P 73	
4号墳		E-3	P 76	近世以降の盛り土
5号墳	S D2106	H-5	P 39	
	S X8805			
	S X8806			
	S X8808			
	S X8809			
	S X8810			
6号墳	S D2101	G-4	P 52	
	S D2103			
	S D2104			
	S D2105			
7号墳	S D2109	G-5	P 55	
8号墳	S D3001	G-6	P 58	
	S X8821			
9号墳	S D0802	D-3	P 76	
	S D0805			
10号墳	S D0803	C-4	P 78	
11号墳	S D0302	C-4	P 80	
12号墳	S D0304	B-3	P 80	
13号墳	S D0306	B-3	P 82	
14号墳	S X8819	G-4	P 61	
15号墳	S X8820	G-4	P 63	
16号墳	S X8824	G-6	P 65	
17号墳	S X2702	H-6	P 69	
	S X8802			
18号墳		F-4	P 70	
19号墳		E-3	P 82	
20号墳		E-5	P 83	

新規番号	旧遺構番号	地 区	本文	備考 (奈良時代)
S B301	S B8839	G-4~G-5	P 140	A建物跡群
S B302	S B8849	F-4~F-5	P 141	A建物跡群
S B303	S B8851	F-4~F-5	P 141	A建物跡群
S B304	S B8920	E-4~E-5	P 142	A建物跡群
S D305	S D8931	E-5~G-5	P 142	A群圍繞溝
S D306		G-5	P 142	S D305の南延長溝
S B307	S B1201	E-4	P 148	C建物跡群
S B308	S B8914	F-4	P 151	C建物跡群
S B309	S B8922	F-4	P 152	C建物跡群
S B310	S B8946	F-6	P 144	B建物跡群
S B311	S B8975	G-5	P 145	B建物跡群

新規番号	旧遺構番号	地区	本文	備考(奈良時代1)
S B 312	S B 8852	F-5	P 145	B建物跡群
S B 313	S B 8978	F-5	P 146	B建物跡群
S B 314	S B 8980	F-6	P 146	B建物跡群
S E 315	S E 8837	G-5	P 153	
S K 316	S K 8942	D-6	P 157	
S K 317		E-6	P 157	
S K 318	S K 8941	E-6	P 157	20号墳東周溝を改変した土坑
S K 319	S K 8833	F-5	P 157	S B 311廃絶後の土坑
S K 320	S K 8983	F-6	P 157	銭貨出土
S K 321	S K 1909	D-6	P 157	20号墳の北側土坑
S K 322	S K 8848	G-5	P 159	S B 301の西側土坑
S A 323		F-5		B建物跡群の北を限る柵列?
S A 324		G-5	P 147	S B 311に南接する柱列
S D 325	S D 8976	G-5	P 147	S B 311の南に位置する溝
S A 326	S A 8990	G-5		S D 325の南接する小柵列
S A 327	S A 8988	G-5	P 143	A・B建物跡群の南を限る柵列?
S D 328	S D 8977	G-5		S B 311の東を限る小溝
S D 329		G-5		7号墳に流れ込む南北区画溝
S K 330	S K 8847	F-5		S B 302の東隣の小ピット
S K 331		F-5		S K 319の西端に掘り込まれた土坑
S K 332	S K 8984	F-6		S K 320に北接する焼土坑
S K 333	S K 8982	G-6		S K 320の南西端に掘り込まれた土坑
S K 334	S K 8982	F-6		S B 314の北側柱に重複する浅い土坑
S D 335	S D 8943	E-6		20号墳の周溝の一部
S A 336	S A 1202	E-4		B群中の柵
S A 337	S A 1201	E-4	P 152	S B 304の南廂と柱筋を揃える柵列
S K 338	S K 8917	F-4		竪穴式住居跡風土坑
S K 339	S K 8919	F-4	P 159	竪穴式住居跡風土坑
S K 340	S K 8918	F-4	P 159	竪穴式住居跡風土坑
S K 341	S K 8950	F-5	P 159	B建物跡群東隣の皿状土坑
S D 342	S D 8904	D-3	P 153	路面北側溝
S D 343	S D 8906	D-4	P 153	路面北側溝
S D 344	S D 8992	D-5	P 153	路面北側溝
S D 345	S D 8903-b	D-4	P 153	路面南側溝
S D 346	S D 8903-a	D-4	P 153	路面南側溝
S D 347	S D 8993	D-5	P 153	路面南側溝
S D 348		E-3		S H 102に重複、斜交溝A
S K 349	S K 8970	E-4	P 159	礫敷土坑
S K 350		E-4	P 159	S K 349西隣の土坑
S D 351		D-4		倉庫S B 107と重複、斜交溝B
S D 352	S D 8916	D-5~F-4	P 163	斜交溝、A建物跡群の上層遺構
S B 353	S B 8991	D-4~D-5	P 147	B建物跡群
S D 354	S D 8979	F-5		斜交溝E、A建物跡群の上層遺構
S D 355		G-6	P 163	8号墳からB谷部へ向かう溝



新規番号	旧遺構番号	地 区	本文	備考 (奈良時代)
S D356	S D8832	G-5~H-5	P 163	8~5号墳連繫溝
S D357	S D8831	H-5	P 163	7~5号墳連繫溝
S D358	S D8813	H-5		5号墳周濠水量調節溝
S K359	S K8951	G-4	P 159	S B301北廂列に平行する土坑群
S K360	S K8952	G-4	P 159	S B301北廂列に平行する土坑群
S K361	S K8953	G-4	P 160	S B301北廂列に平行する土坑群
S K362	S K8842	G-4	P 160	S B301北廂列に平行する土坑群
S K363	S K8843	G-4	P 160	S B301北廂列に平行する土坑群
S K364	S K8844	G-5	P 163	近世以降の土坑
S K365	S K8845	G-5	P 163	近世以降の土坑
S D366		E-4		B群の北側で平行する溝、現農道跡?
S D367		E-4		B群の北側で平行する溝、現農道跡?
S D368		E-4		S B304を切る溝
S D369		E-4		S B304を切る溝
S D370	S D8932	E-5		S B304を切る溝
S D371		E-5~F-5		S B304を切る溝
S K372		F-5		S D305を切る土坑
S K373		F-5		S B302を切る土坑
S D374		D-5~F-4	P 163	S D352の上面遺構
S K375	S K0301	C-4	P 163	11号墳南の土器溜り
S D376	S D1917	D-5		S K321の北西の南北方向の小溝
S D378	S D8841	F-5		S D305の延長溝
S B379		C-4		2間×3間、時期不明
S F380		F-4	P 153	市坂瓦窯へ向かう切り通し道
S K381	S K8905	D-4		S D246切った土坑
S E382		F-7	P 153	B谷部の井戸
S D383		G-5	P 163	7~8号墳連繫溝
S B384	S B3002	G-6		8号墳東側、1間×3間掘立柱建物跡
S K385		D-6		円形土坑、土坑内に瓦・土器が出土
S K386			P 163	S D374に平行する溝

新規番号	旧遺構番号	地 区	本文	備考 (中世・その他)
S X501	S X3201	H-7	P 179	S B502を「コ」の字形に囲む溝
S B502	S B3202	H-7	P 179	1間×1間の掘立柱建物跡
S A503	S A3204	H-7	P 179	S X501の東端から南北にのびる柵列
S A504	S A3210	H-7		7トレンチ南端の柵列
S D505	S D3205	H-7		S B502を切る小溝
S K506	S K3206	H-7		S X501の西に接した不整形土坑
S D507	S D3207	G-7		S X501を切る溝
S K508	S K3208	H-7		8トレンチ西端の不整形の落ち込み
S D509	S D3209	G-7		コ字形土壇 32bt、S K508を切る小溝
S K510	S K3203	H-8	P 179	焼土坑
S K511	S K8915・S K03	F-5		焼土坑
S K513	S X1910	D-6		焼土坑
S K514	S K8801・S K27	H-6~I-6		17号墳上の土坑
S B515		A-5		2間×2間小規模建物跡、近世以降?

付表13 円筒埴輪観察表1

埴輪 番号	出土遺構	残存度 残存高	遺存 度	規 模		タガの 形 態	口唇 形態	粘土紐の幅		成形 手法	外面調整	
				直径	各段幅			輪台	一般		1次	2次
1 SH2	5号埴 埴丘	完形 完周 61.1	3	33.2 26.6 (5.4)	7.4→7.7→7.7→8.1 →8.1→8.1→5.5	台形 3.6	A2	3.5 右巻 一帯	3.5 均等	(内) タテナ デ	タテ ハケ	2段以上 B種ヨコ ハケ
2 EH4	5号埴 埴丘	完形 完周 73.3	4	33.0 25.8 (4.91)	11.0→8.5→8.5→8.5 →8.5→8.5→5.5	台形	B1	3.0 左巻 一帯	2.0 均等	(内) タテナ デ	タテ ハケ	2段以上 B種ヨコ ハケ
3 EH2	5号埴 埴丘	完形 完周 71.2	3	38.2 26.3 (8.35)	10.3→8.8→8.7→7.0 →9.2→8.9→8.8	台形 1.9	B1	8.5 左巻 一帯	5.0 ~ 7.5 不揃い	(内) ナナメ ナデ	タテ ハケ	2段以上 B種ヨコ ハケ
4	5号埴 造出部	2段弱 1/5周 16.0	3	(37.8) —	→8.4→5.0	台形 2.8	B2	— —	不明	(内) タテナ デ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
5	5号埴 周濠内	3段強 3/4周 26.0	2	(38.0) —	→9.1→7.5	台形 2.9	B2	— —	不明	(内) タテナ デ	左傾 タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
6	5号埴 周濠内	3段 2/3周 22.4	4	(32.0) —	→7.8→5.8	台形 2.5	A1	— —	1.5 ~ 2.0 均等	不明	左傾 タテ ハケ	ヨコハケ タテハケ
7 EH3	5号埴 埴丘	完形 完周 66.0	4	37.0 30.0 (5.3)	8.1→8.0→8.3→5.9 →8.3→8.2→8.3(均 等)	台形 M形 3.1	A1 (A4)	7.0 左巻 一帯	(5.5) 均等?	(内) タテナ デ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
8 SH6	5号埴 埴丘	4段強 完周 45.9	4	— 28.1	8.4→9.0→8.9→8.7 →	台形 M形 2.4	—	4.5 右巻 一帯	2.5 ~ 4.0 均等	(内) タテナ デ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
9	5号埴 周濠内	6段強 完周 55.2	3	37.0 —	→7.6→7.6→6.3→ 7.4→7.1→6.9	台形 M形 2.9	B2	— —	不明	(内) タテナ デ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
10	5号埴 周濠内	4段強 1/3周 37.8	4	(38.0) —	→7.7→7.6→7.6→ 5.1	M形 2.5	A3	— —	2.0 ~ 3.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	左傾 タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
11	5号埴 周濠内	2段弱 1/5周 16.2	3	(40.4) —	→8.3→5.0	台形 M形 2.9	B4	— —	2.0 前後	不明	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
12	5号埴 周濠内	2段強 1/6周 23.6	2	(39.0) —	→9.3→7.4	台形 M形 2.3	B1	— —	約2.5 均等	(内) 左傾斜 ナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
13	5号埴 周濠内	2段強 小片 19.0	3	(39.9) —	→7.5→6.0	台形 M形 2.4	B2	— —	1.5 ~ 2.0 均等	(内) 左傾斜 ナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
14	5号埴 周濠内	2段弱 1/6周 13.8	3	(47.6) —	→15.5	台形 2.2	A2	— —	不明	(内) タテナ デ	不明	ヨコハケ (痕跡)
15 SH4	5号埴 埴丘	2段強 1/5周 20.7	2	(39.2) —	→9.0→6.1	台形 3.1	A1	— —	不明	不明	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
16	5号埴 周濠内	2段強 小片 19.8	4	(35.0) —	→6.8→7.6	台形 2.6	A1	— —	不明	(内) タテナ デ	不明	B種ヨコ ハケ
17	5号埴 造出部	1段 小片 9.0	3	(36.0) —	→5.6	擬三角 形 2.7	B5	— —	不明	(内) 左傾タ テナデ	(タ テハ ケ)	B種ヨコ ハケ
19	5号埴 周濠内	1段強 小片 9.4	4	(30.0) —	→4.6	台形 2.1	(A5)	— —	不明	不明	左傾 タテ ハケ	口縁段 ヨコ ナデ
20	5号埴 周濠内	2段弱 1/3周 13.0	3	(24.0) —	→4.5	M形 2.1	B1	— —	2.0 ~ 2.5 均 等	不明	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ

付 表

填輪 番号	出土遺構	残存度 残存高	遺存 度	規 模		タガの 形 態	口唇 形態	粘土紐の幅		成形 手法	外面調整	
				直径	各段幅			輪台	一般		1次	2次
21	5号墳 造出部	1段強 小片 18.0	4	(31.0) —		M形 2.1	A1	—	不明	(内) タテナ デ	タテ ハケ	ヨコハケ (B種?)
22	5号墳 造出部	2段 1/2周 18.0	3	(29.4) —	—5.6	台形	B5	—	不明	(内) 左上り 斜ナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
23	5号墳 周濠内	1段強 1/3周 11.3	4	(30.5) —	—5.9	台形 2.9	A2	—	不明	不明	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
24	5号墳 周濠内	1段強 1/4周 18.5	3	— —	—9.0—	台形 3.2	—	—	2.5 ~3.0 均等	左傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
25	5号墳 造出部	1段強 1/2周 22.8	1	— —	—4.0—	台形 3.2	—	—	(4.0) 均等?	(内) 左傾タ テナデ	不明	ヨコハケ
26	5号墳 外堤	1段弱 小片 21.7	3	— —	—	幅広台 形 4.0	—	—	2.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	(タ テナ ハケ)	B種ヨコ ハケ
27	5号墳 周濠内	3段強 1/8周 29.0	1	— —	—8.0—8.2—	台形 M形 2.1	—	—	2.5 ~ 4.0 均等	不明	不明	B種ヨコ ハケ
28	5号墳 周濠内	3段弱 1/8周 24.3	1	— —	—7.8—	M形 2.6	—	—	3.0 ~ 5.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	不明	ヨコハケ 痕
31 S H5	5号墳 墳丘	7段 完周 61.9	3	— 25.2	7.3—7.4—7.5—10.0 —7.5—7.1—3.7	台形 3.3	—	6.0 右巻 一帯	2.5 ~ 4.0 均等	(内) タテナ デ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
32	5号墳 周濠内	1段 8.2	3	— (20.8)	—	—	—	—	—	(内外) タテナ デ	省略	省略
33	5号墳 周濠内	2段強 1/5周 25.0	3	— (25.4)	9.0—7.2—	台形 3.3	—	5.0 不明	2.5 ~ 5.0 不揃い	(内) 左上り 斜ナデ	左傾 タテ ハケ	2段目以 上B種ヨ コハケ
34 SGH1	5号墳 外堤	3段 完周 32.3	4	— 26.7	8.9—8.6—8.7	低い台 形 4.6	—	3.5 二帯	3.0 ~ 5.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	左傾 タテ ハケ	3段目以 上B種ヨ コハケ
35	5号墳 周濠内	4段 完周 35.0	3	— 21.4	6.9—7.4—7.4	台形 2.9	—	5.0 不明	2.0 ~ 2.5 均等	不明	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
36	5号墳 周濠内	3段弱 1/2周 28.0	3	— (25.8)	7.7—7.4—7.8 —(均等)	M形 3.2	—	6.0 不明	3.0 ~ 4.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	2段目以 上B種ヨ コハケ
37	5号墳 周濠内	2段強 1/3周 21.9	4	— (25.0)	7.7—7.4— (均等)	不整台 形 3.1	—	4.0 不明	1.5 ~ 2.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
38 SGH2	5号墳 外堤	2段 完周 24.5	2	— 29.0	9.7—9.4— (ほぼ均等)	台形 (摩滅)	—	7.0 左巻 一帯	不明	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	2段目以 上(B種) ヨコハケ
40 S H3	5号墳 墳丘	2段強 完周 24.3	1	— 26.0	8.7—8.8— (均等)	低い台 形 (摩滅)	—	5.5 左巻 一帯	2.0 ~ 2.5 均等	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	2段目以 上B種ヨ コハケ

埴輪 番号	出土遺構	残存度 残存高	遺存 度	規 模		タガの 形 態	口唇 形態	粘土紐の幅		成形 手法	外面調整	
				直径	各段幅			輪台	一般		1次	2次
41 SH1	5号埴 填丘	4段弱 完周 32.5	3	— 24.4	7.7→7.2→7.3 →(ほぼ均等)	低い 台形 3.1	—	5.0 左巻 一帯	1.5 ~ 2.0 均等	(内) 斜ハケ ナデ	タテ ハケ	2段目以 上B種ヨ コハケ
42 SH4	5号埴 填丘	3段 完周 36.3	1	— 23.5	10.7→9.8→ 10.1(均等)	低い 台形 (摩滅)	—	5.5 左巻 一帯	不明	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	2段目以 上ヨコハ ケ( B 種?)
43	5号埴 周濠内	2段弱 1/2周 17.3	2	— (29.0)	9.4→	台形 2.9	—	4.5 不明	2.5 ~ 4.5 不揃い	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
45	5号埴 周濠内	3段弱 1/6周 25.1	3	— —	→8.2→	類三角 形	—	— —	2.5 ~ 4.0 不揃い	(内) 左傾タ テナデ	(タ テハケ)	B種ヨコ ハケ
46	5号埴 周濠内	1段強 小片 16.1	3	— —	→9.1→	幅広 台形 3.5	—	— —	不明	(内) 左傾タ テナデ	(タ テハケ)	B種ヨコ ハケ
47	5号埴 造出部	4段強 完周 40.4	2	— —	→8.2→7.9→7.6 →	台形 2.6	—	— —	不明	不明	(タ テハケ)	B種ヨコ ハケ
48	5号埴 周濠内	1段強 1/5周 14.9	2	— —	→7.7→	台形 3.1	—	— —	3.0 ~ 3.3 均等	(内) ナデ	タテ ハケ	ヨコハケ (部分)
49 EGH1	5号埴 外堤	2段 完周 24.2	1	— 24.8	10.7→10.2→ (均等)	低い 台形 (摩滅)	—	不明 右巻 一帯	3.0 ~ 3.5 均等	不明	不明	不明
126	7号埴 周溝内	2段弱 1/6周 13.5	1	— (25.5)	7.4→	M形 3.5	—	5.5 不明	約2.5 均等	(内) タテナ デ痕?	不明	ヨコハケ (痕跡)
165	8号埴 周溝内	3段強 1/2周 37.2	4	43.0	→10.2→10.2 →5.7	台形 2.6	A1	— —	2.5 ~ 3.0 均等	(内) 右傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
166	8号埴 周溝内	2段強 1/6周 22.5	3	— —	→7.7→7.7→	台形 2.1	—	— —	2.0 ~ 2.5 均等	不明	(タ テハケ)	B種ヨコ ハケ
167	8号埴 周溝内	2段 1/2周 26.4	3	— 27.4	10.2→10.2→ (均等)	台形 M形 3.4	—	4.0 不明	4.0 ~ 6.0 不揃い	(内) タテナ デ	タテ ハケ	2段目以 上B種ヨ コハケ
168	8号埴 周溝内	4段弱 1/2周 32.6	4	29.0 —	→7.4→7.4→8.3	M形 1.48	A3	— —	2.0 ~ 5.0 不揃い	不明	タテ ハケ	タテハケ
169	8号埴 周溝内	4段強 1/2周 36.4	4	35.8 —	→6.8→6.6→6.6→ 6.4 (ほぼ均等)	M形 台形 3.1	B3	— —	2.5 ~ 3.0 均等	(内) 右上り 斜ナデ	左傾 タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
170	8号埴 主体部 棺内	5段強 完周 42.3	3	37.9 —	→7.8→7.7→7.6→ 5.8	M形 台形 2.7	B3	— —	1.5 ~ 3.0 均等	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
172	8号埴 周溝内	4段強 完周 52.9	3	66.6 朝顔 —	→7.1→7.7→4.0	台形 3.2	(朝顔)	— —	不明	不明	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
253	16号埴 周溝内	3段弱 完周 24.0	4	33.5 —	→7.3→6.4	台形 2.7	A3	— —	2.0 ~ 3.5 均等	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
281	14号埴 周溝内	完形 49.3	3	24.0~ 27.3・ 16.7~ 17.3	10.7→10.2→11.3→ 13.8	M形 2.3	A1	6.0 右巻 一帯	2.4 ~ 5.1 均等	(内) 左傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
301	6号埴 周溝内	2段弱 1/8周 13.0	2	— —	→8.4→	M形 2.8	—	— —	2.5	(内) 左傾タ テナデ	(タ テハケ)	B種ヨコ ハケ (痕跡)

埴輪 番号	出土遺構	残存度 残存高	遺存 度	規 模		タガの 形 態	口唇 形態	粘土紐の幅		成形 手法	外面調整	
				直径	各段幅			輪台	一般		1 次	2 次
352	9号埴 周溝内	3段 28.0	4	19.5 —	—8.1—7.4—8.7	台形 2.4	A1	— —	2.5 ~ 3.0 均等	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	省略
353	9号埴 周溝内	2段弱 2/3周 16.9	4	13.5~ 28.6 楕円	—7.7—7.3	小型台 形三角 形2.3	A1ま たはA 3	— —	不明	(内)左 上斜 テナデ	タテ ハケ	省略
354	9号埴 周溝内	2段弱 1/2周 19.9	4	(20.4)	—10.0	小型台 形	A1	— —	不明	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	省略
355	9号埴 周溝内	1段強 完周 12.5	4	— 11.8~ 14.0	9.5—	台形 3.2	—	4.0 右巻 一帯	2.0 ~ 4.0 均等	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	省略
356	9号埴 周溝内	3段弱 完周	4	10.0~ 30.2 —	—7.5—7.0	小型台 形 2.4	A4	— —	2.5 均等	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	省略
390	1号窯 第3次 床面	2段弱 1/5周 27.6	2	(23.6) —	—14.5	低い台 形 6.0	A3	— —	2.0 ~ 3.0 均等	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	ヨコハケ ナナメハ ケ
391	1号窯 第3次 床面	1段強 1/4周 15.8	2	— (14.2)	11.0—	低い台 形 4.1	—	3.5 不明	1.5 ~ 2.0 均等	(内)右 傾タ テナデ	タテ ハケ	ヨコハケ
392	1号窯 第3次 床面	1段弱 1/3周 11.7	3	— 18.5	—	—	—	5.0 不明	3.0 均等	(内)左 傾タ テナデ	左傾 タテ ハケ	省略
393	1号窯 第3次 床面	3段弱 完周 36.5	2	26.4 —	—9.0—9.0—12.0	低いM 形11.0	A1ま たはA 3	— —	4.0 ~ 6.0 不揃い	(内)タ テナ デ	タテ ハケ	省略
406	1号窯 第2次 床面	1段強 1/4周 14.3	3	— (18.0)	7.8—	台形 3.6	—	5.5 不明	2.0 ~ 3.0 均等	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
413	1号窯 第3次 床面	2段弱 1/2周 18.8	3	— 17.0	10.5—	台形 3.1	—	5.5 不明	3.0 均等	(内)左 傾タ テナデ	タテ ハケ	ヨコハケ
438	1号窯 灰原	2段弱 1/5周 24.0	2	27.6 —	—8.8	台形	—	— —	2.5 ~ 3.0 均等	(内)左 上リ テナ メナ デ	タテ ハケ	B種ヨコ ハケ
439	1号窯 灰原	1段弱 1/6周 8.0	3	不明 —	—	—	B1	— —	不明	不明	タテ ハケ	省略

付表14 円筒埴輪観察表2

埴輪 番号	内 面 調 整		底部調整	透 孔			焼成	そ の 他
	1 次	2次		位置	方式	形態		
1 SH2	2段目以下 左傾タテナデ	省略	(内) ヨコナデ	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 6.9×6.7	須恵質・ 普通	・外面に赤色顔料塗布 ・2段目タガ付近に乾燥単位面
2 EH4	ヨコナデ・ タテナデ	口縁 ヨコ ハケ	(内) 連続ユビオ サエ	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 5.5×5.2	須恵質・ 普通	・6段目に方形の副次的穿孔 ・底端部が半月状に変色 ・4段目タガ付近に乾燥単位面
3 EH2	左傾する ヨコ板ナデ	6・7 段 ヨコ ハケ	(内) 連続ユビオ サエ	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 6.3×6.4	須恵質・ 普通	・3段目タガ付近に乾燥単位面 ・底端部が半月状に変色
4	左傾する タテハケ	ヨコ ナデ	—	6段 (1孔)	—	方形 2.7×7.0 (縦)	須恵質・ 普通	・内面ヨコナデは布を介在させるユビナデ で口縁段のみ丁寧に施行する
5	省略	ナナ メナ デ	—	6段 (1孔)	—	方形 2.8×7.5 (縦)	須恵質・ 軟	・内面調整は口縁段に限る
6	左傾ナナメ ハケ	ヨコ ハケ・ タ テナ デ	—	5段 (1孔)	—	円形 (残欠)	須恵質・ 普通	・外面2次タテハケは6・7段に限り施行 ・最上段タガは2次調整後に貼付 ・内面調整はハケーナデの順
7 EH3	タテハケ	ヨコ ハケ・ タ テナ デ	(内) 連続ユビオ サエ	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 6.6×8.5	須恵質・ 普通	・内面2次調整ヨコハケは5段目以上に施 行 ・4段目タガ付近に乾燥単位面
8 SH6	3段目以上 左傾ヨコハケ	省略	(内) 連続ユビオ サエ	3段 (1孔)	—	円形 7.0×7.5	須恵質・ 普通	・B種ヨコハケの静止幅が一定せず10cm以 上と長い
9	口縁段のみ ヨコナデ	省略	—	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 7.1×8.0	須恵質・ 普通	・タガ貼付位置を凹線で明示 ・6段目外面にヘラ記号 (絵画的)
10	4段タガ位以 下左傾タテハ ケ	口縁 段ヨ コハ ケ	—	6段 (1孔)	他段 穿孔 なし	円形 5.0×5.8	須恵質・ 軟	・口縁段外面ヨコハケは断続的
11	左傾ヨコハケ	口縁 段ヨ コナ デ	—	—	—	—	須恵質・ 軟	
12	不明	口縁 段ヨ コナ デ	—	—	—	—	土師質・ 普通	・内面2次調整のヨコナデは痕跡のみ
13	省略	口縁 段ヨ コハ ケ	—	—	—	—	須恵質・ 普通	・内面2次調整のヨコハケは静止痕をとど める継続的施行
14	省略	省略	—	—	—	—	須恵質・ 軟	
15 SH4	タテハケ	口縁 段ヨ コハ ケ	—	—	—	—	土師質・ 普通	・口縁段内面にヘラ描き絵画(動物?) ・内面1次調整のタテハケは遺存部分全て に見られる
16	省略	口縁 段ヨ コナ デ	—	5段 残欠 (1孔)	—	円形	須恵質・ 硬	・内面2次調整は布を介在させたユビナデ ・口縁段にヘラ記号あり
17	省略	口縁 段ヨ コナ デ	—	—	—	—	須恵質・ 普通	・内面2次調整は布を介在させたユビナデ

填輪 番号	内 面 調 整		底部調整	透 孔			焼成	そ の 他
	1 次	2次		位置	方式	形態		
19	省略	口縁 段ヨコ ナデ	—	—	—	—	須恵質・ 普通	・口縁段が極端に短く、やや内湾する
20	左上がりヨコ ハケ	口縁 段ヨコ コハケ	—	—	—	—	須恵質・ 軟	・ハケ工具原体の条線密度高い
21	省略	ヨコ ナデ	—	—	—	—	土師質・ 硬	・口唇調整(ヨコナデ)を行わず、直口状を 呈す
22	タテハケ (全面)	口縁 段ヨコ コナデ	—	6段 (1孔)	他段 穿孔 なし	方形	須恵質・ 軟	・ハケ工具原体の条線密度高い ・タガ貼付位置を凹線で明示
23	断続的なヨコ ハケ	省略	—	—	—	—	須恵質・ 硬	・口唇部外面には2次調整後、静止痕をと どめない継続的ヨコハケを加える
24	省略	ヨコ ハケ	—	不明 (1孔)	—	円形 (残欠)	土師質・ 硬	・成形手法は内外器表面で観察可能・内面 ヨコハケは断続的に施行するもので、部分 的調整
25	省略	省略	—	—	—	—	土師質・ 軟	・外面に同心円弧からなるヘラ記号
26	省略	省略	—	—	—	—	土師質・ 軟	・外面に格子状のヘラ記号(絵画的)
27	不明 (ナデ痕)	不明	—	—	—	—	土師質・ 普通	
28	不明 (省略)	不明 (省略)	(内) 連続ユビオ サエ	3段 (1孔)	—	円形 (残欠)	土師質・ 普通	・底端部が半月状に変色
31 S H5	省略	省略	(内) 連続ユビオ サエ	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 5.0×5.3		・4段目内面に乾燥単位間接合のためのナ ナメハケが残る
32	省略	省略	(内) 連続ユビオ サエ	—	—	—	須恵質・ 普通	
33	省略	省略	(内) ヨコナデ	—	—	—	土師質・ 硬	・外面B種ヨコハケの静止痕は大きく左傾 する(工具幅と段間の不一致)
34 SGH1	省略	省略	(内) 連続ユビオ サエ	3段 (2孔)	—	円形 6.6×5.8	土師質・ 硬	・基底・2段目外面2次調整を省略
35	左傾タテハケ 左上ナナメハ ケ	省略	省略(ハケの 開始部で平 滑化)	3段 (2孔)	—	円形	須恵質・ 軟	・内面1次調整は3段タガ位まで左傾タテ ハケ、それ以上左上ナナメハケを用いその 差は乾燥工程の差を示すものか
36	省略 (整形のみ)	省略	(内) ヨコナデ	3段 (1孔)	—	円形 5.0×(4.0)	須恵質・ 軟	・3段目内面に顕著なヨコナデを加え、乾 燥単位間を調整
37	省略 (整形のみ)	省略	(内)連続ユ ビオサエ・ ナデ	3段 (1孔)	—	円形 (残欠)	須恵質・ 普通	
38 SGH2	省略 (整形のみ)	省略	不明	2段 2孔	対向	円形 7~9	土師質・ 硬	
40 S H3	省略 (整形のみ)	省略	不明	3段 2孔	対向	円形 (残欠)	土師質・ 普通	
41 S H1	省略 (整形のみ)	省略	(内)連続ユ ビオサエ・ ナデ	3段 2孔	対向	円形 5.0×7.0	土師質・ 普通	・内面は2段目中位まで左上ナナメハケ、 それ以上は左上リナナメナデで整形する
42 S H4	省略 (整形のみ)	省略	(内)連続ユ ビオサエ	—	—	—	土師質・ 普通	
43	省略 (整形のみ)	省略	(内) 連続ユビオ サエ	—	—	—	土師質・ 普通	・底端部の変形は、調整後に生じたもの

埴輪 番号	内面調整		底部調整	透孔			焼成	その他
	1次	2次		位置	方式	形態		
45	省略 (整形のみ)	省略	—	不明 (1孔)	—	円形 7.4×(6.4)	土師質・ 硬	・タガの断面形は、下面が極端に狭いため 三角形を呈する
46	省略 (整形のみ)	省略	—	不明 (1孔)	—	円形 (残欠)	須恵質・ 軟	・外面B種ヨコハケは、段間に上下2回にわ たって施行する
47	不明	不明	—	3段 (1孔)	(尙)	円形 5.5×5.0	土師質・ 普通	
48	省略 (整形のみ)	省略	—	不明 (1孔)	—	円形 ヨコ7.6	土師質・ 硬	
49 EGH1	不明	不明	不明	—	—	—	須恵質・ 軟	
126	不明	不明	(内)連続ユ ビオサエ	—	—	—	土師質・ 普通	
165	省略	ナナ メ ナデ	—	5段 (1孔)	—	円形 タテ6.8	須恵質・ 軟	・外面B種ヨコハケは、口縁段を除き段間 上下2回施行
166	不明	不明	—	—	—	—	土師質 ・軟	・外面にヘラ記号あり
167	2段目タガ以 上ヨコナデ	不明	(内外とも) ヨコナデ	—	—	—	須恵質・ 軟	・内面ヨコナデ調整は、1次から2次か区 別不可能 ・底外面は板ナデ
168	左傾タテハケ	口縁 ヨコ ハケ	—	5段 (1孔)	—	円形 (残欠)	須恵質・ 軟	・タガ貼付位置を回線で明示 ・内面2次調整は口縁段に限る
169	ヨコナデ	省略	—	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 5.8×7.0	須恵質・ 普通	・外面B種ヨコハケの静止痕は口縁段を除 きかなり左傾する
170	4段目以上 左上がりヨコ ハケ	口縁 ヨコ ハケ	—	3・5段 各2孔	隔段 交互	円形 (残欠)	須恵質・ 軟	・内面のヨコハケは断続的で重層する
172	不明	タテ ハケ	—	4・6段 各2孔	隔段 交互	円形 5.2×7.0	須恵質・ 普通	・7段目タガは2次調整後に貼付 ・6段目内面にタテハケに後出するヨコハ ケ ・ナデがみられる ・ヘラ記号有
253	タテハケー ヨコハケ	省略	—	—	—	—	須恵質・ 普通	・内面ヨコハケは、口縁段に限られる ・6段目外面にヘラ記号有
281	口縁段に左上 がりナナメハ ケ	口縁 ヨコ ハケ	(内) 連続ユビオ サエ	2・3段 各2孔	隔段 交互	円形 6.5~8.0	須恵質・ 軟	・外面B種ヨコハケは、基底段を除き1段 あたり2回施行 ・口縁段外面にヘラ記号
301	省略	省略	—	—	—	—	土師質・ 軟	・外面にヘラ記号有
352	口縁段のみ B種ヨコハケ	—	—	3段 (1孔)	—	円形 6.7~5.7	須恵質・ 硬	・外面に右傾縦ナデ(成形用)の痕跡 ・内面調整は1次2次の区別が困難 ・口縁段外面にヘラ記号
353	口縁段のみ左 上りヨコハケ	—	—	3段 (1孔)	—	円形 (4.7)	須恵質・ 硬	・内面調整は1次と2次の区別が困難。焼 きひずみにより極端に変形している
354	省略	省略	—	3段 (1孔)	—	円形 (6.0)	須恵質・ 軟	・外面に右傾縦ナデ(成形用)の痕跡、内面 の口縁段にナナメナデ(成形用)を加える
355	省略	省略	(倒立して) 連続オサエ	2段 2孔	—	円形	須恵質・ 普通	・外面に右傾縦ナデ(成形用)の痕跡 ・底部調整(倒立)技法有
356	省略	省略	—	2・3段 各2孔	隣段 交互	円形 6.4	須恵質・ 硬	・焼きひずみにより極端に変形している
390	口縁段のみ左 上りナナメハ ケ	—	—	3段 (1孔)	—	円形 8.0	須恵質・ 軟	・内面調整は1次と2次の区別が困難
391	省略	省略	(内) ヨコナデ	—	—	—	須恵質・ 軟	
392	左傾タテハケ	省略	(内外) ヨコナデ	—	—	—	土師質・ 普通	



埴輪 番号	内 面 調 整		底部調整	透 孔			焼成	そ の 他
	1 次	2次		位置	方式	形態		
393	省略	省略	—	2・3段 各2孔	隣段 交互	円形7.5 ～8.0	土師質・ 普通	・口縁段外面に絵画風へら描き有
406	省略	省略	(内) ヨコナデ	—	—	—	須恵質・ 軟	
413	省略	省略	(内)部分的 にヨコナデ	2段 (1孔)	—	円形 5.0	須恵質・ 軟	基底段外面は1次調整のみ
438	口縁段のみ 左上りヨコハ ケ	—	—	—	—	—	須恵質・ 軟	・タガ貼付位置を器壁に凹線で明示 ・内面調整は1次か2次の区別が困難 ・口唇部外面に粘土補充
439	(口縁段のみ) 左上りヨコハ ケ	—	—	—	—	—	土師質・ 硬	・内面調整は、1次か2次の区別が困難

表内の測定値の単位はcm。

埴輪番号は、上段が図版番号、下段が樹立番号(5号埴に限定)を記す。

遺存度は、4：良好、3：器表がやや摩耗、2：摩耗、1：激しく摩耗に分類する。

直径は、上段が口径、下段が底径を、( )は復原径を示す。また< >は外傾指数を示す。

タガの形態は、上段が断面形態、下段は突出度を示す。

粘土紐の幅の輪台の項目は、上段が幅、下段が上方からみた接合状態を記す。

成形手法は、基本的には内面に残る手法を記入する。

透孔の形態は、上段が形態、下段がその規模を示す。

付表15 A建物跡群、柱穴掘形規模一覧表

掘形番号	掘形			柱痕		備考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	一・イ	隅丸方形	46cm×53cm	42cm	23cm	39cm	瓦なし
	一・ロ	円	直径37cm	25cm	23cm	25cm	瓦なし
	一・ハ	隅丸方形	60cm×55cm	28cm	24cm	28cm	瓦片がわずかにある
B	一・ニ	楕円	長80cm×短62cm	?	21cm	?	不明
	一・ホ	円	直径45cm	28cm	17cm	28cm	瓦なし
3	一・ヘ	楕円	61cm×40cm	24cm	14cm	24cm	瓦がわずかに出土
	一・ト	円	直径50cm	45cm	24cm	45cm	瓦なし
0	一・チ	隅丸方形	46cm×64cm	35cm	22cm	35cm	
	一・リ	隅丸方形	47cm×42cm	48cm	18cm	48cm	
1	一・ヌ	隅丸方形	65cm×70cm	35cm	29cm	35cm	
	二・イ	隅丸方形	72cm×71cm	53cm	20cm	45cm	上層に瓦あり
	二・ロ	隅丸方形	76cm×87cm	38cm	36cm	38cm	瓦片がわずかにある
	二・ハ	隅丸方形	69cm×61cm	61cm	26cm	61cm	瓦なし
	二・ニ	—	—	—	—	—	現在の野壺により削平
	二・ホ	隅丸方形	86cm×75cm	53cm	40cm	53cm	瓦がわずかに出土
	二・ヘ	隅丸方形	90cm×70cm	63cm	38cm	63cm	瓦なし
	二・ト	隅丸方形	87cm×82cm	70cm	30cm	50cm	
	二・チ	隅丸	80cm×100cm	52cm	25cm	52cm	
	二・リ	楕円	110cm×100cm	50cm	33cm	50cm	
	二・ヌ	隅丸	96cm×84cm	48cm	30cm	48cm	
	三・イ	隅丸方形	84cm×84cm	60cm	?	?	柱の抜き取り穴に集中して瓦出土
	三・ハ	円	直径37cm	38cm	19cm	38cm	瓦なし
	三・ニ	—	—	—	—	—	現在の野壺により削平
	三・ホ	隅丸方形	46cm×44cm	42cm	18cm	42cm	瓦がわずかに出土
	三・ヘ	円	直径30cm	16cm	—	—	柱穴不明、東柱とは考えにくい
	三・ト	楕円	長40cm×短34cm	27cm	—	—	(柱穴不明)
三・チ	楕円	44cm×36cm	14cm	—	—	東柱とは考えにくい	
三・リ	円	直径35cm	40cm	14cm	40cm		
三・ヌ	隅丸	90cm×82cm	85cm	40cm	85cm	平瓦が多量に入る	
四・イ	隅丸方形	90cm×80cm	48cm	20cm	45cm	瓦なし	
四・ロ	隅丸方形	65cm×65cm	53cm	22cm	53cm	瓦なし	
四・ハ	隅丸方形	104cm×92cm	63cm	23cm	63cm	瓦なし	
四・ニ	隅丸方形	76cm×62cm	56cm	25cm	56cm	瓦なし	
四・ホ	隅丸方形	76cm×71cm	65cm	25cm	65cm	瓦なし	
四・ヘ	隅丸方形	83cm×79cm	50cm	22cm	50cm	瓦なし	
四・ト	隅丸方形	64cm×84cm	一段58cm 二段80cm	25cm	80cm	中段面に瓦あり	
四・チ	隅丸	66cm×80cm	62cm	27cm	62cm		
四・リ	隅丸	90cm×90cm	70cm	23cm	70cm	平瓦	
四・ヌ	楕円	100cm×95cm	84cm	37cm	84cm		
五・イ	隅丸方形	70cm×58cm	36cm	20cm	36cm	瓦なし	
五・ロ	隅丸方形	34cm×28cm	47cm	18cm	47cm	瓦なし	
五・ハ	隅丸方形	46cm×52cm	40cm	22cm	40cm	瓦なし	
五・ニ	隅丸方形	59cm×60cm	35cm	23cm	35cm	瓦がわずかに出土	
五a・ホ	隅丸方形	45cm×55cm	39cm	16cm	39cm	瓦なし	
五・ヘ	楕円	長54cm×短45cm	40cm	19cm	40cm	瓦なし	
五・ト	楕円	長96cm×短59cm	75cm	26cm	75cm		

掘形番号	掘 形			柱 痕		備 考
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ	
五・チ	楕円	50cm×48cm	70cm	18cm	70cm	
五・リ	楕円	56cm×64cm	50cm	22cm	50cm	
五・ヌ	円	直径46cm	70cm	15cm	70cm	

掘形番号	掘 形			柱 痕		備 考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	一・イ	円	直径36cm	32cm	20cm	27cm	
	一・ロ	楕円	35cm×32cm	33cm	18cm	33cm	
	一・ハ	円	直径46cm	30cm	16cm	30cm	
B	一・ニ	隅丸方形	50cm×50cm	29cm	18cm	29cm	
	一・ホ	楕円	40cm×50cm	25cm	18cm	25cm	
3	一・ヘ	楕円	46cm×50cm	25cm	14cm	25cm	
	一・ト	楕円	68cm×64cm	46cm	20cm	45cm	
0	一・チ	円	直径52cm	38cm	19cm	38cm	
	一・リ	円	直径62cm	40cm	24cm	48cm	
2	一・ヌ	隅丸方形	130cm×70cm	42cm	30cm	42cm	(抜き取り穴か?)
	二・イ	隅丸方形	64cm×80cm	82cm	32cm	82cm	
	二・ロ	隅丸方形	118cm×100cm	45cm	24cm	45cm	
	二・ハ	隅丸方形	80cm×70cm	66cm	18cm	66cm	
	二・ニ	隅丸方形	80cm×80cm	68cm	22cm	68cm	
	二・ホ	隅丸方形	94cm×72cm	50cm	25cm	50cm	
	二・ヘ	隅丸方形	90cm×92cm	50cm	25cm	50cm	
	二・ト	楕円	60cm×58cm	56cm	20cm	56cm	平瓦
	二・チ	楕円	63cm×73cm	44cm	23cm	44cm	
	二・リ	円	直径62cm	48cm	21cm	48cm	
	二・ヌ	円	直径47cm	38cm	20cm	38cm	
	三・イ	隅丸方形	76cm×70cm	66cm	22cm	66cm	
	三・ロ	楕円	58cm×48cm	56cm	20cm	56cm	
	三・ハ	円	直径38cm	22cm	16cm	22cm	
	三・ニ	隅丸方形	50cm×48cm	27cm	20cm	27cm	東西方向にずれあり
	三・ホ	円	直径42cm	15cm	15cm	15cm	
	三・ヘ	楕円	50cm×36cm	34cm	20cm	34cm	
	三・ヌ	隅丸方形	70cm×80cm	34cm	22cm	34cm	平瓦
	四・イ	楕円	72cm×86cm	80cm	25cm	80cm	
	四・ロ	楕円	63cm×86cm	50cm	26cm	50cm	
	四・ハ	隅丸方形	90cm×65cm	48cm	22cm	48cm	
	四・ニ	隅丸方形	77cm×74cm	33cm	26cm	33cm	
	四・ホ	隅丸方形	80cm×57cm	37cm	25cm	37cm	平瓦が柱痕に入る
	四・ヘ	隅丸方形	90cm×74cm	57cm	26cm	57cm	
	四・ト	隅丸方形	74cm×58cm	65cm	24cm	65cm	
	四・チ	隅丸方形	85cm×64cm	46cm	30cm	46cm	平瓦
	四・リ	隅丸方形	104cm×70cm	50cm	33cm	50cm	
	四・ヌ	円	直径60cm	70cm	26cm	70cm	平瓦
	五・イ	円	直径50cm	35cm	20cm	35cm	
	五・ロ	隅丸方形	50cm×35cm	45cm	23cm	45cm	
	五・ハ	隅丸方形	40cm×60cm	36cm	20cm	36cm	
	五・ニ	隅丸方形	68cm×65cm	25cm	25cm	25cm	
	五・ホ	楕円	50cm×65cm	20cm	23cm	20cm	

掘形番号	掘形			柱痕		備考
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ	
五・ヘ	隅丸方形	60cm×60cm	24cm	22cm	24cm	平瓦が柱痕の底に水平に入る
五・ト	楕円	50cm×70cm	42cm	16cm	40cm	
五・チ	円	直径50cm	30cm	—	—	柱痕なし
五・リ	隅丸方形	43cm×40cm	24cm	22cm	24cm	
五・ヌ	円	直径40cm	33cm	16cm	33cm	

掘形番号	掘形			柱痕		備考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	一・a・イ	楕円	46直径×45cm	66cm	23cm	66cm	平瓦
	一・a・ロ	隅丸方形	50cm×40cm	60cm	22cm	60cm	
B	一・a・ハ	円	直径38cm	45cm	18cm	45cm	
	一・a・ニ	円	直径30cm	15cm	20cm	15cm	
3	一・a・ホ	円	直径35cm	39cm	16cm	39cm	
	一・a・ヘ	円	直径25cm	31cm	—	—	柱不明
0	一・a・ト	円	直径30cm	—	—	—	
	一・a・チ	円	直径35cm	20cm	18cm	20cm	
3	一・a・リ	楕円	48cm×45cm	24cm	20cm	24cm	
	一・a・ヌ	隅丸方形	75cm×61cm	22cm	22cm	22cm	
3	一・b・イ	楕円	60cm×70cm	65cm	25cm	35cm	平瓦
	一・b・ロ	楕円	30cm×25cm	42cm	14cm	42cm	
3	一・b・ハ	楕円	48cm×48cm	34cm	18cm	34cm	
	一・b・ニ	楕円	40cm×35cm	44cm	15cm	44cm	
3	一・b・ホ	円	直径27cm	40cm	16cm	40cm	
	一・b・ヘ	円	直径33cm	24cm	—	—	柱不明
3	一・b・ト	楕円	52cm×54cm	22cm	16cm	22cm	
	一・b・チ	円	直径50cm	19cm	26cm	19cm	
3	一・b・リ	円	直径34cm	27cm	17cm	27cm	平瓦
	一・b・ヌ	—	—	—	—	—	
3	二・イ	隅丸方形	74cm×80cm	70cm	27cm	60cm	平瓦
	二・ロ	隅丸方形	64cm×68cm	70cm	17cm	70cm	
	二・ハ	隅丸方形	60cm×76cm	70cm	20cm	70cm	
	二・ニ	隅丸方形	72cm×74cm	59cm	28cm	59cm	

掘形番号	掘 形			柱 痕		備 考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	二・ホ	隅丸方形	74cm×66cm	54cm	26cm	54cm	
	二・ヘ	隅丸方形	62cm×80cm	46cm	30cm	46cm	
	二・ト	隅丸方形	88cm×60cm	70cm	28cm	70cm	平瓦
	二・チ	隅丸方形	62cm×75cm	45cm	26cm	45cm	
B	二・リ	隅丸方形	66cm×80cm	62cm	28cm	62cm	
	二・ヌ	隅丸方形	63cm×89cm	39cm	25cm	39cm	丸瓦
3	三・イ	隅丸方形	70cm×73cm	76cm	33cm	76cm	
	三・ハ	隅丸方形	50cm×50cm	33cm	26cm	33cm	
0	三・ニ	円	直径42cm	30cm	—	—	柱不明
	三・ホ	円	直径56cm	32cm	—	—	柱不明
3	三・ヘ	隅丸方形	60cm×50cm	46cm	20cm	46cm	
	三・ト	楕円	32cm×40cm	38cm	—	—	柱不明
	三・ヌ	隅丸方形	65cm×74cm	65cm	30cm	65cm	
	四・イ	隅丸方形	65cm×87cm	80cm	36cm	80cm	
	四・ロ	隅丸方形	80cm×80cm	83cm	26cm	83cm	
	四・ハ	隅丸方形	80cm×78cm	85cm	22cm	85cm	
	四・ニ	隅丸方形	62cm×64cm	90cm	30cm	90cm	
	四・ホ	隅丸方形	72cm×66cm	80cm	20cm	72cm	
	四・ヘ	隅丸方形	86cm×82cm	67cm	28cm	—	
	四・ト	隅丸方形	72cm×72cm	70cm	29cm	70cm	
	四・チ	隅丸方形	72cm×84cm	75cm	25cm	75cm	平瓦
	四・リ	隅丸方形	72cm×80cm	70cm	24cm	70cm	平・丸瓦
	四・ヌ	隅丸方形	68cm×70cm	60cm	21cm	60cm	
	五・イ	楕円	47cm×60cm	33cm	40cm	33cm	
	五・ロ	隅丸方形	58cm×60cm	40cm	26cm	40cm	
	五・ハ	楕円	83cm×68cm	23cm	30cm	22cm	
	五・ニ	円	直径60cm	37cm	22cm	37cm	
	五・ホ	楕円	54cm×51cm	40cm	22cm	40cm	
	五・ヘ	楕円	54cm×96cm	38cm	27cm	38cm	
	五・ト	隅丸方形	92cm×60cm	50cm	44cm	50cm	
	五・チ	隅丸方形	80cm×54cm	34cm	30cm	34cm	平瓦
	五・リ	隅丸方形	80cm×60cm	25cm	36cm	25cm	
	五・ヌ	円	直径32cm	22cm	21cm	22cm	

掘形番号	掘 形			柱 痕		備 考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	一・a・イ	隅丸方形	43cm×48cm	44cm	20cm	44cm	
B	一・a・ロ	楕円	43cm×34cm	—	—	—	
	3	一・a・ハ	楕円	41cm×30cm	—	—	
0	一・a・ニ	円	直径30cm	22cm	—	—	
4	一・a・ホ	円	直径50cm	60cm	20cm	60cm	
	一・a・ヘ	円	直径40cm	46cm	—	—	

掘形番号	掘形			柱痕		備考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	一・a・ト	楕円	40cm×45cm	37cm	22cm	37cm	
	一・a・チ	円	直径45cm	40cm	17cm	40cm	
	一・a・リ	円	直径30cm	42cm	—	—	
B	一・a・ヌ	隅丸方形	40cm×40cm	40cm	16cm	40cm	平瓦
	一・b・イ	円	直径16cm	49cm	15cm	49cm	
3	一・b・ロ	楕円	43cm×32cm	66cm	22cm	66cm	平瓦
	一・b・ハ	楕円	40cm×50cm	50cm	24cm	50cm	
0	一・b・ニ	楕円	40cm×50cm	32cm	—	—	
	一・b・ホ	隅丸方形	55cm×54cm	40cm	32cm	40cm	
4	一・b・ヘ	円	直径37cm	25cm	24cm	25cm	
	一・b・ト	隅丸方形	55cm×47cm	33cm	16cm	33cm	平瓦
	一・b・チ	円	直径50cm	30cm	17cm	30cm	
	一・b・リ	隅丸方形	50cm×55cm	35cm	30cm	35cm	
	一・b・ヌ	隅丸方形	48cm×40cm	36cm	16cm	36cm	須恵器・平瓦
	二・イ	隅丸方形	64cm×62cm	56cm	28cm	56cm	平瓦
	二・ロ	隅丸方形	66cm×70cm	53cm	25cm	53cm	平瓦
	二・ハ	隅丸方形	50cm×60cm	70cm	30cm	70cm	平瓦多量
	二・ニ	隅丸方形	80cm×90cm	75cm	26cm	75cm	平瓦
	二・ホ	隅丸方形	100cm×74cm	60cm	—	—	平瓦多量
	二・ヘ	隅丸方形	90cm×80cm	72cm	36cm	72cm	
	二・ト	隅丸方形	86cm×66cm	74cm	30cm	74cm	平瓦
二・チ	隅丸方形	96cm×70cm	55cm	30cm	55cm		
二・リ	隅丸方形	90cm×90cm	63cm	34cm	63cm		
二・ヌ	隅丸方形	88cm×90cm	55cm	24cm	55cm	抜き取り痕あり	
三・イ	隅丸方形	70cm×80cm	60cm	25cm	53cm	平瓦	
三・ロ	隅丸方形	48cm×54cm	45cm	24cm	45cm	平瓦	
三・ハ	隅丸方形	30cm×45cm	30cm	16cm	30cm		
三・ニ	隅丸方形	50cm×40cm	27cm	24cm	27cm		
三・リ	円	直径50cm	28cm	14cm	28cm		
三・ヌ	隅丸方形	90cm×115cm	76cm	—	—	平瓦	
三・b・ロ	円	直径40cm	37cm	18cm	37cm	平瓦	
四・イ	隅丸方形	60cm×83cm	65cm	36cm	65cm	平瓦	
四・ロ	隅丸方形	76cm×76cm	64cm	32cm	64cm	平瓦	
四・ハ	円	直径80cm	65cm	20cm	65cm	平瓦	
四・ニ	隅丸方形	73cm×78cm	62cm	34cm	62cm		
四・ホ	隅丸方形	70cm×90cm	64cm	30cm	64cm		

掘形番号	掘 形			柱 痕		備 考	
	平面形	規模(東西×南北)	深さ	直径	深さ		
S	四・へ	隅丸方形	78cm×70cm	57cm	27cm	57cm	
B	四・ト	隅丸円形	90cm×68cm	59cm	23cm	65cm	平瓦
3	四・チ	隅丸方形	75cm×75cm	65cm	30cm	65cm	平瓦
0	四・リ	隅丸方形	95cm×80cm	70cm	33cm	70cm	
4	四・ヌ	隅丸方形	100cm×100cm	65cm	26cm	65cm	抜き取り痕あり
	五・イ	楕円	74cm×44cm	50cm	22cm	50cm	
	五・ロ	隅丸方形	56cm×47cm	59cm	34cm	59cm	平瓦
	五・ハ	隅丸方形	65cm×61cm	74cm	30cm	74cm	抜き取りか？
	五・ニ	隅丸方形	53cm×68cm	50cm	30cm	50cm	
	五・ホ	隅丸方形	62cm×55cm	50cm	26cm	50cm	
	五・へ	隅丸方形	70cm×51cm	50cm	17cm	50cm	
	五・ト	楕円	34cm×42cm	43cm	13cm	43cm	丸瓦
	五・チ	隅丸方形	50cm×50cm	50cm	17cm	50cm	
	五・リ	隅丸方形	54cm×60cm	50cm	19cm	50cm	
五・ヌ	円	直径45cm	45cm	23cm	45cm		

〈付 載〉

## 上人ケ平遺跡出土埴輪・瓦の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

### 1. はじめに

埴輪・瓦の科学的特性は、素材の粘土によって支配されているということは粘土の焼成実験や砂粒添加による科学的特性への影響などの基礎実験によって確認されている。そうすると、窯跡出土埴輪や瓦の科学的特性を前もって求めておけば、遺跡から出土する埴輪・瓦の分析値を、それに対応させることによって産地を推定することができる。そして、多数の埴輪・瓦の産地推定のデータをそろえる、つまり、伝播・流通の研究が積み重なり、それらは歴史研究の素材となる。このような目的を目指して、全国各地で須恵器・埴輪・瓦のみならず、縄文土器・弥生土器・土師器の胎土分析が進められている。

上人ケ平遺跡には古墳のみならず、埴輪・瓦を焼成した窯跡が発見されている。したがって、これらの窯跡から出土した埴輪・瓦の科学的特性を求めておけば、上人ケ平遺跡で生産された埴輪や瓦が何処へ供給されたのかを研究するための基礎データとなる。

本報告では上人ケ平遺跡の窯跡から出土した埴輪・瓦、採掘穴出土粘土、地山の土などの他に、上人ケ平遺跡・瓦谷遺跡・幣羅坂古墳・吐師七ツ塚3号墳・白山古墳などから出土した埴輪を分析した結果について報告する。

### 2. 分析法

土器片はすべて、表面を研磨してのち、100～200メッシュ程度に粉碎した。粉碎することの意味は試料をできるだけ均質化するためである。次いで、塩化ビニール製リングを枠にして試料粉末を入れ、約10トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmのコイン状の錠剤試料を作成した。このようにするのは、試料に対する入射X線及び検出器の幾何学的条件を一定にするためである。

蛍光X線の測定には、2枚ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用した。Tiを2枚ターゲットにして真空中でK・Caを、また、Moを2枚ターゲットにして空气中でFe・Rb・Srを測定した。こうした試料をX線管からのX線で直接励起せず、2枚ターゲットからのX線で励起するのは、K・CaやRb・Srの励起効率をあ



げるのみならず、特に、バックグラウンドを下げ、微量元素であるR b・S rを効果的に測定するためである。

筆者の装置では通常、16個の試料が同時にセットできる。このうち、岩石標準試料J G-1が2個含まれている。J G-1は、土器試料の定量分析における標準試料となるのみならず、自動分析におけるモニターとしての役割ももつ。このような分析方法をとるので、土器試料の分析値はJ G-1による標準化値で表示する。このような方法をとると、分析装置が変わっても、分析値(J G-1による標準化値)は変動しない。既に、この方法で全国各地の窯跡出土須恵器や花崗岩類の分析が行われている。

### 3. 分析結果

上人ヶ平窯跡出土埴輪の分析値を表1に示す。このデータから、上人ヶ平窯跡出土埴輪は、どのような科学的特性をもっているのか、出土地点によって埴輪の科学的特性に変動があるのかどうか、あるとすればどの程度の変動があるのか、そして、上人ヶ平窯跡としてまとまるのかなどについて述べる。これらのことは、上人ヶ平窯跡の供給先を追跡する上に重要な問題である。

はじめに、上人ヶ平窯跡で採集されたすべての埴輪のR b-S r分布図を示す。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、R b-S r分布図は各地の須恵器の地域差をきわめて効果的に表示することが知られている。図1でも、上人ヶ平窯跡出土埴輪はよくまとまって分布していることがわかる。つまり、ある程度のばらつきはあるものの、一定の科学的特性をもつことを示している。そこで、ほとんどの点を包含するようにして、上人ヶ平埴輪領域をとり、比較の目安とした。

次に、上人ヶ平窯跡群内の、いろいろの地点で採集した埴輪が上人ヶ平埴輪領域内に均等に分布するのか、それとも、偏在して分布するのかを調べてみた。図4には、1号埴輪窯前面灰原で採集した埴輪のR b-S r分布図を示す。領域内で少し右側に偏在していることがわかる。同様にして、図10には1号墳、図11には6号墳、図5には8号墳、図12には9号墳出土埴輪のR b-S r分布図を示す。これらの図から、採集地点によって埴輪の科学的特性には若干の違いがあることがわかる。これまでのデータから、この程度の偏在は、一つの窯群内の各々の窯出土須恵器についても普通にみられたことでもある。しかし、決して大きくは偏在しなかった。その結果、科学的特性は窯群ごとにまとめられた訳である。本報告でも、上人ヶ平埴輪領域としてまとめることができた。この分布領域は大阪陶邑群の須恵器や京都府山城町の高麗寺出土瓦などの分布領域に近く、大阪層群の粘土のもつ科学的特性であることを示唆している。

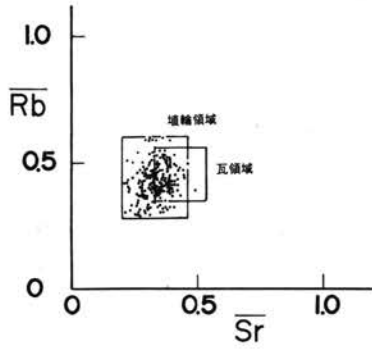


図1. 上人ヶ平遺跡出土埴輪の R b - S r 分布図

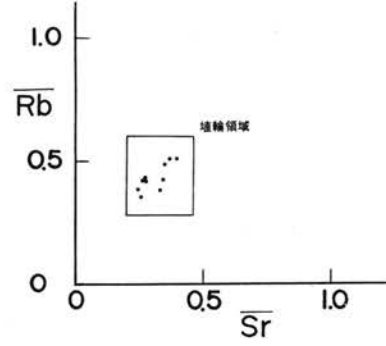


図2. 上人ヶ平遺跡1号埴輪窯出土埴輪の R b - S r 分布図

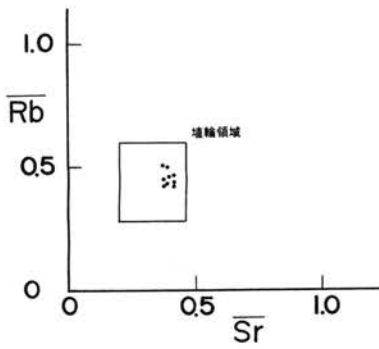


図3. 上人ヶ平遺跡第2床面出土埴輪の R b - S r 分布図

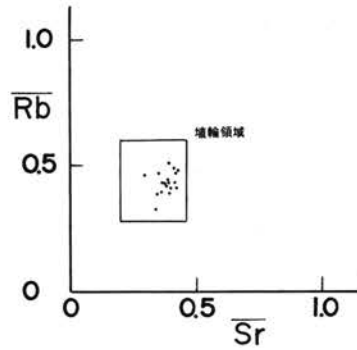


図4. 上人ヶ平1号埴輪窯前面灰原出土埴輪の R b - S r 分布図

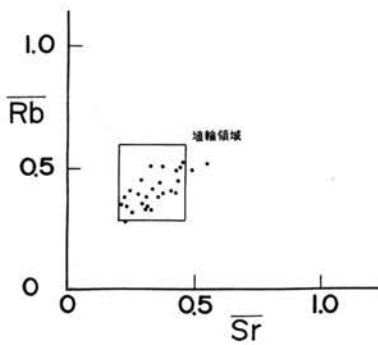


図5. 上人ヶ平8号埴輪出土埴輪の R b - S r 分布図

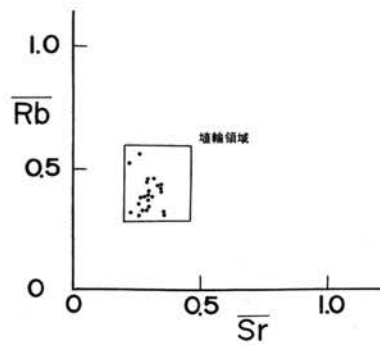


図6. 上人ヶ平7号埴輪出土埴輪の R b - S r 分布図

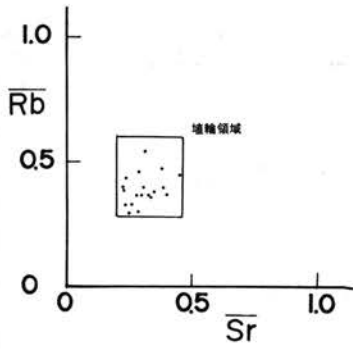


図7. 上人ヶ平8号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

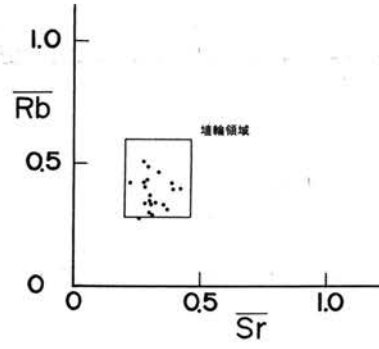


図8. 上人ヶ平16号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

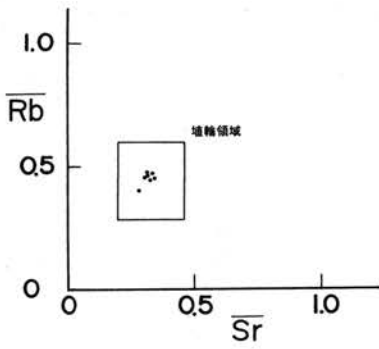


図9. 上人ヶ平14号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

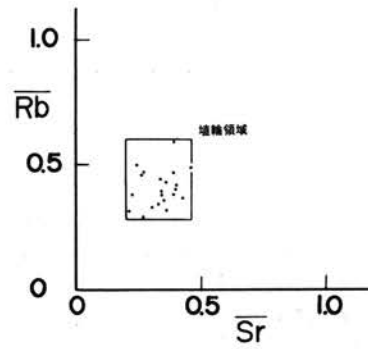


図10. 上人ヶ平1号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

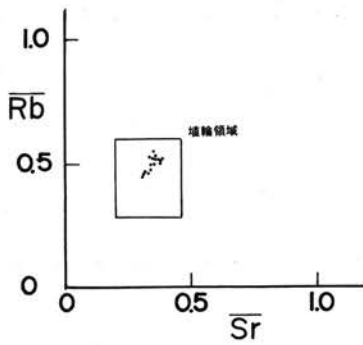


図11. 上人ヶ平6号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

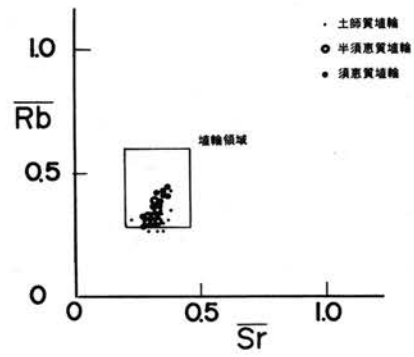


図12. 上人ヶ平9号墳出土埴輪のRb-Sr分布図

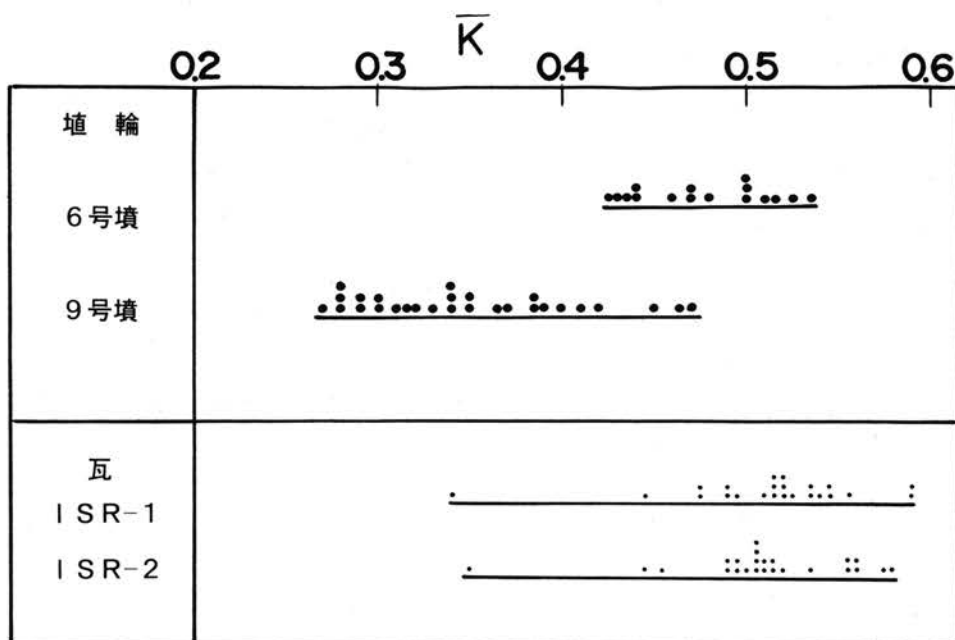


図13 K因子のばらつき

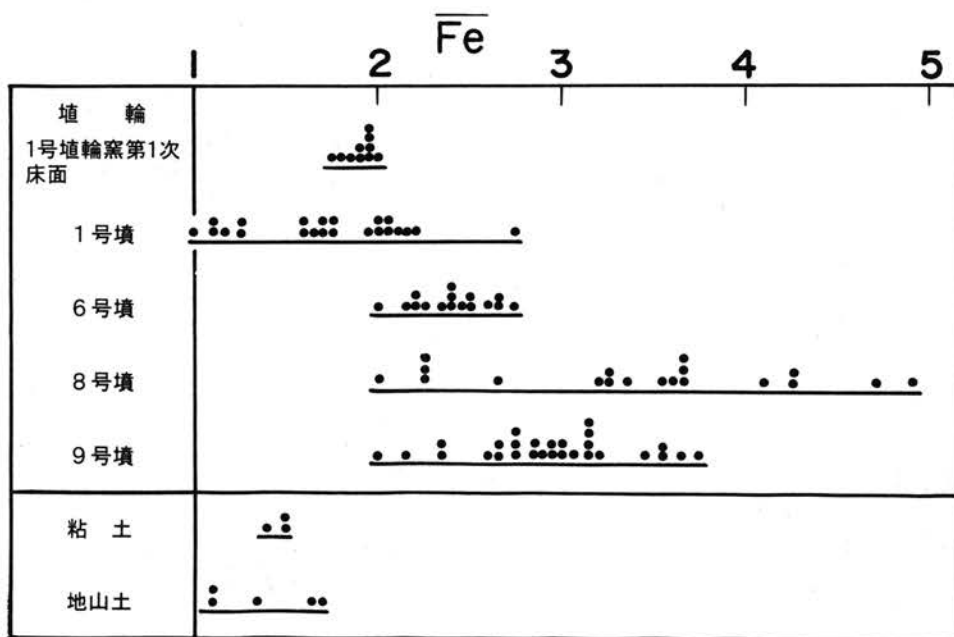


図14 Fe因子のばらつき

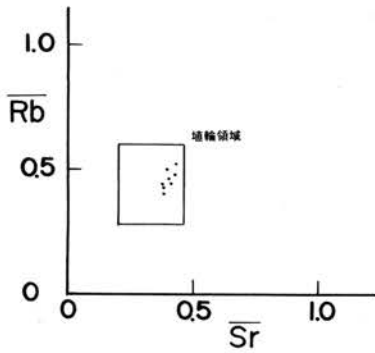


図15.瓦谷遺跡出土埴輪Rb-Sr分布図

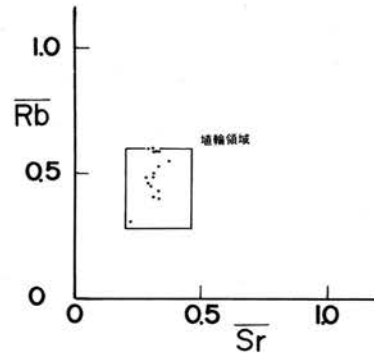


図16.幣羅坂古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

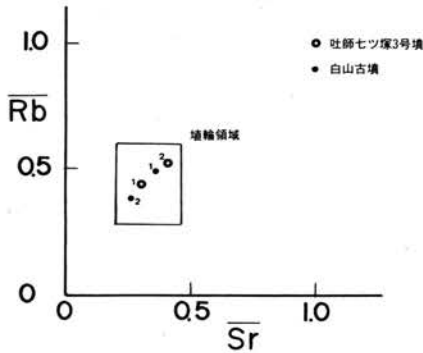


図17.土師七ツ塚3号墳白山古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

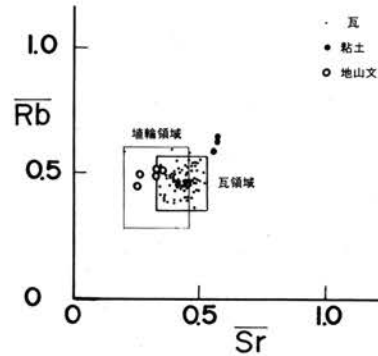


図18.上人ヶ平遺跡出土瓦・粘土・地山土のRb-Sr分布図

また、図12から9号墳で出土した埴輪には、土師質・半須恵質・須恵質という具合に、焼成度の異なるものが三様含まれているにもかかわらず、Rb-Sr分布図では同じ領域にまとまって分布し、焼成による科学的特性の変動がないことを示している。このことは筆者らが行った粘土の高温焼成実検の結果とも一致する。したがって、外見上、焼成度の相違から土器類の産地を推定することは危険であることがわかる。

上述したように、同じ窯群の埴輪のRb、Sr因子にみられたような若干の変動は他の因子でもみられる。図13にはK因子の変動を示してある。6号墳と9号墳の埴輪で明らかにK因子にも偏在があることがわかる。通常、K因子はRb因子と正の相関性をもつ。9号墳の埴輪には他の埴輪と比較して、K量もRb量も少ないことがわかる。Ca因子にも偏在は認められたが、含有量が少ないので、偏在は目立たなかった。さらに、図14にはFe因子の変動を示してある。Fe因子にも明らかに偏在が認められる。Fe因子の場合にはRb、Sr因子については勿論、K・Ca因子よりもずっと大きな偏在をする。図14よ

り、1号墳の埴輪は6号墳などの埴輪からF e 因子で相互識別できる位である。このようなF e 因子を使うと、一つの窯群のまとまりがなくなり、かつ、他の窯群との相互識別も難しくなる。そのため、筆者は通常、F e 因子をはずし、K・Ca・Rb・Srの4因子を使って窯群間の相互識別を行う。しかし、F e 因子も地域差を有効に表示する場合もある。例えば、青森県五所川原群の須恵器にはF e 量は多い。例外なく多いのである。したがって、五所川原群の須恵器を特徴づける上には、K・Ca・Rb・Sr因子の他に、F e 因子も有効である。同様に、猿投群や湖西群などの東海地域の須恵器にはF e 量が少ないという共通性がある。このように、窯群を特徴づける上に、F e 因子を使用するには注意を要する。また、図14より、上人ヶ平窯群内で小分類する上にF e 因子は有効かもしれないが、そう判断するには、1号墳などの埴輪をもっと数多く分析して確認することが必要である。ともかく、筆者は現在のところ、窯群間の相互識別に重点を置いており、窯群内の小分類は2次的に考えているので、F e 因子を使用しない場合が多い。かくして、K・Ca・Rb・Srの4因子、とくに、Rb-Sr分布図上で上人ヶ平窯の埴輪は十分、その科学的特性を表示し得ることが明らかになった。

次に、この結果を使って上人ヶ平遺跡周辺の古墳から出土した埴輪の分析結果について説明する。表1に分析値を示す。本来、須恵器と同様、古墳出土埴輪の産地推定にも2群間判別分析法を適用するが、ここでは、同じ遺跡内にある古墳のことであり、Rb-Sr分布上で上人ヶ平埴輪窯に対応するにとどめた。図15には瓦谷遺跡、図16には幣羅坂古墳、図17には吐師七ツ塚3号墳・白山古墳出土埴輪のRb-Sr分布図を示す。いずれも上人ヶ平埴輪領域内に分布していることがわかる。さらに、表1の分析値を比べると、他の因子でもよく対応しており、いずれも上人ヶ平埴輪窯産の埴輪と推定される。吐師七ツ塚3号墳の埴輪のうち、No.1は砂質、No.2は粘土質であるが、両者の分析値にはほとんど差異がないことは表1よりわかる。他方、白山古墳のNo.1は硬質、No.2は軟質の埴輪である。両者とも図17では上人ヶ平埴輪領域内に分布するものの、F e 量に明確な差異があることが表1よりわかる。したがって、上人ヶ平窯跡群産の製品でも互いに別胎土と推定される。

最後に、上人ヶ平遺跡出土瓦と地山の土の分析結果について説明する。表2に分析値を示す。また、図18にRb-Sr分布図を示す。瓦領域と埴輪領域には若干のずれがあることがわかる。したがって、上人ヶ平遺跡内でも瓦の素材粘土は埴輪の素材粘土とは異なると考えられる。

表 1 出土植輪の分析値

遺跡名	遺構名	試料番号		K	Ca	Fe	Rb	Sr
上人ケ平 1 号 植輪窯	第 1 次床面	1		0.471	0.085	2.00	0.401	0.283
		2		0.454	0.141	1.82	0.474	0.360
		3		0.496	0.164	1.73	0.493	0.389
		4		0.444	0.085	1.92	0.410	0.277
		5		0.439	0.099	1.96	0.418	0.282
		6		0.392	0.071	1.86	0.375	0.255
		7		0.385	0.107	1.90	0.343	0.262
		8		0.397	0.139	1.93	0.373	0.340
		9		0.406	0.153	1.96	0.415	0.357
		10		0.487	0.194	1.96	0.495	0.407
	第 2 次床面	11		0.423	0.164	1.96	0.409	0.413
		12		0.535	0.134	2.13	0.483	0.395
		13		0.478	0.161	2.24	0.453	0.413
		14		0.475	0.157	2.21	0.419	0.387
		15		0.425	0.155	2.16	0.425	0.411
		16		0.506	0.135	2.20	0.437	0.374
		17		0.438	0.176	2.13	0.410	0.372
		18		0.474	0.156	1.67	0.495	0.376
		19		0.446	0.152	1.67	0.447	0.394
	灰原	20		0.422	0.180	1.55	0.508	0.387
		21		0.358	0.102	1.65	0.325	0.341
		22		0.415	0.122	1.58	0.389	0.387
		23		0.454	0.129	1.58	0.486	0.410
		24		0.459	0.126	2.10	0.420	0.379
		25		0.462	0.149	1.84	0.482	0.432
		26		0.423	0.133	1.87	0.429	0.393
		27		0.500	0.156	1.81	0.466	0.422
		28		0.414	0.131	1.73	0.466	0.350
		29		0.415	0.116	1.82	0.417	0.380
		30		0.400	0.155	1.69	0.412	0.401
		31		0.470	0.156	1.51	0.435	0.419
		32		0.370	0.176	2.21	0.438	0.386
		33		0.370	0.117	1.42	0.434	0.372
		34		0.405	0.080	2.18	0.459	0.294
		35		0.378	0.105	1.69	0.392	0.354
		36		0.398	0.121	1.62	0.384	0.343
	37		0.413	0.157	1.72	0.407	0.424	
上人ケ平遺跡	1 号墳	38		0.419	0.141	1.17	0.402	0.397
		39		0.455	0.124	1.50	0.373	0.429
		40		0.467	0.103	1.59	0.443	0.338
		41		0.426	0.148	1.76	0.472	0.394
		42		0.473	0.122	1.26	0.384	0.393
		43		0.435	0.059	2.06	0.460	0.250
		44		0.422	0.109	1.26	0.359	0.352
		45		0.428	0.113	1.09	0.384	0.342
		46		0.369	0.117	1.09	0.338	0.325
		47		0.375	0.099	1.04	0.322	0.304
		48		0.340	0.060	1.69	0.385	0.225
		49		0.313	0.109	1.75	0.315	0.307
		50		0.392	0.149	1.63	0.431	0.361
		51		0.488	0.177	2.23	0.427	0.404
		52		0.423	0.078	2.06	0.504	0.244
		53		0.563	0.217	2.13	0.492	0.459
		54		0.447	0.081	2.74	0.474	0.274
		55		0.392	0.141	1.94	0.392	0.344
	56		0.554	0.169	1.98	0.589	0.392	
	57		0.313	0.114	2.01	0.291	0.272	
	58		0.459	0.120	1.71	0.315	0.357	
	6 号墳	59		0.471	0.143	2.49	0.459	0.332

遺跡名	遺構名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr
		60	0.435	0.125	2.41	0.451	0.310
		61	0.443	0.139	2.39	0.467	0.315
		62	0.432	0.127	2.20	0.469	0.323
		63	0.444	0.143	2.28	0.517	0.352
		64	0.463	0.124	2.46	0.476	0.338
		65	0.470	0.136	2.49	0.503	0.343
		66	0.512	0.155	2.73	0.518	0.358
		67	0.504	0.150	2.63	0.533	0.357
		68	0.483	0.142	2.20	0.521	0.379
		69	0.516	0.158	2.65	0.546	0.350
		70	0.536	0.174	2.61	0.524	0.371
		71	0.496	0.170	2.16	0.513	0.377
		72	0.527	0.135	2.37	0.526	0.338
		73	0.499	0.161	2.42	0.495	0.350
		74	0.421	0.147	2.01	0.417	0.385
		75	0.434	0.128	2.26	0.471	0.339
		76	0.468	0.137	2.28	0.485	0.338
		77	0.441	0.130	2.33	0.488	0.321
		78	0.452	0.145	2.29	0.488	0.345
		79	0.470	0.147	1.87	0.477	0.335
	7号墳	80	0.294	0.088	1.98	0.370	0.279
		81	0.290	0.105	2.62	0.314	0.287
		82	0.271	0.091	2.68	0.291	0.259
		83	0.310	0.103	2.57	0.340	0.256
		84	0.342	0.118	2.57	0.357	0.291
		85	0.336	0.105	1.92	0.394	0.291
		86	0.337	0.154	2.90	0.298	0.351
		87	0.446	0.143	5.43	0.430	0.289
		88	0.444	0.079	3.04	0.507	0.216
		89	0.469	0.156	3.58	0.416	0.329
		90	0.452	0.122	4.34	0.369	0.266
		91	0.517	0.126	2.72	0.448	0.318
		92	0.524	0.160	2.99	0.422	0.348
		93	0.457	0.108	3.76	0.373	0.291
		94	0.319	0.117	3.96	0.308	0.229
		95	0.334	0.144	3.03	0.303	0.358
		96	0.473	0.104	1.62	0.442	0.299
		97	0.297	0.131	2.84	0.324	0.295
		98	0.317	0.124	3.96	0.312	0.269
		99	0.586	0.099	3.55	0.541	0.260
		99	0.413	0.125	3.26	0.371	0.310
		99	0.449	0.142	3.75	0.401	0.342
		99	0.333	0.150	3.31	0.39	0.342
		100	0.413	0.125	3.26	0.371	0.310
		101	0.449	0.142	3.75	0.401	0.342
		102	0.333	0.150	3.31	0.390	0.342
	8号墳	103	0.395	0.114	3.20	0.440	0.244
		104	0.421	0.109	4.28	0.388	0.233
		105	0.395	0.109	3.55	0.398	0.225
		106	0.349	0.125	3.25	0.371	0.304
		107	0.446	0.138	4.25	0.400	0.306
		108	0.329	0.130	2.66	0.363	0.339
		109	0.361	0.108	4.71	0.286	0.251
		110	0.431	0.159	2.03	0.373	0.403
		111	0.349	0.117	4.89	0.330	0.235
		112	0.368	0.113	3.67	0.373	0.277
		113	0.304	0.127	3.61	0.298	0.289
		114	0.318	0.124	2.23	0.367	0.326
		115	0.494	0.136	3.67	0.543	0.316
		116	0.435	0.084	3.68	0.332	0.255



遺跡名	遺構名	試料番号		K	Ca	Fe	Rb	Sr	
		117		0.358	0.154	3.36	0.378	0.351	
		118		0.550	0.278	4.12	0.475	0.382	
		119		0.392	0.103	3.26	0.459	0.294	
		120		0.529	0.175	2.28	0.446	0.447	
		121		0.485	0.156	2.27	0.395	0.393	
		122		0.456	0.107	3.93	0.356	0.232	
		123		0.515	0.083	2.56	0.449	0.240	
	9号墳	土師質	124		0.311	0.151	2.60	0.294	0.322
			125		0.314	0.151	2.99	0.260	0.325
			126		0.332	0.167	2.34	0.302	0.348
			127		0.399	0.198	2.66	0.347	0.384
			128		0.268	0.087	2.16	0.310	0.219
			129		0.366	0.188	3.54	0.337	0.338
上人ヶ平遺跡	9号墳	130		0.341	0.181	3.22	0.308	0.375	
		131	土師質	0.323	0.186	3.74	0.255	0.351	
		132		0.290	0.163	3.64	0.255	0.293	
		133		0.337	0.175	3.54	0.330	0.324	
		134		0.472	0.162	2.03	0.431	0.382	
		135	半須恵質	0.341	0.173	2.90	0.341	0.325	
		136		0.282	0.155	3.43	0.299	0.275	
		137		0.291	0.154	2.87	0.310	0.303	
		138		0.297	0.153	2.75	0.297	0.309	
		139		0.283	0.146	2.87	0.310	0.292	
		140		0.301	0.153	3.13	0.323	0.322	
		141		0.351	0.162	3.15	0.385	0.317	
		142	須恵質	0.368	0.163	2.95	0.387	0.322	
		143		0.423	0.184	3.07	0.411	0.349	
144	0.394	0.186		2.77	0.417	0.354			
145	0.387	0.176		3.13	0.370	0.334			
146	0.387	0.179		3.18	0.376	0.332			
147	0.466	0.188		2.95	0.423	0.352			
148	0.348	0.136		3.02	0.306	0.286			
149	0.451	0.185		2.34	0.438	0.363			
150	0.411	0.179		2.77	0.423	0.338			
151	0.279	0.141		2.67	0.294	0.292			
152	0.396	0.191	2.87	0.394	0.346				
153	0.329	0.169	3.10	0.319	0.312				
154	0.348	0.171	2.94	0.346	0.336				
14号墳		155		0.397	0.088	1.27	0.456	0.331	
		156		0.338	0.079	1.37	0.384	0.281	
		157		0.387	0.093	1.40	0.423	0.323	
		158		0.406	0.096	1.53	0.436	0.342	
		159		0.466	0.085	2.04	0.447	0.312	
		160		0.432	0.085	1.34	0.469	0.313	
		161		0.437	0.078	1.46	0.440	0.307	
15号墳		162		0.437	0.141	1.96	0.452	0.363	
		163		0.447	0.173	2.08	0.496	0.394	
		164		0.430	0.151	2.16	0.483	0.384	
		165		0.515	0.120	1.75	0.491	0.345	
		166		0.519	0.162	2.19	0.498	0.377	
		167		0.466	0.122	1.72	0.470	0.328	
		168		0.494	0.161	1.77	0.473	0.380	
		169		0.455	0.173	2.20	0.493	0.388	
		170		0.360	0.123	1.61	0.437	0.327	
		171		0.480	0.104	1.69	0.457	0.328	
		172		0.395	0.087	1.40	0.428	0.266	
		173		0.391	0.136	1.88	0.414	0.349	
		174		0.414	0.132	1.72	0.407	0.341	
175		0.460	0.101	1.60	0.535	0.306			
176		0.491	0.193	2.01	0.529	0.408			

遺跡名	遺構名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr
		177	0.515	0.171	2.08	0.598	0.359
		178	0.472	0.105	2.71	0.505	0.319
		179	0.405	0.089	1.86	0.393	0.309
		180	0.381	0.122	2.18	0.409	0.346
		181	0.456	0.124	1.72	0.462	0.309
	17号墳	182	0.443	0.125	2.26	0.385	0.337
		183	0.430	0.143	1.86	0.383	0.365
		184	0.457	0.134	1.55	0.403	0.379
		185	0.437	0.117	2.55	0.399	0.321
		186	0.379	0.160	2.24	0.380	0.323
		187	0.354	0.132	2.09	0.391	0.317
		188	0.376	0.152	2.15	0.378	0.345
		189	0.362	0.146	2.31	0.377	0.346
		190	0.431	0.057	2.49	0.434	0.218
		191	0.387	0.160	1.93	0.385	0.361
		192	0.419	0.130	2.08	0.418	0.366
		193	0.375	0.135	2.31	0.318	0.341
	5号墳	194	0.468	0.214	1.56	0.476	0.425
		195	0.430	0.131	4.09	0.379	0.276
		196	0.533	0.192	2.67	0.499	0.442
		197	0.472	0.188	2.06	0.435	0.432
		198	0.461	0.168	1.91	0.382	0.423
		199	0.469	0.167	1.81	0.395	0.401
		200	0.423	0.132	2.84	0.368	0.353
		201	0.411	0.104	3.96	0.302	0.249
		202	0.380	0.098	1.63	0.315	0.321
		203	0.464	0.214	1.48	0.498	0.472
		204	0.312	0.096	2.96	0.368	0.222
		205	0.374	0.154	2.80	0.388	0.372
		206	0.369	0.173	3.11	0.425	0.362
		207	0.584	0.175	1.86	0.506	0.450
		208	0.576	0.228	2.16	0.472	0.494
		209	0.574	0.258	1.97	0.500	0.550
		210	0.459	0.114	3.34	0.434	0.290
		211	0.401	0.136	3.80	0.337	0.287
		212	0.441	0.089	3.19	0.389	0.241
		213	0.416	0.121	1.30	0.323	0.311
		214	0.389	0.111	2.71	0.324	0.230
		215	0.442	0.135	2.31	0.365	0.307
		216	0.407	0.105	1.62	0.313	0.305
		217	0.358	0.101	2.98	0.268	0.223
		218	0.492	0.122	2.64	0.399	0.330
		219	0.400	0.087	4.16	0.334	0.210
		220	0.536	0.105	1.84	0.491	0.326
	16号墳	221	0.441	0.157	3.16	0.383	0.394
		222	0.416	0.233	2.98	0.390	0.422
		223	0.387	0.178	3.00	0.417	0.385
		224	0.324	0.165	3.12	0.329	0.353
		225	0.422	0.166	2.88	0.456	0.336
		226	0.495	0.103	2.07	0.499	0.277
		227	0.415	0.143	3.30	0.362	0.300
		228	0.309	0.163	3.14	0.285	0.307
		229	0.403	0.118	2.37	0.329	0.301
		230	0.352	0.175	2.96	0.338	0.321
		231	0.383	0.158	3.03	0.301	0.364
		232	0.392	0.106	4.53	0.395	0.279
		233	0.423	0.099	3.58	0.475	0.296
		234	0.450	0.092	3.64	0.417	0.222
		235	0.418	0.138	4.39	0.417	0.277
		236	0.338	0.109	4.27	0.268	0.253
		237	0.404	0.121	3.91	0.322	0.277

遺跡名	遺構名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr		
		238	0.389	0.107	3.00	0.468	0.294		
		239	0.424	0.101	3.05	0.415	0.286		
		240	0.378	0.122	3.35	0.286	0.297		
		241	0.394	0.135	2.58	0.331	0.294		
瓦谷遺跡	S X 2001	242	0.381	0.145	1.98	0.378	0.395		
		243	0.425	0.162	1.81	0.405	0.328		
		244	0.343	0.150	2.00	0.410	0.362		
		245	0.344	0.170	2.31	0.310	0.379		
		246	0.369	0.126	2.71	0.371	0.293		
		247	0.537	0.189	2.33	0.528	0.368		
		248	0.370	0.173	2.97	0.399	0.355		
		249	0.386	0.203	2.70	0.321	0.412		
		250	0.407	0.211	2.23	0.390	0.491		
		251	0.376	0.210	2.72	0.341	0.450		
		252	0.467	0.065	3.45	0.423	0.291		
		253	0.363	0.180	3.40	0.315	0.377		
		254	0.355	0.181	2.65	0.318	0.385		
		255	0.363	0.145	2.46	0.346	0.370		
		256	0.493	0.136	2.29	0.437	0.367		
		257	0.394	0.186	1.79	0.404	0.381		
		258	0.503	0.216	1.77	0.501	0.388		
		259	0.512	0.182	1.70	0.437	0.406		
		260	0.421	0.202	1.97	0.427	0.376		
		261	0.552	0.216	1.61	0.480	0.425		
		262	0.566	0.254	1.54	0.522	0.434		
			S X 2004	263	0.516	0.177	1.94	0.440	0.375
				264	0.447	0.165	1.82	0.464	0.400
		幣羅坂古墳	墳丘上	265	0.485	0.116	2.40	0.401	0.328
266	0.415			0.095	2.53	0.457	0.292		
267	0.443			0.116	2.45	0.452	0.295		
268	0.439			0.112	2.58	0.503	0.308		
269	0.505			0.084	2.21	0.591	0.319		
270	0.438			0.103	2.31	0.432	0.328		
271	0.595			0.088	2.57	0.590	0.331		
272	0.566			0.084	2.57	0.589	0.314		
273	0.538			0.143	2.68	0.545	0.371		
274	0.556			0.089	2.53	0.598	0.307		
275	0.536			0.075	2.40	0.593	0.293		
276	0.472			0.120	2.51	0.533	0.331		
277	0.417			0.122	2.48	0.487	0.313		
278	0.434			0.103	2.28	0.413	0.308		
279	0.476			0.075	2.08	0.481	0.278		
280	0.582			0.084	2.40	0.567	0.247		
281	0.577			0.076	2.26	0.582	0.267		
282	0.557			0.087	2.27	0.564	0.254		
283	0.590			0.108	2.29	0.540	0.309		
284	0.518			0.132	2.18	0.563	0.308		
285	0.560	0.093	2.25	0.497	0.260				
吐師七ツ塚 3号墳	N o 1	286	0.496	0.141	2.75	0.440	0.301		
	N o 2	287	0.425	0.154	2.65	0.520	0.405		
白山古墳	N o 1	288	0.472	0.142	1.61	0.488	0.363		
	N o 2	289	0.500	0.063	3.24	0.382	0.259		

表2 窯出土瓦の分析値

遺跡名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	遺跡名	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	
I S R - 1	1	0.489	0.184	1.73	0.422	0.475	I S R - 4	64	0.438	0.185	1.63	0.385	0.395	
	2	0.517	0.196	2.02	0.476	0.479		65	0.421	0.210	1.41	0.388	0.451	
	3	0.541	0.190	2.56	0.472	0.445		66	0.502	0.184	1.57	0.404	0.453	
	4	0.545	0.205	2.15	0.544	0.478		67	0.470	0.210	2.29	0.465	0.487	
	5	0.522	0.174	1.70	0.537	0.486		68	0.503	0.189	2.13	0.432	0.445	
	6	0.543	0.194	1.85	0.526	0.470		69	0.526	0.201	2.41	0.468	0.469	
	7	0.558	0.182	2.18	0.513	0.467		70	0.384	0.120	1.91	0.525	0.335	
	8	0.592	0.186	2.38	0.474	0.453		71	0.519	0.180	1.44	0.546	0.413	
	9	0.517	0.180	1.90	0.474	0.461		72	0.549	0.216	2.44	0.458	0.497	
	10	0.528	0.178	1.72	0.466	0.452		73	0.622	0.193	1.63	0.546	0.465	
	11	0.473	0.177	2.00	0.472	0.443		74	0.611	0.225	2.41	0.513	0.494	
	12	0.444	0.150	0.905	0.436	0.452		75	0.536	0.175	1.93	0.592	0.394	
	13	0.492	0.154	2.21	0.472	0.406		76	0.428	0.247	1.68	0.433	0.496	
	14	0.342	0.225	2.28	0.471	0.448		77	0.528	0.181	2.00	0.507	0.404	
	15	0.512	0.152	1.71	0.474	0.424		78	0.445	0.226	1.44	0.434	0.490	
	16	0.476	0.166	2.17	0.471	0.457		79	0.455	0.158	1.38	0.479	0.366	
	17	0.520	0.162	2.90	0.494	0.379		80	0.475	0.158	1.65	0.492	0.388	
	18	0.535	0.170	3.02	0.477	0.399		地山の上	81	0.495	0.061	1.71	0.489	0.264
	19	0.538	0.216	1.62	0.549	0.498			82	0.592	0.082	1.08	0.492	0.325
	20	0.517	0.175	1.86	0.576	0.457		埋土	83	0.842	0.265	0.945	0.990	0.354
	21	0.591	0.210	2.02	0.526	0.482			84	0.555	0.168	1.77	0.562	0.423
	22	0.521	0.172	2.61	0.458	0.419		採掘坑粘	85	0.632	0.262	1.49	0.642	0.577
	23	0.495	0.162	2.07	0.475	0.398								
I S R - 2	24	0.505	0.229	1.94	0.455	0.478								
	25	0.454	0.157	2.88	0.404	0.355								
	26	0.492	0.170	1.86	0.471	0.398								
	27	0.495	0.163	1.81	0.485	0.403								
	28	0.503	0.174	1.85	0.456	0.419								
	29	0.508	0.197	2.02	0.459	0.474								
	30	0.353	0.168	1.85	0.446	0.432								
	31	0.555	0.181	2.19	0.503	0.451								
	32	0.518	0.170	1.46	0.526	0.466								
	33	0.508	0.150	1.54	0.518	0.422								
	34	0.559	0.175	2.28	0.535	0.447								
	35	0.560	0.173	2.92	0.496	0.424								
	36	0.534	0.167	2.26	0.512	0.434								
	37	0.493	0.140	2.18	0.448	0.377								
	38	0.519	0.158	2.20	0.431	0.396								
	39	0.492	0.172	1.60	0.392	0.431								
	40	0.443	0.167	1.86	0.449	0.417								
41	0.504	0.169	1.55	0.380	0.402									
42	0.508	0.165	2.10	0.485	0.387									
43	0.508	0.197	2.08	0.457	0.446									
44	0.516	0.148	2.67	0.491	0.371									
45	0.575	0.192	3.10	0.457	0.419									
46	0.554	0.188	2.41	0.498	0.454									
47	0.582	0.212	1.53	0.496	0.528									
I S R - 3	48	0.448	0.189	1.93	0.400	0.474								
	49	0.433	0.210	2.09	0.363	0.479								
	50	0.438	0.124	2.16	0.392	0.355								
	51	0.493	0.178	1.84	0.402	0.442								
	52	0.461	0.159	3.55	0.382	0.365								
	53	0.515	0.177	2.43	0.451	0.433								
	54	0.468	0.152	3.35	0.405	0.358								
	55	0.492	0.146	4.32	0.412	0.335								
	56	0.576	0.169	2.10	0.539	0.484								
	57	0.557	0.206	2.04	0.469	0.490								
	58	0.553	0.187	3.16	0.471	0.424								
	59	0.478	0.182	2.42	0.462	0.448								
	60	0.541	0.219	1.79	0.466	0.521								
	61	0.495	0.150	2.12	0.458	0.415								
	62	0.534	0.162	1.35	0.4505	0.439								
	63	0.480	0.158	3.11	0.446	0.341								

京都府遺跡調査報告書 第15冊(本文編)

平成3年12月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075) 933-3877 (代)

印刷 株式会社 中村太古舎  
TEL (0775) 24-4370